

即興詩人

IMPROVISATOREN

ハンス・クリスチアン・アンデルセン Hans Christian Andersen

青空文庫

初版例言

一、即興詩人はデンマルク馬の HANS 《ハンス》 CHRISTIAN 《クリスチアン》 ANDERSEN 《アンデルセン》 (1805—1875) の作にして、原本の初板は千八百三十四年に世に公にせられぬ。

二、此譯は明治二十五年九月十日稿を起し、三十四年一月十五日完成す。殆ど九星霜を経たり。然れども軍職の身に在るを以て、稿を屬するは、大抵夜間、若くは大祭日日曜日にして家に在り客に接せざる際に於いてす。予は既に、歲月の久し

き、嗜好の屢 《しばしば》變じ、文致の畫一なり難きを憾^{うら}み、又筆を擱^おくことの頻にして、興に乗じて揮瀉すること能はざるを惜みたりき。世或は予其職を曠^{むな}しくして、縦^{ほしいまゝ}に述作に耽ると謂ふ。冤^{ゑん}も亦甚しきかな。

三、文中加^{カトリック}特力教の語多し。印刷成れる後、我國公教會の定譯あるを知りぬ。而れども遂に改^{かい}刪^{さん}すること能はず。

四、此書は印するに四號活字を以てせり。予の母の、年老い目力衰へて、毎^{つね}に予の著作を讀むことを嗜^{たしな}めるは、此書に字形の大なるを選びし所以の一なり。夫れ字形は大なり。然れども紙面殆ど餘白を留めず、段落猶且連續して書し、以て紙數をして太^{はなは}だ加はらざらしむることを得たり。

明治三十五年七月七日下志津陣營に於いて

譯者識す

第十三版題言

是れ予が壯時の筆に成れる IMPROVISATOREN 《イムプロキザトオレン》の譯本なり。國語と漢文とを調和し、雅言と俚辭とを融合せむと欲せし、放膽にして無謀なる嘗試は、今新に其得失を論ずることを須^{もち}ゐざるべし。初めこれを縮刷に付するに臨み、予は大いに字句を削正せむことを期せしに、會 《たま〜》歐洲大戰の起るありて、我國も亦其旋渦中に投ずるに

至りぬ。羽檄うげきばうご旁午の間、予は僅に假刷紙を一閱することを得しのみ。

大正三年八月三十一日觀潮樓に於いて

譯者又識す

わが最初の境界

羅馬ロオマに往きしことある人はピアツツア、バルベリイニなを知りたるべし。こは貝殻持てるトリイトンの神の像に造り做したる、美しき噴井ふんせいある、大なる廣こうぢの名なり。貝殻よりは水湧き出で、その高さ數尺に及べり。羅馬に往きしことなき人もかの廣こ

うぢのさまをば銅板畫にて見つることあらむ。かゝる畫には中ア、
 フエリチエの角なる家の見えぬこそ恨なれ。わがいふ家の石垣よ
 りのぞきたる三條の樋ひの口は水を吐きて石盤に入らしむ。この家
 はわがためには尋常よのつねならぬおもしろ味あり。そをいかにといふ
 にわれはこの家にて生れぬ。首かうべめぐらを回してわが穢をさなかりける程の事を
 おもへば、目もくるめくばかりいろ／＼なる記念の多きことよ。

我はいづこより語り始めむかと心迷ひて爲せむすべを知らず。又我
 世ドラマの傳奇の全局を見わたせば、われはいよくこれを寫す手段に
 苦くるしめり。いかなる事をか緊要ならずとして棄て置くべき。いかな
 る事をか全畫圖をおもひ浮べしめむために殊更に數へ擧ぐべき。
 わがためには面白きことも外よそびと人のためには何の興もなきものあ

らむ。われは我世のおほいなる 穉をさなものがたり物語をありのまゝに偽り飾ることなくして語らむとす。されどわれは人の意を迎へて自ら喜ぶ性のさがこゝにもまぎれ入らむことを恐る。この性は早くもわが穉き時に、畠の中なる雑草の如く萌え出で、やうやく聖經に見えたる芥子のかいし如く高く空に向ひて長じ、つひには一株の大木となりて、それが枝の間にわが七情は巢食ひたり。わが最初の記念の一つは既にその芽生めばえを見せたり。おもふにわれは最早六つになりし時の事ならむ。われはおのれより穉き子供二三人と向ひなる尖カッブ帽僧チノオの寺の前にて遊びき。寺の扉にはちひさき眞鍮の十字架を打ち付けたりき。その處はおほよそ扉の中程にてわれは僅に手をさし伸べてこれに達することを得き。母上は我を伴ひてかの扉の前を

過ぐるごとに、必ずわれを搔き抱きてかの十字架に接吻せしめ給ひき。あるときわれ又子供と遊びたりしに、甚だ穉をさなき一人がいふやう。いかなれば耶蘇やその穉子は一たびもこの群に來て、われ等と共に遊ばざるといひき。われさかしく答ふるやう。むべなり、耶蘇の穉子は十字架にかゝりたればといひき。さてわれ等は十字架の下にゆきぬ。かしこには何物も見えざりしかど、われ等は猶母に教へられし如く耶蘇に接吻せむとおもひき。さるを我等が口はかしこに届くべきならねば、我等はかはる／＼抱き上げて接吻せしめき。一人の子のさし上げられて僅に唇を尖らせたるを、抱いたる子力足らねば落しつ。この時母上通りかゝり給へり。この遊のさまを見て立ち住とまり、指組みあはせて宣のたまふやう。汝等はま

ことの天使なり。さて汝はといひさして、母上はわれに接吻し給ひ、汝はわが天使なりといひ給ひき。

母上は隣家の女子の前にて、わがいかに罪なき子なるかを繰り返して語り給ひぬ。われはこれを聞きしが、この物語はいたくわが心に協かなひたり。わが罪なきことは固もとよりこれがために前には及ばずなりぬ。人の意を迎へて自ら喜ぶ性さがの種は、この時始めて日光を吸ひ込みたりしなり。造化は我におとなしく軟やはらかなる心を授けたりき。さるを母上はつねに我がこゝろのおとなしきを我に告げ、わがまことに持てる長處と母上のわが持てりと思ひ給へる長處とを我にさし示して、小兒の罪なきはかの醜みにくき「バジリスコ」の獸におなじきをおもひ給はざりき。かれもこれもおのが姿を見ると

きは死なでかなはぬ者なるを。

かのカッブチヨオ

彼尖帽宗の寺の僧にフラア・マルチノといへるあり。こは母

上の懺悔を聞く人なりき。かの僧に母上はわがおとなしさを告げ給ひき。祈のこゝろをばわれ知らざりしかど、祈の詞をばわれ善そらんく諳じて洩らすことなかりき。僧は我をかはゆきものにおもひて、あるとき我に一枚の圖をおくりしことあり。圖の中なる聖母マドンナのこぼし給ふおほいなる涙の露は地獄ほのほの上におちかかれり。亡者は争ひてかの露の滴りおつるを承うけむとせり。僧は又一たびわれを伴ひてその僧舎にかへりぬ。當時わが目にとまりしは、けた方なる形に作りたる圓柱の廊なりき。廊に圍まれたるはちきばれいしよば小き馬鈴ちきばれいしよば諸たけ圍にて、そこにはいとすぎ（チプレツソオ）の木二株、リモネ檸檬

の木一株立てりき。開け放ちたる廊には世を逝りし僧どもの像を
 ならば懸けたり。部屋といふ部屋の戸には獻身者の傳記より撰び
 出したる畫圖を貼り付けたり。當時わがこの圖を觀し心は、後
 になりてラファエロ、アンドレア・デル・サルトオが作を觀る心
 におなじかりき。

僧はそちは心猛き童なり、いで死人を見せむといひて、小き戸
 を開きつ。こゝは廊より二三級低きところなりき。われは延かれ
 て級を降りて見しに、こゝも小き廊にて、四圍悉く髑髏なりき。
 髑髏は髑髏と接して壁を成し、壁はその並びざまにて許多の小
 龕に分れたり。おほいなる龕には頭のみならず、胴をも手足を
 も具へたる骨あり。こは高位の僧のみまかりたるなり。かゝる骨

には褐色の尖帽を被^きせて、腹に繩を結び、手には一卷の經文若くは枯れたる花束を持たせたり。にへづくゑ 贄卓、はながた 花形の燭臺、そのほかの飾をばかひがらぼね 肩胛、せのつちぼね 脊椎などにて細工したり。人骨の浮彫^りあり。これのみならず忌まはしくも、又趣なきはこゝの拵へざまの全體なるべし。僧は祈の詞を唱へつゝ行くに、われはひとと寄り添ひて従へり。僧は唱へ畢^{をは}りていふやう。われも早晚^{いつか}こゝに眠らむ。その時汝はわれを見舞ふべきかといふ。われは一語をも出すこと能はずして、僧と僧のめぐりなる氣味わるきものを驚^みきたり。まことに我が如き穉子をかゝるところに伴ひ入りしは、いとおろかなる業^{わざ}なりき。われはかしこにて見しものに心を動かさるゝこと甚しかりければ、歸りて僧の小房に入りしとき纔^{わづか}

に生き返りたるやうなりき。この小房の窓には黄金色なる柑子のかうじいと美しきありて、殆ど一間の中に垂れむとす。又聖母の畫あり。その姿は天使に擔ひ上げられて日光明なるところに浮び出でたり。下には聖母の息いこひたまひし墓穴ありて、もゝいろちいろの花これを掩おほひたり。われはかの柑子を見、この畫を見るに及びて、わづかに我にかへりしなり。

この始めて僧房をたづねし時の事は、久しき間わが空想に好き材料を興へき。今もかの時の事をおもへば、めづらしくあざやかに目の前に浮び出でむとす。わが當時の心にては、僧といふ者は全く我等の知りたる常の人とは殊なるやうなりき。かの僧が褐色の衣を着たる死人の殆どおのれとおなじさまなると共に棲すめるこ

と、かの僧があまたの尊き人の上を語り、あまたの不思議の蹟あとを話すこと、かの僧の尊さをば我母のいたく敬ひ給ふことなどを思ひ合する程に、われも人と生れたる甲斐かひにかゝる人にならばやと折々おもふことありき。

母上は未亡人なりき。活計くらしを立つるには、鍼はりしごと仕事して得給ふ

錢と、むかし我等が住みたりしおほいなる部屋を人に借して得給

ふ價あたひとあるのみなりき。われ等は屋根裏やねうらの小部屋に住めり。かの

おほいなる部屋に引き移りたるはフエデリゴといふ年少わかき畫工な

りき。フエデリゴは心敏さとく世をおもしろく暮らす少年なりき。か

れはいともく遠きところより來ぬといふ。母上の物語り給ふを

聞けば、かれが故郷にては聖母をも耶蘇の穉子をも知らずとぞ。

その國の名をば 璉デンマルク馬といへり。當時われは世の中にいろく
 の國語ありといふことを解せねば、畫工が我が言ふことを曉さとらぬ
 を耳とほきがためならむとおもひ、おなじ詞を繰り返して聲の限
 り高くいふに、かれはわれを可笑をかしきものにおもひて、をりく
 果このみをわれに取らせ、又わがために兵卒、馬、家などの形をゑがき
 あたへしことあり。われと畫工とは幾時も立たぬに中善くなりぬ。
 われは畫工を愛しき。母上もをりくかれは善き人なりと宣のたまひき。
 さるほどにわれはとある夕母上とフラア・マルチノとの話を聞き
 しが、これを聞きてよりわがかの技藝家の少年の上をおもふ心あ
 やしく動かされぬ。かの異國人は地獄に墜おちて永く浮ぶ瀬あらざ
 るべきかと母上問ひ給ひぬ。そはひとりかの男の上のみにはあら

じ。異國人のうちにはかの男の如く悪しき事をば一たびもせざるもの多し。かの輩は貧ともがらき人に逢ふときは物取らせて吝をしむことなし。かの輩は債あるときは期を愆あやまたず額をたがへずして拂ふなり。然しかのみならず、かの輩は吾邦人のうちなる多人數の作る如き罪をば作らざるやうにおもはる。母上の問はおほよそ此の如くなりき。

フラア・マルチノの答へけるやう。さなり。まことにいはるゝ如き事あり。かの輩のうちには善き人少からず。されどおん身は何故に然るかを知り給ふか。見給へ。世中をめぐりありく悪魔は、邪宗の人の所詮おのが手に落つべきを知りたるゆゑ、強ひてこれを誘はむとすることなし。このゆゑに彼輩は何の苦もなく善行をなし、罪惡をのがる。善き加特力教徒はこれと殊ことにて神の愛子まなごな

り、これをおとし陥れむには悪魔はさま／＼の手立を用ゐざることは能はず。悪魔はわれ等を誘ふなり。われ等は弱きものなればその手の中に落つること多し。されど邪宗の人は肉體にも悪魔にも誘はるゝことなしと答へき。

母上はこれを聞きて復た言ふべきこともあらねば、便びんなき少年の上をおもひて大息といきつき給ひぬ。かたへ聞きせしわれは泣き出しつ。こはかの人の永く地獄にありてに苦められむつらさをおもひければなり。かの人は善き人なるに、わがために美しき畫をかく人なるに。

わが穢けきころ、わがためにおほいなる意味ありと覺えし第三の人はペツポポのをぢなりき。悪あく人にんペツポといふも西スパ班ニア牙いし磴だんの

王といふも皆その人の綽號あだななりき。此王は日ごとに西班牙磴の上
 に出しゅつぎよ御ましましき。(西班牙廣こうちよりモンテ、ピンチヨ
 才の上なる街に登るには高く廣き石級あり。この石級は羅馬の乞
 兒たゐの集まるところなり。西班牙廣こうちより登るところなればか
 く名づけられしなり。)ペツポのをぢは生れつき兩の足な痿えたる
 人なり。當時それを十字に組みて折り敷き居たり。されど穉なきとき
 よりの熟鍊にて、をぢは兩手もて歩くこといと巧なり。其手には
 革紐を結びて、これに板を掛けたるが、をぢがこの道具にて歩む
 速すこやきは健かなる脚もて行く人に劣らず。をぢは日ごとに上にもい
 へるが如く西班牙磴の上に坐したり。さりとして外の乞兒の如く憐
 を乞ふにもあらず。唯だおのが前を過ぐる人あるごとに、詐いつはりあり

げに面おもてをしかめて「ボン、ジヨオルノオ」（我俗の今日はといふ如し）と呼べり。日は既に入りたる後もその呼ぶ詞はかはらざりき。母上はこのをぢを敬ひ給ふことさまでならざりき。あらず。親族みうちにかゝる人あるをば心のうちに恥ぢ給へり。されど母上はしばく我に向ひて、そなたのためならば、彼につきあひおくとのみたまひき。餘所よその人の此世にありて求むるものをば、かの人筐かたみの底をきに藏めて持ちたり。若し臨終に、寺に納めだにせずば、それを讓り受くべき人、わが外にはあらぬを、母上は恃たのみたまひき。をぢも我に親むやうなるところありしが、我は其側にあるごとに、まことに喜ばしくおもふこと絶てなかりき。或る時、我はをぢの振舞を見て、心に怖を懷きはじめき。こは、をぢの本性をも見るに

足りぬべき事なりき。例の石級の下に老いたる盲の乞兒ありて、
往きかふ人の「バヨツコ」（我二錢許ばかりに當る銅貨）一つ投げ入れ
むを願ひて、薄葉鐵トルヲの小筒をさらくと鳴らし居たり。我がをぢ
は、面にやさしげなる色を見せて、帽を揮ふり動しなどすれど、人
々その前をばいたづらに過ぎゆきて、かの盲人の何の會釋もせざ
るに、錢を與へき。三人かく過ぐるまでは、をぢ傍より見居たり
しが、四人めの客かの盲人に小貨幣二つ三つ與へしとき、をぢは
毒蛇の身をひねりて行く如く、石級を下りて、盲の乞兒の面を打
ちしに、盲の乞兒は錢をも杖をも取りおとしつ。ペツポの叫びけ
るやう。うぬは盜人なり。我錢を竊ぬすむ奴やつなり。立派に廢人かたはといは
るべき身にもあらで、たゞ目の見えぬを手柄顔に、わが口に入ら

むとする「パン」を奪ふこそ心得られねといひき。われはこゝま
 では聞きつれど、こゝまでは見てありつれど、この時買ひに出で
 たる、一「フオリエツタ」（一勺）の酒をひさげて、急ぎて家に
 かへりぬ。

大祭日には、母につきてをぢがり祝よろこびにゆきぬ。その折には苞苴みやげ
 もてゆくことなるが、そはをぢが嗜たしなめるおほ房の葡萄二つ三つか、
 さらば砂糖につけたる林檎なんとなりき。われはをぢ御ごと呼び
 かけて、その手に接吻しき。をぢはあやしげに笑ひて、われに半
 「バヨツコ」を與へ、果子をな買ひそ、果子は食をばひ畢りたるとき、
 迹かたもなくなるものなれど、この錢はいつまでも貯へらるゝも
 のぞと教へき。

をぢが住めるところは、暗くして見苦しかりき。一間には窓と
 いふものなく、また一間には壁の上の端に、破硝子を紙もて補
 ひたる小窓ありき。臥床の用をもなしたる大箱と、衣を藏むる小
 桶二つとの外には、家具といふものなし。をぢがり往け、といは
 るゝときは、われ必ず泣きぬ。これも無理ならず。母上はをぢに
 やさしくせよ、と我にをしへながら、我を嚇さむとおもふときは、
 必ずをぢを案山子に使ひ給ひき。母上の宣たまひけるやう。かく
 悪劇せば、好きをぢ御の許にやるべし。さらば汝も磔の上に坐
 して、をぢと共に袖乞するならむ、歌をうたひて「バヨツコ」を
 めぐまるゝを待つならむとのたまふ。われはこの詞を聞きても、
 あながち恐るゝことなかりき。母上は我をいつくしみ給ふこと、

目の球にも優れるを知りたれば。

向ひの家の壁には、小^{せうがん}龕をしつらひて、それに聖母の像を据

ゑ、その前にはいつも燈を燃やしたり。「アエ、マリア」の鐘鳴

るころ、われは近隣の子供と像の前に^{ひざまづ}跪きて歌ひき。燈の光ゆら

めくときは、聖母も、いろ／＼の紐、珠、銀色したる^{しん}心の臓など

にて飾りたる耶蘇のをさな子も、共に動きて、我等が面を見て笑

み給ふ如くなりき。われは高く朗なる聲して歌ひしに、人々聞き

て善き聲なりといひき。或る時^{イギリス}英吉利人の一家族、我歌を聞きて

立ちとまり、歌ひ^{をば}畢るを待ちて、^{をさ}長らしき人われに銀貨一つ與へ

き。母に語りしに、そなたが聲のめでたさ故、とのたまひき。さ

れどこの詞は、その後我祈を妨ぐることに、いかばかりなりしを知

らず。それよりは、聖母の前にて歌ふごとくに、聖母の上をのみ思ふこと能はずして、必ず我聲の美しきを聞く人やあると思ひ、かく思ひつゝも、聖母のわがあだし心を懐けるを嫉み給はむか^{にく}とあやぶみ、聖母に向ひて罪を謝し、あはれなる子に慈悲の眸を垂れ給へと願ひき。

わが餘所の子供に出で逢ふは、この夕の祈の時のみなりき。わが世は静けかりき。わが自ら作りたる夢の世に心を潜め、仰ぎ臥して開きたる窓に向ひ、伊太利^{イタリア}の美しき青空を眺め、日の西に傾くとき、紫の光ある雲の黄金色したる地の上に垂れかゝりたるをめで、時の遷^{うつ}るを知らざることしばしくなりき。ある時は、遠くクヰリナル（丘の名にて、其上に法皇の宮居あり）と家々の棟^{むね}

とを越えて、紅に染まりたる地平線のわたりに、眞黒まぐろに浮き出で、見ゆる「ピニヨロ」の木々の方へ、飛び行かばや、と願ひき。我部屋には、この眺ある窓の外、中庭に向へる窓ありき。我家の中庭は、隣の家の中庭に並びて、いづれもいと狭く、上の方は木の「アルタナ」（物見のやうにしたる屋根）にて鎖とぎされたり。庭ごとごに石にて整たみたる井ありしが、家々の壁と井との間をば、人ひとり僅かに通らるゝほどなれば、我は上より覗きて、二つの井の内を見るのみなりき。緑なるほうらいしだ（アヂアンツム）生ひ茂りて、深きところは唯だ黒くのみぞ見えたる。俯してこれを見るたびに、われは地の底を見おろすやうに覺えて、ここにも怪しき境ありとおもひき。かゝるとき、母上は杖の尖さきにて窓硝子を淨

め、なんぢ井に墜ちて溺れだにせずば、この窓に當りたる木々の枝には、汝が食ふべき果このみおほく熟すべしとのたまひき。

隧道、ちご

我家に宿りたる畫工は、廓外に出づるをり、我を伴ひゆくことありき。畫を作る間は、われかれを妨ぐることなかりき。さて作りを畢りたるはとき、われ穉をき物語して慰むるに、かれも今はわが國の詞を解げして、面白がりたり。われは既に一たび畫工に隨ひて、「クリア、ホスチリア」にゆき、昔遊戲の日まで猛獸を押し込めおきて、つねに無辜むこの俘囚を獅子、「イエナ」獸なんどの餌とし

たりと聞く、かの暗き洞の深き處まで入りしことあり。洞の裡うちな
 る暗き道に、我等を導きてくゞり入り、燃ゆる松たいまつ火を、絶えず
 石壁に振り當てたる僧、深き池の水の、鏡の如く明あきらかにて、目の前
 には何もなきやうなれば、その足もとまで湛へ寄せたるを知らむ
 には、松火もて觸れ探らではかなはざるほどなる、いづれもわが
 空想を激したりき。われは怖をば懷かざりき。そは危しといふこ
 とを知らねばなりけり。

街のはつる處に、「コリゼエオ」おほさじき（大觀棚）の頂見えたと

き、われ等はかの洞の方へゆくにや、と畫工に問ひしに、否、あ
 れよりははるかに大なる洞にゆきて、面白きものを見せ、そなたをも
 景色と俱ともに寫すべし、と答へき。葡萄園の間を過ぎ、古の混堂ゆやの

址あとを圍とみたる白き石垣いしゐきに沿したがひて、ひたすら進すすみゆく程ほどに羅馬ローマの府ふの外そとに出ででぬ。日ひはいと烈はげしかりき。緑きよの枝えだを手折てりて、車くるまの上うへに挿さし、農夫のうとはその下したに眠ねりたるに、馬うまは車くるまの片側かたがはに吊つり下げたる一束ひとつかの秣まぐさを食くひつゝ、ひとり徐しづかに歩あみゆけり。やうく女神めがは工くジエリアジエリアの洞ほらにたどり着つきて、われ等は朝餐あさげを食くべ、岩間いわまより湧わき出でづる泉いづみの水みづに、葡萄酒ぶどうざう混まぜて飲のみき。洞ほらの裏うちには、天井てんじやうにも四方しやうの壁かべにも、すべて絹きぬ、天鵝絨びろおどなどにて張ひりたらむやうに、緑きよこまやかなる苔こけ生なひたり。露つゆけく茂さかりたる蔦つたの、おほいなる洞ほら門かどにかゝりたるさまは、カラブリア州カラブリアの谿間たにまなる葡萄架ぶどうだなを見る心地こころす。洞ほらの前まへ數步すうぶには、その頃ころいと寂さびしき一軒いっけんの家いへありて、
 「カタコンバ」のうちの一つひとつに造つくりかけたりき。この家いへ今は潰つぶえ

て斷礎をのみぞ留めたる。「カタコンバ」は人も知りたる如く、
羅馬城とこれに接したる村々とを通ずるすまう隧道なりしが、半はなかばお
のづから壞れ、半は盜人、ぬけうりする人などの隱家となるを
厭ひて、石もて塞がれたるなり。當時猶存じたるは、聖セバスチ
ヤノ寺の内なる穹窿の墓穴よりの入口と、わが言へる一軒家より
の入口とのみなりき。さてわれ等のかの一軒家のうちなる入口よ
り進み入りしが、おもふに最後に此道を通りたるはわれ等二人な
りしなるべし。いかにといふに此入口はわれ等が危き目に逢ひた
る後、いまだいくばく幾もあらぬに塞がれて、後には寺の内なる入口のみ
残りぬ。かしこには今も僧一人居りて、旅人を導きて穴に入らし
む。

深きところには、軟やはらかなる土に掘りこみたる道の行き違ひたるあり。その枝の多き、その様の相似たる、おもなる筋を知りたる人も踏み迷ふべきほどなり。われは穉をさなごころ心に何ともおもはず。晝工はまた豫め其心して、我を伴ひ入りぬ。先づ蠟燭一つとも點し、一をば猶衣のかくしの中に貯へおき、一卷ひとまきの絲の端を入口に結びつけ、さて我手を引きて進み入りぬ。忽ち天井低くなりて、われのみ立ちて歩まるゝところあり、忽ち又岐路の出づるところ廣がりて方形をなし、見上ぐるばかりなる穹窿をなしたるあり。われ等は中央に小き石卓を据ゑたる圓堂を過よぎりぬ。こゝは始て基督教に歸依きえしたる人々の、異教の民に逐はるゝごとに、ひそかに集りて神に仕へまつりしところなりとぞ。フエデリゴはこゝにて、こ

の壁中に葬られたる法皇十四人、その外數千の獻身者の事を物語りぬ。われ等は石龕のわれ目に燭ともしび火さしつけて、中なる白骨を見き。(こゝの墓には何の飾もなし。拿破ナポリ里に近き聖ヤヌアリウスの「カタコンバ」には聖像をも文字をも彫りつけたるあれど、これも技術上の價あるにあらず。基督教徒の墓には、魚を彫りたり。希臘文ギリシアの魚といふ字は「イヒトユス」なれば、暗に「イエソウス、クリストス、テオウ　ウイオス、ソオテエル」の文の首字を集めて語をなしたるなり。此希臘文はこゝに耶蘇やそ基督キリストかみ神の子救世者と云ふ。)われ等はこれより入ること二三歩にして立ち留りぬ。ほぐし來たる絲はこゝにて盡きたればなり。畫工は絲の端を控鈕ボタンの孔に結びて、蠟燭を拾ひ集めたる小石の間に立て、

さてそこに蹲うづくまりて、隧道の摸様を寫し始めき。われは傍なる石にこしか踞こしかけて合掌し、上の方を仰ぎ視るたり。燭は半ば流れたり。されどさきに貯へおきたる新なる蠟燭をば、今取り出してその側におきたる上、火打道具さへ帯びたれば、消えなむ折に火を點すべき用意ありしなり。

われはおそろしき暗黒天地に通ずる幾條の道を望みて、心の中にさま／＼の奇怪なる事をおもひ居たり。この時われ等が周圍には寂として何の聲も聞えず、唯だ忽ち斷え忽ち續く、物寂しき岩間の雫の音を聞くのみなりき。われはかく由よしなき妄想を懷きてしばしあたりを忘れ居たるに、ふと心づきて畫工の方を見やれば、あな訝いぶかし、畫工は大息つきて一つとところを馳せめぐりたり。そ

の間かれは頻しきりに俯して、地上のものを捜し索もとむる如し。かれは又火を新なる蠟燭に點じて再びあたりをたづねたり。その氣色けしきただならず覺えければ、われも立ちあがりて泣き出しつ。

この時畫工は聲を勵まして、こは何事ぞ、善き子なれば、そこに坐すわりよよ、と云ひしが、又眉を顰ひそめて地を見たり。われは畫工の手に取りすがりて、最早登りゆくべし、こゝには居りたくなし、とむつかりたり。畫工は、そちは善き子なり、畫かきてや遣らむ、果子をや與へむ、こゝに錢もあり、といひつゝ、衣のかくしを探して、財布を取り出し、中なる錢をば、ことごとく我に與へき。我はこれを受くるとき、畫工の手の氷の如く冷ひや、かになりて、いたく震ひたるに心づきぬ。我はいよく騒ぎ出し、母を呼びてます／＼

泣きぬ。畫工はこの時我肩を掴みて、劇しくゆすり揺かし、靜にせずば打擲せむ、といひしが、急に手巾を引き出して、我腕を縛りて、しかと其端を取り、さて俯してあまた、び我に接吻し、かはゆき子なり、そちも聖母に願へ、といひき。絲をや失ひ給ひし、と我は叫びぬ。今こそ見出さめ、といひく、畫工は又地上をかいさぐりぬ。

さる程に、地上なりし蠟燭は流れ畢りぬ。手に持ちたる蠟燭も、かなたこなたを搜し索むる忙しさに、流るゝこといよく早く、今は手の際まで燃え來りぬ。畫工の周章は大方ならざりき。そも無理ならず。若し絲なくして歩を運ばば、われ等は次第に深きところに入りて、遂に活路なきに至らむも計られざればなり。畫工

は再び氣を勵まして探りしが、こたびも絲を得ざりしかば、力抜けて地上に坐し、我頸を抱きて大息つき、あはれなる子よ、とつぶやきぬ。われはこの詞を聞きて、最早家に還られざることぞ、とおもひければ、いたく泣きぬ。畫工にあまりに緊きびしく抱き寄せられて、我が縛られたる手はいざり落ちて地に達したり。我は覺えず埃の間に指さし入れしに、例の絲を撮つまみ得たり。こゝにこそ、と我呼びしに、畫工は我手をと※りて、物狂ほしきまでよろこびぬ。あはれ、われ等二人の命はこの絲にぞ繋ぎ留められける。

われ等の再び外に歩み出でたるときは、日の暖に照りたる、天の蒼く晴れたる、木々の梢のうるはしく緑なる、皆常にも増してよろこばしかりき。フエデリゴは又我に接吻して、衣のかくしよ

り美しき銀の※とけいを取り出し、これをば汝に取らせむ、といひて與へき。われはあまりの嬉しさに、けふの恐ろしかりし事共、はや悉くこと忘れ果てたり。されど此事を得忘れ給はざるは、始終の事を聞き給ひし母上なりき。フエデリゴはこれより後、我を伴ひて出づることを許されざりき。フラア・マルチノもいふやう。かの時二人の命の助かりしは、全く聖マドンナ母のおほん恵にて、邪宗のフエデリゴが手には授け給はざる絲を、善く神に仕ふる、やさしき子の手には與へ給ひしなり。されば聖母の恩をば、身を終ふるまで、ゆめ忘るゝこと勿なかれといひき。

フラア・マルチノがこの詞と、或る知人の戯たはむれに、アントニオはあやしき子なるかな、うみの母をば愛するやうなれど、外の女を

ばことごとく嫌ふと見ゆれば、あれをば、人となりて後僧にこそ
 すべきなれ、といひしことあるとによりて、母上はわれに出家せ
 しめむとおもひ給ひき。まことに我は奈何いかなる故とも知らねど、
 女といふ女は側に來らるゝだに厭はしう覺えき。母上のところに
 來る婦人は、人の妻ともいはず、處女をとめともいはず、我が釋き詞に
 て、このあやしき好憎の心を語るを聞きて、いとおもしろき事
 におもひな做し、強しひて我に接吻せむとしたり。就なかんづく中マリウチア
 といふ娘は、この戲にて我を泣かすること屢しばしばなりき。マリウチア
 は活潑なる少女なりき。農家の子なれど、裁縫店にて雛形娘をつ
 とむるゆゑ、華靡はでやかなる色の衣をよそひて、幅廣き白き麻布も
 て髪を卷けり。この少女フエドリゴが畫の雛形をもつとめ、又母

上のところにも遊びに来て、その度ごとに自らわがいひなづけの
 妻なりといひ、我をうけが小き夫なりといひて、迫りて接吻せむとした
 り。われうけが諾はねば、この少女しばらく武を用ゐき。或る日われま
 た脅されて泣き出し、に、さてはをさなご猶穉兒なりけり、乳房ふく脚ませ
 ずては、啼き止むまじ、とて我を搔き抱かむとす。われ慌て、逃に
 ぐるを、少女はすかさず追ひすがりて、兩膝にて我身をしかと挾
 み、いやがりて振り向かむとする頭を、やうく胸の方へ引き寄
 せたり。われは少女が挿したる銀の矢を抜きたるに、豊なる髪は
 波打ちて、我身をも、あらは露れたる少女が肩をもおほ掩はむとす。母上は
 室の隅に立ちて、笑みつゝマリウチアがなすわざを勧め勵まし給
 へり。この時フエデリゴは戸の片蔭にかくれて、ひそか竊に此群を急が

きぬ。われは母上にいふやう。われは生涯妻といふものをば持たざるべし。われはフラア・マルチノの君のやうなる僧とこそならめといひき。

夕ごとにわが怪しく何の詞もなく坐したるを、母上は出家せしむるにたよりよき性さがなりとおもひ給ひき。われはかゝる時、いつも人となりたる後、金あまた得たらむには、いかなる寺、いかなる城をか建つべき、寺の主、城の主となりなん日には、「カルチナアレ」の僧の如く、赤き衷ぼしや甸に乗りて、金色に装ひたる僕しもべあまた隨へ、そこより出入せんとおもひき。或るときは又フラア・マルチノに聞きたる、種々なる獻身者の話によそへて、おのれ獻身者とならむをりの事をおもひ、世の人いかにおのれを責むとも、

おのれは聖母のめぐみにて、つゆばかりも苦痛を覚えざるべしとおもひき。殊に願はしく覺えしは、フエデリゴが故郷にたづねゆきて、かしこなる邪宗の人々をまことの道に歸依せしむる事なりき。

母上のいかにフラア・マルチノと謀り給ひて、その日とはなりけむ。そはわれ知らでありしに、或る朝母上は、我にちひさき衣を着せ、其上に白衣を打掛け給ひぬ。此白衣は膝のあたりまで届きて、寺に仕ふる兒ちひの着るものと同じかりき。母上はかく爲立て、我を鏡に向はせ給ひき。我は此日より尖帽宗カッブチヨオの寺にゆきてちごとなり、火伴なかまの童達と共に、おほいなる弔香爐つりかうろを提げて儀にあづかり、また贄にへづく卓オの前に出で、讚美歌をうたひき。總ての指圖

をばフアラ・マルチノなしつ。われは幾程もあらぬに、小き寺の
 うちに住み馴れて、贄卓に畫きたる神の使の童の顔を悉く記え、
 柱の上なるうねりたる摸様を識り、瞑目したるときも、醜き龍と
 戦ひたる、美しき聖ミケルを面前に見ることを得るやうになり、
 鋪床ゆかに刻みたる髑髏の、緑なる蔦かづらにて編みたる環を戴ける
 を見てはさま／＼の怪しき思をなしき。(聖ミケルが大なる翼
 ある美少年の姿にて、悪鬼の頭を踏みつけ、鎗をその上加へた
 るは、名高き畫なり。)

美小鬢、即興詩人

萬聖祭には衆人もろひとと俱ともに骨ほね龕ほくらにありき。こはフラア・マル
 チノの嘗て我を伴ひて入りにしところなり。僧どもは皆經を誦じゆす
 るに、我は火伴なかまの童二人と共に、髑髏にへづくゑの贄卓にへづくゑの前に立ちて、
ひさげかうろ提香爐を振り動したり。骨もて作りたる燭臺に、けふは火を點
 したり。僧侶の遺骨の手足全きは、けふ額に新しき花の環を戴き
 て、手に露けき花の一束を取りたり。この祭にも、いつもの如く、
 人あまた集ひ來ぬ。歌ふ僧の「ミゼレエレ」（「ミゼレエレ、メ
 イ、ドミネ」、主よ、我をあはれ愍み給へ、と唱へ出す加特力教カトリコオの歌を
 いふ）唱へはじめるとき、人々は膝をかゞ屈めて拜したり。髑髏の色
 白みたる、髑髏と我との間に渦卷ける香の烟の怪しげなる形に見
 ゆるなどを、我は久しく打ち目守まもり居たりしに、こはいかに、我

身の周圍めぐりの物、皆獨樂こまの如くに　り出しつ。物を見るに、すべて
 大なる虹を隔て、望むが如し。耳には寺の鐘もつばかりも、一時に
 鳴るらむやうなる音聞ゆ。我心は早き流を舟にて下る如くにて、
 譬へむやうなく目出たかりき。これより後の事は知らず。我は氣
 を喪ひき。人あまた集ひて、鬱陶うつたうしくなりたるに、我空想の燃
 え上りたるや、この眩暈めまひのもとなりけむ。醒めたるときは、寺の
 園なる檸檬リモネの木の下にて、フラア・マルチノが膝に抱かれ居たり。
 わが夢の裡に見きといふ、首尾整はざる事を、フラア・マルチ
 ノを始として、僧ども皆神の業わざなりといひき。聖ひじりのみたまは面前
 を飛び過ぎ給ひしかど、はるかなき童のそのひかり耀かゞやけるさまに
 え堪へで、卒倒したるならむといひき。これより後、われは怪し

き夢をみることに類なりき。それを母上に語れば、母上は又友なる女どもに傳へ給ひき。そが中には、われまことにさる夢を見しにはあらねど、見きと詐りて語りしもありき。これによりて、我を神のおん子なりとする、人々の惑は、日にけに深くなりまさりぬ。

さる程に嬉しき聖誕祭は近づきぬ。つねは山住ひする牧者の笛ふき（ピツフエラリ）となりたるが、短き外套着て、紐あまた下げ、尖りたる帽を戴き、聖母の像ある家ごとに音信れ來て、救世主の誕れ給ひしは今ぞ、と笛の音に知らせありきぬ。この單調にして悲しげなる聲を聞きて、我は朝なく覺むるが常となりぬ。覺むれば説教の稽古す。おほよそ聖誕日と新年との間には、「サント、マリア、アラチエリ」の寺なる基督教の像のみまへにて、

童男童女の説教あること、年ごとの例なるが、我はことし其一人に當りたるなり。

吾^{わが}齡^{よはひ}は甫^{はじ}めて九つなるに、

かしこにて説教せむこと、いと

めでたき事なりとて、歡びあふは、母上、マリウチア、我の三人のみかは。わがありあふ卓の上に登りて、一たびさらへ聞かせたるを聞きし、畫工フエリゴもこよなうめでたがりぬ。さて其日になりければ、寺のうちなる卓の上に押しあげられぬ。我家のとは違ひて、この卓には毯^{かも}を被ひたり。われはよその子供の如く、諳^{そらん}じたるまゝの説教をなしき。聖母の心^{むね}より血汐出でたる、穢き基督のめでたきなど、説教のたねなりき。我順番になりて、衆人に仰ぎ見られしとき、我胸跳りしは、恐ろしさゆゑにはあらで、

喜ばしさのためなりき。これ迄の小兒の中にて、尤も人々の氣に入
 入りしもの、即ち我なること疑なかりき。さるをわが後に、卓の
 上に立たせられたるは、小き女の子なるが、その言ふべからず優
 しき姿、驚くべきまでしほらしき顔つき、調清しらべき樂ねに似たる聲音
 に、人々これぞ神のみつかひなるべき、とさゝやきぬ。母上は、
 我子に優る子はあらず、といはまほしう思ひ給ひけむが、これさ
 へ聲高く、あの女の子の贅卓に畫ける神のみつかひに似たること
 よ、とのたまひき。母上は我に向ひて、かの女子の怪しく濃き目
 の色、鴉からすば青あざいろの髪、をさなくて又さかし伶俐れいれいげなる顔、美しき紅葉もみぢ
 のやうなる手などを、繰りかへして譽め給ふに、わが心には妬ねたま
 しきやうなる情起りぬ。母上は我上をも神のみつかひに譬へ給ひ

しかども。

鶯の歌あり。まだ巢ごもり居て、薔薇さうびの枝の緑の葉を啄つめども、今生ぜむとする蕾をば見ざりき。二月三月の後、薔薇の花は開きぬ。今は鶯これにのみ鳴きて聞かせ、つひには刺はりの間に飛び入りて、血を流して死にき。われ人となりて後、しばく此歌の事をおもひき。されど「アラチエリ」の寺にては、我耳も未だこれを聞かず、我心も未だこれを會あせざりき。

母上、マリウチア、その外女どもあまたの前にて、寺にてせし説教をくりかへすこと、しばくありき。わが自ら喜ぶ心はこれにて慰められき。されど我が未だ語り厭あかぬ間に、かれ等は早く聞き倦うみき。われは聴衆を失はじの心より、自ら新しき説教一段

を作りき。その詞は、まことの聖誕日の説教といはむよりは、寺の祭を敍したるものといふべき詞なりき。それを最初に聞きしはフエデリゴなるが、かれは打ち笑ひ乍らも、そちが説教は、兎も角もフラア・マルチノが教へしよりは善し、そちが身には詩人や舎やどれる、といひき。フラア・マルチノより善しといへる詞は、わがためにいと喜ばしく、さて詩人とはいかなるものならむとおもひ煩ひ、おそらくは我身の内に舍れる善き神のみつかひならむと判じ、又夢のうちに我に面白きものを見するものにやと疑ひぬ。

母上は家を離れて遠く出で給ふこと稀なりき。されば或日の晝すぎ、トラスステエルトラスステエル（テエエル河の右岸なる羅馬の市區）なる友だちを訪はむ、とのたまひしは、我がためには祭に往くごとく

なりき。日曜に着る衣をきよそひぬ。中單チヨキの代にその頃着る習なりし絹の胸當をば、針にて上衣の下に縫ひ留めき。領えりぎぬ巾をば幅廣き襪ひだに摺たみたり。頭には縫とりしたる帽を戴きつ。我姿はいとやさしかりき。

とぶらひ畢そはりて、家路に向ふころは、はや頗る遅くなりたれど、月影さやけく、空の色青く、風いと心地好かりき。路に近き丘の上には、「チプレツソオ」、「ピニヨロ」ときはぎなどの常磐樹立ときてるが、怪しげなる輪廓を、鋭く空に畫ゑがきたり。人の世にあるや、とある夕、何事もあらざりしを、久しくえ忘れぬやうに、美しう思ふことあるものなるが、かの歸路の景色、また然さる類たぐひなりき。國を去りての後も、テエエルの流のさまを思ふごとに、かの夕の景

色のみぞ心には浮ぶなる。黄なる河水のいと濃こげに見ゆるに、月の光はさしたり。碾こひきぐるま穀車の鳴り響く水の上に、朽ち果てたる橋柱、黒き影を印して立てり。この景色心に浮べば、あの折の心輕げなる少をとめご女子さへ、扁ひらづゝみ鼓手に把とりて、「サルタレルロ」舞ひつゝ過ぐらむ心地す。（「サルタレルロ」の事をば聊いさ、か注すべし。こは單調なる曲につれて踊り舞ふ羅馬の民の技藝なり。一人にて踊ることあり。又二人にても舞へど、その身の相觸るゝことはなし。大抵男子二人、若くは女子二人なるが、跳はねる如き早足にて半圈に動き、その間手をも休むることなく、羅馬人に産れ付きたる、しなやかなる振をなせり。女子は裳裾もすそを蹇かぐ。鼓をば自ら打ち、又人にも打たす。其調の變化といふは、唯遲速のみなり。）

サンタ、マリア、デルラ、ロツンダの街に來て見れば、こゝはま
 だいと賑はし。魚蠟ぎよらふの烟を風のまにまに吹き靡なびかせて、前に木
 机を据ゑ、そが上に月桂ラウレオの青枝もて編みたる籠しろものに貨物を載せ
 たるを飾りたるは、肉鬻ひさぐ男、果賣くだものる女などなり。剥栗むきぐり並べた
 る釜の下よりは、火 立昇りたり。賈人あきうどの物いひかはす聲の高
 きは、伊太利ことば知らぬ旅人聞かば、命をも顧みざる争とやお
 もふらむ。魚賣る女の店の前にて、母上識る人に逢ひ給ひぬ。女
 子の間とて、物語長きに、店の蠟燭流れ盡むとしたり。さて連れ
 立ちて、其人の家の戸口までおくり行くに、街の上はいふもさら
 なり、「コルソオ」の大道さへ物寂しう見えぬ。されど美しき水
 盤を築きたるピアツツア、チ、トレネイに曲り出でしときは、又

賑はしきさま前の如し。

こゝに古き殿づくりあり。意なく投げ疊ねたらむやうに見ゆる、礎の間より、水流れ落ちて、月は恰も好し棟の上にぞ照りわたれる。河伯の像は、重き石衣を風に吹かせて、大なる瀧を見おろしたり。瀧のほとりには、喇叭吹くトリティンの神二人海馬を馭したり。その下には、豊に水を湛へたる大水盤あり。盤を繞れる石級を見れば農夫どもあまた心地好げに月明の裡に臥したり。截り碎きたる西瓜より、紅の露滴りたるが其傍にあり。骨組太き童一人、身に着けたるものとは、薄き汗衫一枚、鞣革の袴一つなるが、その袴さへ、控鈕脱れて膝のあたりに垂れかゝりたるを、心ともせずや、「キタルラ」の絃のおもしろげに

搔き鳴して坐したり。忽ちにして歌ふこと一句、忽にして又奏かなづ
 ること一節。農夫どもは掌打たなそこち鳴しつ。母上は立ちとまり給ひぬ。
 この時童の歌ひたる歌こそは、いたく我心を動かしつれ。あはれ
 此歌よ。こは尋常よのつねの歌にあらず。この童の歌ふは、目の前に見
 え、耳のほとりに聞ゆるが儘なりき。母上も我も亦曲中の人とな
 りぬ。さるに其歌には韻脚あり、其調はいと妙たへなり。童の歌ひけ
 るやう。青き空を衾ふすまとして、白き石を枕としたる寢ねごゝろの好き
 よ。かくて笛手ふえふき二人の曲をこそ聞け。童は斯く歌ひて、「トリ
 イトン」の石像を指したり。童の又歌ひけるやう。こゝに西瓜の
 血汐を酌める、百姓の一群は、皆戀人の上安かれと祈るなり。そ
 の戀人は今は寢て、聖サンピエトロの寺の塔、その法皇の都にゆきし、

人の上をも夢みるらむ。人々の戀人の上安かれと祈りて飲まむ。
又世の中にあらむ限の、や箭の手開かぬ少女が上をも、皆安かれと
祈りて飲まむ。(箭の手開かぬ少女とは、髪に挿す箭をいへるに
て、處女の箭には握りたる手あり、嫁とつぎたる女の箭には開きたる
手あり。)かくて童は、母上の脇をひね※りて、さて母御の上をも、
又その童の鬚お生ふるやうになりて、迎へむ少女の上をも、と歌ひ
ぬ。母上善くぞ歌ひしと讚め給へば、農夫ども、ジヤコモがうま旨さ
よ、と手打ち鳴してさゞめきぬ。この時ふと小き寺の石級の上を
見しに、こゝには識る人ひとりあり。そは鉛筆取りて、この月明
の中なる群を、寫さむとしたる畫工フエテリゴなりき。歸途には
畫工と母上と、かの歌うたひし童の上につきて、語り戯れき。そ

の時畫工は、かの童を即興詩人とぞいひける。

フエデリゴの我にいふやう。アントニオ聞け。そなたも即興の詩を作れ。そなたは固より詩人なり。たゞ例の説教を韻語にして歌へ。これを聞きて、我初めて詩人といふことあきらかにさとれり。まことに詩人とは、見るもの、聞くものにつけて、おもしろく歌ふ人にぞありける。げにこは面白き業なり。想ふにあながち難からむとは思はれず、「キタルラ」一つだにあらましかば。わが初の作の料たねになりしは、向ひなる枯肉鋪ひものみせなりしこそ可笑をかしけれ。此家の貨物しろものの排ならべ方は、旅人の目にさへ留まるやうなりければ、早くも我空想を襲ひしなり。月桂ラウレオの枝美しく編みたる間には、おほいなる駝鳥の卵の如く、乾酪の塊懸りたり。「オルガ

ノ」の笛の如く、金紙巻きたる燭は並び立てり。柱のやうに立て
 たる腸づめの肉の上には、琥珀の如く光を放ちて、「パルミジヤ
 ノ」の乾酪据わりたり。夕になれば、燭に火を點ずるほどに、其
 光は腸づめの肉と「プレシチウツトオ」（らかん）との間に燃ゆ
 る、聖母像前の紅玻璃燈と共に、この幻まぼろしの境を照せり。我詩には、
 店の卓の上なる猫兒ねこ、店の女房と價を争ひたる、若き「カツプチ
 ノ」僧さへ、残ることなく入りぬ。此詩をば、幾度か心の内にて
 吟じ試みて、さてフエデリゴに歌ひて聞かせしに、フエデリゴめ
 でたがりければ、つひに家の中に廣まり、又街を躰こえて、向ひな
 るひものやの女房の耳にも入りぬ。女房聞きて、げに珍らしき詩
 なるかな、ダンテのデント、コメデア神曲とはかゝるものか、とぞ稱たへけ

る。

これを手始に、物として我詩に入らぬはなきやうになりぬ。我世は夢の世、空想の世となりぬ。寺にありて、僧の歌ふとき、提さげかうろ香爐を打ち振りても、街にありて、叫ぶ賈人あきうど、轟く車とゞろの間に立ちても、聖母の像と靈水盛りたる瓶の下なる、小き臥床ちさせの中にありても、たゞ詩をおもふより外あらざりき。冬の夕暮、鍛冶の火高く燃えて、道ゆく百姓の立ち倚りよて手を温むるとき、我は家の窓に坐して、これを見つゝ、時の過ぐるを知らず。かの鍛冶の火の中には、我空想の世の如き殊ことなる世ありとぞ覺えし。北山おろし劇はげしうして、白雪街を籠め、廣こうぢの石の「トリイトン」に氷の鬚おふるときは、我喜限なかりき。憾うらむらくは、かゝる時

の長からぬことよ。かゝる日には年ゆたかなる兆きざしとて、羊かはの裘ころもきたる農夫ども、手を拍うちて「トリイトン」のめぐりを踊りまはりき。噴き出づる水に雨は、晴れなんとする空にかゝれる虹の影映りて。

花祭

六月の事なりき。年ごとにジエンツアノにて執行せらるゝ、名高き花祭の期は近づきぬ。(ジエンツアノはアルバノ山間の小都會なり。羅馬と沼澤との間なる街道に近し。)母上とも、マリウチアとも仲好き女房ありて、かしこなる料理屋の妻となりたり。

(伊太利の小料理屋にて「オステリア、エエ、クチイナ」と招^{かんば}牌懸けたる類なるべし。) 母上とマリウチアとが此祭にゆかむと約したるは、數年前よりの事なれども、いつも思ひ掛けぬ事に妨げられて、えも果さざりき。今年は必ず約を履^ふまむとなり。道遠ければ、祭の前日にいで立たむとす。かしまだちの前の夕には、喜ばしさの餘に、我眠の穩^{おだやか}ならざりしも、理^{ことわり}なるべし。

「エツツリノ」といふ車の門前に來しときは、日未だ昇らざりき。我等は直に車に上りぬ。是れより先には、われ未だ山に入りしことあらざりき。祭の事を思ひての喜に胸さわぎのみぞせられたる。身の邊^{ほとり}なる自然と生活とを、人となりての後、當時の情もて觀^みましかば、我が作る詩こそ類なき妙品ならめ。街道の靜けさ、鐵^{かなも}

物のいかめしき閩門りよもん、見わたす限遙なるカムパニアの野邊に、物寂しき墳墓のところ／＼に立てる、遠山の裾を罩こめたる濃き朝霧など、我がためにはこたび観るべき、めでたき祕事の前兆の如くおもはれぬ。道の傍に十字架あり。そが上には枯されこうべ骸こうべ残れり。こは幸つみなき人を脅むくいしたる報に、こゝに刑せられし強人ぬすびとの骨なるべし。これさへ我心を動すことたゞならざりき。山中の水を羅馬の市に導くなる、許多あまたの筧かけひの數をば、はじめこそ讀み見むとしつれ、幾程もあらぬに、倦うみて思ひとゞまりつ。さて我は母上とマリウチアとに問ひはじめき。壞れ傾きたる墓標のめぐりにて、牧者が焚く火は何のためぞ。羊の群のめぐりに引きめぐらしたる網は何のためぞ。問はるゝ人はいかにうるさかりけむ。

アルバノに着きて車を下りぬ。こゝよりアリチアを越す美しき
 道の程をば徒かちにてぞゆく。木犀草もくせいさう（レセダ）又はにほひあらせ
 いとう（ヘイランツス）の花など道の傍に野生したり。緑なる葉
 の茂れる橄欖樹オリワの蔭は涼しくして、憩ふ人待貌なり。遠き海をば、
 我也望み見ることを得き。十字架立ちたる山腹を過ぐるとき、少
 女子の一群笑ひ戯れて過ぐるに逢ひぬ。笑ひ戯れながらも、十字
 架に接吻することをば忘れざりき。アリチアの寺の屋根、黒き橄
 欖の林の間に見えたるをば、神の使たはむれが戯たはむれに据たはむれゑかへたる聖サンピエト
 口寺の屋根ならむとおもひき。索ひにて牽ひかれたる熊の、人の如く
 に立ちて舞へるあり。人あまた其周めぐりにつどひたり。熊を牽ける男
 の吹く笛を聞けば、こは羅馬に來て聖母の前に立ちて吹く、「ピ

ツフエラリ」が曲におなじかりき。男に軍曹と呼ばれる、猿あり。美しき軍服着て、熊の頭の上、脊の上などにてとんぼがへり翻筋斗す。われは面白さにこゝに止らむとおもふほどなりき。ジエンツアノの祭も明日のことなれば、止まればとて遅るゝにもあらず。されど母上は早く往きて、友なる女房の環飾編むを助けむとのたまへば、甲斐なかりき。

幾程もなく到り着きて、アンジエリカが家をたづね得つ。ジエンツアノの市にて、ネミといふ湖に向へる方にありき。家はいとめでたし。壁よりは泉湧き出で、石盤に流れ落つ。驢馬あまたそを飲まむとて、めぐりに集ひたり。

料理屋に立ち入りて見るに賑しき物音我等を迎へたり。かまど竈には

火燃えて、鍋の裡なる食は煮え上りたり。長き卓あり。市人も田
 舎人も、それに倚りて、酒飲み、しほつけ藏にせる豚を食へり。聖母
 の御影の前には、青磁の花瓶に、美しき薔薇花を活けたるが、其
 傍なる燈は、棚引く烟に壓されて、善くも燃えず。帳場のほとり
 なる卓に置きたる乾酪の上をば、猫跳り越えたり、鶏の群は、我
 等が脚にまつはれて、踏まるゝをも厭はじと覺ゆ。アンジエリカ
 は快く我等を迎へき。險しき梯はしごを登りて、烟突の傍なる小部屋に
 入り、こゝにて食を饗せられき。我心にては、國王の宴うたげに召され
 たるかとおぼえつ。物として美しからぬはなく、一「フオリエツ
 タ」の葡萄酒さへ其瓶に飾ありて、いとめでたかりき。瓶の口に
 栓がはりに挿したるは、わづか纔に開きたる薔薇花なり。主客三人の女

房、互に接吻したり。我も否いなとも諾うとも云ふ暇なくして、接吻せられき。母上片手にて我頬を撫なり、片手にて我衣をなほし給ふ。手尖てさきの隠るゝまで袖を引き、又頸を越すまで襟を揚げなどして、やうく心を安やすんじ給ひき。アンジエリカは我を佳よき兒なりと讚めき。

食後には面白き事はじまりぬ。紅なる花、緑なる梢を摘みて、環飾を編まむとて、人々皆出でぬ。低き戸口をくゞれば庭あり。そのめぐりは幾尺かあらむ。すべてのさまま唯だ一つの四阿屋あづまやめきたり。細き欄おぼしまをば、こゝに野生したる蘆薈ろくわいの、太く堅き葉にて援けたり。これ自然の籬まがきなり。看卸みおろせば深き湖の面いと靜なり。昔こゝは火坑にて、一たびは焰の柱天に朝したることもありきと

いふ。庭を出で、山腹を歩み、大なる葡萄架だな、茂れる「プラタノ」の林のほつりを過ぐ。葡萄の蔓は高く這ひのぼりて、林の木々にさへ纏ひたり。彼方の山腹の尖りたるところにネミの市あり。其影は湖の底に印うづりたり。我等は花を採り、梢を折りて、且行き且編みたり。あらせいとうの間には、露けき橄欖の葉を織り込めつ。高き青空と深き碧水とは、乍たちまち草木に遮られ、乍ち又一様なる限なき色に現れ出づ。我がためには、物としてめでたく、珍らかならざるなし。平和なる歡喜の情は、我魂を震はしめき。今に到るまで、この折の事は、埋没したる古城の彩石壁畫ムザイコゑの如く、我心目に浮び出づることあり。

日は烈しかりき。湖の畔ほとりに降りゆきて、葡萄蔓纏えびかづらへる「プラ

タノ」の古樹の、長き枝を水の面にさしおろしたる蔭にやすらひ
 たる時、我等は纔に涼しさを迎へて、編みものに心籠むることを
 得つ。水草の美しき頭の、蔭にありて、徐しづかうなづに頷くさま、夢みる人
 の如し。これをも祈りて編み込めつ。暫しありて、日の光は最早
 水面に及ばずなりて、ネミとジエンツアノとの家々の屋根をさま
 よへり。我等が坐したるところは、次第にほの暗うなりぬ。我は
 遊ばむとて、群を離れたれど、岸低く、湖の深きを母上氣づかひ
 給へば、數歩の外には出でざりき。こゝには古きチアナの祠の址ほこらあと
 あり。その破壊して形かたばかりになりたる裡に、大なる無花果樹いちじゆくあ
 り。葛つたかづら 蘿らは隙なきままでに、これにまつはれたり。われは此樹
 に攀よち上りて、環飾編みつゝ、流行の小歌うたひたり。

—Ah rossi, rossi fiori,

Un mazzo di violi!

Un gelsomin d'amore—

(あはれ、赤き、赤き花よ。

すみれたば
堇の束よ。

戀のしるしの素馨そけい〔ジェルソミノ〕の花よ。)

この時あやしく咳枯しはがれたる聲にて、歌ひつぐ人あり。

—Per dar al mio bene!

(摘みて取らせむその人に。)

忽ちフラスカアチの農家の婦人の装したる媪おうなありて、我前に立ち現れぬ。その脊はあやしき迄眞直なり。その顔の色の目立ちて

黒く見ゆるは、頭より肩に垂れたる、長き白紗のため^{はだへ}にや。膚の
 皺は繁くして、縮めたる網の如し。黒き瞳は^{まぶち}を^う填めん程なり。
 この媪は初め^{ほゝゑ}微笑みつゝ我を見しが、俄に色を正して、我面を打
 ちまもりたるさま、傍なる木に寄せ掛けたる木^み乃伊^{いら}にはあらずや、
 と疑はる。暫しありていふやう。花はそちが手にありて美しくぞ
 なるべき。彼の目には^{さいはひ}福の星ありといふ。我は編みかけたる環飾
 を、我唇におし當てたるまゝ、驚きて彼の方を見居たり。媪また
 いはく。その月桂の葉は、美しけれど毒あり。飾に編むは好し。
 唇にな當てそといふ。此時^{まがき}アンジェリカ籬の後より出でゝいふや
 う。賢き老女、フラスカアチのフル中ア。そなたも明日の祭の料
 にとて、環飾編まむとするか。さらずは日のカムパニアのあなた

に入りてより、常ならぬ花束を作らむとするかといふ。媼はかく
 問はれても、顧みもせで我面のみ打ち目守り、詞を續つぎていふや
 う。賢き目なり。日の金牛宮を過ぐるとき誕うまれぬ。名も財たからも牛の
 角にかゝりたりといふ。此時母上も歩み寄りてのたまふやう。吾
 子が受領すべきは、緇くろき衣と大なる帽となり。かくて後は、護ごま摩
 焚きて神に仕ふべきか、棘いばらの道走るべきか。そはかれが運命に
 任せてむ、とのたまふ。媼は聞きて、我を僧とすべしといふ意こころぞ、
 とは心得たりと覺えられき。されど當時は、我等悉く媼が詞の顛もと
 末とすゑを解げすること能はざりき。媼のいふやう。あらず。此兒が衆も
ろひと
 人の前にて説くところは、げに格子の裏うちなる尼少女の歌より優
 しく、アルバノの山の雷より烈しかるべし。されどその時戴くも

のは大なる帽にあらず。^{さいはひ}福の座は、かの羊の群の間に白雲立てる、
 カヲの山より高きものぞといふ。この詞のめでたげなるに、母上
 は喜び給ひながら、猶訝^{いぶか}しげにもてなして、太き息つきつゝ宣^{のたま}給
 ふやう。あはれなる兒なり。行末をば聖母こそ知り給はめ。アル
 バノの農夫の車より福^{さいはひ}の車は高きものを、かゝるをさな子のいか
 でか上り得むとのたまふ。媪のいはく。農車の輪のめぐるを見ず
 や。下なる輻^やは上なる輻となれば、足を低き輻に踏みかけて、旋^{めぐ}
 るに任せて登るときは、忽ち車の上にあるべし。(アルバノの農
 車はいと高ければ、農夫等かくして登るといふ。)唯だ道なる石
 に心せよ。市に舞ふ人もこれに躓^{つまづ}く習ぞといふ。母上は半ば戲の
 やうに、さらばその福の車に、われも俱に登るべきか、と問ひ給

ひしが、俄に打ち驚きてあなやと叫び給ひき。この時大なる鷺鳥しゅうう
 ありて、さと落し來たりしに、その翼の前なる湖を撃ちたるとき、
 飛沫は我等が面を濕うるほしき。雲の上にて、鋭くも水面に浮びたる大
 魚を見付け、矢を射る如く來りて攫つかみたるなり。刃の如き爪は魚
 の脊を穿うがちたり。さて再び空に揚らむとするに、騒ぐ波にて測る
 にも、その大さはよの常ならぬ魚にしあれば、力を極めて引かれ
 じと争ひたり。鳥も打ち込みたる爪抜けざれば、今更にその獲も
 のを放つこと能はず。魚と鳥との鬪はいよく激しく、湖水の面
 ゆらぐまに、幾重ともなき大なる環を畫き出せり。鳥の翼は
 忽ち斂をさまり、忽ち放たれ、魚の背は浮ぶかと思れば又沈みつ。數
 分時の後、雙翼靜に水を蔽ひて、鳥は憩ふが如く見えしが、俄に

はたゞく勢に、偏翼くた摧け折るゝ聲、岸のほとりに聞えぬ。鳥は残れる翼にて、二たび三たび水を敲き、つひに沈みて見えずなりぬ。魚は最後の力を出して、敵を負ひて水底に下りしならむ。鳥も魚も、しばしが程に、底のみくづとなるならむ。我等は詞もあらで、此光景ありさまを眺め居たり。事果てゝ後顧みれば、かの媼は在らざりき。

我等は詞少く歸路をいそぎぬ。森の木葉このはのしげみは、闇を吐き出だす如くなれど、夕照ゆふばえは湖水に映じて纔わづかにゆくてに迷はざらしむ。この時間ゆる單調なる物音は粉碾車こひきぐるまの轆きしるなり。すべてアンジエリカはゆくゝ怪しき老女が上を物語りぬ。かの媼は藥草を識りて、能く人を殺し、能く人

を感はしむ。オレワアノといふ所に、テレザといふ少女ありき。

ジユウゼツペといふ若者が、山を越えて北の方へゆきたるを戀ひて、日にけに瘦せ衰へけり。媪さらば其男を喚び返して得させむとてテレザが髪とジユウゼツペが髪とを結び合せて、銅の器に入れ、薬草を雜^{まじ}へて煮き。ジユウゼツペは其日より、晝も夜も、テレザが上のみ案ぜられければ、何事をも打ち棄て、歸り來ぬとぞ。我は此物語を聞きつゝ、「アエ、マリア」の祈をなしつ。アンジエリカが家に歸り着きて、我心は纔におちりたり。

新に編みたる環飾一つを懸けたる、眞鍮の燈には、四條^{よすぢ}の心^{しん}に残なく火を點し、「モンツアノ、アル、ポミドロ」といふ旨^{うま}きものに、善き酒一瓶を添へて供せられき。農夫等は下なる一間にて

飲み歌へり。二人代る／＼唱へ、末の句に至りて、坐客齊しく
 和したり。我が子供と共に、燃ゆる竈の傍なる聖母の像のみまへ
 にゆきて、讚美歌唱へはじめしとき、農夫等は聲を止めて、我曲
 を聴き、好き聲なりと稱へき。その嬉しさに我は暗き林をも、怪
 しき老女をも忘れ果てつ。我は農夫等と共に、即興の詩を歌はむ
 とおもひしに、母上とゞめて宣給ふやう。そちは香爐を提ぐる子
 ならずや。行末は人の前に出で、神のみことばをも傳ふべきに、
 今いかでかさる戲せらるべき。謝カルネワレ 肉カルネの祭はまだ來ぬものを、
 とのたまひき。されど我がアンジェリカが家の廣き臥床ふしどに上りし
 ときは、母上我枕の低きを厭ひて、肱さし伸べて枕せさせ、頼たのみあ
 る子ぞ、と胸に抱き寄せて眠り給ひき。我は旭あさひの光窓を照して、

美しき花祭の我を喚び醒すまで、穩なる夢を結びぬ。

その旦先づ目に觸れし街の有様、その彩色したる活畫圖を、當時の心になりて寫し出さむには、いかに筆を下すべきか。少しく爪尖あがりになりたる、長き街をば、すべて花もて掩おほひたり。地は青く見えたり。かく色を揃へて花を飾るには、園生そのふの草をも、野に茂る枝をも、摘み盡し、折り盡したるかと思はる。兩側には大なる緑の葉を、帶の如く引きたり。その上には薔薇の花を隙間なきまで並べたり。この帶の隣には又似寄りたる帶を引きて、その間をば暗紅なる花もて填めたり。これを街の氈かもの小縁さへりとす。中央には黄なる花多く簇あつめて、その角立ちたる紋を成したる群を星とし、その輪の如き紋を成したる束を日とす。これよりも骨折

りて造り出でけんと思はるゝは、人の名頭ながしらの字を花もて現したるにぞありける。こゝにては花と花とつら聯ね、葉と葉と合せて形を作りたり。總ての模様は、まことに活きたる五色の氈かもと見るべく、又彩ムザイコ石を組み合せたる牀とこと見るべし。されどポムペイポムペイにありといふ床にも、かく美しき色あるはあらじ。このあした、風といふもの絶てなかりき。花の落着きたるさまは、重き寶石を据ゑたらむが如くなり。窓といふ窓よりは、大なる氈を垂れて石の壁を掩おほひたり。この氈も、花と葉とにて織りて、おほくは聖書に出でたる事蹟の圖を成したり。こゝには聖母とをさな穉うさぎき基督とを騎のせたる驢うさぎあり、ジユウゼツペその口を取りたり。顔、手、足などをば、薔薇の花もて作りたり。こあらせいとう（マチオラ）の花、青き

「アネモオネ」の花などにて、風にひるがへ翻りたる衣を織り成せり。その冠を見れば、ネミの湖にて摘みたる白きひつじぐさ睡蓮（ニユムフエア）の花なりき。かしこには尊きミケルの毒龍と鬪へるあり。尊きロザリアは深碧なる地球の上に、薔薇の花を散らしたり。いつかたに向ひて見ても、花は我に聖書の事蹟を語れり。いつかたに向ひて見ても、人の面は我と同じく樂しげなり。美しき衣着きよそ装ひて、出張りたる窓に立てるは、山のあなたより來しことくにびと異國人なるべし。街の側には、おのがじし飾り繕ひたる人の波打つ如く行くあり。街の曲り角にて、大なる噴井あるところに、母上は腰掛け給へり。我は水よりさしのぞきたるサチロ（羊脚の神）の神の頭かうべの前に立てり。

日は烈しく照りたり。市中の鐘ごとく鳴りはじめぬ。この
 時美しき花の氈を踏みて、祭の行列過ぐ。めでたき音楽、謳歌の
 聲は、その近づくを知らせたり。モンストランチア 贄 櫃 の前には、兒ちごあま
 たひさげかうろ提香爐を振り動かして歩めり。これに續きたるは、こゝらあ
 たりえの美しき少女を撰り出でて、花の環を取らせたるなり。もろ
 肌ぬぎて、翼を負ひたる、あはれなる小兒等は、高たかづくゑ卓の前に
 立ちて、神の使の歌をうたひて、行列の來るを待てり。若人等は
 尖りたる帽の上に、聖母の像を印したる紐のひらくとしたるを
 付けたり。鎖に金銀の環を繋ぎて、頸に懸けたり。斜に肩に掛け
 たる、彩いろどりたる紐は、黒天鵝絨びろおどの上衣に映じて美し。アルバノ、
 フラスカアチの少女の群は、髪を編みて、銀しろがねの箭やにて留め、薄き

面紗ヴェールの端を、やさしく髻もとどりの上にて結びたり。エルレトリあらはの少女

の群は、頭に環かざりを戴き、美しき肩、圓き乳房あらはの露るゝやう

に着たる衣に、襟あたりの邊より、彩りたる巾きれを下げたり。アプルツチ

イよりも、大澤たいたくよりも、おほよそ近きほとりの民悉くつどひ來

て、おのゝ古風を存じたる打扮いでたちしたれば、その入り亂れたる

を見るときは、餘所よその國にはあるまじき奇觀なるべし。花を飾り

たる天蓋の下に、華美はでやかなる式の衣を着けて歩み來たるは、「カ

ルヂナアレ」なり。さま／＼の宗派に屬する僧は、燃ゆる蠟燭

を取りてこれに隨へり。行列のごとく寺を離るゝとき、群衆

はその後に跟ついて動きはじめき。我等もこの間にありしが、母上

はしかと我肩おさを按へて、人に押し隔てられじとし給へり。我等は

人に揉まれつゝ歩を移せり。我目に見ゆるは、唯だ頭上の青空のみ。忽ち我等がめぐりに、人々の諸聲もろごゑに叫ぶを聞きつ。我等は彼方へおし遣られ、又此方へおし戻されき。こは一二頭の仗馬ぢやうめの物に怯おぢて駈け出したるなり。われは纔わづかにこの事を聞きたる時、騒ぎ立ちたる人々に推し倒されぬ。目の前は黒くなりて、頭の上には瀑布たきの水漲り落つる如くなりき。

あはれ、神の母よ、哀なる事なりき。われは今に至るまで、その時の事を憶ふごとに、身うち震ひて止まず。我にかへりしとき、マリウチアは泣き叫びつゝ、我頭を膝の上に載せ居たり。側には母上地よこたはに横り居給ふ。これを圍みたるは、見もしらぬ人々なり。馬は車を引きたる儘まにて、仆たふれたる母上の上を過ぎ、轍わだちは胸を碎

きしなり。母上の口よりは血流れたり。母上は早や事きれ給へり。

人々は母上の目を瞑らせ、その掌を合せたり。この掌の温きを

ば今まで我肩に覚えしものを。遺體をば、僧たち寺に昇き入れぬ。

マリウチアは手に淺瘻負ひたる我を伴ひて、さきの酒店に歸り

ぬ。きのふは此酒店にて、樂しき事のみおもひつゝ、花を編み、

母上の腕を枕にして眠りしものを。當時わがいよくまことの孤

になりしをば、まだ熟くも思ひ得ざりしかど、わが穉き心にも、

唯だ何となく物悲しかりき。人々は我に果子、くだもの、玩

具など與へて、なだめ賺し、おん身が母は今聖母の許にいませ

ば、日ごとに花祭ありて、めでたき事のみなりといふ。又あすは

今一度母上に逢はせんと慰めつ。人々は我にはかく言ふのみなれ

ど、互にさゝやぎあひて、きのふの鷺鳥しやうの事、怪しき媼おうなの事、母上の夢の事など語り、誰もく母上の死をば豫め知りたりと誇れり。

暴馬あれうまは街はづれにて、立木に突きあたりて止まりぬ。車中よりは、人々よはひ齡四十の上を一つ二つ踰こえたる貴人の驚怖のあまりに氣を喪うしなはんとしたるを助け出だしき。人の噂を聞くに、この貴人はボルゲエゼうからの族にて、アルバノとフラスアチとの間に、大なる別墅べつしよを構かまへ、その苑そのにはめづらしき草花を植たゑて樂たのしみとせりとなり。世にはこの翁おきなもあやしき藥草を知ること、かのフルピアといふ媼に劣らずなど云ふものありとぞ。此貴人の使なりとて、「リフレア」着たる僕盾銀しもへたてぎん（スクヂイ）二十枚入りたる囊ふくろを我

におく
に貽りぬ。

翌日の夕まだ「アエ、マリア」の鐘鳴らぬほどに、人々我を伴ひて寺にゆき、母上に暇いとまごひ乞せしめき。きのふ祭見にゆきし晴は衣れぎのまゝにて、狭き木棺うちの裡に臥し給へり。我は合せたる掌に接吻するに、人々共音ともねに泣きぬ。寺門には柩ひつぎを擔ふ人立てり。送りゆく僧は白衣着て、帽を垂れ面を覆へり。柩は人の肩に上りぬ。

「カツプチノ」僧は蠟燭に火をうつして挽歌をうたひ始めたり。

マリウチアは我を牽ひきて柩かたへの旁かたへに隨へり。斜日ゆふひは蓋おほはざる棺を射て、母上のおん顔は生けるが如く見えぬ。知らぬ子供あまたおもしろげに我めぐりを馳せりて、燭涙の地に墜ちて凝りたるを拾ひ、反古ほごを振ひねりて作りたる筒に入れたり。我等が行くは、きのふ

祭の行列の過よぎりし街なり。木葉このはも草花も猶地上にあり。されど當時織り成したる華紋は、吾少時の福さいはひと俱ともに、きのふの祭の樂と俱ともに、今や跡なくなりぬ。幽堂つかあなの穹窿ふさを塞ふさぎたる大石を推し退け、柩を下ししに、底なる他ほかの柩と相觸れて、かすかなる響をなせり。僧等の去りしあとにて、マリウチアは我を石上に跪ひざまづかせ、「オオラ、プロオ、ノオビス」いのれわれらがために（禱爲我等）を唱へしめき。

ジエンツアノを立ちしは月あかき夜なりき。フエテリゴと知らぬ人ふたりと我を伴ひゆく。濃き雲はアルバノの巔いたゞきめぐを繞り。我がカムパニアの野を飛びゆく輕き霧を眺むる間、人々はもの言ふこと少かりき。いくばく幾もあらぬに、我は車の中に眠り、聖母を夢み、花を夢み、母上を夢みき。母上は猶生きて、我にもものいひ、我顔

を見てほゝ笑み給へり。

蹇丐

羅馬なる母上の住み給ひし家に歸りし後、人々は我をいかにせんかと議するが中に、フラア・マルチノはカムパニアの野に羊飼へる、マリウチアが父母にあづけんといふ。盾銀二十は、牧者が上にては得易からぬ寶なれば、この兒を家におきて養ふはいふもさらなり、又心のうちに喜びて迎ふるならん。さはあれ、この兒は既に半ば出家したるものなり。カムパニアの野にゆきては、香爐を提げて寺中の職をなさんやうなし。かくマルチノの心たゆた

ふと共に、フエデリゴも云ふやう。われは此兒をカムパニアにやりて、百姓にせんこと惜しければ、この羅馬市中にて、然るべき人を見立て、これにあづくるに若かずといふ。マルチノ思ひ定めかねて、僧たちと謀らんとて去る折柄、ペツポのをぢは例の木履きぐつを手に穿はきていざり來ぬ。をぢは母上のみまかり給ひしを聞き、又人の我に盾銀二十を貽おくりしを聞き、母上の追悼くやみよりは、かの金の發落なりゆきのこゝろづかひのために、こゝには訪おとづれ來ぬるなり。をぢは聲振り立てゝいふやう。この孤みなしごの族ぢうにて世にあるものは、今われひとりなり。孤をばわれ引き取りて世話すべし。その代りには、此家に残りたる物悉くわが方へ受け收むべし。かの盾銀二十は勿論なりといふ。マリウチアは臆面せぬ女なれば、進み出でゝ、

おのれフアラ・マルチノ其餘の人々ところの始末をば油斷なく取
 り行ふべければ、おのが一身をだにもてあましたる乞丐かたみの益なき
 こと言はんより、疾く歸れといふ。フエテリゴは席を立ちぬ。マ
 リウチアとペツポのをぢとは、跡に残りてはしたなく言ひ罵り、
 いづれも多少の利慾を離れざる、きたなき争をなしたり。マリウ
 チアのいふやう。この兒をさほど欲ほしと思はゞ、直に連れて歸り
 ても好し。若し肋あばら二三本打ち折りて、おなじやうなる畸形かたはとなし、
 往來ゆきの人の袖に縫らせんとならば、それも好し。盾銀二十枚をば、
 われこゝに持ち居れば、フアラ・マルチノの來給ふまで、決して
 他人に渡さじといふ。ペツポ怒りて、頑かたくななる女かな、この木履も
 てそちが頭に、ピアツツア、デル、ポ、口の通衢おほぢのやうなる穴を

穿^あけんと叫びぬ。われは二人が間に立ちて、泣き居たるに、マリ
 ウチアは我を推しやり、をぢは我を引き寄せたり。をぢのいふや
 う。唯だ我に隨ひ來よ。我を頼めよ。この負擔だに我方にあらば、
 その報酬も受けらるべし。羅馬の裁判所に公平なる沙汰なからん
 や。かく云ひつゝ、強ひて我をひきて戸を出でたるに、こゝには
 檻^{ぼろ}樓着たる童^{わらべ}ありて、一頭の驢^{ういぎうま}を牽けり。をぢは遠きところに往
 くとき、又急ぐことあるときは、枯れたる足を、驢の兩脇にひた
 と押し付け、おのが身と驢と一つ體になりたるやうにし、例の木
 履のかはりに走らするが常なれば、けふもかく騎^のりて來しなるべ
 し。をぢは我をも驢^{ろはい}背に抱き上げたるに、かの童は後より一鞭加
 へて驅け出^{いだ}させつ。途すがらをぢは、いつもの厭はしきさまに賺^{すか}

し慰めき。見よ吾兒。よき驢にあらずや。走るさまは、「コルソ
 才」の競馬にも似ずや。我家にゆき着かば、樂しき世を送らせん。
 神の使もえ享^うけぬやうなる饗^{もてなし}應すべし。この話の末は、マリウ
 チアを罵る千言萬句、いつ果つべしとも覺えざりき。をぢは家を
 遠ざかるにつれて、驢^{むちう}を策たしむること少ければ、道行く人々皆
 このあやしき凹^{ふたりのり}騎に目を注^つけて、美しき兒なり、何處よりか
 盗み來し、と問ひぬ。をぢはその度ごとに我^{わが}身上話を繰り返しつ。
 この話をば、ほとく道^{みち}の曲りめごとに浚^{さら}へ行くほどに、賣漿^{みづうり}
 婆^ばはをぢが長物語の酬^{むくい}に、檸檬水^{リモネ}一杯^{ひとつき}を白^{たゞ}にて與へ、をぢと
 我とに分ち飲ましめ、又別に臨みて我に核^{さね}の落ち去りたる松^{まつ}子^{のみ}
 一つ得させつ。

まだをぢがすみか栖すにゆき着かぬに、日は暮れぬ。我は一言をも出さ
 ず、顔をおほ掩おほうて泣き居たり。をぢは我を抱おろき卸おろして、例の大部屋
 の側なる狭き一間につれゆき、一隅たうもろこしに玉蜀黍さやの莢敷きたるを指
 し示し、あれこそ汝がふしど臥床ふしどなれ、さきには善き檸檬水吞ませたれ
 ば、まだ喉も乾かざるべく、腹も減らざるべし、と我頬を撫で、
 微笑ほゝゑみたる、その面恐しきこと譬たとへんに物なし。マリウチアが持
 ちたる囊エツツリノには、猶銀幾ばくかある。馭エツツリノ者者に與ふる錢をも、あ
 の中よりや出し。貴人の僕は、金もて來しとき、何といひしか。
 かく問ひ掛けられて、我はたゞ知らずとのみ答へ、はては泣聲に
 なりて、いつまでもこゝに居ることによ、あすは家に歸らるゝこ
 とによ、と問ひぬ。勿論なり。いかでか歸られぬ事あらん。おと

なくそこに寐よ。「アエ、マリア」を唱ふることを忘るな。人

の眠る時は鬼の醒めたる時なり。十字を截りて寐よ。この鐵壁を

ば吼る獅子も越えずといふ。神を祈らば、あのマリウチアの腐

女が、そちにも我にも難儀を掛けたるを訴へて、毒に中り、惡

瘡を發するやうに呪へかし。おとなしく寐よ。小窓をば開けてお

くべし。涼風は夕餉の半といふ諺あり。蝙蝠をなおそれそ。

かなたこなたへ飛びめぐれど、入るものにはあらず。神の子と共
に熟寐せよ。斯く云ひ畢りて、をぢは戸を鎖ちて去りぬ。

をぢの部屋には久しく立ち働く音聞えしが、今は人あまた集へ

りと覺しく、さま／＼の聲して、戸の隙よりは光もさしたり。

部屋のさまは見まほしけれど、枯れたる玉蜀黍の莢のさわくと

鳴らば、おそろしきをぢの又入來ることもやと、いと徐しづかに起き上りて、戸の隙に目をさし寄せつ。燈心は二すぢともに燃えたり。卓には麵包パンあり、菜　母親だに迂闊ならずば、今日を待たず、善き金の蔓となすべかりしものを。神の使のやうなる善き聲なり。法皇の伶人には恰好なる童なり。人々は我齡を算へ、我がために作なさでかなはぬ事を商量したり。その何事なるかは知らねど、善きことにはあらず。奈何いかにしてこゝをばのがれむ。われは穉心をさなごころにあらん限りの智慧を絞り出しつ。固もとよりいづこをさして往かんと迄は、一たびも思ひ計らざりき。鋪板ゆかを這ひて窓の下にいたり、木片きのきれありしを踏臺にして窓に上りぬ。家は皆戸を閉ぢたり。街には人行絶えたり。るゝには飛びおるゝより外に道なし。されどそれ

も恐ろし。とつおいつする折しも、この挟き間の戸ざしに手を掛くる如き音したれば、覺えず窓縁まどぶちをすべりおちて、石垣づたひに地に墜おちぬ。身は少し痛みしが、幸にこゝは草の上なりき。

跳ね起きて、いづくを宛あてともなく、狭く曲りたる巷ちまたを走りぬ。

途にて逢ひたるは、杖もて敷石を敲たき、高聲にて歌ふ男一人のみなりき。しばらくして廣きところに出でぬ。こゝは見覺あるフオ、ルム、ロマアヌムなりき。常は牛市と呼ぶところなり。

露宿、わかれ

月はカピトリウム（羅馬七陵の一）の背後を照せり。セプチミ

ウス・セエルス帝の凱旋門に登る磴の上には、大外套被りて臥したる乞兒かたゐ二三人あり。古の神殿のなごりなる高き石柱は、長き影を地上に印せり。われはこの夕まで、日暮れてこゝに來しことなかりき。鬼氣は少年の衣を襲へり。歩をうつす間、高草の底に横はりたる大理石の柱頭に蹶つまづきて倒れ、また起き上りて帝王堡ていおうはうの方を仰ぎ見つ。高き石がきは、纏まつはれたる蔦かづらのために、いよゝおそろし氣げなり。青き空をかすめて、ところ／＼に立てるは、眞黒まぐろにおほいなるいとすぎの木なり。毀れたる柱、碎けたる石の間には、放飼はなしがひうさぎうまの驢あり、牛ありて草を食はみたり。あはれ、こゝには猶我に迫り、我を窘めくるしざる生物こそあれ。

月あきらかなれば、物として見えぬはなし。遠き方より人の來

り近づくあり。若し我を索むるものならば奈何せん。われは巨巖
 の如くに我前に在る「コリゼエオ」に匿れたり。われは猶きのふ
 落したる如き重廊の上に立てり。こゝは暗くして且冷なり。われ
 は二あし三あし進み入りぬ。されど窸響にひゞく足音おそろしけ
 れば、徐に歩を運びたり。先の方には焚火する人あり。三人の形
 明に見ゆ。寂しきカムパニアの野邊を夜更けては過ぎじとて、こゝ
 に宿りし農夫にやあらん。さらずばこゝを成る兵士にや。はた盜
 にや。さおもへば打物の石に觸るゝ音も聞ゆる如し。われは却
 歩して、高き圓柱の上に、木梢と蔦蘿とのおほひをなした
 るところに出でぬ。石がきの面をばあやしき影往來す。處々に抽
 け出でたる截石の將に墜んとして僅に懸りたるさま、唯だ蔓草

にのみ支へられたるかと思はる。

上の方なる中の廊を行く人あり。旅人の此古跡の月を見んとて來ぬるなるべし。その一群のうちには白き衣着たる婦人あり。案内者に續ついまつ松とらせて行きつゝ、柱しげき間に、忽ち顯あらはれ忽ち隱るゝ光景今も見ゆらん心地す。

暗碧なる夜は大地を覆ひ來たり、高低さまざまなる木は天鵝絨びろうどの如き色に見ゆ。一葉ごとに夜氣を吐けり。旅人のかへり行くあとを見送りて、ついまつの赤き光さへ見えなくなりぬる時、あたりは闐げきとして物音絶えたり。この遺址ゐしのうちには、耶蘇教徒が立てたる木卓あまたあり。その一つの片かげに、柱頭ありて草に埋もれたれば、われはこれに腰掛けつ。石は氷の如く冷なるに、我頭

の熱さは熱を病むが如くなりき。寐られぬまゝに思ひ出づるは、

この「コリゼエオ」の昔語なり。猶太教奉ずる囚人が、羅馬の帝ユダヤみかど

の厳しき仰によりて、大石を引き上げさせられしこと、この平地にて獸を闘はせ、又人と獸と相搏うたせて、前低く後高き廊の上より、あまたの市民これを觀きといふ事、皆我當時の心頭に上りぬ。

そもくこの「コリゼエオ」は楕圓なる四層のたてものにして、「トラエルチイノ」石もてこれを造る。層ごとに組かたを殊にす。「ドロス」、「イオン」、「コリントス」の柱の式皆備はりたり。基督生れてより七十餘年の後、エスパジアヌス帝の時、この工事を起しつ。これに役せられたる猶太教徒の數一萬二千人とぞ聞えし。櫛形の迫せりもち持八十ありて、これをめぐれ

ば千六百四十一歩。平地の周匝めぐりには八萬六千坐を設け、頂に二萬人を立たしむべかりきといふ。今はこゝにて基督教の祭儀を執行せしむ。バイロン卿詩あり。

この場にはのあらん限は

内日刺す都もあらん
うちひさ

このにはのなからん時は

うちひさす都もあらじ

うちひさす都あらずば

あはれくこの世よのなか間もあらじとぞおもふ

頭の上にあたりて物音こそすれ。見あぐれば物の動くやうにこ

そおもはるれ。影の如き人ありて、椎つちを揮ふるひ石をたゝむが如し。

その人を見れば、色蒼ざめて黒き髯長く生ひたり。これ話に聞きし猶太教徒なるべし。積み疊ぬる石は見る見る高くなりぬ。「コリゼエオ」は再び昔のさまに立ちて、幾千萬とも知られぬ人これに満ちたり。長き白き衣着たるエスタの神の巫女あり。帝王の座も設けられたり。赤條々あかはだかなる力士の血を流せるあり。低き廊の方より叫ぶ聲、吼ほゆる聲聞ゆ。忽ち虎豹の群ありて我前を奔り過ぐ。我はその血ばしる眼を見、その熱き息に觸れたり。あまりのおそろしさに、かの柱頭にひたと抱きつきて、聖母の御名をとなふれども、物騒がしきは未だ止まず。この怪しき物共の群りたる間にも、幸なるかな、大なる十字架の屹きつとして立てるあり。こはわがこゝを過ぐることに接吻したるものなり。これを目當に走り

寄りて、緊しかと抱きつくほどに、石落ち柱倒れ、人も獸もあらずな
りて、我は復また人事をしらず。

人心地つきたる時は、熱すでに退きたれど、身は尚いたく疲れ
て、われはかの木づくりの十字架の下に臥したり。あたりを見る
に、怪しき事もなし。夜は静にして、高き石垣の上には鶯鳴けり。
われは耶蘇をおもひ、その母をおもひぬ。わが母上は今あらねば、
これよりは耶蘇の母ぞ我母なるべき。われは十字架を抱きて、そ
の柱に頭を寄せて眠りぬ。

幾時をか眠りけん。歌の聲に醒さむれば、石垣の頂には日の光かゞ
やき、「カツプチノ」僧二三人蠟燭を把とりて卓より卓に歩みゆき
つゝ、「キユリエ、エレイソン」（主よ、憫あはれめ）と歌へり。僧は

十字架に來り近づきぬ。俯して我面を見るものは、フラア・マル
 チノなりき。わが色蒼ざめてこゝにあるを訝いぶかりて、何事のありし
 ぞと問ひぬ。われはいかに答へしか知らず。されどペツポのをぢ
 の恐ろしさを聞きたるのみにて、僧は我上を推し得たり。我は衣
 の袖に縋りて、我を見棄て給ふなど願ひぬ。連なる僧もわれをあ
 はれと思へる如し。かれ等は皆我を知れり。われはその部屋をお
 とづれ、彼等と共に寺にて歌ひしことあり。

僧は我を伴ひて寺に歸りぬ。壁に木板の畫を貼てうしたる房に入り、
 檸檬樹リモネの枝さし入れたる窓を見て、われはきのふの苦を忘れぬ。
 フラア・マルチノは我をペツポが許へは還かへさじと誓ひ給へり。同
 寮の僧にも、このちごをば蹇あしなへたる丐兒かたゐにわたされずとのたまふ

を聞きつ。

午のころ僧は菜あほね、麩包パン、葡萄酒を取り來りて我に飲いんたん啖せしめ、さて容かたちを正していふやう。便びんなき童よ。母だに世にあらば、この別わかれはあるまじきを。母だに世にあらば、この寺の内うちにありて、尊き御蔭を被り、安らかに人となるべかりしを。今は是非なき事となりぬ。そちは波風荒き海に浮ばんとす。寄るところは一ひらの板のみ。血を流し給へる耶蘇、涙を墮おとし給ふ聖母をな忘れそ。汝うからが族といふものは、その外にあらじかし。此詞を聞きて、われは身を震はせ、さらば我をばいづかたにか遣らんとし給ふと問ひぬ。これより僧は、われをカムパニアの野なる牧者夫婦にあづくること、二人をば父母の如く敬ふべき事、かねて教へおきし祈祷

の詞を忘るべからざる事など語り出でぬ。夕暮にマリウチアと其
 父とは寺門迄迎へに來ぬ。僧はわれを伴ひ出で、引き渡しつ。こ
 の牧者のさまを見るに、衣はペツポのをぢのより舊ふりたるべし。
 塵を蒙り、裂けやぶれたる皮靴を穿はき、膝あらはを露し、野の花を挿し
 たる尖せんぼう帽を戴けり。かれは跪ひざまづきて僧の手に接吻し、我を顧みて、
 かゝる美しき童なれば、我のみかは、妻も喜びてもり育てんと誓
 ひぬ。マリウチアは財囊を父にわたしつ。われ等四人はこれより
 寺に入りて、人々皆默禱す。われも共に跪ひざまづきしが、祈禱の詞は出
 でざりき。我眼は久しき馴染なじみの諸像を見たり。戸の上高きところ
 を舟に乗りてゆき給ふ耶蘇、贊にへづくゑ卓の神の使、美しきミケルは
 いふもさらなり、蔦かづらの環を戴きたる髑髏どくろにも暇乞しつ。別

に臨みて、フラア・マルチノは手を我頭上に加へ、晚餐式施行法
 (モオドオ、ヂ、セルキレ、ラ、サンクタ、メツサア)と題した
 る、繪入の小冊子を贈りぬ。

既に別れて、ピアツツア、バルベリイニの街を過ぐとて、仰い
 で母上の住み給ひし家を見れば、窓といふ窓悉く開け放たれたり。
 新しきあるじを待つにやあらん。

あらの
 曠野

羅馬城のめぐりなる大曠野だいくわうやは、今我すみかとなりぬ。古跡を
 たづね、美術を究めんと、初てテエエル河畔の古都に近づくもの

は、必ずこの荒野に歩をとゞめて、これを萬國史の一ひらと看み做な
 すなり。起たてる丘、伏したる谷、おほよそ眼に觸るゝもの、一つ
 として史冊中の奇怪なる古文字にあらざるなし。畫工の來るや、
 古の水道のなごりなる、寂しき橢形せりもち迫持せりもちを寫し、羊の群を牽ひき
 たる牧者を寫し、さてその前に枯れたる薊あざみを寫すのみ。歸りてこ
 れを人に示せば、看るもの皆めでくつがへるなるべし。されど我
 と牧者とは、おのゝ其情を殊にせり。牧者は久しくこゝに住ひ
 て、この焦こがれたる如き草を見、この熱き風に吹かれ、こゝに行は
 るゝ疫癘えやみに苦められたれば、唯だあしき方、忌まはしき方のみを
 や思ふらん。我は此景に對して、いと面白くぞ覺えし。平原の一
 面たる山々の濃淡いろなる緑を染め出したる、おそろしき水

牛、テエエルの黄なる流、これを溯さかのほる舟、岸邊を牽くかるゝ軛びきお負おひたる牧牛、皆目新しきものゝみなりき。われ等は流に溯りて行きぬ。足の下なるは丈低く黄なる草、身のめぐりなるは莖長く枯れたる薊のみ。十字架の側を過ぐ。こは人の殺されたるあとに立たりしなり。架かに近きところには、盗人の屍の切り碎きて棄てたるなり。隻腕かたうで、隻脚かたあしは猶その形を存じたり。それさへ心を寒からしむるに、我栖すみかはこゝより遠からずとぞいふなる。

此家は古の墳墓の址あとなり。この類たぐひの穴こゝらあれば、牧者となるもの大抵これに住みて、身を成まもるにも、又身を安んずるにも、事足れりとおもへるなり。用なき窪くぼみをば填うめ、いらぬ罅すきまをば塞ふぎ、上に草を茸ふけば、家すでに成れり。我牧者の家は丘の上うへにありて

兩層あり。隘せばき戸口なるコリントスがたの柱は、當初墳墓を築き

しときの面影なるべし。石垣の間なる、幅廣き三條の柱は、後の

修繕ならん。おもふに中古は砦とりでにやしたりけん。戸口の上に穴あ

り。これ窓なるべし。屋根の半は葦よしすだれ簾に枯枝をまじへて葺き、

半は又枝さしかはしたる古木をその儘に用ゐたるが、その梢より

は忍冬にんどう（カプリフオリウム）の蔓長く垂れて石垣にかゝりたり。

こゝが家ぞ、と途すがら一言も物いはざりしベネデツトオ告げ

ぬ。われは怪しげなる家を望み、またかの盗人の屍をかへり見て、

こゝに住むことか、と問ひかへしつ。翁おきなにドメニカ、ドメニカと

呼ばれて、荒あらたへの汗衫はだぎひとつ着たる媼おうな出でぬ。手足をばことごと

とく露あらはして髪をばふり亂したり。媼は我を抱き寄せて、あまたゝ

び接吻す。夫の詞少きとはうらうへにて、この媼はめづらしき饒ぜ
うぜつ舌なり。そなたは薊生ふる沙原より、われ等に授けられたるイ
 スマエルアブラハム（亞伯拉罕の子）なるぞ。されどわが饗もてなし應には足らぬ
 ことあらせじ。天上なる聖母に代りて、われ汝を育つべし。臥床ふしど
 はすでにこしらへ置きぬ。豆も烹にえたるべし。ベネデツトオもそ
 なたも食卓に就け。マリウチアはともに來てざりしか。尊てき爺や（法
 皇）を拜まざりしか。ラカン豚かぎをば忘れざりしならん。眞まこと鍬くわの鉤かぎをも。
 新しき聖母の像をも。舊ふるきをば最早形見えわかぬ迄接吻したり。
 ベネデツトオよ。おん身ほど物覺好き人はあらじ。わがかはゆき
 ベネデツトオよ。かく語りつゞけて、狭き一間に伴ひ入りぬ。後
 にはこの一間、わがためには「ワチカアノ」（法皇の宮）の廣間

の如く思はれぬ。おもふに我詩才を産み出ししは、此ひとつ家ならんか。

若き棕櫚しゆるは重おもきを負ふこといよく大にして、長ずることいよ／＼早しといふ。我空想も亦この狭き處にとぢ込められて、却かへりて大に發達せしならん。古の墳墓の常とて、此家には中央なる廣間あり。そのめぐりには、許多あまたの小龕せうがん並びたり。又二重の幅闊ひろき棚あり。處々色かはりたる石を竝たみて紋を成せり。一つの龕をば食堂とし、一つには壺鉢などを藏し、一つをば廚くりやとなして豆を煮たり。

老夫婦は祈祷して卓に就けり。食畢をりて媪は我を牽ひきて梯はしごを登り、二階なる二龕がんにいたりぬ。是れわれ等三人の臥房ねべやなり。わが

龕は戸口の向ひにて、戸口よりは最も遠きところにあり。臥床の側には、二條の木を交くひちが叉はせて、其間に布を張り、これにをさな子一人寐せたり。マリウチアが子なるべし。媪が我に「アエ、マリア」唱へしむるとき、美しき色いろつや澤ある蜥蜴とかけ我が側を走り過ぎぬ。おそろしき物にはあらず、人をおそれこそすれ、絶てものそこなふものにはあらず、と云ひつゝ、かの釋兒をおのが龕のかたへ遷うつしつ。壁に石一つ抽ぬけ落ちたるところあり。こゝより青空見ゆ。黒き蔦つたの葉の鳥なんどの如く風に揺らるゝも見ゆ。我は十字を切りて眠に就きぬ。亡なき母上、聖母、刑せられたる盗人の手足、皆わが怪しき夢に入りぬ。

翌朝より雨ふりつゞきて、戸は開けたれどいと闇き小部屋に籠

り居たり。わが帆木綿の上なる穉子をゆすぶる傍にて、媼は芋^をう
 みつゝ、我に新しき祈禱を教へ、まだ聞かぬ聖^{ひじり}の上を語り、また
 この野邊に出づる劫盜^{ひはぎ}の事を話せり。劫盜は旅人を覗^{ねら}ふのみにて、
 牧者の家^{など}杯へは來ることなしとぞ。食は葱、麵包^{パン}などなり。皆^{うま}旨
 し。されど一間にのみ籠り居らんこと物憂きに堪へねば、媼は我
 を慰めんとて、戸の前に小溝を掘りたり。この小テエ^{テエ}ル河は、
 をやみなき雨に黄なる流となりて、いと緩やかにながるめり。さ
 て木を刻み葦を截りて作りたるは羅馬よりオスチア^{テエ}（テエ^{テエ}ル河
 口の港）にかよふなる帆かけ舟なり。雨あまり劇^{はげ}しきときは、戸
 をさして闇黒裡に坐し、媼は芋をうみ、われは羅馬なる寺のさま
 を思へり。舟に乗りたる耶蘇は今面前に見ゆる心地す。聖母の雲

に駕りて、神の使の童供に舁かせ給ふも見ゆ。環かざりしたる髑れかうべも見ゆ。

雨の時過ぐれば、月を踰こゆれども曇ることなし。われは走り出で、遊びありくに、媪いましは戒めて遠く行かしめず、又テエルの河近く寄らしめず。この岸は土鬆ゆるければ、踏むに従ひて頽くづることありといへり。そが上、岸近きところには水牛あまたあり。こは猛き獸にて、怒るときは人を殺すと聞く。されど我はこの獸を見ることを好めり。蟒蛇をろちの鳥を呑むときは、鳥自ら飛びて其咽のんどに入るといふ類にやあらん。この獸の赤き目には、怪しき光ありて、我を引き寄せんとする如し。又此獸の馬の如く走るさま、力を極めて相鬪ふさま、皆わがために興ある事なりき。我は見たるとこ

ろを沙すなに畫き、又歌につゞりて歌ひぬ。媪は我聲のめでたきを稱たへて止まず。

時は暑に向ひぬ。カムパニアの野は火の海とならんとす。瀦たまり

水みづは悪臭を放てり。朝夕のほかは、戸外に出づべからず。かゝ

る苦熱はモンテ、ピンチヨオにありし身の知らざる所なり。かし

この夏をば、我猶記おぼえたり。乞兒かたゐは人に小銅貨をねだり、麩包パンを

ば買はで氷水を飲めり。二つに割りたる大西瓜の肉赤く核黒きは、

いづれの店にもありき。これをおもへば唾つわ湧きて堪へがたし。こ

の野邊にては、日光ますぐに射下せり。我が立てる影さへ我脚下

に没せんばかりなり。水牛は或は死せるが如く枯草の上に臥し、

或は狂せるが如く驅けめぐりたり。われは物語に聞ける亞弗利加アフリカ

沙漠の旅人になりたらんやうにおもひき。

大海の孤舟にあるが如き念をなすこと二月間、何の用事をも朝夕の涼しき間に濟ませ、終日我も出でず人も來ざりき。烘く如き熱、腐りたる蒸氣の中にありて、我血は湧きかへらんとす。沼は涸れたり。テエエルの黄なる水は生なまぬる温くなりて、眠たげに流れたり。西瓜の汁も温し。土石の底に藏したる葡萄酒も酸すくして、半ば煮にたる如し。我喉は一滴の冷露を嘗むること能はざりき。天には一纖雲なく、いつもおなじ碧色にて、吹く風は唯だ熱き「シロツコ」（東南風）のみなり。われ等は日ごとに雨を祈り、媼は朝夕山ある方を眺めて、雲や起ると待てども甲斐なし。蔭あるは夜のみ。涼風の少しく動くは日出る時と日入る時とのみ。われは

暑に苦み、この變化なき生活に倦^うみて、殆ど死せる如くなりき。

風少しく動くと覺ゆるときは、蠅^{ぶよ}など群がり來りて人の肌を

刺せり。水牛の背にも、昆蟲^{あつま}聚りて寸膚を止めねば、時々怒りて

自らテエ^エルの黄なる流に躍り入り、身を水底に滾^{まろが}してこれを攘^{はら}

ひたり。羅馬の市にて、^{げきぜん}闐然たる午^{ひるどき}時の街を行く人は、^{すぢ}綫の

如き陰影を求めて夏日の烈しきをかこつと雖^{いへども}、これをこの火の海

にたゞよひ、硫黄氣ある毒を呼吸し、幾萬とも知られぬ惡蟲に

膚を嚙まるゝものに比ぶれば、猶是れ樂土の客ならんかし。

九月になりて氣候やゝ温和になりぬ。フエ^エデリゴはこの燒原を

畫かんとて來ぬ。我が住める怪しき家、^{ひはぎ}劫盜^{かばね}の屍をさらしたる處、

おそろしき水牛、皆其筆に上りぬ。我には紙筆を與へて畫の稽古

せよと勧め、又折もあらば迎へに来て、フラア・マルチノ、マリウチア其外の人々に逢はせばやと契りおきぬ。惜むらくはこの人久しく約を履まざりき。

水牛

十一月になりぬ。こゝに來しより最快き時節なり。爽快なる風は山々よりおろし來ぬ。夕暮になれば、南の國ならでは無しといふたゞならぬ雲の色、目を驚かすやうなり。こは畫工のえうつさぬところなるべく、また敢て寫さぬものなるべし。あめ色の地に、橄欖（オリワ）の如く緑なる色の雲あるをば、樂土の苑圍に

湧き出でたる山かと疑ひぬ。又夕ゆふばえ映の赤きところに、暗碧なる
 雲の浮べるをば、天人の居る山の松林ならんと思ひて、その谷
 かげには、美しき神の童あまた休みる、白き翼を扇の如くつかひ
 て、みづから涼を取るらんとおもひやりぬ。或日の夕ぐれ、いつ
 もの如く夢ごゝろになりてゐたるが、ふと思ひ付きて、鍼はりもて穿うが
 ちたる紙片を目にあて、太陽を覗きはじめつ。ドメニカこれを見
 つけて、そは目を傷そこなふわざとて日の見えぬやうに戸をさしつ。
 われ無事に苦みて、外に出で、遊ばんことを請こひ、許ゆるしをえたる嬉
 しさに、門のかたへ走りゆき、戸を推し開きつ。その時一人の男
 遽あわただしく驅け入りて、門口に立ちたる我を撞つきまろばし、扉をは
 たと閉ぢたり。われは此人の蒼ざめたる面を見、その震ふ唇より

洩れたる「マドンナ」（聖母）といふ一聲を聞きも果てぬに、おそろしき勢にて、外より戸を衝くものあり。裂け飛んだる板は我頭に觸れんとせり。その時戸口を塞ぎたるは、血ばしる眼を我等に注ぎたる、水牛の頭なりき。ドメニカはあと叫びて、我手を握り、上の間にゆく梯を二足三足のぼりぬ。逃げ込みたる男は、あたりを見　　はしベネデツトオが銃の壁に掛かりたるを見出しつ。こは賊なんどの入らん折の備にとて、丸をこめおきたるなり。男は手早く銃を取りぬ。耳を貫く響と共に、烟は狭き家に満ちわたり。われは彼男の烟の中にて、銃把を舉げて、水牛の額を撃つを見たり。獸は隘せばき戸口にはさまりて前にも後にもえ動かざりしなり。

こは何事をかし給ふ。君は物の命を取り給ひぬ。この詞はドメ
ニカが纒わづかにわれにかへりたる口より出でぬ。かの男。否聖母の恵
なりき。我等が命を拾ひぬとこそおもへ。さて我を抱き上げて、
されどわがために戸を開きしはこの恩人なりといひき。男の面は
猶蒼く、額の汗は玉をなしたり。その語を聞くに外國人にあらず。
その衣を見るに羅馬の貴人とおぼし。この人草木の花を愛めづる癖
あり。けふも採集に出で、ポンテ、モルレにて車を下り、テエ
エル河に沿ひてこなたへ來しに、圖らずも水牛の群にあひぬ。そ
の一つ、いかなる故にか、群を離れて衝つき來たりしが、幸にこの
家の戸開きて、危き難を免れきとなり。ドメニカ聞きて。さらば
おん身を救ひしは、疑もなく聖母のおんしわざなり。この童は聖

母の愛でさせ給ふものなれば、それに戸をば開かせ給ひしなり。おん身はまだ此童を識り給はず。物讀むことには長けたれば、書きたるをも、印おしたるをも、え讀まずといふことなし。晝かくことを善くして、いかなる形のものをも、明にそれと見ゆるやうに寫せり。「ピエトロ」寺の塔をも、水牛をも、肥えふとりたるパアテル・アムブロジオ（僧の名）をもゑがきぬ。聲は類なくめでたし。おん身にかれが歌ふを聞かせまほし。法皇の伶人もこれには優らざるべし。そが上に性さがすなほなる兒なり。善き兒なり。子供には譽めて聞かすること宜しからねば、その外をば申さず。されどこの子は、譽められても好き子なりといふ。客。この子の穉をじなきを見れば、おん身の腹にはあらざるべし。ドメニカ。否、老い

たる無花果いちじゆくの木には、かかる芽は出でぬものなり。されど此世
 には、この子の親といふもの、われとベネデツトオとの外あらず。
 いかに貧くなりても、これをば育てむと思ひ侍り。そは兎とまれ角かく
 まれ、この獸をばいかにせん。(頭より血流るゝ、水牛の角を握
 りて。)戸口に挟まりたれば、たやすく動くべくもあらず。ベネ
 デツトオの歸るまでは、外に出でんやうなし。こを殺しつとて、
 咎めらるゝことあらば、いかにすべき。客。そは心安かれ。ある
 じの老女おうなも聞きしことあるべきが、われはボルゲエゼうからの族なり。
 媪。いかでか、と答へて衣に接吻せんとせしに、客はその手をさ
 し出して吸はせ、さて我手を兩の掌の間に挟みて、媪にいふやう。
 あすは此子を伴ひて、羅馬に來よ。われはボルゲエゼやかたの館に住め

り。ドメニカは忝かたじけなしとて涙を流しつ。

ドメニカはわが日ごろ書き棄てたる反古ほごあまた取り出で、客に示し、客は我頬を撫で、小きサルワトル・ロオザ(名高き畫工)よと讚め稱へぬ。媪。まことに宣のたまふ如し。穉わざきもの業として、珍しくは候はずや。それくの形明に備はりたり。この水牛を見給へ。この舟を見給へ。こはまた我等の住める小家なり。こは我姿を寫したるなり。鉛筆なれば、色こそ異なれ、わが姿のその儘ならずや。又我に向ひて、何にもあれ、この御方に歌ひて聞せよ。自ら作りて歌ふが好し。この童は長き物語、こまやかなる法話をさへ、歌に作りて歌ひ侍り。年長たけたる僧にも劣らじと覺ゆ。客は我等二人のさまを見て、おもしろがり、我には疾とく歌

ひて聞せよ、と勸めつ。われは常の如く遠慮なく歌ひぬ。媼は常の如くほめそやしつ。されど其歌をば記憶せず。唯だ聖母、貴き客人、水牛の三つをくりかへしたるをば未だ忘れず。客は黙坐して聴きゐたり。媼はそのさまを見て、童の才に驚きて詞なきならんと推し量りつ。

歌ひ畢りしとき、客は口を開きていふやう。さらば明日疾くその子を伴ひ來よ。否、夕暮のかたよろしからん。「アエ、マリア」の鐘鳴る時より、一時ばかり早く來よ。さて我は最早退るべきが、いづくよりか出づべき。水牛の塞ぎたる口の外、この家には口はなきか。又こゝを出で、車まで行かんに、水牛に追はるゝやうなる虞おそれなからしめんには、いかにして好かるべきか。媼。かしこの

壁に穴ありて、それより這ひ出づるときは、石垣も高からねば、すべりおりんこと難からず。わが如き老いたるものも、かしこよりに出入すべく覺え侍り。されど貴きおん方を案内しまゐらすべき口にはあらず。客は聞きも果てず、梯を上りて、穴より頭を出し、外の方を覗きていふやう。否、善き降口なり。「カピトリウム」に降りゆく階段にも譲らず。水牛の群は河のかたに遠ざかりぬ。道には眠たげなる百姓あまた、籐とうの束積みたる車を、馬に引かせて行けり。あの車に沿ひゆかば、また水牛に襲はるとも身を匿かくすに便よからん。かく見定めて、客は媪に手を吸はせ、わが頬を撫で、再びあすの事を契りおきて、茂れる蔦かづらの間をすべりおりぬ。われは窓より見送りしが、客は間もなく籐の車に追ひすが

りて、百姓の群と俱ともに見えずなりぬ。

みたち

牧者二三人の帮たすけを得て、ベネデツトオは戸口なる水牛の屍かばねを取り片付けつ。その日の物語は止むときなかりしかど、今はよくも記おぼえず。翌朝疾く起きいで、夕暮に都に行かんと支度に取り掛りぬ。数月の間行李の中に鎖される我晴衣はれぎはとり出されぬ。帽には美しき薔薇の花を挿したり。身のまはりにて、最も怪しげなりしは履はきものなり。靴とはいへど羅馬の鞋サンダラに近く覚えられき。

カムパニアの野道の遠かりしことよ。その照る日の烈しかりし

ことよ。ポ、口の廣こうぢに出で、記念塔のめぐりなる石獅の
 口より吐ける水を掬むすびて、我涸れたる咽のんどうを潤し、が、その味は人
 となりて後フアレルナ、チプリイの酒などを飲みたるにも増し
 て旨かりき。「北より羅馬に入るものは、ポルタア、デル、ポ、
 口の關を入りて、ピアツツア、デル、ポ、口といふ美しく大なる
 廣こうぢに出づ。この廣こうぢはテエエル河とピンチヨオ山との
 間にあり。兩側にはいとすぎ、亞刺比亞アラビア護謨ゴムの木（アカチア）茂
 りあひて、その下かげに今様なる石像、噴水などあり。中央には
 四つの石獅に圍まれたる、セソストリス時代の記念塔あり。前に
 は三條の直道あり。即ち卅ア、バブ卅ノ、イル、コルソオ、卅ア、
 リペツタなり。イル、コルソオの兩角をなしたるは、同じ式に建

てたる兩伽藍がらんなり。歐羅巴ヨオロッパに都會多しと雖、古羅馬のピアツツ

ア、デル、ポ、口ほど晴やかなるはあらし。」我は熱き頬を獅子の口に押し當て、水を頭に被りぬ。衣うるほや潤はん、髪や亂れん、と

ドメニカは氣遣ひぬ。トア、リペツタを下りゆきて、ボルゲエゼの館に近づきぬ。我もドメニカも、此館の前をば幾度となく過よぎり

しかど、けふ迄は心とめて見しことなし。今歩を停めて仰ぎ見れば、その大き、その豊さ、その美しさ、譬へんに物なしと覺えき。

殊に目を駭おどろかせるは、窓の裡なる長き絹の帷とぼりなり。あの内にいま

す君は、いま我等が識る人となりぬ。きのふその君の我家に來給ひし如く、いま我等はそのみたちに入らんとす。斯く思へば嬉しさいかばかりならん。

中庭、部屋々々を見しとき、身の震ひたるをば、われ決して忘
 れざるべし。あるじの君は我に親し。彼も人なり。我も人なり。
 然さはあれどこの家居のさまこそ譬へても言はれね。聖ひじりと世の常の
 人との別もかくやあらん。方形をなして、いろ／＼なる全身像、
 半身像を据ゑつけたる、白塗の廊のいと高きが、小き園めぐ繼れ
 るあり。(後にはこゝに瓦を敷きて中庭とせり。) 高き蘆ろくわい薈、
 霸王はわうじゆ樹じゆなど、廊の柱に攀よぢんとす。檸檬リモネ樹はまだ日の光に黄
 金色に染められざる、緑の實を垂れたり。希臘ギリシヤの舞女の形したる
 像二つあり。力を併あはせて、金盤一つさし上げたるがその縁少しく
 欹そはだちて、水は肩に迸はしり落ちたり。丈高く育ちたる水草ありて、
 露けき緑葉もてこの像を掩おほはんとす。烈しき日に焼かれたるカム

パニアの瘠土に比ぶるときは、この園の涼しき、香しきかぐは奈何いかにぞや。

闊ひろき大理石の梯を登りぬ。龕がんあまたありて、貴き石像立てり。

其一つをば、ドメニカ聖母ならんと思ひ惑ひて、立ち停りてぬか

づきぬ。後に聞けば、こはエスタの像なりき。これも人間の奇くし

き處女にぞありける。(譯者のいはく。希臘の竈かまどの神なり。男神

二人に挑いどまれて、嫁せずして終りぬと云ひ傳ふ。)飾美しき「リ

フレア」着たる僮出しもべで迎へつ。その面持おももちの優しさには、こゝの

間まごとの大き、美しさかくまでならずば、我胸の躍ることさへ治

りしならん。床は鏡の如き大理石なり。壁といふ壁には、めでた

き畫を貼てふしたり。その間々には、玻はり璃鏡を嵌はめ、その上に花束、

はなの環など持たる神童の飛行せるを畫きたり。又色美しき鳥の、

翼を放ちて、赤き、黄なる、さま／＼の木の實を啄めるを畫きたるあり。かく華やかなるものをば、今まで見しことあらざりき。

暫し待つほどに、あるじの君出でましぬ。白衣着たる、美しき貴婦人の、大なる敏き目を我等に注ぎたるを、伴ひ給へり。婦人は我額髪を撫で上げ、鋭けれども優しき目にて、我面を打ち守り、さなり、君を助けしは神のみつかひなり、この見ぐるしき衣の下に、翼はかくれたるべしと宣ひぬ。主人。否、この兒の紅なる頬を見給へ。翼の生ゆるまでにはテエエルの河波あまた海に入るならん。母もこの兒の飛び去らんをば願はざるべし。さにあらずや。この兒を失はんことは、つらかるべし。媪。げにこの兒あらずなりなば、我小家の戸も窓も塞がりたるやうなる心地やせん。我小

家は暗く、寂しくなるべし。否、このかはゆき兒には、われえ別れざるべし。婦人。されど今宵しばらくは、別るとも好からん。二三時間立ちて迎へに來よ。歸路は月あかゝるべし。そち達は盗を恐るゝことはあらじ。主人。さなり。兒をばしばしこゝにおきて、買ふものあらば買ひもて來よ。斯く云ひつゝ、主人は小き財ねいれ囊をドメニカが手に渡し、猶何事をか語り給ふに、我は貴婦人に引かれて奥に入りぬ。

奥の座敷の美しき、賓客の貴さに、我魂は奪はれぬ。我はあるは壁に畫ける神童の面の、緑なる草木の間にほゝゑめるを見、あるは日ごろ半ば神のやうにおもひし、紫の鞆くつしな穿ける議セナトオレ官、紅の袴着たる僧カルヂナアレ官達を見て、おのれがかゝる間に入り、かゝる

人に交ることを訝いぶかりぬ。殊に我眼をひきしは、一間の中央なる大水盤なり。醜みにくき龍に騎のりたる、美しきアモオルの神を据たゑたり。龍の口よりは、水高く迸り出で、又盤中に落ちたり。

貴婦人のこはをぢの命を救ひし兒ぞ、と引き合せ給ひしとき、

賓客達は皆ほゝゑみて、我に詞を掛け、議官僧官さへ頷き給ひぬ。

法皇のまもりのつはもの禁軍のの號衣しるしを着たる、少わかく美しき士官は我手を握

りぬ。人々さま／＼の事を問ふに、我は臆することなく答へつ。

その詞に、人々或は譽めそやし、或は高く笑ひぬ。主人入り來りて、我に歌うたへといふに、我は喜んで命に従ひぬ。士官は我に報せんとて、泡立てる酒を酌みてわたしゝかば、我何の心もつかで飲み乾さんとせしに、貴婦人快はやく傍より取り給ひぬ。我口に入

りしは少^{すこしばかり}許^ほなるに、その酒は火の如く^{ほのほ}の如く、脈々をめぐ
 りぬ。貴婦人はなほ我傍を離れず、笑を含みて立ち給へり。士官
 我にこの御方の上を歌へと勧めしに、我又喜んで歌ひぬ。何事を
 か聯^{つら}ねけん、いまは覺えず。人々はわが詞の多かりしを、才豊な
 りと稱へ、わが臆せざるを、心敏^{さと}しと譽めたり。カムパニアなる
 貧きものゝ子なりとおもへば、世の常なる作をも、天才の爲せる
 わぎの如く、愛^めでくつがへるなるべし。人々は掌を鳴せり。士官
 は座の隅なる石像に戴かせたりし、美しき月桂冠を取り來りて、
 笑みつゝ我頭の上に安んじたり。こは固^{もと}より戲謔に過ぎざりき。
 されどわが幼き心には、其間に眞面目なる榮譽もありと覺えられ
 て、又なく嬉しかりき。我は尚席上にて、マリウチア、ドメニカ

等に教へられし歌をうたひ、又曠野の中なる古墳の栖家すみか、眼の光
 おそろしき水牛の事など人々に語り聞せつ。時は惜めども早く過
 ぎて、我は媪おきなに引かれて歸りぬ。くだもの、果子など多く賜り、
 白銀幾つか兜兒かぶしにさへ入れられたるわが喜はいふもさらなり、媪
 は衣服、器什ものざらくさ／＼の外、二瓶の葡萄酒をさへ購あがなひひ得て、幸さち
 ある日ぞとおもふなるべし。夜は草木の上に眠れり。されど仰い
 でおほ空を見れば、皎々かうくたる望月もちづき、黄金の船の如く、藍碧な
 る青雲の海うかに泛うかびて、焦こがれたるカムパニアの野邊に涼をおくり降
 せり。

家に還りてより、優しき貴女の姿、賑はしき拍手の聲、寤寐ごびの
 間斷えず耳目を往來せり。喜ばしきは折々我夢うつつの現まになりて、又

ボルゲエゼの館に迎へらるゝ事なりき。かの貴婦人はわが人に殊なる性を知りておもしろがり給へば、我も亦ドメニカに對する如く、これに對して物語するやうになりぬ。貴婦人はこれを興あることに思ひて、主人の君に我上を譽め給ふ。主人の君も我を愛し給ふ。この愛は、曩さきに料はからずも我母上を、おのが車の轍わだちにかけしことありと知りてより、愈深くなりまさりぬ。逸したる馬の母上を踏たふしゝとき、車の中に居たるは、こゝの主人の君にぞありける。

貴婦人の名をフランチエスカといふ。我を率ゐて宮のうちなる畫堂に入り給ひぬ。美しき畫ぐわ幀たうに對して、我が穉をさなき問おろか、癡おろかなる評などするを、面白がりて笑ひ給ひぬ。後人々に我詞を語りつぎ給

ふごとに、人々皆聲高く笑はずといふことなし。午前は旅人この堂に満ちたり。又畫工の來ていろ／＼なる畫を寫し取れるもあり。午後になれば、堂中に人影なし。此時フランチエスカの君我を伴ひゆきて、畫ときなどし給ふなり。

特に我心に愜かなひしは、フランチエスコ・アルバニが四季の圖なり。「アモレットオ」といふ者ぞ、と教へられたる、美しき神の使の童どもは、我夢の中より生れ出でしものかと疑はる。その春と題したる畫の中に群れ遊べるさまこそ愛でたけれ。童一人大なる砥とめぐらを運すあれば、一人はそれにて鏃やじりを研ぎ、外の二人は上にありて飛行しつゝも、水を砥の上に灌そそげり。夏の圖を見れば、童ども樹々のめぐりを飛びかひて、枝もたわゝに實りたる果このみを摘みと

り、又清き流を泳ぎて、水を弄もてびたり。秋は獵の興を寫せり。手に繼ついで松取りたる童一人小車の裡うちに坐したるを、友なる童子二人牽き行くさまなり。愛はこの優しき獵夫さつをに、共に憩ふべき處を指し示せり。冬は童達皆眠れり。美しき女怪水中より出で、眠れる童たちの弓矢を奪ひ、火に投げ入れて焚き棄つ。

神の使の童をば、何故「アモレットオ」（愛の神童）といふにか。その「アモレットオ」は、何故箭やを放てる。こは我が今少し詳つばらに知らんと願ふところなれど、フランチエスカの君は教へ給はざりき。君の宣ふやう。そは文にあれば、讀みて知れかし。おほよそ文にて知らるゝことは、その外にもいと多し。されど讀みおぼゆる初は、あまり樂しきものにはあらず。汝そちは終日榻たふに坐して、

文を手より藉おかじと心掛くべし。カムパニアの野にありて、山羊と戯れ、友達を訪はんとて走りめぐることとは、叶はざるべし。そちは何事をか望める。かのフアビア二の君のやうなる、美しき軍服に身をかためて、羽つきたる 繁くなりぬ。我はいかなる故と、明には知らざりしが、斯く諭さとされたる時、限なき幸なさを覺えき。フランチエスカは我頬を撫で、我が餘りに心弱きを諫いさめ、かくては世に立たんをり、いと便びんなかるべしと氣づかひ給ひぬ。この時主人の君は、曾て我頭の上に月桂冠を戴せたるフアビア二といふ士官とともと俱ともに一間に歩み入り給ひぬ。

ボルゲエゼの別墅べつしよに婚禮あり。世に罕まれなるべき儀式を見よ。

この風説は或るタカムパニアなるドメニカがあばら屋にさへ洩れ

聞えぬ。フランチエスカの君はかの士官の妻になるべき約を定めて、遠からずフイレンチエなるフアビア二家の莊園に遷うつらんとす。儀式あるべき處は羅馬附近の別墅なり。《たま〜》とある高

窓の背後に、男女の影うつれり。あれこそ夫婦の君なれと、ドメニカ耳さ、や語きぬ。二人の影は相依りて、接吻する如くなりき。ドメニカは合掌して祈祷の詞を唱へつ。我も暗きいとすぎの木の下のついで、恩人の上を神に祈りぬ。我傍なるドメニカは二人の御上安かれとつぶやきぬ。烟火の星の、數知れず亂れ落るは、我等が祈祷に答ふる如くなりき。されどドメニカは泣きぬ。こは我がために泣くなり。我が遠からず、分れ去るべきをおもひて泣くなり。ボルゲエゼの主人の君は、「ジエスキタ」派の學校の一座を

買ひて我に取らせ給ひしかば、我はカムパニアの野と牧者の媪おうなと
 に別れて、我行末のために修行の門出せんとす。ドメニカは歸路
 に我にいふやう。我目の明きたるうちに、おん身と此野道行かん
 こと、今日を限なるべし。ドメニカなどの知らぬ、滑なめらかなる床、華
 やかなる氈かもをや、おん身が足は踏むならん。されどおん身は優し
 き兒なりき。人となりてもその優しさあらば、あはれなる我等夫
 婦を忘れ給ふな。あはれ、今は猶果敢はかなき焼栗もて、おん身が心
 を樂ましむることを得るなり。おん身が籐を焚く火を煽あふぎ、栗の
 やくるを待つときは、我はおん身が目の中に神の使の面影を見る
 ことを得るなり。かく果敢なき物にて、かく大なる樂をなすこと
 は、おん身忘れ給ふならん。カムパニアの野には薊あざみ生ふといへど、

その薊には尚紅の花咲くことあり。富貴の家なる、なめら滑なる床には、
 一本の草だもとに生ひず。その滑なる上を行くものは、つまづ蹉き易しと聞
 く。アントニオよ。一たび貧き兒となりたることを忘るな。見ま
 くほしき物も見られず、聞かまくほしき事も聞かれざりしことを
 忘るな。さらば御身は世に成りいづべし。我等夫婦の亡からん後、
 おん身は馬に騎り、又は車に乗りて、昔の破屋をおとづれ給ふこ
 ともあらん。その時はおん身に揺ゆられし籃かごの中なる兒は、知らぬ
 牧者の妻となりて、おん身が前にぬかづくならん。おん身は人に
おご驕るやうにはなり給はじ。その時になりても、おん身は我側に坐
 して栗を焼き、又籃を揺りたることを思ひ給ふならん。言ひ畢り
 て、媼は我に接吻し、面を掩ひて泣きぬ。我心ははり鍼もて刺さるゝ

如くなりき。この時の苦しきは、後の別の時に増したり。後の別の時には、媼は泣きつれど、何事をもいはざりき。既に闕しきゐを出でしとき、媼走り入りて、薰くゆりに半ば黒みたる聖母の像を、扉より剥ぎ取りて贈りぬ。こは我が屢接吻せしものなり。まことにこの媼が我におくるべきものは、この外にはあらぬなるべし。

學校、えせ詩人、
露ほしみせ肆

フランチエスカの君は夫に隨ひて旅立ち給ひぬ。我は「ジエス・キタ」派の學校の生徒となりたり。わが日ごとの業わざもかはり、われに交る人の面も改まりて、定なき演劇めきたる生涯の端はこゝ

に開かれぬ。時々刻々の變化のいと繁きに、歲月の遷りゆくこと
の早きことのみぞ驚かれし。當時こそ片々の畫圖となりて我目に
觸れつれ、今に至りて首を回せば、その片々は一幅の大畫圖とな
りて我前に横はれり。是れわが學校生活なり。旅人の高山の巔に
登り得て、雲霧立ち籠めたる大地を看下すとき、その雲霧の散る
に従ひて、忽ち隣れる山の尖あらはれ、忽ち日光に照されたる谿
間の見ゆるが如く、我心の世界は漸く開け、漸く擴ごりぬ。カム
パニアの野を圍める山に隔てられて、夢にだに見えざりける津々
浦々は、次第に浮び出で、歴史はそのところ／＼に人を住はせ、
そのところ／＼にて珍らしき昔物語を歌ひ聞せたり。一株の木、
一輪の花、いづれか我に興を與へざる。されど最も美しく我前に

咲き出でたるは、わが本國なる伊太利なりき。我も一個の羅馬人
 ぞとおもふ心には、我を興起せしむる力なからんや。我都のうち
 には、寸尺の地として、我愛を引き、我興を催さざるものなし。
 街の傍に棄てられて、今は界さかひの石となりたる、古き柱頭も、わが
 ためには、神聖なる記念なり、わがためには、めでたき音色に心
 を悩ますメムノンが塔なり。（昔物語にアメノフイスといふ王あ
 りき。エチオピアを領しつるが、希臘のアヒルレエスに滅されぬ。
 その像を刻める塔、埃エチプト及なるチオスポリスに立てり、日出日没
 ごとに鳴るといひ傳ふ。）テエエル河に生ふる蘆の葉は風そよに戦たたかぎ
 て、我にロムルスとレムスとの上を語り。凱旋門、石の柱、石
 の像は、皆我心に本國の歴史を刻ましめんとす。我心はつねに古

希臘、古羅馬の時代に遊びて、師の賞譽にあづかりぬ。

凡そ政界にも、教界にも、旗亭に集まるものも、富豪の骨牌卓かるたくのめぐりに寄るものも、社會といふ社會の限、必ず太郎冠くわじや者のやうなるものありて、もろ人の嘲戲は一身に聚あつまる習なり。學校にも亦此の如き人あり。我等少年生徒の眼は、早くも嘲戲の的まとを見出したり。そは我等が教師多かる中にて、最眞面目なる、最怒り易き、最可笑をかしき一人なりき。名をば「アバテ」ハツバス・ダアダアとなんいひける。元と亞拉伯アラビアの産うまれなるが、穉をさなき時より法皇の教の庭に遷うつされて、こゝに生ひ立ち、今はこの學校の趣味の指南役、テエエルアカデミア大學院の審美上主權者となりぬ。

詩といふ神のめぐらしき賜たまものにつきては、われ人となりて後、屢

考へたづねしことあり。詩は深山の裏なる黄金の如くぞおもはるゝ。家庭と學校との教育は、さかしき鑛掘かねほり、鑛鑄かねふぎなどのやうに、これを索め出だしもと、これを吹き分くるなり。折々は初より淨き黄金にいで逢ふことあり。自然詩人が即興の抒情詩これなり。されど鑛山の出すものは黄金のみにあらず。白銀いだす脈もあり。錫すずその外卑いやしき金屬を出す脈もあり。その卑ひたすらきも世に益あるものにしあれば、只ひたすら管に言ひ腐すくたべきにもあらず。これを磨き、これちりばに鑲むるときは、金とも銀とも見ゆることあらん。されば世の中の詩人には、金の詩人、銀の詩人、銅の詩人、鐵の詩人などありとも謂ふことを得べし。こゝに此列に加はるべきならぬ、埴はにもて物作る人ありて、強ひて自ら詩人と稱す。ハツバス・ダアダアは

實にその一人なりき。

ハツバス・ダアダアは當時一流の埴瓮はにべづくりはじめて、これを氣象情致はるかのに優れたる詩人に擲なげ付け、自ら恥づることを知らざりき。字法句法の輕捷けいせふなる、體制音調の流麗なる、詩にあらねども詩とおもはれ、人々の喝采を受けたり。平生ペトラルカを崇あがむも、その「ソネットオ」の音調のみ會し得たるにやあらん。さらずば、矮わいじん人觀場なりしか。又狂人にありといふなる固執の妄想か。兎まれ角まれ、ペトラルカとハツバス・ダアダアとは似もよらぬ人なるは、争ひ難かるべし。ハツバス・ダアダアは我等にかの亞弗利加アフリカと題したる、長き敘事詩の四分の一を諳誦せしめんとせしかば、幾行の涙、幾下の鞭か、我等が世々のスチピオを

怨む媒なかだちをなしたりけん。

ペトラルカは基督曆千三百四年七月二十日アレツツオに生れき。いにしへの希臘羅馬時代にのみ眼を注ぎたりしが、千三百二十七年ア中ニヨンにてラウラといふ婦人に逢ひ、その戀に引かれて、又現世げんせの詩人となりぬ。おのが上と世々のスチピオ（羅馬の名族）の上とを、千載の下に傳へんと、長篇の敘事詩亞弗利加あらはを著しつ。今はその甚だ意を経ざりし小抒情詩世に行はれて、復た亞弗利加を説くものなし。

我等は日ごとにペトラルカの深しんすの邃なる趣味といふことを教へられき。ハツバス・ダアダアの云ふやう。膚ふせん淺なる詩人は水彩畫師なり、空想の子なり。凡そ世道人心に害あること、これより甚し

きものあらじ。その群にて最大なりとせらるゝダンテすら、我眼
 より見るときは、小なり、極めて小なり。ペトラルカは抒情詩の
 寸錦のみにても、尚朽ちざることを得べきものなり。ダンテは不
 朽ならんがために、天堂人間地獄をさへ擔ひ出しゝものなり。さ
 なり。ダンテも韻語をば聯つらねたり。そのバビロン塔の如きもの、
 後の世に傳はりたるは、これが爲なり。されど若しその詞だにも
 拉甸ラテンならましかば、後の世の人せめては彼が學殖をおもひて、些
 の敬をば起すなるべし。さるを彼は俚言もて歌ひぬ。ボツカチヨ
 オの心醉せる、これを評して、獅ししの能く泳ぎ、羊の能く踏むべき
 波と云ひき。我はその深さをも、その易さをも見ることに能はず。
 通篇脚を立つべき底あることなし。唯だ昔と今との間を、ゆきつ

戻りつするを見るのみ。我が眞理の聖使たるペトラルカを見ずや。既往の天子法皇を捉へて、地獄に墮すを、手柄めかすやうなる事をばなさず、その生れあひたる世に立ちて、男性のカツサンドラ（希臘の昔物語に見えたる巫女みこ）となり、法皇王侯の嗔いかりを懼おそれずして預言したるは、希臘悲壯劇の中なる「ホロス」の群の如くなりき。嘗て面まのりあた査列斯チャアルス四世あざけを刺りて、徳の遺傳せざるをば、汝に於いてこれを見ると云ひき。羅馬と巴里とより、月桂冠を贈らんとせしとき、ペトラルカは敢てすなは輒ち受けずして、三日の考試に應じき。その謙遜なりしこと、今の兒曹こらも及ばざるべし。考試畢りて後、彼は「カピトリウム」の壇に上りぬ。拿破里ナポリの王は手づから濃紫はうの袍はうを取りて、彼が背に被きせき。これに月桂ラウレオの環をわ

たしたるは、羅馬の議セナト官オレなりき。此の如き光榮は、ダンテの身を終ふるまで受くること能はざりしところなり。

ダンテは千二百六十五年フイレンチエに生れぬ。そのはじめの命名はツランテなりき。神曲に見えたるベアトリチエとの戀は、夙はやく九歳の頃より始めぬ。千二百九十年戀人みまかりぬ。是れダンテが女性の美の極致にして、ダンテはこれに依りて、心を淨おもひめ懐たかを崇たかうせしなり。アレツツオとピザとの戰ありしときは、ダンテ軍人たりき。後政治家となりて、千三百二十一年ラエンナにて歿す。

ハツバス・ダアダアが講説は、いつも此の如くペトラルカを揚げダンテを抑ふるより外あらざりき。この兩詩人をば、匂ふ董花、

燃ゆる薔薇の如く並び立たせてもあるべきものを。ペトラルカが
 小抒情詩をば、盡く諳んぜしめられき。ダンテが作をば生徒の目
 に觸れしめざりき。我は僅に師の詞によりて、そのおもなる作は、
 地獄、淨火、天堂の三大段に分れたるを知れりしのみ。この分け
 かたは、既に我空想を喚び起して、これを讀まん願は、我心に
 溢れたり。されどダンテは禁斷の果なり。その味は、竊むにあら
 では知るに由なし。

或る日ピアツツア、ナヲネ（大なる廣こうぢにて、夏の頃水を
 湛ふることあり）を漫歩して、積み疊ねたる柑子、地に委ねたる
 鐵の器、破衣、その外いろくの骨董を列ねたる露肆の側
 に、古書古畫を賣るものあるを見き。こゝに卑き戲畫あれば、か

しここに刃を胸に貫きたる聖母の圖あり。似も通はぬものゝ伍をなしたる中に、ふとメタスタジオが詩集一卷我目にとまりぬ。我懷には猶一「パオロ」ありき。こは半年前ボルゲエゼの君が、小遣錢にせよと賜りし「スクヂイ」の殘にて、わがためには輕んじ難き金額なりき。(一「スクウド」は約我一圓五十錢に當る。十「パオリ」に換ふべし。一「パオロ」は十五錢許なり。十「バヨツチ」に換ふべし。「スクウド」、「パオロ」は銀貨、「バヨツチ」は銅貨なり。) 幾個の銅錢もて買ふべくば、この卷見みのがすべきものならねど、「パオロ」一つを手離さんはいと惜しとおもひぬ。價を論ずれども成らざりしかば、思ひあきらめて立ち去らんとしたる時、一書の題簽だいせんに「チキナ、コメチア、チ、ダンテ」

(ダンテが神曲)と云へるあるを見出しつ。嗚呼、これこそは我がために、善惡二途の知識の木になりたる、禁斷の果このみなれ。われはメタスタジオの集なげうを擲ちて、ダンテの書を握りつ。さるに哀かなしきかな、この果は我手の届かぬ枝になりたり。その價は二「パオリ」なりき。露肆の主人は、一錢も引かずといふに、わが銀錢は掌中に熱すれども、二つにはならず。主人、こは伊太利第一の書なり、世界第一の詩なりと稱たへて、おのれが知りたる限のダンテの名譽を説き出しつ。ハツバス・ダアダアには無むげ下にいひけたれたるダンテの名譽を。

露肆の主人のいふやう。この卷は一葉ごとに一場の説教なり。これを書きしは、かう／＼しき預言者にて、その指すかたに向

ひて往くものは、地獄の火を踏み破りて、天堂に抵いたらんとす。
 若き華主だんなよ。君はまだ此書を読み給ひし事なきなるべし。然らず
 ば君一「スクウド」をも惜み給はぬならん。二「パオリ」は言ふ
 に足らざる錢なり。それにて生涯讀み厭くことなき、伊太利第一
 の書を藏することを得給はゞ、實にこよなき幸ならずや。

嗚呼、われは三「パオリ」をも惜まざるべし。されど我手中に
 はその錢なきを奈何せん。かの伊蘇普エソオポスが物語に、おのがえ取ら
 ぬ架上の葡萄をば、酸すしといひきといふ狐の事あり。われはその
 狐の如く、ハツバス・ダアダアに聞きたるダンテの難さへづを囀り出し、
 その代にはいたくペトラルカを讚め稱へき。露肆の主人は聞畢をはり
 て。さなりさなり。おのれの無學なる、固より此の如き大家を回

護せん力は侍らず。されど君もまだ歳若ければ、此の如き大家を
非難すべきにあらざるべし。おのれはえ讀まぬものなり。君は未
だ讀まざるものなり。されば褒むるも貶けなすも、遂に甲斐なき業な
らずや。唯だ訝いぶかしきは、君はまだ讀まぬ書をいひおとし給ふこ
との苛酷なることぞといふ。われは心に慙はぢて、我詞の全く師の
口眞似なるを白状したり。主人も我が樸直すなほなるをや喜びけん、書
を取りて我にわたしていふやう。好し、一「パオロ」にて君に賣
らん。その代には早く讀み試みて、本國の大詩人をあしざまに言
ふことを止め給へ。

神曲、吾友なる貴公子

何等の快事ぞ。神曲は今我書となりぬ。我が永く藏することを
 得るものとなりぬ。ハツバス・ダアダアが非難をば、我始より深
 く信ぜざりき。わが奇を好む心は、かの露肆ほしみせの主人が言に挑いどま
 れて、愈さかん熾さかんになりぬ。われは人なき處に於いて、はじめて此卷
 を繙ひもとかん折を、待ち兼ねるのみなりき。

われは生れかはりたる如くなりき。ダンテは實にわがために、
 新に發見したる亞米利加なりき。我空想は未だ一たびも斯く廣大
 に、斯く豊饒なる天地を望みしことなかりしなり。その岩石何ぞ
 峨々たる。その色彩何ぞ奕えきく々たる。我は作者と共に憂へ、作者
 と共に樂み、作者と共に當時の生活を閱けみし盡したり。地獄の關に

刻めりといふ銘は、全篇を讀む間、我耳に響くこと、世の末の裁判の時、鳴りわたるらん鐘の音の如くなりき。その銘に云く^{いは}。

こゝすぎて　うれへの市に^{まち}

こゝすぎて　歎の淵に

こゝすぎて　浮ぶ時なき

群に社^{こそ}　人は入るらめ

あたゝかき　情はあれど

おぎろなき　心にたづね

きはみなき　ちからによりて

いつくしき　法^{のり}をうき世に

しめさんと　この關の戸を

神や据ゑけん

われは 「パペ、サタン、アレツプ、サタン、パペ」といふ詞聞えぬ。こはわが讀みたる神曲の文なるを、同房の書生はさりとも知らねば、我魂まことに悪魔に責められたるかと思ひ惑ひぬ。教場に出でゝも、我心は課程に在らざりき。師の聲にて、アントニオよ、又何事をか夢みたる、と問はるゝ毎に、われは且恐れ且恥ぢたり。されどこの儘に神曲を擲なげうたんことは、わがなすこと能はざるところなりき。

我が暮らす日の長く又重きことは、ダンテが地獄にて負心ふしんの人の被きるといふ鍍金めつきしたる鉛の上衣の如くなりき。夜に入れば、又我禁斷の果に匍はひ寄りて、その悪鬼に我妄想の罪を數せめらる。か

の人を螫さしてはほのほに入り、一たびは烟となれど、又「フヨニツクス」(自ら焚やけて後、再び灰より生るゝ怪鳥)の如く生れ出で、毒を吐き人を傷やぶるといふ蛇へびの刺はりをば、われ自ら我膚の上に受くと覺えき。

わが夢中に地獄と呼び、罪人と叫ぶを聞きて、同房の書生は驚き醒さむることしばゝなりき。或る朝老僧の舍監を勤むるが、我臥床ふしどの前に來しに、われ眠れるまゝに眼みひらを睜ひらき、おのれ魔王と叫びもあへず、半ば身を起してこれに抱きつき、暫し角力すまひて、又枕に就きしことあり。

わがよなく、悪魔に責めらるといふ噂は、やうく高くなりぬ。我床には呪水を灑そぎぬ。わが眠に就くときは、僧來りて祈祷を勸

めたり。此處置は益 我心を妥おだやかならざらしめき。嚙うは語ごとの由りて
 出づるところは、われ自ら知れり。これを隠して人を欺あざむくことの
 快からぬために、我血はいよく騒ぎ立ちぬ。數日の後、反動の
 期至り、我心は風の吹き荒れたる迹あとの如くなりぬ。

學校の書生衆おほしといへども、その家世、その才智、並に人に優
 れたるは、ベルナルドオといふ人なりき。遊戯に日をおくるは咎
 むべきならねど、あまりに情を放ちて自ら恣ほしいまゝにするさまも見えき。
 或ときは四層の屋の棟むねに騎り、或ときは窓より窓にわたしたる板
 を踐ふみて、人の膽を寒からしめき。凡そこの學校國に、内ない証こう起
 りぬといふときは、其責は多く此人の身に歸することなり。しか
 もベルナルドオこれを冤ぬれぎぬとすること能はざるが常なりき。舍内の

静けさ、僧尼の房の如くならんは、人々の願なるに、このベルナルドオあるがために、平和はいつも破られき。されど彼が戯たはぶ人は人を傷そこなふには至らざりしが、獨りハツバス・ダアダアに對しての振舞は、やゝ中傷の嫌ありとおもはれぬ。ハツバス・ダアダアはこれを憎みてあはれ福さいはひの神は、直すぐなる「ピニヨロ」の木を顧みで、珠を朽木に抛なげ與へしよ杯などいひぬ。ベルナルドオは羅馬の議セナトオ官レの甥おひにて、その家富みさかえたればなるべし。

ベルナルドオは何事につけても、人に殊けんなる見を立て、これを同學のものに説き聞かせて、その聽かざるものをば、拳もて制しつれば、いつも級中にて、出色の人物ともてはやされき。彼と我とは性質いた太く異なるに、彼は能く我に親みき。唯だわがあまりに

争ふ心に乏とほしきをば、ベルナルドオ嘲り笑ひぬ。

或時ベルナルドオの我にいふやう。われ若し我拳の、一たび爾なんぢを怒らしむるを知らば、われは必ず爾を打つべし。汝は人に本性を見するときなきか。わが汝を嘲るとき、汝は何故に拳を揮ふるひて我面を撲うたんとせざる。その時こそ我は汝がまことの友となるならめ。されど今はわれこの望を絶ちたりといひき。

わがダンテの熱の少しく平らぎたる頃なりき。ひと日ベルナルドオは我前なる卓に腰掛けて、しばし故ありげなる笑をもらしつゝ我顔を見つめ居たるが、忽ち我にいふやう。汝は我にもまして横着なる男なり。善くも狂言して人を欺くことよ。床は呪水に濡らされ、身は護摩ごまの煙に薰いぶさるゝは、これがために非ずや。我知ら

じとやおもふ、汝はダンテを讀みたるを。

血は我頬に上りぬ。われは争いでかさる禁を犯すべきと答へき。

ベルナルドオのいはく。汝が昨夜物語りし悪魔の事は、全く神曲の中なる悪魔ならずや。汝が空想はゆたかなれば、わが説くを厭かず聽くならん。地獄に火の海、瘴霧しやうむの沼あるは、汝が早くより知るところならん。されど地獄には又深き底まで凍りたる海あり。その中に閉ぢられたる亡者も亦少からず。その底にゆきて見れば、恩そむに負そむきし悪人ども集りたり。「ルチフェエル」（魔王）も神に背きし報にて、胸を氷にとぢられたるが、その大いなる口をば開きたり。その口に墮ちたるは、ブルツス、カツシウス、ユダス・イスカリオツトなり。中にもユダス・イスカリオツトは、

魔王が蝙蝠かはほりの如き翼を振ふ隙に、早く半身を喉の裡に没したり。

この「ルチフエエル」が姿をば、一たび見つるもの忘るゝことな

し。われもダンテが詩にて、彼奴かやつと相識ちかづきになりたるが、汝はよ

べの囁うはごと語に、その魔王の状を、詳つばらに我に語りぬ。その時われは

今の如く、汝はダンテを讀みたるかと問ひぬ。夢中の汝は、今よ

り直すなほにて、我に眞を打ち明け、ハツバス・ダアダアが事をさへ語

り出でぬ。何故に覺めたる後には我を隔てんとする。我は汝が祕ひ

事めぐとを人に告ぐるものにあらず。汝が禁を犯したるは、汝が身に

取りて譽となすべき事なり。我は久しく汝が上にかゝることあら

んを望みき。されど彼書をば、汝何處にてか獲つる。我も一部を

藏したれば、汝若し蚤はやく我に求めば、我は汝に借しゝならん。我

はハツバス・ダアダアがダンテを罵りしを聞きしより、その良き書なるを推し得て、汝に先だちて買ひ來りぬ。われは長く机に倚ることを好まず。神曲の大いなる二卷には、我とほく厭みしが、これぞハツバス・ダアダアが禁ずるところとおもひく、勇を鼓して讀みとほしつ。後にはかのふみ我にさへ面白くなりて、今は早や三たび閲しつ。その地獄のめでたさよ。汝はハツバス・ダアダアの墮つべきを何處とか思へる。火のかたなるべきか、氷のかたなるべきか。

わが祕事はあは許かれたり。されどベルナルドオはこれを人に語るべくもあらず。ベルナルドオとわれとの交は、この時より一際ひときは密になりぬ。かたはら旁に人なき時は、われ等の物語は必ず神曲の事にう

つりぬ。わがこれを読みて感じたるところをば、必ずベルナルド
 才に語り聞かせたり。この間にわが文字を知りてよりの初の詩は
 成りぬ。その題はダンテと其神曲となりき。

わが買ひ得たる神曲の首には、ダンテが傳を刻したりき。そは
 いたく省略したるものなりしかど、尚わが詩材とするに堪へたれ
 ば、われはこれに據りて、此詩人の生涯を歌ひき。ベアトリチエ
 との淨き戀、戦争の間の苦、逐客となりてアルピイ山を躪えし
 旅の憂さ、異郷の鬼となりし哀さ、皆我詩中のものとなりぬ。わ
 が最も力を用ゐしは、ダンテが靈魂天翔りて、人間地獄を見お
 ろす一段なりき。その敘事は省筆を以て、神曲の梗概を摸寫した
 るものなりき。淨火は又燃え上れり。果實累々たる、樂園の木の

こずゑは、漲りみなぎ落つる瀑布の水に浸されたり。ダンテが乗りたる、そら行く舟は、神童の白く大なる翼を帆としたり。その舟次第に騰りのぼゆく程に、山々は揺り動うごかれたり。太陽とそのめぐりなる神童の群とは、明鏡の如く、神の光明を映じ出せり。この時に遇ふものは、賢きも愚なるも、こゝろ／＼に無上の樂を覺えたり。

誦ずしてベルナルドオに聞せしに、彼はこれを激稱せり。彼のいはく。アントニオよ。次の祭の日には、汝其詩を讀み上げよ。ハツバス・ダアダアいかなる面おもてをかすらん。面白しく。汝が讀むべき詩は、その外にはあらし。斯く勧めらるゝに、われは手を揮ふりて諾うべなはざりき。ベルナルドオ語を繼ぎていふやう。さらば汝はえ讀まぬなるべし。我にその詩を得させよ。われダンテの不朽を

もて、ハツバス・ダアダアを苦めんとす。汝はおのが美しき羽を
抜きて、このおほおそ鳥を飾らんを惜むか。譲るは汝が常の徳に
あらずや。いかにく、と勸めて止まざりき。我もその日のあり
さまいかに面白からんとおもへば、詩稿をば直にベルナルドオに
わたしつ。

今も西班牙スパニア廣こうぢの「プロパガンダ」といふ學校にては、毎

年一月十三日に、祭の式行はるゝ事なるが、當時は「ジエス・クタ」
學校に、おなじ式ありき。諸生徒はおのゝその故郷の語、若く
はその最も熟したる語にて、一篇の詩を作り、これを式場に持ち
出で、讀むことなり。題をば自ら撰びて、師の認可を請ひ、さて
章を成すを法とす。

題の認可の日に、ハツバス・ダアダアはベルナルドオにいふやう。君は又何の題をも撰び給はざりしならん。君は歌ふ鳥の群にあらねば。ベルナルドオのいはく。否。ことしは例に違ひて作らんとおもへり。伊太利詩人の中にて題とすべきものを求めたるが、その第一の大家を歌はんは、わが力の及ばざるところなり。さればわれは稍 《やゝ》小なるものをとて、ダンテを撰びぬ、ハツバス・ダアダアあざわら冷笑ひていふ。ダンテを詠ずとならば、定めて傑作をなすなるべし。そは聞きものなり。さはあれ式の日には、僧官たちも皆臨席せらるゝが上に、外國の貴賓も來べければ、さる戲はふさはしからず。カルネワレ謝肉の祭をこそ待ち給ふべけれ。この詞にて、他人ならば思ひとゞまるべきなれど、ベルナルドオは

なかく、屈すべくもあらず。別の師の許を得て、かの詩を讀むことゝ定めき。われは本國を題として、新に一篇を草しはじめつ。

學校の規則には、詩賦は他人の助を藉かることを允ゆるさずと記した

り。されどいつも雨雲に蔽おほはれたるハツバス・ダアダアが面に、

些ちとの日光を見んと願ふものは、先づ草稿を出して閱を請ひ、自在

に塗抹せしめずてはかなはず。大抵原もとの語は、纔わづかにその半を存す

るのみなり。さて詩の拙つたなさは、すこしも始に殊ならず。その始に

殊なるは、唯だその癖、その手段のみなるべし。斯く改めたる作、

他日よそ人に譽めらるゝ時は、ハツバス・ダアダアは必ずおのれ

が刪さんじゆん潤せしを告ぐ。こたび讀むべき詩も、多く一たびハツバ

ス・ダアダアが手を經たるが、ひとりベルナルドオが詩のみは、

遂にその目に觸れざりき。

兎角する程にその日となりぬ。馬車は次第に學校の門に簇むらりぬ。老僧官たちは、赤き法衣の裾を牽ひきて式場に入り、美しき椅子に倚より給ひぬ。詩の題、その國語、その作者など列記したる刷ものは、來賓に頒わかたれぬ。ハツバス・ダアダア先づ開場の演説をなし、諸生徒は次を逐ひて詩を讀みたり。シリア、カルデア、新埃エチプト及、其外梵文英語の作さへありて、その耳ざはり愈あやしうして、喝采の聲は愈盛なりき。但だ喝采の聲には、拍手なんどのみならず、高笑もまじるを常とす。

われは胸を跳らせて進み出で、伊太利を頌したる短篇を讀みき。喝采の聲は幾度となく起りぬ。老いたる僧官達も手を拍ち給ひぬ。

ハツバス・デアデア出來る限のやさしき顔をなし、手中の桂冠を動かしつ。伊太利語の詩もて、我後に技を奏すべきは、獨りベルナルドオあるのみにて、其次なる英語は固もとより賞を得べくもあらねば、あはれ此冠は我頭の上に落ちんとぞおもはれける。

その時ベルナルドオは壇に登りぬ。我はあやぶみながら友の言動に耳を傾け目を注ぎつ。友は些いさ、かおくの怯れたる氣色もなく、かのダントを詠ずる詩を誦ずしたり。式場は忽ち水を打ちたるやうに鎮まりぬ。讀誦どくじゆの力あるに、聽くもの皆感動したるなり。われは初より隻句を遺のこさず諳そらんじたり。されど今改めてこれを聽けば、ほとくダンテ其人の作を聞くが如くおもはれぬ。誦をばし畢りし時、場に臨みたる人々は、悉く喝采せり。僧官達は席を離れ給ひぬ。式

はこゝに終れるが如く、桂冠はベルナルドオがものと定めぬ。次なる英語の詩をば、人々止むことを得ずして聴き、又止むことを得ずして拍手せしのみ。その畢るや、満場の話柄はベルナルドオがダンテの詩の上にかへりぬ。

我類は火の如くなりき。我胸は擴まりたり。我心は人々のベルナルドオがために焚ける香の烟を吸ひて、ほとく酔へるが如くなりき。この時われは友の方を打ち見たるに、彼が容貌はいたく常にかはりて見えき。その面色土の如く、目を床に注ぎて立てるさまは、重き罪を犯したる人の如くなりき。ハツバス・ダアダアも亦いたく不興げなるおも持して、心こゝにあらねばか、その手にしたる桂冠を摘み砕かんとする如くなりき。僧官のうちなる一

人、すなは 迺ちこれを取りて、ベルナルドオが前に進み給ひぬ。我友は
 此時ひざまづ跪きたるが、もろ手に面を掩おほひて、この冠を頭に受けたり。

式畢りて後、われは友の側に歩み寄りしに、彼は明日こそと云
 ひもあへず、走り去りぬ。翌日になりても、彼は我を避けて、共
 に語らざりき。我は唯だ一人なる友を失へるやうに覺えて、憂き
 に堪へざりき。二日過ぎて、ベルナルドオは我頸をいだ擁き、我手を
 把とりていふやう。アントニオよ。今こそは我心を語らめ。桂冠の
 我頭に觸れたる時は、われは百千も、ちいばらの棘もて刺さるゝ如くなりき。
 人々の我を譽むる聲は、我を嘲るが如くなりき。この譽を受くべ
 きは、我に非ずして汝なればなり。我は汝が目のうちなる喜の色
 を見き。汝知らずや。この時われは汝を憎みたり。おもふに我は

こゝにありて、今迄の如く汝に交ることを得ざるべし。この故に
我はこゝを去らんとす。試におもへ。明年の式あらんとき、われ
又汝が羽毛を借らずば、人々の前に出づることを得ざるべし。我
心争いかでかこれに堪へん。我に勢あるをぢあり。我はこれに我上を
頼みき。我は身を屈して願ひき。こはわが未だ嘗て爲さざること
なり。わが敢てせざるところなり。我はその時又汝が事をおもひ
出しつ。斯くわが心に負そむきて人に頼るも、その原もとは汝に在らん
やうにおもはれぬ。この故に我は汝に對して、忍びがたき苦を覺
ゆるなり。我は一たびこゝを去りて、別に身を立つるよすがを求
め、その上にて又汝が友とならん。アントニオよ。願はくはその
時を待て。吾は去らん。

このタベルナルド才はおそ晩く歸りて床に入りしが、翌朝は彼が退校の噂諸生の間に高かりき。ベルナルド才は思ふよしありて、目的を變じたりとぞ聞えし。

ハツバス・ダアダは冷笑の調子にていはく。彼男は流星の如く去りぬ。その光を放てると、その影を隠しゝとは、一瞬の間なりき。その學校生涯は爆竹の遽にはかに耳おどろを駭かす如くなりき。その詩も亦然なり。彼草稿は猶我手に留まれり。何等の怪しき作ぞ。熟《つらく》これを讀むときは、畢竟是れ何物ぞ。斯くても尚詩といはるべき歟か。全篇支離にして、絶て格調の見るべきなし。見て瓶へいとなせば、これ瓶。盞さんとなせば、是れ盞。劍となせば、これ劍。その定まりたる形なきこと、これより甚しきはあらず。字

を剩あますこと凡そ三たび。聞くに堪へざる平ひやうじ字の連用（ヒアツス）あり。神チアナといふ字を下すことおほよそ二十五處、それにて詩をか
 う／＼しくせんとにや。性靈よ、性靈よ。誰かこれのみにて詩
 人とならん。このとりとめなき空想能く何事をか做なし出さん。こゝ
 に在りと見れば、忽こつえん焉としてかしこに在り。汝は才といふか。
 才果して何をかなさん。眞の詩人の貴むところは、心の上の鍛鍊
 なり。詩人はその題のために動さるゝこと莫なれ。その心は冷なる
 こと氷の如くならんを要す。その心の生ずるところをば、先づ刀
 もて截きり碎き、一片々に査しらべ視よ。かく細心して組み立てたる
 を、まことの名作とはいふなり。厭ふべきは熱なり、激興なり。
 誰かその熱に感じて、桂冠を乳臭兒の頭に加へし。その詩に史上

の事實を矯め、聞くに堪へざる平字の連用をなしたるなど、皆咎
 ち懲すべき科なるを。我はまことに甚しき不快を覺えき。かゝる
 事に逢ふごとに、我は健康をさへ害せられんとす。ベルナルドオ
 のこわつば奴。ハツバス・ダアダアが批評は大抵此の如くなりき。
 學校の中、ベルナルドオが去りしを惜まざるものなかりき。さ
 れどその惜むことの最も深きは我なりき。身のめぐりは遽に寂し
 くなりぬ。書を読みても物足らぬ心地して、胸の中には遺るに由
 なき悶を覺えき。さて如何してこれを散すべき。唯だ音樂あるの
 み。我生活我願望はこれを樂の裡に求むるとき、始めて残るとこ
 ろなく明なる如くなりき。こゝを思へば、詩には猶飽き足らぬと
 ころあり。ダンテが雄篇にも猶我心を充たすに足らざるところあ

り。詩は我魂わがこんを動せども、樂はわが魂と共に、わが耳によりてわが魄はくを動せりうごか。夕されば我窓の外に、一群の小兒來て、聖母の像を拜みて歌へり。その調は我にわが穉をさなかりける時を憶ひ起さしむ。その調はかの笛ふきが笛にあはせし搖籃の曲に似たり、又或時は野邊送の列、窓の下を過ぐるを見て、これをおくる僧尼の挽歌を聽き、昔母上を葬りし時を思ひ出しつ。我心はこしかたより行末に遷うつりゆきぬ。我胸は押し狭せまめらるゝ如くなりぬ。昔歌ひし曲は虚空より來りて我耳を襲へり。その曲は知らず識らず我唇より洩れて歌聲となりぬ。

ハツバス・ダアダアが室は、我室を去ること近からぬに、我聲は覺えず高くなりて、そこまで聞えぬ。ハツバス・ダアダア人し

て言はしむるやう。こゝは劇場にもあらず、又唱歌學校にもあらず、讚美歌に非ざる歌の聞ゆるこそ心得られねとなり。われは黙して答へず。頭を窓の縁に寄せかけて、目を街のかたに注ぎたれど、心はこゝに在らざりき。

忽ち街上より「フエリチツシイマ、ノツテエ、アントニオ」

(幸^{さち}あらん夜をこそ祈れ、アントニオよといふ事なり、北歐羅巴にては善き夜をとのみいふめれど、伊太利の夜の樂きより、かゝる詞さへ出來ぬるなるべし)と呼ぶ人あり。窓の前にて、美しく猛き若駒に首を昂^あげさせ、手を軍帽に加へて我に禮を施し、振り返りつゝ馳せ去りしは、法皇の禁軍^{このゑ}なる士官なりき。嗚呼、我はその顔を見識りたり。これわがベルナルドオなり。わが幸あるべ

ルナルドオなり。

我生活は今彼に殊なること幾何ぞ。われは深くこれを思ふことを好まず。われは傍なる帽を取りて、目深まぶかにかぶり、惡魔に逐はるゝ如く、學校の門を出でぬ。おほよそ「ジエスエタ」學校、「プロパガンダ」學校、その外この教國の學校生徒は、外に出づるとき、おのれより年長たけたる、若くはおのれと同じ齡なる、同學のものに伴はるゝを法とす。稀に獨り行くには、必ず許可を請ふことなり。こは誰も知りたる掟なるを、われはこの時少しも思ひ出でざりき。老いたる番僧はわが出づるを見つれど、許可を得たるものとや思ひけん、我を誰とが何めざりき。

めぐりあひ、尼君

大路おほぢに出づれば馬車ひきもきらず。羅馬の人を載せたるあり、

外國の客を載せたるあり。往くあり、還るあり。こは都の習なる
夕暮あそびのりの逍遙乗といふものにいでたる人々なるべし。銅版畫を挂かけ

つらねたる技藝品鋪の前には、人あまた立てり。その衣にまつは
れて錢を得んとするは、乞兒かたみの群なり。されば車の間を馳せぬく
ることを厭ひては、こゝを行くべくもあらず。我が車の隙うかゞを覗のぞひ
て走りぬけんとしたる時「ボン、ジヨオルノオ、アントニオ」

よきひ（吉日をこそ、アントニオ）と呼ぶは、むかし聞き慣れたる忌いまは
しき聲なり。見卸せば、ペツポのをきくつち例の木履を手に穿はきて、地

上にすわり居たり。この人にかく近づきたることは、この年頃絶
 てなかりき。西班牙スパニアの磴いしだんを避けてとほり、道にて逢ふときは面を
 掩おほひて知らしめず、式の日などに諸生の群にありてこれに近づく
 ときは、友の身を盾に取りて見付けられぬ心がまへしたりき。ペ
 ツポは我裳裾もすそを握りて離たずしていふやう。血を分けたるアント
 ニオよ。そちがをぢなるペツポを知らぬ人のやうになあしらひそ。
 尊ついできジウゼツペ（ペツポはこの名を約つひめたるなり）の上を思は
 ず、我名を忘るゝことなからん。暫く見ぬ隙に、おとなびたるこ
 とよ。かく親しく物言はるゝ程に、道行く人は怪みて我面たやすを見た
 り。我は放ち給へと叫びて裾を引けども、ペツポは容易たやすく手をゆ
 るめず。アントニオよ。共に驢うさぎうまに乗りし日の事を忘れしか。善き

兒なるかな。今は丈高き馬に乗れば、最早我を顧みざるならん。

母の同胞はらからの西班牙の磴にあるを訪はざるならん。そちも我手に

接吻せしことあり。そちも我宿の一束の藁を敷寝せしことあり。

昔をわすれなせそ。かくかきくどかるゝうるさゝに、我は力を極

めて裾ひきはなち、車の間をくゞりぬけて、横街に馳せ入りぬ。

我胸は跳をどれり。こは驚のためのみにはあらず、辱はづかしめのためなりき。

我はをぢがもろ人の前に我を辱めたりとおもひき。されど此心は

久しからずして止み、これに代りて起りしは、これよりも苦しき

情なりき。をぢが詞は一つとして偽ならず。われはまことにペツ

ポポが一人の甥なり。わがこれに對して恩すくなかりしは、そもノ

何故ぞ。若し餘所に見る人なくば、我は昔の如くをぢの手に接

吻せしならん。さるを今かく殘忍なる振舞せしは、わが罪深き名譽心にあらずや。われは自ら愧ぢ、又神に恥ぢて、我胸は燃ゆる如くなりき。

この時聖^{サン}アゴスチノ寺の「アエ、マリア」の鐘の聲響きしかば、われは懺悔せんとして寺の内に入りぬ。高き穹窿の下は暗くして人影絶えたり。卓の上なる蠟燭は僅に燃ゆれども光なかりき。われは聖母の前に伏し沈みて、心の重荷をおろさんとしつ。忽ち我側にありて、我名を呼ぶ人あり。アントニオの君よ。^{やかた}館も御奥もフイレンツエより歸り來ませり。かしこにて設け給ひし穢^{をさな}き姫君をも伴ひ給ひぬ。今より共に往きて喜をのべ給はずやといふ。寺の内の暗さに見えざりしが、かく言はれてその人を見れば、我恩人

の館なる門者かどもりの妻にてフエネルラといふものなりき。年久しく相見ざりし人々に逢はせんといふが嬉しさに、われは共に足を早めてボルゲエゼの館たちにゆきぬ。

フアビアニの君はやさしく我をもてなし給ひ、フランチエスカの君は又母の如くいたはり給ひぬ。姫君にも引きあはせ給ひぬ。名をばフラミアニアといふ。目の美しく光ある穉子なり。我に接吻し、我側に來居たるが、まだ二分時ならぬに、はや我に昵なじみ給へり。かき抱きて間のうちをめぐり、可笑をかしき小歌うたひて聞せしかば、面白しと打笑ひ給ひぬ。館は微笑みつゝ。穉むしぎみき尼君を世の中の少女の様になせそ。法皇の手づから授けられし壻君をば、今より胸にをさめたるをとのたまふ。げにこの姫君は、白かねも

て造りたる十字架に基督の像つきたるを、鎖もて胸に懸け給へり。

(伊太利の俗、尼寺に入れんと定めたる女兒をば、はや夙くより小アベチ)

尼ツサ公など呼ぶことあり。) 夫婦の君は婚禮の初、喜のあまりに

始て生るべき子をば、み寺に参らせんと誓ひ給ひしなり。勢ある

家の事とて、羅馬に名高き尼寺の首座をば、今よりこの姫君の爲

めに設けおけりとぞ。さればこの君には、かりそめ苟且の戯にも法のりおきての掟

に背かぬやうなることのみをぞ勧め参らせける。小尼公はにんぎよ偶

人ういれたる箱取り出で、中なる穉き耶蘇の像、またあまたの

白衣きたる尼の像を示し給ふ。さて尼の人形を二列に立てて、日

ごとにかく歩ませて供養のにはに連れゆくとのたまひぬ。又尼ど

もは皆聲めでたく歌ひて、穉き耶蘇を拜めりとのたまひぬ。こは

皆保う姆ばが教へつるなり。我は晝かきて小尼公を慰めき。長けきお※衣ころも
 を着て、噴水のトリイトンの神のめぐりに舞ふ農夫、一人の匍匐はらば
 ひたるが上に一人の跨またりたるが 侏ブル儒チ杯ネル、いたく姫君の心になな
 ひて、始はこれに接吻し給ひしが、後には引き破りて棄て給ひぬ。
 兎角する程に、はや常に眠り給ふ時過ぎぬとて、うば抱きて入り
 ぬ。

夫婦の君は我上を細こまに問ひて、今より後も助にならんと契り、
 こゝに留らん間は日ごとに訪へかしのたまひぬ。カムパニアの
 野邊に住める媪が事を語り出で給ひしかば、我は春秋の天氣好き
 折、かしこに尋ねゆきて、我臥床ふしどの跡を見、媪が經卷珠じゆず數と共に
 藏したる我晝反古ほごを見、また爐の側にて燒栗を噛みつゝ昔語せば

やとおもふ心を聞え上げぬ。暇いとまごひ乞こひして出でんとせしとき、夫
 人は館を顧みてのたまふやう。學校は智育に心を用ゐると覺ゆれ
 ど、作法の末まではゆきとゞかぬなるべし。この子の禮みやするさま
 こそ可笑しけれ。世の中に出でん後は、これをも忽ゆるがせにすべからず。
 されど、アントニオよ、心をだに附けなば、そはおのづから直る
 べきものぞ。

學校に還らんとて館を出でしは、まだ宵の程なりしが、街はい
 と暗かりき。羅馬の市に竿燈かんとうを點つくるは近き世の事にて、其の
 頃はまださるものなかりしなり。狭き枝みちに歩み入れば、平な
 らざる道を照すもの唯だ聖母の像の御前みまへに供へたる油燈のみなり。
 われは心のうちに晝の程の事どもを思ひめぐらしつゝ、徐しづかにあゆ

みを運びぬ。固より咫尺しせきの間もさやかに見えねば、忽ち我手に
觸るゝものあるに驚きて、われはまだ何とも思ひ定めぬ時、耳慣
れたる聲音にて、奇怪なる人かな、目をさへ撞つきつぶされなば、
道はいよゝゝ見えずやならんといふ。われは喜のあまりに聲高く
叫びて、さてはベルナルドオなるよ、嬉くも逢ひけるものかなと
いひぬ。アントニオか、可笑き再會もあるものよと、友は我を抱
きたり。さるにても何處よりか來し。忍びて訪ふところやある。
そは汝に似合はしからず。されど我に見現されぬれば是非なし。
例の獄丁はいづくに居る。學校よりつけたる道づれは。我。否け
ふはひとりなり。ベルナルドオ。ひとりとは面白し。汝も天あつぱれ晴
なる少年なり。我と共に法皇の護衛に入らずや。

我は恩人夫婦のこゝに來ませし喜を告げしに、吾友も亦喜びぬ。これよりは足の行くに任せて、暗路を辿りつゝ、別れての後の事どもを語りあひぬ。

猶太の翁
ユダヤ

途すがらベルナルドオの云ふやう。我は今こそ浮世の様をも見ることを得つれ。そなた等が世にあるは、唯だ世にありといふ名のみにて、まだ襁褓むつきの中を出でざるにひとし。冷なる學校の榻たふに坐して、かび黴の生はえたるハツバス・ダアダアが講釋に耳傾けんは、あまりに甲斐なき事ならずや。見よ、我が馬に騎のりて市まちを行くを。

美しき少女達は、燃ゆる如き眼まなざしして、我を仰ぎ瞻みるなり。
わが貌かほは醜ばからず。われには號衣ウニフオルメよく似合ひたり。此街の暗きこ
とよ、汝は我號衣を見ること能はざるべし。我が新に獲たる友は、
善く我を導けり。彼等は汝が如き窮措きうそだ大めきたる男にあらず。
我等は御國を祝ひて盞を傾け、又折に觸れてはおもしろき戲をも
なせり。されど其戲をももの語らんは、汝が耳の聴くに堪へざると
ころならん。そなたの世を渡るさまをおもへば、男に生れたる甲
斐なくぞおもはるゝ。我はこの二三月が程に十年の經驗をなした
り。我はわが少年の血氣を覺えたり。そは我血を湧し、我胸を張
らしむ。我は人生の快樂を味へり。我唇はまだ燃え、我咽はまだ
痒かゆきに、我身はこれを受用すること酔ひたる人の水を飲むらんや

うなり。斯く説き聞せられて、我はいつもながら氣沮はゞみて聲も微かすかに、さらば君が友だちといふはあまり善き際きはにはあらぬなるべしと答へき。ベルナルド才はこらへず。善き際にあらず、とは何をか謂ふ。我に向ひて道徳をや説かんとする。吾友だちは汝にあしさまに言はるべきものにはあらず。吾友だちは羅馬にあらん限の貴き血統にこそあなれ。われ等は法皇の禁軍このゑなり。縦たとひわづかの罪ありとも、そは法皇の免除するところなり。われも學校を出でし初には、汝が言ふ如き感なきにあらざりしが、われは敢て直ちにこれを言はず、敢て友等に知らしめざりき。われは彼輩かのともがらのなすところならに倣ならひき。そは我意志の最も強き方に従ひたるのみ。我意馬はしを奔らしめて、その往くところに任するときは、我はかの

友だちに立ち後おくるゝ憂なかりしなり。されど此間我胸中には、猶
 少しの寺院教育の滓かす残り居たれば、我も何となく自ら安やすんぜざる如
 き思をなすことありき。我はをりくゝ此滓のために戒いましめられき。
 我は生れながらの清白なる身を流けがすが如くおもひき。かゝる懸念
 は今や名残なごりなく失せたり。今こそ我は一人前の男にはなりたるな
 れ。かの教育の滓を身に帯びたる限は、その人小兒のみ、卑怯者
 のみ。おのれが意志を抑へ、おのれが欲するところを制して、獨
 り鬱々として日を送らんは、その卑怯ものゝ舉動ならずや、餘に
 饒舌しやべりて途のついでをも顧みざりしこそ可笑しけれ。こゝはキヤ
 中力の前たぐひなり。類なき酒オステリア家にて、羅馬の藝人どもの集ふとこ
 ろなり。我と共に來よ。切角の邂めぐりあひ逅あひなれば、一瓶の葡萄酒を

飲まん。この家のさまの興あるをも見せまほしといふ。われ。そ
 は思ひもよらぬ事なり。若し學校の人々、わが禁軍このゑの士官ともと俱ともに
 酒店にありしを聞かば奈何。ベルナルドオ。現げに酒一杯飲まんは
 限なき不幸なるべし。されど試に入りて見よ。外國の藝人等が故
 郷の歌をうたふさまいと可笑し。獨逸語あり。法朗西語あり。英イ
 吉利語ギリスあり。またいづくの語とも知られぬあり。これ等を聞かん
 も興あるべし。われ。否、君には酒一杯飲まんこと常の事なるべ
 けれど、我は然らず。強ひて伴はんことは君が本意にもあらざる
 べし。斯く辭いろふほどに、傍なる細道の方に、許多あまたの人の笑ふ聲、
 喝采する聲いと賑はしく聞えたり。われはこれに便を得て、友の
 臂ひぢを把とりていはく。見よ、かしこに人あまた集りたるは何事にか

あらん。想ふに聖母の御龕みほごらの下にて手品使ふものあるならん。
我等も往きてこそ觀め。

我等が往方ゆくてを塞ぎたるは、極めて卑き際きはの老若男女なりき。この人々は聖母のみほごらの前にて長き圈わをなし、老いたる猶太教徒一人を取り巻きたり。身うち肥えふとりて、肩幅いと廣き男あり。手に一條の杖を持ちたるが、これを翁おきなが前に横よこたへ、翁に跳をどり超えよと促すにぞありける。

凡そ羅馬の市には、猶太教徒みだりに住むことを許されず。その住むべき廓くるわをば嚴しく圍みて、これを猶太街ゲットオといふ。(我國の穢多まちの類なるべし。)夕暮には廓の門を閉ぢ、兵士を置きて人の出入することを許さず。こゝに住める猶太教徒は、歳に一た

び仲間の年寄をカピトリウムに遣り、來ん年もまた羅馬にあらんことを許し給はゞ、謝肉祭カルネウレの時の競馬くらべうまの費用ものいりをも例の如く辨わかまへ、又定の日には加特力教徒カトリコオの寺に往きて、宗旨がへの説法をも聽くべし、と願ふことなり。

今杖の前に立てる翁は、こよひ此街のをぐらき方を、靜に走り過ぎんとしたるなり。「モルラ」といふ戯たはぶせんと集ひたりし男ども、道に遊び居たりし童等は、早くこれを見付けて、見よ人々、猶太の爺ぢぢこそ來ぬれと叫びぬ。翁はさりげなく過ぎんとせしに、群衆はゆくてに立ちふさがりて通さず。かの肥えたる男は、杖を翁が前に横へて、これを跳り超えて行け、さらずは廓の門の閉ぢらるゝ迄えこそは通すまじけれ、我等は汝が足の健すこやかさを見んと呼

びたり。童等はもろ聲に、超えよ超えよ、アブラハム亞伯罕の神は汝を助
 くるならんといと喧しくはや囃したり。翁は聖母の像を指ざしていふ
 やう。人々あれを見給へ。おん身等もかしこに跪きては、慈悲を
 願ひ給ふならずや。我はおん身等に對して何の辜つみをもおかしこ
 となし。我髮の白きをあはれ憫み給はゞ、恙つがなく家に歸らしめ給へとい
 ふ。杖持ちたる男あざわら冷笑ひて、聖母いか争でか猶太の狗いぬを顧み給はん、
 疾とく跳り超えよといひつゝ、いよく翁に迫る程に、群衆は次第に
 狭きわ圈を畫して、翁の爲せんやうを見んものと、息を屏つめて覗ひ
 居たり。ベルナルド才はこの有様を見るより、前なる群衆を押し
 退けて圈の中に躍り入り、肥えたる男の側につと寄せて、その杖
 を奪ひ取り、左の手にこれを指し伸べ、右の手には劍を抜ききて振

り翳^{かぎ}し、かの男を叱して云ふやう。この杖をば、汝先づ跳り超えよ。猶^{たゆた}與ふことかは。超えずは、汝が頭を裂くべしといふ。群衆は唯だ呆れてベルナルドオが面を打ち眺めたり。彼男はしばし夢見る如くなりしが、怒氣を帯びたる詞、鞞^{さや}を拂ひし劍、禁軍の號衣、これ皆膽を寒からしむるに足るものなりければ、何のいらへもせず、一^{ひとはね}跳して杖を超えたり。ベルナルドオは男の跳り超ゆるを待ちて杖を擲^{なげう}ち、その肩口をしかと壓へ、劍の背^せもて片頬を打ちていふやう。善くこそしつれ。狗にはふさはしき舉^{ふるまひ}動かな。今一たびせよさらば免^{ゆる}さんといふ。男は是非なく又跳り超えぬ。初め呆れ居たる群衆は、今その可笑しさにえ堪へず、一度にどつと笑ひぬ。ベルナルドオのいはく。猶^{おきな}太の翁よ。邪魔をば早や拂

ひたれば、いざ送りて得させんといふ。されど翁はいつの間にか逃げゆきけん、近きところには見えざりき。

我はベルナルドオを引きて群衆の中を走り出でぬ。來よ我友。

今こそは汝と共に酒飲まんとおもふなれ。今より後は、たとひいかなる事ありても、われ汝が友たるべし。ベルナルドオ。そなたは昔にかはらぬ物ずきなるよ。されど我が知らぬ猶太の翁のかた持ちて、かの癡人しれものと争ひしも、おなじ物ずきにやあらん。

我等は酒家オステリアに入りぬ。客は一間に満ちたれども、別に我等

に目を注つくるものあらざりき。隅の方なる小卓に倚りて、共に一瓶の葡萄酒を酌み、友誼の永く渝かはらざらんことを誓ひて別れぬ。

學校の門をば、心やすき番僧の年老いたるが、仔細なく開きて

入れぬ。あはれ、珍しき事の多かりし日かな。身の疲に酒の酔さへ加はりたれば、程なく熟睡して前後を知らず。

猶太をとめ

許をも受けて校外に出で、士官と俱に酒店に入りしは、輕からぬ罪なれば、若し事露れなばあらは奈何いかにすべきと、安き心もあらざりき。さるを僥倖げうかうにもその夕我を尋ねし人なく、又我が在らぬを知りたるは、例の許を得つるならんとおもひて、深くも問ひたゞ糺さで止みぬ。我が日ごろの行よくつし謹めるかたなればなりしなるべし。光陰は穩うづに遷りぬ。課業の暇あるごとに、恩人の許におとづれて、

そを無上の樂となしき。小尼公は日にけに我に昵なじみ給ひぬ。我は
 穉をさなかりしとき寫しつる畫など取り出で、み館にもて往き、小尼
 公に贈るに、しばしはそれもて遊び給へど、幾程もあらぬに破やり
 棄て給ふ。我はそをさへ拾ひ取りて、藏をさめおきぬ。

その頃我はナルギリウスを讀みき。その六の卷なるエネエアス
 がキユメエの巫みこに導かれて地獄くだりに往く條に至りて、我はその面白
 さに感ずること常に超えたり。こはダンテの詩に似たるがためな
 り。ダンテによりて我作をおもひ、我作によりて我友をおもへば、
ベルナルドオが面を見ざること久しうなりぬ。恰も好しワチカア
ノの畫廊開かるべき日なり。且は美しき畫、めでたき石像を觀、
 且はなつかしき友の消息を聞かばやとおもひて、われは又學校の

門を出でぬ。

美しきラファエロが半身像を据ゑたる長き廊の中に入りぬ。仰て

塵んじやうにはかの大匠の下畫によりて、門人等が爲上げたりといふ

聖經の圖あり。壁を掩おほへるめづらしき飾畫、穹窿を填うづめたる飛行

の童の圖、これ等は皆我が見慣れたるものなれど、我は心ともな

くこれに目を注ぎて、わが待つ人や來るとたゆたひ居たり。欄おほしまに

凭よりて遠く望めば、カムパニアの野のかなたなる山々の雄々しき

姿をなしたる、固より厭あかぬ眺なれど、鋪石に觸るゝ劍の音ある

ごとに、我は其人にはあらずやとワチカアノの庭を見おろしたり。

されどベルナルドオは久しく來ざりき。

間といふ間を空むなしくめぐり來ぬ。ラオコオンの群の前をも徒いたづらに過

ぎぬ。我はほとく興を失ひて、「トルソオ」をも「アンチノウス」をも打ち棄て、家路に向はんとせしとき、忽ち羽つきたるかふと鍔かぶとを戴き、長靴の拍車を鳴して、軽らかに廊を歩みゆく人あり。追ひ近づきて見ればベルナルドオなり。友の喜は我喜に譲らざりき。語るべき事多ければ、共に來よと云ひつゝ、友は我を延ひきて奥の方へ行きぬ。

汝はわが別後いかなる苦を嘗めしかを知らざるべし。又その苦の今も猶止むときなきを知らぬなるべし。譬へば我は病める人の如し。それを救ふべき醫は汝のみ。汝が採らん藥草の力こそは、我が唯一の頼なれ。斯くさゝやきつゝ、友は我を延いて大なる廳を過ぎ、そこを護れる禁軍この系の瑞西兵スイスの前を歩みて、當直士官の室に

入りぬ。君は病めりと云へど、面は紅に目は輝けるこそ訝いぶかしけれ。さなり。我身は頭の頂より足の尖まで燃ゆるやうなり。我はそれにつきて汝が智恵を借らんとす。先づそこに坐せよ。別れてより後の事を語り聞すべし。

汝はかの猶太の翁の事を記おほえたりや。聖母の龕がんの前にて、悪少年に窘くるしめられし翁の事なり。我はかの悪少年を懲こらして後、翁猶在らば、家まで送りて得させんとおもひしに、早やいづち行きけん見えずなりぬ。その後翁の事をば少しも心に留めざりしに、或日ふと猶太廓ゲットオの前を過ぎぬ。廓の門を守れる兵士に敬禮せられて、我は始めてこゝは猶太街の入口ぞと覺さとりぬ。その時門の内を見入りたるに、黒目がちなる猶太の少女あまた群たぐをなして佇たぐみたり。

例のすぎごゝろ止みがたくて、我はそが儘馬を乗り入れたり。こゝ
 に住める猶太教徒は全き宗門の組合をなして、その家々軒を連ね
 て高く聳え、窓といふ窓よりは、「ベレスヒツト、バラ、エロヒ
 ム」といふ祈の聲聞ゆ。街には宗徒簇りて、肩と肩と相摩するさ
 ま、むかし紅海を渡りけん時も忍ばる。簷端のきばには古衣、雨傘その
 外骨董どもを、懸ならけも陳べもしたり。我駒の行くところは、古か
 なもの、古畫ひさを鬻ほしみせぐ露肆ほしみせの間にて、目も當てられず穢けがれたる泥ぬ
かるみ 淖うちの裡うちにぞありける。家々の戸口より笑みつゝ仰ぎ瞻みる少女二
 人三人を見るほどに、何にても買ひ給はずや、賣り給ふ物あらば
 價尊く申し受けんと、聲々に叫ぶさま堪ふべくもあらず。想へ汝、
 かゝる地獄めぐりをこそダンテは書くべかりしなれ。

忽ち傍なる家より一人の翁馳せ出で、我馬の前に立ち迎へ、
 我を拜むこと法皇を拜むに異ならず。貴き君よ、我命の親なる君
 よ。再び君と相見る今日は、けふそもくいかなる吉日ぞ。このハノ
 ホ老いたれども、恩義を忘れぬほどの記憶はありとおぼされよ。
 かく語りつゞけて、末にはいかなる事をか言ひけん、悉くは解げせ
 ず、又解したるをも今は忘れたれば甲斐なし。これ去いぬる夜悪少
 年の杖を跳り越ゆべかりし翁なり。翁は我手の尖さきに接吻し、我衣
 の裾ももに接吻していふやう。かしこなるは我破あぼらや屋なり。されど鴨か
 居のいと低くて君が如き貴人を入らしむべきならぬを奈何せん。
 かく言ひては拜み、拜みては言ふ隙に、近きわたりの物共は、我
 等二人のまはりに集ひ、あからめもせず打ち守りたる、そのうる

さゝにえ堪へず、我は早や馬を進めんとしたり。この時ふと仰ぎ見れば、翁が家の樓上よりさし覗きたる少女あり。色好なる我すらかゝる女子を見しことなし。大理石もて刻めるアフロヂテの神か。されど亞刺伯種アラビアの少女なればにや、目と頬とには血の温さぞ籠りたる。想へ汝、我が翁に引かれて、辭いろはずその家に入りしことの無理ならぬを。

廊の闇さはスチピオ等の墓に降りゆく道に譲らず。木の欄てすりある梯はしごは、行くに足の尖まで油斷せざる稽古を、怠りがちなる男にせさするに宜しかるべし。部屋に入りて見れば、さまで見苦しからず。されど例の少女はあらず。少女あらずば、われこゝに來て何をかせん。技癢ぎやうに堪へざる我心をも覺らず、かの翁は永々しき謝

恩の演説をぞ始めける。その辭に綴り込めたる亞細亞風の譬喩の
多かりしことよ。汝が如き詩人ならましかば、それを樂みて聞きも
せん。我は恰も消化し難き饌せんに向へる心地して、肚はらのうちには彼
女子今か出づるとのみおもひ居たり。此時翁は感ずべき好き智慧
を出しぬ。あはれ此智慧、好き折に出でなば、いかに我を喜ば
しめしならん。翁のいはく。貴きわたりに交らひ給ふ殿達は、定
めて金多く費し給ふならん。君も卒にはかに金なくてかなはぬ時、餘
所にてそれを借り給はば、二割三割などいひて、夥おびたゞしき利息を取ら
れ給ふべし。さる時あらば、必ず我許に來給へ。利息は申し受け
ずして、いくばくにてても御用だて侍らん。そはイスラエルの一枝
を護りたる君が情なさけの報なりといひぬ。我は今さる望なきよし答へ

ぬ。翁さらに語を繼ぎて。さらば先づ平かに居給へ。好き葡萄酒
 一瓶あれば、そを獻たてまつらんといふ。我は今いかなる事を答へしか知
 らず。されどその詞と共に一間に入り來りしは彼少女なり。いか
 なる形ぞ。いかなる色ぞ。髪は漆うるしの黒さにてしかも澤つやあり。こは
 彼翁の娘なりき。少女はチプリーの酒を汲みて我に與へぬ。我が
 これを飲みて、少女が壽ことほぎをなしゝとき、その頬にはサロモ王の餘な
 波ごりの血こそ上りたれ。汝はいかにかの天女が、言ふにも足らぬ我
 腕立を謝せしを知るか。その聲は世にたぐひなき音樂の如く我耳
 を打ちたり。あはれ、かれは斯世のものにはあらざりけり。され
 ば其姿の忽ち見えざりて、唯だ翁と我とのみ座に残りしも宜むべな
 り。

この物語を聞きて、我は覺えず呼びぬ。そは自然の詩なり。韻語にせばいかに面白からん。

なかだち
媒

士官のいふやう。この時よりして我がいかばかり戀といふもの、苦を嘗めたるを知るか。我が幾たび空中に樓閣を築きて、又これを毀ちたるを知るか。我が彼猶太ユダヤをとめに逢はんとていかなる手段を盡しゝを知るか。我は用なきに翁を訪ひて金を借りぬ。我は八日の期限にて、二十「スクヂイ」を借らんといひしに、翁は快うべなく諾ひて粲然たる黄金を卓上に並べたり。されど少女は影だに見

せざりき。我は三日過ぎて金返しに往きぬ。初翁は我を信ぜること厚しとは云ひしが、それには世辭も雜りたりしことなれば、今わが斯く速に金を返すを見て、翁が喜は眉のあたりに呈あらはれき。我は前の日の酒の旨うまかりしを稱へしかど、翁自ら瓶取り出して、顫ふるふ瘦手にて注ぎたれば、これさへあだなる望となりぬ。この日も少女は影だに見せざりき。たゞ我が梯はしごを走りおりしとき、半ば開きたる窓の帷とばりすこしゆらめきたるやうなりき。是れ我少女なりしならん。さらば君よ、とわれ呼びしが、窓の中はしづまりかへりて何の應いらいへもなし。おほよそ其頃よりして、今日まで盡し、我手段は悉くあだなりき。されど我心は決して撓たわむことなし。我は少女が上を忘るゝこと能はず。友よ。我に力を借せ。昔エネエアスを

戀人に逢せしサツルニアとエヌとをば、汝が上とこそ思へ。いざ我をあやしき巖室いはむろに誘はずや。われ。そは我身にはふさはしからぬ業なりと覺ゆ。さはれおん身は猶いかなる手段ありて、我をさへ用ゐんとするか、かゝる筋の事に、この身用立つべしとは、つやく／＼思ひもかけず。士官。否々。汝が一諾をだに得ば、我事は半ば成りたるものぞ。ヘブライオスの語は美しき詞なり。その詩趣に富みたること多く類を見ずと聞く。汝そを學びて、師には老いたるハノホを撰べ。彼翁は廓内にて學者の群に數へられたり。彼翁汝がおとなしきを見て、娘にも逢はせんをり、汝我がために娘に説かば、我戀何ぞ協かなはざることを憂へん。されど此手段を行はんには、決して時機を失ふべからず。駟かけあし足にせよ歩度を伸べ

たる驅足にせよ。燃ゆる毒は我脈を循れり。そは世におそろしき戀の毒なり。異議なくば、あすをも待たで猶太の翁を訪へ。われそは餘りに無理なる囑たのみなり。我が爲すべきことの面正しからぬはいふも更なり、汝が志すところも卑しき限ならずや。その少女しや縱よ令美しといふとも、猶太の翁が子なりといへば。士官。それ等は汝が解げし得ざる事なり。貨しろものだに善くば、その産地を問ふことを須もちゐず。友よ、善き子よ。我がためにヘブライオスの語を學べ。我も諸共に學ばんとす。たゞその學びさまを殊にせんのみ。想へ、我がいかに幸ある人となるべきかを。我。わが心を傾けて汝に交るをば、汝知りたるべし。汝が意志、汝が勢力のおほいなる、常に我心を左右するをも、汝知りたるべし。汝若し悪人とならば、

我おそらくは善人たることを得じ。そは怪しき力我を引きて汝が
 圈わの中に入るればなり。我は素より我心を以て汝が行を匡たゞさんと
 せず。人皆天賦の性さがあり。そが上に我は必ずしも汝が將に行はん
 とする所を以て罪なりとせず。汝が性然らしむればなり。されど
 此事は、縦令成りたらんも、汝が上にまことの福を降すべきもの
 にあらずとおもへり。士官。善しく。我はたゞ汝に戯れたるの
 み。我がために汝を驅りて懺悔の榻たふに就かしめんは、初より我願
 にあらず。たゞ汝がヘブライオスの語を學ばんに、いかなる障さはりあ
 るべきか、そは我に解せられず。況いはんやそを猶太の翁に學ぶこと
 をや。されどこの事に就きては、我等また詞を費さざるべし。今
 日は善くこそ我を訪ねつれ。物欲しからずや。酒飲まずや。

友なる士官がかく話頭を轉じたる時、我はその特なる目なことざま

しを見き。こはベルナルドオが學校にありしとき屢ハツバス・

ダアダアに對してなしたる目なふるまひざしなりき。友の舉動、その言

語、一つとして不興のしるしならぬはなし。我も快からねば程な

く暇乞して還りぬ。別るゝときは友の恭うやくしき常に倍して、その冷

なる手は我が温なる手を握りぬ。我はわが辭退の理に愜かなへる、友

の腹立ちしことの我儘に過ぎざるを信じたりき。されど或時は無

聊に堪へずしてベルナルドオなつかしく、我詞の猶穩おだやかならざると

ころありしを悔みぬ。一日散歩のついで、吾友の上をおもひつゝ、

かの猶太廓ゲットオに入りぬ。若し期せずして其人に逢はゞ、我友の怒を

霽はらたよりす便にもならんとおもひき。されど我は彼翁をだに見ざりき。

門かどよりも窓よりも、知らぬ人面を出せり。街の兩側なる敷石の上には、例の古衣、古かねなど陳のべたるその間には見苦き子供遊べり。物買はずや、物賣らずやと呼ぶ聲は、我みを聾しひにせんとする如し。少女あり。向ひの家なる友と、窓より窓へ毬まり投げつゝ戯れ居たり。そが一人は頗すこぶ美しと覺えき。吾友の戀人はもしこれにはあらずや。我は圖らず帽を脱したり。嗚呼、おろかなる振舞せしことよ。我は人の思はん程も影うしろめた護たくて、手もて額を拭ひつ。こは帽を脱したるは、少女のためならで、暑に堪へねばぞと、見る人におもはしめんとてなりき。

一とせの月日は事なくして過ぎぬ。稀にベルナルドオに逢ふことありても、交情昔のごとくならず。我はそのやさしき假面の背

後に、人におしる貴人の色あるを見て、友の無情なるを恨むのみに
 て、かの猶太廓の戀のなりゆきを問ふに違いとまあらざりき。ボルゲエ
 ゼの館をば頻におとづれて、主人の君、フアビアニ、フランチェ
 スカの人々のやさしさに、故郷にある如き思をなしつ。されどそ
 れさへ時としては胸を痛むる媒なかだちとなることありき。我胸には慈愛
 に感ずる情みちくたれば、彼人々の一たびひそ響めることあるとき
 は、徑たゞちに我世の光を蔽はるゝ如く思ひなりぬ。フランチェスカの
 我性を譽めつゝも、強ひて備はらんことを我に求めて、わが立居
 振舞、わが詞遣ことばづかひの疵きずを指すことの苛酷なる、主人の君のわが
 獨り物思ふことの人に踰こえたるを戒いましめて、わが草木などの細かな
 る區別に心入れぬを咎め、我を自ら巻きて終には萎しをるゝ葉に比べ

たる、皆我心を苦むるものなりき。我齡は早く十六になりぬ。さ
 るを斯かばかりの事に逢ひて、必ず涙を墮おとすは何故ぞや。主人の君
 は我が憂はしげなるさまを見るときは、又我頬を撫で、聖母の
 善き人を得給はんためには、美しき花の壓おさるゝ如く、人も壓さ
 れではかなはぬが浮世の習ぞと慰め給ひぬ。獨りフアピアニの君
 のみは、何事をもをかしき方に取りなして、岳翁しうとと夫人との教の
 嚴なることよと打笑ひ、さて我に向ひてのたまふやう。君は父上
 の如き學者とはならざるべし。はた妻のやうに怜愍なる人ともな
 らざるならん。されど君が如き性もまた世の中になくて協はぬも
 のぞと宣のたまふ。斯く裁判し畢りて、小尼公アベヂツサを召し給へば、我はそ
 の遊び戯れ給ふさまのめでたきを見て、身の憂きことを忘れ果て

つ。人々は來ん年を北伊太利にて暮さんとその心こころがまへ構し給へり。

夏はジエノワにとゞまり、冬はミラノに往き給ふなるべし。我は

來ん年の試験にて、「アバテ」の位を受けんとす。人々は首途かどでに

先だちて、大いなる舞踏會を催し、我をも招き給ひぬ。門前には

おほかゞり大 篝 を焚かせたり。賓客の車には皆松明まつとりたる先供あるが、

おのゝ其火を石垣に設けたる鐵の柄に挿したれば、火の子ほとばし迸り

落ちて赤き瀑布カスカタを見る心地す。法皇の兵つはものは騎馬にて門の傍に控へ

たり。門の内なる小き園には五色の紙燈をつ吊り、正面なる大理石

階には萬點の燭を點せり。階をきざはし升るときは奇香衣を襲ふ。こは級きだ

ごとに瓶いけばな花、盆栽リモネの檸檬樹を据ゑたればなり。階の際なる兵は

肩銃の禮を施しつ。「リフレア」着飾りたる僕しもべは堂に満ちたり。

フランチエスカの君は眩まばゆきまで美かりき。珍らしき樂土鳥の羽、
 組緒多くつけたる白き「アトラス」の衣はこれに一層の美しさを
 添へたり。そのやさしき指に觸れたるときの我喜はいかなりし。
 廣間二つに樂の群を居らせて、客の舞踏にはの場としたり。舞ふ人の
 中にベルナルドオありき。金絲もて飾りたる緋羅紗らしやの上衣、白き
 細袴スポン、皆發育好き身形みなりに適かなひたり。その舞の敵手あひてはこよひ集ひし
 少女の中にて、すぐれて美しき一人なるべし。織かぼそき手をベルナル
 ドオが肩に打ち掛けて秋波を送れり。我が舞を知らざることの可く
 悔やしかりしことよ。客に相識る人少ければ、我を顧みるものなし。
 ベルナルドオが舞果て、我傍うしろに來りしとき、我憂は忽ち散じたり。
 紅なる帷とぼりの長く垂れたる背後うしろにて、我等二人は「シヤムパニエ」

酒の杯を傾け、別後の情を語りぬ。面白き樂の調は耳しらべより入りて胸に達し、昔日の不興をば少しも殘さず打ち消しつ。われ遠慮せで猶太少女の事を語り出でしに、友は唯だ高く笑ひぬ。その胸の内なる痕きずは早くも愈いえて跡なきに至りしものなるべし。友のいはく。われはその後聲めでたき小鳥を捕へたり。この鳥我戀の病を歌なほひ治しき。これある間は、よその鳥はその飛ぶに任せんののみ。その猶太廓より飛び去りしは事實なり。人の傳ふるが信ならば、今は羅馬にさへ居らぬやうなり。友と我とは又杯を擧げたり。泡立てる酒、賑はしき樂は我等が血を湧しつ。ベルナルドオは又舞踏の群に投ぜり。我は獨り残りたれど、心の中には前に似ぬ樂しさを覺えき。街のかたを見おろせば、貧人の兒ども簇むらりて、松まつ明

より散る火の子を眺め、手を打ちて歡び呼べり。われも昔はかゝる兒どもの夥伴つれなりしに、今堂上にありて羅馬の貴族に交るやうになりたるは、いかなる神のみ恵ぞ。われは帷とばりの蔭ひざまづに跪ひざまづきて神に謝したり。

謝肉祭

その夜は曉近くなりて歸りぬ。二日たちて人々は羅馬を立ち給ひぬ。ハツバス・ダアダアは日ごとに我を顧みて、ことしは「アバテ」の位受くべき歳ぞと、いましめ顔にいふ。されば此頃は文よむ窓を離れずして、ベルナルドオをも外の友をも尋ぬることな

かりき。週を累ね^{かさ}月を積みて、試験畢^{をは}る日とはなりぬ。

黒き衣、短き絹の外套。是れ久しく夢みし「アバテ」の服なら
 ずや。目に觸るゝもの一つとして我を祝せざるなし。街を走る吹
 聽人はいふも更なり、今咲き出づる「アネモオネ」の花、高く聳
 ゆる松の末^{うれ}より空飛ぶ雲にいたるまで、皆我を祝する如し。恰も
 好しフランチエスカの君は、臨時の費^{つひえ}もあるべく又日ごろの勞^{つかれ}を
 も忘れしめんとて、百「スクヂイ」の爲^{かはせ}換を送り給ひぬ。我はあ
 まりの嬉さに、西班牙^{スペイン}磴^{だん}を驅け上りて、ペツポのをちに光ある
 「スクウド」一つ抛げ與へ、そのアントニオの主公^{だんな}と呼ぶ聲^{しりへ}を後
 に聞きて馳せ去りぬ。

頃は二月の初なりき。杏^{きやうくわ}花は盛に開きたり。柑子^{かうじ}の木目を

逐ひて黄ばめり。カルネワレ 謝肉祭は既に戸外に來りぬ。馬に跨り天鷲絨びろうどののぼり幟を建て、喇叭らっぱを吹きて、祭の前まへ觸ふれする男も、ことしは我がためにかく晴々しくいでたちしかと疑はる。ことしまでは我この祭のまことの樂しさを知らざりき。をさな穉をかりし程は、母上我に怪我せさせじとて、とある街の角に佇たぐずみて祭の盛さかりを見せ給ひしのみ。學校に入りてよりは、「パラツツオオ、デル、ドリア」のひさびさ庶作りひさびさの平屋根より笑ひ戯るゝ群を見ることを許されしのみ。すべて街のこなたよりかなたへ行くことだに自由ならず。まして矧ましてや「カピトリウム」に登り、「トラスステエエル」(河東の地なり、テエエル河の東岸に當れる羅馬の一部を謂ふ)に渡らんこと思ひも掛けざりき。かゝれば我がことしの祭に身をゆだ委ねて、兒どもの様なる物狂

ほしき振舞せしも、無理ならぬ事ならん。唯だ怪しきは此祭我生涯の境遇を一變するに至りしことなり。されどこれも我がむかし蒔きて、久しく忘れ居たりし種の、今緑なる蔓草つるくさとなりて、わが命の木に纏まとへるなるべし。

祭は全く我心を奪ひき。朝あしたにはポ、口の廣こうぢに出で、競馬の準こゝろがまへ備を觀、夕にはゴルソオの大道をゆきかへりて、店々の窓に曝さらせる假粧けしやうの衣類を閲けみしつ。我は可笑しき振舞せんに宜よろしからんとおもへば、状だいげんにん師の服を借りて歸りぬ。これを衣きて云ふべきこと爲すべきことの心にかゝりて、其夜は殆ほとほと眠らざりき。

明日あすの祭ことは特に尊こきものゝ如く思はれぬ。我喜は兒童の喜ゆづに遜

らざりき。横街といふ横街には「コンフエツチイ」の丸賣たまる浮とこみ鋪簷せのきを列べて、その卓の上には美しき貨物しろものを盛り上げたり。

（「コンフエツチイ」の丸は石灰を豌豆ゑんどう「#「豌豆」は底本では「《たま〜》女の身上を占ひて善く中あてたるものならん。

友なる男は、アントニオ、物にや狂へると私語さぐやぎて、急に婦人を

拉ひきつゝ、巡査スベルロ、希臘人、牧婦などにいでたちたる人の間を潜

りて通のがれ去りぬ。その聲を聞くに、ベルナルドオなりき。さるに

ても彼婦人は誰にかあらん。椅子を借さんとて、觀棚さじき々々（ルオ

ジ、ルオジ、パトロニ）と呼ぶ聲いと喧かまびすし。われは思慮する違いとまあ

らざりき。されど謝肉祭の間に思慮せんといふも、固より世たくひに儔

なき好事かうずにやあらん。忽ち肩かたさき尖と靴の上とに鈴つけたる戲おどけや

奴つこ（アレツキノ）の群ありて、我一人を中に取巻きて跳ねり
 たり。忽ち又いと高き踊つぎあししたる状だいげん師あり。我傍を過ぐとて、
 我を顧みて冷あざわら笑ひていはく。あはれなる同業者なるかな。君が
 立脚點の低きことよ。おほよそ地上にへばり着きたるものは、正
 を邪に勝たしむること能はず。我は高く舉りたり。我に代言せし
 むるものは、天の祐たすけを得たらん如し。かく誇りかに告げて大踏歩おほまた
 に去りぬ。ピアツツア、コロンナに伶人の群あり。非常を戒めん
 と、徐しづかにねりゆく兵隊の間をさへ、學士ドットレ、牧婦などにいでたち
 たるもの踊りくるひて通れり。我は再び演説を始めしに、書記の
 服着たる男一僕を隨へたるが我前に來て、僕しもおほすゞならに鐸を鳴さする其響
 耳を裂くばかりなれば、われ我詞を解げし得ずして止みぬ。この時

號砲鳴りぬ。こは車の大道を去るべき知らせなり。我は道の傍に
 築きたる壇きづつに上りぬ。脚下には人の頭波立てり。今やコルソオの
 競馬始らんとするなれば、兵士は人を攘はらはんことに力を竭つくせり。
 街の一端に近きホ、口の廣こうぢに索つなを引き、馬をば其後うしろに並
 べたり。馬は早や焦躁いらだてり。脊には燃ゆる海綿を貼はり、耳後には
 小き烟はなび火具を装わひ、腋わきには拍車ある鐵板を懸けたり。口際に引き
 傍そひたる壯わかもの丁はやうやくにして馬の逸はやるを制したり。號砲は再
 び鳴りぬ。こは埒うちにしたる索を落す合圖なり。馬は旋つむじかぜ風かぜの如
 く奔はしりて、我前を過ぎぬ。幣ぬぎの如く束ねたる薄うす金がねはさらくと
 鳴り、彩りたる紐たてがみは鬣ひるがへと共に飄ひづめり、蹄の觸るゝ處は火花を散せり。
 かゝる時彼鐵板は腋を打ちて、拍車ちぬに響ると聞く。群衆は高く叫

びて馬の後に従ひ走れり。そのさまともう艦打つ波に似たり。けふの祭
はこれにて終りぬ。

歌女うため

衣脱きぬぬぎ更へんとて家にかへれば、ベルナルドとぶら才訪ひ來て我を待
てり。われ。いかなれば茲こゝには來たる。さきの婦人をばいづくに
かおきし。友は指を堅たて、我を威おどすまねしていはく。措おけ。我等
は決闘することを好まず。さきに邂逅いであひたるときの狂態は何事ぞ。
言ふこともあるべきにかゝることをばなど言ひたる。然されどもこ
のたびは釋ゆるすべし。今宵は我と俱に芝居見に往け。「チド」(カ)

ルタゴ女王の名にて又樂劇オペラの名となれり)を興行すといふ。音樂
 よの常ならず。女優の中には世に稀なる美人多し。しかのみなら加 旃す主
 人公に扮するは、嘗てナポリナポリに在りしとき、闔府かふふの民をして物に
 狂へる如くならしめきといふ餘所の歌女うためなり。その發音、その表
 情、その整調、みな我等の夢にだに見ざるところと聞く。容貌も
 亦美し、絶はなはだ美しと傳へらる。汝は筆を載せて従ひ來よ。若し世
 人の言半まことば信まことならんには、汝が「ソネットオ」の工たくみを盡すも、こ
 れに贈るに堪へざらんとす。我はけふの謝肉祭に賣り盡して、今
 は珍すまれしきものになりたる董すみれの花束を貯へおきつ。かの歌女もし我
 心に協かなはゞ、我はこれを贄にへにせんといふ。我は共に往かんことを
 諾うべなひぬ。すべて謝肉祭に連りたる樂たのしみをば、つゆ遺のこさずして嘗こころみん

と誓ひたればなり。

今は我がために永くわするべからざる夕となりぬ。我チアリオ、ロマ羅馬日ノ記ひらを披ひらげば、けふの二月三日の四字に重圈を施したるを見る。

想ふにベルナルドオも如し日記を作らば、また我筆ならに倣はざることを得ざるならん。そもく「アルベルトオ」座といへるは、羅馬の都に數多き樂劇部の中にて最大なるものなり。飛行の詩神を畫ける仰塵プラフオン、オリユムポスの圖を寫したる幕、黄金ちりばを鏤めたる觀棚さじきなど、當時は猶新なりき。棚さじきごとに壁かぎに鈎かぎして燭を立てたれば、場内には光の波を湧かしたり。女客の來て座を占むるあれば、ベルナルドオ必ずその月旦を怠ることなし。

開場の樂（ウエルチユウル）は始りぬ。こは音を以て言に代へ

たる全曲の^{じよ}紋と看^{みな}做さるべきものなり。狂^{きやう}波を鞭^{むちう}ちてエネエア
 スはリユビアの^{なぎさ}澗に漂へり。風波に^{おどろ}駭きし叫號の聲は神に謝する
 祈祷の歌となり、この歌又變じて歡呼となる。忽ち柔なる笛の音
 起れり。是れ^{チド}が戀の始なるべし。戀といふものは我が未だ知
 らざるところなれど、この笛の音は、我に^{はうふつ}髣髴としてその面影
 を認めしめたり。忽ち角聲^{かり}獵を報ず。暴風又起れり。樂聲は我を
 引いて怪しき^{いはむろ}巖室の中に入りぬ。是れ溫柔郷なり。一呼一吸戀
 にあらざることなし。忽ち^{れつぱく}裂帛の聲あり。幕は開きたり。

エネエアスは去らんとす。去りてアスカニウス（エネエアスの
 子）がために、ヘスペリヤ（晩國の義、伊太利）を略せんとす。
 去りて^{チド}を棄てんとす。憐むべし^{チド}はおのれが榮譽と平和と

を捧げて、これを無情の人におくり、その夢猶未だ醒めざるなり。
 エネエアスが歌にいはく。その夢は早晩醒むべし。トロアスの兵
 黒き蟻の群の如く獲えものを載せて岸に達せば、その夢いかでか醒めざ
 ることを得ん。

チドは舞臺に上りぬ。その始めて現はるゝや、萬客屏息して
 これを仰ぎ瞻みたり。その態度、その嚴おごそかなること王者の如くにして、
 しかも輕かろらかに優しき態度には、人も我も徑たゞちに心を奪はれぬ。初
 めわれこのチドといふ役を我心に畫きしときは、その姿いたく今
 見るところに殊ことなりしかど、この歌女の意外なる態度はすこしも
 我興を損ふことなかりき。その優しく愛らしく、些ちとの塵滓じんしを留め
 ざる美しさは、名匠ラファエロが空想中の女子の如し。烏木こくたんの

光ある髪は、美しく凸なかだかなる額を圍めり。深黒なる瞳には、名状すべからざる表情の力あり。忽ち喝采の聲は柱を撼ゆるがさんとせり。こは未だその藝を讚むるならずして、先づ其色を稱ふるなり。所以ゆゑ者何いかにといふに、彼は今纔わづかぢやうに場まに上りて、未だ隻せきおん音をも發せざればなり。彼は面おもてに紅を潮して軽く會釋し、その天然の美音もて、百鍊千磨したる抑揚をその宣敍レチタイヲオ調の上うへにあらはしつ。

友にはかは遽ひぢに我臂とを把りて、人にも聞ゆべき程なる聲していはく。

アントニオよ。あれこそ例の少女なれ、飛び去りたる例の鳥なれ、その姿をば忘るべくもあらず。その聲さへ昔のまゝなり、われ心狂ひたるにあらずば、わがこの目利めきは違ふことなし。われ。例のとは誰が事ぞ。友。猶ゲットオ太廓の少女なり。されど彼の少女いかにし

てこの歌女とはなりし。不思議なり。有りとしも思はれぬ事なり。
 友は再び眼を舞臺に注ぎて詞なし。チドは戀の歡を歌へり。清き
 情は聲となりて肺腑より迸り出づ。ほとばし是時このときに當りて、我心は怪し
 く動きぬ。久しく心の奥に埋もれたりし記念は、此聲に喚び醒よささま
 れんとする如し。この記念は我が全く忘れたるものなりき。この
 記念は近頃夢にだに入らざるものなりき。さるを忽ちにして我は
 その目前に現るゝを覺えき。今は我も亦ベルナルドオと俱に呼ば
 んとす。あれこそ例の少女なれ。われ穉をさなかりし時、「サンタ、マ
 リア、アラチエリ」の寺にて聖誕日の説教をなしき。その時聲め
 でたき女兒ありて、その人に讚めらるゝこと我右に出でき。今聞
 くところは其聲なり。今見るところ或は其人にはあらずや。

エネエアスは無情なる語を出せり。我は去りなん。我は嘗ておん身を娶りしことなし。誰かおん身が婚儀の松明を見しもので。

この詞を聞きたるときをば、チドいかに巧にその眉目の間に畫き出し。事の意外に出でたる驚、ことばに現すべからざる痛、負心の人に對する忿、皆明かに觀る人の心に印せられき。チドは今主なる單吟に入りぬ。譬へば千尋の海底に波起りて、倒に雲霄を干きんとする如し。我筆いかでか此聲を畫くに足らん。あはれ此聲、人の胸より出づとは思はれず。姑く形あるものに喩へて言はんか。大いなる鵠の、皎潔雪の如くなるが、上りては雲を裂いて瀨氣たゞよふわたりに入り、下りては波を破りて蛟龍の居るところに没し、その性命は聲に化して身を出で去らん

とす。

喝采の聲は屋を撼せり。幕下りて後も、アヌンチャタ、アヌン
 チャタと呼ぶ聲止まねば、歌女は面を幕の外にあらはして、謝す
 ることあまたゝびなりき。

第二齣の妙は初齣を踰ること一等なりき。これチドとエネエ

アスとの對歌なり。チドは無情なる夫のせめては啓行の日

を緩うせんことを願へり。君が爲めにはわれリユビアの種族を辱

めき。君がためにはわれ亞弗利加の侯伯に負きぬ。君がために恥

を忘れ、君がために操を破りたるわれは、トロアスに向けて一隻

の舟をだに出さざりき。我はアンヒイゼス（エネエアスの父）が

靈の地下に安からんことを勉めき。これを聞きて我涙は千行に下

りぬ。この時萬客聲を呑みてその感の我に同じきを證したり。

エネエアスは行きぬ。ヂドは色を喪うしなひて凝立すること少しばらくな

りき。その状さまニオベ（子を射殺されて石に化した女神）の如し。

俄にはかにして渾身の血は湧き立てり。これ最早ヂドならず、戀人なる

ヂド、棄婦きふなるヂドならず。彼は生いきながら怨をんりやう靈となれり。そ

の美しき面は毒を吐けり。その表情の力の大きいなる、今まで共に

嘆なげきし萬客をして忽たちまち又共に怒らしむ。フイレンツエの博物館に、

レオナルドオ・ダ・エンチが畫きたるメヅウザ（おそろしき女神）

の頭あり。これを觀るもの怖るれども去ること能はず。大海の底

に毒泡あり。能くアフロヂテを作りぬ。その目の状さまは言ふことを

須またず、その口の形さへ、能く人を殺さんとす。

エネエアスが舟は波を蹴て遠ざかりゆけり。チドは夫の遺れた^{わす}
 る武器を取りて立てり。その歌は沈みてその聲は重く、忽ちにし
 て又激越悲壯なり。同胞^{はらから}なるアンナアが彼を焚かんとて積み累^{かさ}
 ねたる薪は今燃え上れり。幕は下りぬ。喝采の聲は暴風の如くな
 りき。歌女はその色と聲とを以て満場の客を狂せしめたるなり。
 観棚^{さしき}よりも土間よりも、アヌンチャタ、アヌンチャタと呼ぶ聲頻^{しきり}
 なり。幕上りて歌女出でたり。その羞^{はじらひ}を含める姿は故^{もと}の如くなり
 き。男は其名を呼び、女は紛^{てふき}※を振りたり。花束の雨はその頭^{かうべ}の
 上に降りし。幕再び下りしに、呼ぶ聲いよく劇^{はげ}しかりき。こた
 びはエネエアスに扮せし男優と並びて出でたり。幕三たび下りし
 に、呼ぶ聲いよく劇^{はげ}しかりき。こたびはすべての俳優を伴ひ出

でぬ。幕四たび下りしに、呼ぶ聲猶劇しかりき。こたびはアヌン
 チヤタ又ひとり出でて短き謝辭を陳^のべたり。此時我詩は花束と共
 に歌女が足の下に飛べり。呼ぶ聲は未だ遏^やまねど、幕は復た開か
 ず。この時アヌンチヤタは幕の一邊より出で、舞臺の前のはづ
 れなる燭に沿ひて歩みつゝ觀客に謝したり。その面には喜の色溢
 るゝごとくなりき。想ふにけふは歌女が生涯にて最も嬉しき日な
 りしならん。されどこは特^{ひと}り歌女が上にはあらず。我も亦わが生
 涯の最も嬉しき日を求めば、そは或はけふならんと覺えき。わが
 目の中にも、わが心の底にも、たゞアヌンチヤタあるのみなりき。
 觀客は劇場を出でたり。されど皆未だ肯^{あへ}て散ぜず。こは樂屋の口
 に　りゆきて、歌女が車に上るを見んとするなるべし。我^{もろひ}

人との間に介はさまりて、おなじ方かたに歩みぬれど、後には傍へなる石
 垣に押し付けられて動くこと能はず。歌女は樂屋口に出でぬ。客
 は皆帽を脱ぎてその名を唱へたり。われもこれに聲を合せつゝ、
 言ふべからざる感の我胸に滿つるを覺えき。ベルナルド才はもろ
 人を押し分けて進み、早くも車に近寄りて、歌女がためにその扉
 を開きぬ。少年の群は轅ながえにすがりて馬を脱はづしたり。こは自ら車を
 輓ひかんとてなりき。アヌンチャタは聲を顫ふるはせてこれを制せんとし
 つれど、その聲は萬人のその名を呼べるに打ち消されぬ。ベルナ
 ルド才は歌女を車に載せ、おのれは踏板に上りて説き慰めたり。
 我も轅ながえを握りてかの少年の群と共に喜びぬ。惜むらくは時早く過
 ぎて、たゞ美しかりし夢の痕を我心の中に留めしのみ。

歸路に珈琲店コーヒーに立寄りしに、幸にベルナルドオに逢ひぬ。羨

むべき友なるかな。彼はアヌンチヤタに近づき、アヌンチヤタともの語せり。友のいはく。アントニオよ。奈何いかなりしぞ。汝が心は動かずや。若し骨焦がれ髓ずゐ燃えずば、汝は男子にあらじ。さきの年我が彼に近づかんとせしとき、汝は實に我を妨げたり。汝は何故にヘブライオス語を學ぶいことを辭いなみしか。若し辭いなまずば、かゝる女と並び坐することを得しならん。汝は猶アヌンチヤタの我猶ユ太少女ダヤなることを疑ふにや。我にはかく迄似たる女の世にあらんとは信ぜられず。アヌンチヤタはたしかに猶太をとめなり。我にチプリイの酒を飲せし少女なり。少女は巢を立ちし「フヨニツクス」鳥の如く、かの穢けがらはしき猶太廓を出でつるなり。われ。そは

信じ難き事なり。我も昔一たびかの女を見きと覺ゆ。若し其人な

らば、猶太教徒にあらざして加特力教徒なること疑なし。汝も熟

く／＼、
々々、
彼姿を見しならん。不幸なる猶太教徒の皆負へるカイン

(アダム亞當の子)が印記しるしは、一つとしてその面に呈あらはれたるを見ざりき。

又その詞さへその聲さへ、猶太の民にあるまじきものなり。ベル

ナルドオよ。我心はアヌンチャタが妙音世界に遊びて、ほとく

歸ることを忘れてたり。汝は彼少女に近づきたり。汝は彼少女とも

の語せり。彼少女は何をか云ひし。彼少女も我等と同じくこよひ

の幸さいはひを覺えたりしか。友。アントニオよ。汝が感動せるさまこそ

珍らしけれ。「ジエス・キリスト」の學校にて結びし氷今融くるなるべ

し。アヌンチャタが何を云ひしと問ふか。彼少女は粗暴なる少年

に車を挽かれて、且は懼れ且は喜びたりき。彼少女は面紗を緊しく引締めて、身をば車の片隅に寄せ居たり。我は途すがらかゝる美しき少女に言ふべきことの限を言ひしかど、彼は車を下るとき我がさし伸べたる手にだに觸れざりき。われ。汝が大膽なることよ。汝は歌女と相識れるにあらずして、よくもさまで馴々しくはもてなしよ。こは我が決して敢てせざる所ぞ。友。我もさこそ思へ。汝は世の中を知らず、又女の上を知らねばなり。今日はかの女いまだ我に答へざりしかど、我には猶多少の利益あり。そは少女が我面を認めたることなり。我友はこれより我にさきの詩を誦せしめて聞き、頗妙なり、チアリオ、ロオマ羅馬日記に刻するに足ると稱へき。

我等二人は杯を舉げてアヌンチャタが壽をなしたり。ことほぎ我等のめぐ

りなる客も皆歌女の上を語りて口々に之を讚め居たり。

我がベルナルドオに別れて家に歸りしは、夜ふけて後なりき。

床に上りしかど、いも寐られず。われはこよひ見し阿百拉オペラの全曲

を繰り返して心頭に畫き出せり。ヂドが初めて場に上りし時、單ア

吟リアに入りし時、對ツエツトオ歌せし時より、曲終りし時まで、一々肝に

銘じて、其間の一節だに忘れざりき。我は手を被ひちゆう中より伸べて

拍うち鳴らし、聲を放ちてアヌンチャタと呼びぬ。次に思ひ出した

るは我が心血を濺そぎたる詩なり。起きなほりてこれを寫し、寫し

畢をはりてこれを讀み、讀みては自ら其妙を稱たへき。當時はわれ此詩

のやゝ情熱に過ぐるを覺えしのみにて、その名作たることをば疑

はざりき。アヌンチャタは必ず我詩を拾ひしならん。今は彼少女

家に歸りて半ば衣を脱ぎ、絹の長椅ソファの上に坐し、手もておとがひ頤を支へて、ひとり我詩を讀むならん。

きみが姿を仰ぎみて、君がみ聲を聞くときは、おほそら高く
あま翔かけり、わたつみふかくかづきいり、かぎりある身のかぎりなき、うき世にあそぶこゝちして、うた人なりしいにしへのダヌテがふみをさながらに、おとにうつしてこよひこそ、
聞くとは思へ、うため（歌女）の君に。

我は嘗てダンテの詩をもて天下に比たぐひなきものとなしき。さるを今アヌンチヤタが藝を見るに及びて、その我心に入ること神曲よりも深く、その我胸に迫ること神曲よりも切なるを覺えたり。その愛を歌ひ、苦を歌ひ、狂を歌ふを聞けば、神曲の變化も亦こゝに

備はれり。アヌンチヤタ我詩を讀まば、必ず我意を解して、我を知らんことを願ふならん。斯く思ひつゞけて、やうくにして眠に就きぬ。後に思へば、我は此夕我詩を評せしにはあらで、始終詩中の人をのみ思ひたりしなり。

をかしき樂劇

翌日になりて、ベルナルドを尋ね求むるに、何處にもあらざりき。ピアツツア、コロナをばあまたゝび過ぎぬ。アントニウスの像を見んとてにはあらず。アヌンチヤタの影を見る幸もあらんかとなり。彼君はこゝに住へり。外國人にして共に居るもの

もあり。いかなる月日の下に生れあひたる人にか。「ピアノ」の
 響する儘に耳聳そばだつれど、彼君の歌は聞えず。二聲三聲試みる様な
 るは、低き「バツソオ」の音なり。樂長ならずば彼群の男の一人
 なるべし。幸ある人々よ。殊に羨ましきはエネエアスの役勤めた
 る男なるべし。かの君と目を見あはせ、かの君の燃ゆる如き目まな
 ぎしに我面を見させ、かの君と共に國々を經めぐりて、その響を
 分たんとは。かく思ひつゞくる程に、我心は怏あうく々として樂まず
 なりぬ。忽ち鈴つけたる帽を被れるおどけやつこ戲あそび、道化役者、魔法つ
 かひなどに打扮いでたちたる男あまた我圍めぐりを跳り狂へり。けふも謝肉の
 祭日にて、はや其時刻にさへなりぬるを、われは心づかでありし
 なり。かゝる群の華かなる粧よそほひ、その物騒がしき聲々はますく我

心地を損じたり。車幾輛か我前を過ぐ。その御者ぎよしやはこと／＼く女装せり。忌はしき行装かな。女帽子の下より露あらはれたる黒髯くろひげ、あらくしき身振、皆程を過ぎて醜し。我はきのふの如く此間に立ちて快を取るくびすめぐらこと能はず。今しも最後の眸を彼君の居給ふ家に注ぎて、はや踵くびすめぐらを回さんとしたるとき、その家の門口より馳せ出る人こそあれ。こはベルナルド才なり。満面に打笑みて。そこに立ち盡すは何事ぞ。疾とく來よ。アヌンチヤタに引きあはせ得さすべし。彼君は汝を待ち受けたり。こは我友誼いゆうぎなれば。なに彼君がと我は言ひさして、血は耳廓みみのほに昇りぬ。戯たはむれすな。我をいづくにか伴ひゆかんとする。友。汝が詩を贈りし人の許へ、汝も我も世の人も皆魂を奪れたる彼人の許へ、アヌンチヤタの許へ。かく云

ひつゝ、友は我手を取りて門の内へ引き入れたり。我。先づわれに語れ。いかにして彼君の家に行くことゝはなしたる。いかにして我を紹介するやうにはなりし。友。そは後にゆるやかにこそ物語らぬ。先づその沈みたる顔色をなほさずや。我。されどこのなよびたる衣をいかにせん。かの君にあまりに無作法なりとや思はれん。かく言ひつゝ、我は衣など引き繕つくろひてためらひ居たり。友。否々その衣のままにて結構なり。兎角いひ争ふほどに我等ははや戸の前に來ぬ。戸は開けり。我はアヌンチャタが前に立てり。

衣は黒の絹なり。半紅半碧の紗しやは肩より胸に垂れたり。黒髪を束ねたる紐の飾は珍らしき古代の寶石なるべし。傍に、窓の方に寄りて坐りたるは、暗褐色の粗服したる媪おうななり。彼君の目の色、

顔の形は猶太少女といはんも理なきにあらざと思はる。我友がむ
 かし猶太廓ゲットオにて見きといふ少女の事は、忽ち胸に浮びぬ。されど
 我心に問へば、この人その少女ならんとは思はれず。室の内には、
 尚一人の男居あはせたるが、わが入り來るを見て立ちあがれり。
 アヌンチャヤタも亦起ちて笑みつゝ我を迎へたり。友はわざとらし
 きこわね聲音にて。これこそ我友なる大詩人に候へ。名をばアント二オ
 といひ、ボルゲエゼうからの族の寵兒なり。主人の姫は我に向ひて。許
 し給へ。おん目にかゝらんことは、寔まことに喜ばしき限なれど、かく
 強ひて迎へまつらんこと本意ほいなく、二たび三たび止めしに、ベル
 ナルドオの君聽かれねば是非なし。さきにはめでたき歌を賜たまはり
 ぬ。その作者は君なること、おん友達より承りて、いかでおん目

にかゝらんと願ひ居りしに、窓より君を見付けて、わが詞を聞か
 で呼び入れ給ひぬ。禮なしとや思ひ給ひけん。されどおん友達の
 上は、我より君こそよく知りておはすらめ。ベルナルド才は戯も
 て姫がこの詞に答へ、我は僅にはじめて相見る喜を述べたり。我
 類は燃ゆる如くなりき。姫のさし伸べたる手を握りて、我は熱き
 唇に當てたり。姫は室にありし男を我に引き合せつ。すなはちこ
 の群の樂長なりき。又媪は姫のやしなひ親なりといふ。その友と
 我とを見る目まなざしは廉かどある如く覺えらるれど、姫が待もて遇なしのよ
 きに、我等が興そこなは損なはるゝに至らざりき。

樂長は我詩を讃めて、われと握手し、かゝる技倆ある人のいか
 なれば樂劇オペラを作らざる、早くおもひ立ちて、その初の一曲をば、

おのれに節附せさせよと勧めたり。姫その詞を遮りてさへぎ。彼が言を

聞き給ふな。君にいかなる憂き目を見せんとする。樂人は作者

の苦心をおもはず、聽衆はまた樂人よりも冷淡なるものなり。こ

よひの出物でものなる樂劇のラ、プルオバ、ツン、オペラ、セリア本讀といふ曲はかゝ

る作者の迷惑を書きたるものなるが、まことは猶一層の苦界くがいなる

べし。樂長の答へんとするに口を開かせず、姫は我前に立ちて語

を繼ぎたり。君こゝろみに一曲を作りて、全幅の精神をめでたき

詞に注ぎ、局面の體裁人物の性質、いづれも心を籠めてその趣を

盡し、扱さてこれを樂人の手に授け給へ。樂人はこゝにかゝる聲を挿

まんとす。君が字句はそのために削らるべし。かしこには笛と鼓

とを交へむとす。君はこれにつれて舞はしめられん。さておもな

る女優は來りて、引込の前に歌ふべき單吟アリアの華かなるを一つ作り添へ給はでは、この曲を歌はじといふべし。全篇の布置は善きか悪きか。そは俳優の責にあらず。「テノオレ」うたひの男も、これに譲らぬ我儘をいはむ。君は男女の役者々々を訪ひて項うなじを曲げ色を令よくし、そのおもひ付く限の注文を聞きてこれに應ぜざるべからず。次に來るは座がしらなり。その批評、その指、その刪さ除んじよに逢ふときは、その人いかに愚ならんも、枉まげてこれに従はでは協かなはず。道具かたはそれの道具を調へんは、我座の力の及ぶところにあらずといふ。かゝる場合に原作を改むることを、芝居にては曲を曲まぐといふ。畫工は某それの畑、某の井、其の積み上げたる芻まぐさ秣まぐさをばえ寫さじといふ。これがためにさへ曲ぐべき詞も出來

たるべし。最後におもなる女優又來りて、その詞の韻脚は嘯せへづりにくし、あの韻をば是非とも阿あのこゑにして賜はれといふ。これがためにいかなる重みある詞を削けつり給はんも、又いづくより阿のこゑの韻脚を取り給はんも、そは唯だ君が責に歸せん。かくあまたゝび改めて、ほとゝ元の姿を失ひたる曲を革かはに掛けたるとき、看客のうけあしきを見て、樂長はかならず怒りて云はむ。拙劣なる詩のために、いたづらなる骨折せしことよ。わが譜の翼を借したれども、癡ちちよう重なるかの曲はつひに地に墜ちたりと云はむ。

外よりは樂の聲おもしろげに聞えたり。假面着けたる人はこの街にもかしこの辻にもみちゝたり。たちまち拍手の音と共に聞ゆる喝采の響いとかしましきに、一座の人々みな窓よりさし覗

きぬ。いまわれ意中の人の傍にありて見れば、さきに厭はしと見
 つるとは様かはりて、けふの祭のにぎはひ又面白く、我はふたゝ
 びきのふ衆人に立ち廁まじりて遊びたはぶれし折に劣らぬ興を覺えき。
 道化役者にいでたちたるもの五十人あまり。われ等のさし覗け
 る窓の下につどひ來て、おのれ等が中より一人の王を選舉せんと
 す。これに中あたりたるものは、彩いろどりたる旗、桂の枝の環わかざり飾、檸リモネ檬
 の實の皮などを懸けたる小車に乗り遷うつりぬ。その旗のをかしく風
 へひるがへに翻るさま、衣の紐などの如く見えき。王の着座するや、其頭に
 は金色に塗りて更にまた彩りたる鶏卵を並べて作れる笠を冠とし
 て戴かせ、其手には「マケロニめん（麴類の名）つけたる大いなる玩も
 具てあそび」の柄つきの鈴こつを笏として持たせたり。さて人々その車のめ

ぐりを踊りめぐれば、王はいづかたへも向ひて頷うなづきたり。やゝありて人々は自ら車の綱取りて挽ひき出せり。この時王は窓にアヌンチヤタあるを見つ、親しげに目禮し、車の動きはじむると共に聲を揚げ。きのふは汝、けふは我。羅馬の牧のまことの若駒なまがえを轅なまがえに繋ぐ快さよ、とぞ叫びける。姫は面をさと赤めて一足退きしが、忽ち心を取直したる如く、又手を欄おぼしまにかけて、聲高く。我にも汝にも過分なる事ぞ。かりそめにな思ひそといふ。群集も亦きのふの歌女を見つけたりけるが、今その王との問答を聞きて、喝采の聲しばしは鳴りも止まず、雨の如き花束は樓の上なる窓に向ひて飛びぬ。その花束の一つ、姫が肩に觸れて我前に落ちたれば、我はそを拾ひて胸におしつけ、何物にも換へがたき寶をさぞと藏めおき

ぬ。

ベルナルドオは祭の王のよしなき戯を無禮なめしといきどほり、そのまゝ樓を走り降りて筈むちうち懲らさばやといひしを、樂長は餘よのひとと／＼と共になだめ止むるほどに、「テノオレ」うたひの頭なる男おとづれ來ぬ。その男は歌女に初對面なりといふ「アバテ」一人と外國うまれの樂人一人とを伴へり。續いて外國の藝人あまた打連れ來りて對面を請ひぬ。これにて一間に集ひし客の數俄に殖えたれば、物語さへいと調子づきて、さきの夕「アルジエンチナ」座にて興行したる可笑をかき假粧舞フェスチノの事、詩女ムウザの導者たるアポルロン、古代の力士、圓鐵板投ぐる男の像等に肖にせたる假面の事など、次を逐おひて談柄となりぬ。獨りかの猶太種と覺しき老女の

みはこの賑しき物語あづかに與らで、をりく姫がことさらに物言掛
 たる時、僅に軽く頷くのみなりき。この時姫の態度に心をつくる
 に、きのふ芝居にて思ひしとは、甚しき相違あり。その家にあり
 てのさまは、世を面白く渡りて、物こだはに拘ることなき尋常の少女な
 り。されどわが姫を悦ぶ心はこれがためにすこ毫しも減ぜず。この穉をさな
 き振舞は却りかへてあやしく我心かなに協あひき。姫は譯わけもなき戯言ざれごとをも、
 面白くいひ出で、我をも人をも興おこぜさせ居たりしが、俄にこゝ
 ろ付きたるやうとけいに※を見て、はや化粧すべき時こそ來ぬれ、今宵
 は樂劇ラ、プルオバ、ツン、オペラ、セリアの本本讀讀のうちなる役あたに中り居ればと
 て座を起ち、側なる小房のうちに入りぬ。

門を出でたるとき。われ。汝が惠によりてゆくりなき幸に逢ひ

しことよ。舞臺なるを見し面白さに譲らぬ面白さなりき。さはれ
汝はいかにして彼君とかく迄親くはなりし。又いかにして我をさ
へ紹介しつる。我は猶さきよりの事を夢かと疑はんとす。友。わ
が少女の許を訪れしは、別にめづらしき機會を得しにあらず。羅
馬貴族の一人、法皇禁軍このゑの一將校、すべての美しきものを敬する
人のひとりとして、姫をば見舞つるなり。若し又戀といふものゝ
上より云はゞ、この理由の半ばをだに須もちるざるならん。されば我
が姫を訪ひて、汝も前さきに見つる如き紹介なき客に劣らぬ、善き待
遇を得しこと、復た怪むに足らざるべし。且戀またはいつも我交際またの
技倆を進む。彼と相對するときは、倦怠せしめざる程の事我掌中
に在り。相見てよりまだ半時間を経ざるに、我等は頗すこぶる相識るこ

とを得き。さてかくは汝をさへ引合せつるなり。我。さては汝彼君を愛すといふか。眞心もて愛すといふか。友。然り、今は昔にもまして愛するやうになりぬ。さきに猶太廓にて我に酒を勧めし少女の、今のアヌンチャタなることは、最早疑ふべからず。わが始て居向ひしとき、姫は分ぶんみやう明に我を認むるさまなりき。かの老いたる猶太婦人の詞すくなく、鞆くつした編めるも、わがためには一人の證人なり。されどアヌンチャタは生れながらの猶太婦人にあらず。初め我がしかおもひしは、其髮の黒く、其瞳の暗きと其境界とのために惑はされしのみ。今思へば姫は矢張やはり基督教の民なり。終には樂土に生るべき人なり。

このタベルナルドオと芝居にて逢ふことを約しき。されど餘り

の大入なれば、我はつひに吾友を見出すこと能はざりき。我は辛く一席を購ふことあがなを得き。いづれの棧敷さしきにも客満ちて、暑さは人を壓するやうなり。演劇はまだ始まらぬに、我身は熱せり。きのふけふの事、わがためには渾て夢すべの如くなりき。かゝる折に逢ひて、我心を鎮めんとするに、最も不恰好なるは、蓋しけだ今宵の一曲なりしならん。世に知れわたりたる如く、樂劇の本讀といふは、極めて放肆はうしなる空想の産物なり。全篇を貫ける脈絡あるにあらず。詩人も樂人も、只ひたすら管觀客をして絶倒せしめ、兼ねて許多あまたの俳優に喝采を博する機會を與へんことを勉めたるなり。主人公は我儘にして動き易き性なる男女二人にして、これを主なる歌女及譜を作る樂人とす。絶間なき可笑しきは、盡る期なき滑稽の葛藤を惹

起せり。主人公の外なる人物には人のおのれを取扱ふこと一種の毒藥の如くならんことを望める俳優をのみ多く作り設けたり。かくいふをいかなる意ぞといふに、そは能く人を殺し又能く人を活す者ぞとなり。此群に雜まじれる憐むべき詩人は、始終人に制せられ役せられて、譬へば猶犠牲となるべき價なき小羊のごとくなり。

喝采の聲と花束の閃ひらめきやうは場に上りたるアヌンチャタを迎へき。そ

の我儘にて興ある振舞わざ、何事にも頓着せずして面白げなる舉動を見て、人々は高等なる技わざといへど、我はそを天賦さがの性とおもひぬ。いかにといふに、姫が家にありてのさまはこれと殊なるを見ざればなり。その歌は數千の銀しろかねの鈴ひとし齊く鳴りて、柔なる調子の變化きはまり極なきが如く、これを聞くもの皆頭を擧げて、姫が目より漲みなぎり出づ

る喜をおのが胸に吸ひたり。姫と作譜者と對して歌ふとき相代り
 て姫男の聲になり、男姫の聲になる條くだりあり。この常に異なる技は、
 聽衆の大喝采を受けたるが、就なかんづく中姫が最低の「アルトオ」の
 聲を發し畢りて、最高の「ソプラノ」の聲に移りしときは、人皆
 物に狂へる如くなりき。姫が軽く艶なる舞は、エトルリアの瓶へいの
 面なる舞者まひこに似て、その一舉一動一として畫工彫工の好粉本なら
 ぬはなかりき。われはこのすべての技藝を見て姫の天性の發露せ
 るに外ならじとおもひき。アヌンチャタがチドは妙藝なり、その
 歌女は美質なり。曲中には間何まの縁故もなき曲より取りたる、可
 笑しき節々を高く、作譜者と姫とは之に連れて歌ひたるが、忽
 ち旨しく、場びらきの樂は畢りぬ、いざ幕を開けよといふとき

幕閉づ。これを此曲の結局とす。姫はこよひもあまたゝび呼び出されぬ。花束、緑の環飾、詩を寫したるむすび文、彩りたる紐は姫が前にひるがへ翻りぬ。

即興詩の作りぞめ

この夕我と同じ年頃なる人々にて、中には我を知れるものも幾人か難りたるが、アヌンチヤタが家の窓の下に往きて絃歌を催さむといふ。我は崇拜の念止み難き故をもて、きも膽太くもまたこの群に加りぬ。唱歌といふものをば止めてより早や年ひさしくなりたるにも拘らで。

姫が歸りてより一時間の後なりき。一群はピアツツア、コロ
 ナナに至りぬ。出窓の内よりは猶燈の光さしたり。樂器執りたる人
 々は窓の前に列びぬ。我心は激動せり。我聲は臆することなく人
 々の聲にまじりたり。歌の一節をば、われ一人にて唱へき。この
 時我は唯だアヌンチャタアヌンチャタが上をのみ思ひて、すべての世の中を忘
 れ果てたり。さて深く息して聲を出すに、その力、その柔やはらかさ、能
 くかく迄に至らんとは、みづからも初より思ひかけざる程なりき。
 火伴つれのものは覺えず微かすかなる聲にて喝采す。その聲は微なりと雖、
 猶我耳に入りて、我はおのが聲の能く調へるに心付きたり。喜は
 我胸に満ちたり。神は我身に舍やどり給へり。アヌンチャタアヌンチャタが出窓よ
 りさし覗きて、身を屈し禮をなしたるときは、その禮を受くるも

の殆ど我一人なる如くおもはれき。我は我聲の一群を左右する力ありて、譬へば靈魂の肢體を役するが如くなるを覺えき。事果てて後家に歸りしが、身は唯だ夢中に起ちてさまよひありく、怪しき病ある人の如くにして、その夜枕に就きての夢には始終アヌンチヤタが我歌を喜べるさまをのみ見き。

翌日姫をおとづれぬ。ベルナルドオ、昨夜の火伴つれの二人三人は我に先だちて座にありき。姫のいはく。きのふ絃歌の中にて「テノオレ」の聲のいと善きを聞きつといふ。我面はこの詞と共に火の如くなりぬ。それこそアントニオなれと告ぐるものあり。姫は直ちに我を引きて「ピアノ」の前に往き、俱ともに歌へと勸む。我は法廷に立てるが如き心地して、再三辭いなみたるに、人々側より促し

て止まず、又ベルナルドオは聲を勵まして、さては汝切角の姫の
 聲をさへ我等に聞せざらんとするかと責めたり。姫に手を拉ひかれ
 たる我は、捕とらへられし小鳥に殊ならず。縦たとひ羽ばたきすとも、歌は
 では叶はず。姫の歌はんといふは、わが知れる雙ツエツトオ吟なり。姫
 は「ピアノ」に指を下して、先づ聲を擧げ、我は震ひつゝもこれ
 に和したり。この時姫の目なざしは、我に膽たん々たくとさゝやきて、
 我をその妙音界に迎ふる如くなりき。わが怯おそれは已みて、我聲は朗
 になりぬ。一座は喝采おしを齊おしまず、かの猶太おうなさへやさしげに
 頷うなずきぬ。

このときベルナルドオは汝はいつも人の意表に出づる男ぞとつ
 ぶやきて、さて衆人に向ひ、吾友には猶かくし藝こそあれ、そは

即興の詩を作ることなり、作らせて聞き給はずやといひき。喝采
 に酔ひたる我は、アヌンチャタが一言の囑たのみを待ちて、大膽にも即
 興の詩を歌はんとせり。この技は人と成りての後未だ試みざるも
 のなるを。我は姫の「キタルラ」を把とりぬ。姫は直に不死不滅と
 いふ題を命ぜり。材には豊なる題なりき。しばしうち案じて、絃
 を撥はじくこと二たび三たび、やがて歌は我肺腑より流れ出でたり。
 詩神は蒼茫たる地中海を渡り、希臘ギリシアの緑なる山谷の間間にいたり
 ぬ。雅典アテエンは荒草斷碑の中にあり。こゝに野生の無花果樹いちじゆくの摧くだけ
 残りたる石柱を掩おほへるあり。この間には鬼の歎なき歎きするを聞く。む
 かしペリクレエスの世には、この石柱の負へる穹窿くわうろうの下に、笑ひ
 さゞめく希臘の民往來したりき。そは美の祭まつりを執とり行へるなり。

ライス（名娼の名）の如く美しき婦人は環飾を取りて市に舞ひ、
 詩人は善と美との不死不滅なるを歌ひぬ。忽ちにして美人は黄土
 となりぬ。當時の民の目を悦ばしたる形は世の忘るゝ所となりぬ。
 詩神は瓦礫ぐわれきの中に立ちて泣くほどに、人ありて美しき石像を土
 中より掘り出せり。こは古の巨匠の作れるところにして、大理石
 の衣を着けて眠りたる女神なり。詩神はこれを見て、さきの希臘
 の美人の倂おもかけを認めき。あはれ古人が美をかう／＼しき迄に進め
 て、雪の如き石に印し、これを後こうこん昆に遺したるこそ嬉しけれ。
 見よや、死滅するものは浮世の權勢なり。美いかでか死滅すべき。
 詩神は又波を踏みて伊太利に渡り、古の帝王の住みつる城址きよに踞
 して、羅馬の市を見おろしたり。テエエル河の黄なる水は昔なが

らに流れたり。されどホラチウス・コクレスが戦ひし處には、今
 筏いかだに薪と油とを積みてオスチアおくに輸おるを見る。されどクルチウス
 が炎火のんどの喉のんどに身を投ぜし處には、今牧牛の高草うちの裡うちに眠れるを見
 る。アウグスツスよ。チツスよ。汝が雄大なる名字みやうじも、今は破
 れたる寺、壞れたる門の稱に過ぎず。羅馬の鷲、ユピテルたけの猛たけき
 鳥は死して巢の中にあり。あはれ羅馬よ。汝が不死不滅はいづれ
 の處にか在る。鷲の眼は忽かち耀やきて、その光は全歐羅巴を射たり。
 既に倒れたる帝座は、又起ちてペトルスの椅子（法皇座）となり、
 天下の王者は徒とせん跣せんしてこゝに來り、その下に羅拜せり。おほよそ
 手の觸るべきもの、目の視るべきもの、いづれか死滅せざらん。
 されどペトルスの刀さびいかでか鏽さびを生ずべき。寺院の勢いかでか墮

つる期^{ごと}あるべき。縦^{たと}ひ有るまじきことある世とならんも、羅馬は猶その古き諸神の像と共に、その無窮なる美術と共に、世界の民に崇^{あが}められん。東よりも西よりも、又天寒き北よりも、美^{うやま}を敬ふ人はこゝに來て、羅馬よ、汝が威力は不死不滅なりといはん。この段^をの畢^{をは}るや、喝采の聲は座に滿ちたり。獨りアヌンチヤタは靜座して我面を見たるが、其姿はアフロヂテの像の如く、其眸^{ひとみ}には優しきこもれり。我情は猶輕き詩句となりて、唇より流れ出でたり。詩境は廣き世界より狹き舞臺^{うた}に遷^{うつ}れり。こゝに技倆すぐれたる俳優あり。その所作、その唱歌は萬客の心を奪へり。歌ひてこゝに至りたる時、姫は頭^たを低^たれたり。そは我上とおもへばなるべし。座中の人々も、亦我敘述する所によりて我意の在るところを

認めしならん。かゝる俳優も歌歇やみ幕落ちて、喝采の聲絶ゆるときは、其藝術は死なん。死して美き屍かばねとなりて、聽衆の胸に瘞うづめられたるのみならん。されど詩人の胸は衆人の胸に殊なり。譬へば聖母の墓の如し。こゝに瘞うづめらるゝものは、悉く化して花となり香となり、死者は再びこれより起たん。しかしてその詩は一たび死したる藝術をして、不死不滅の花となりて開かしめん。我目はアヌンチャタが顔を見やりたり。我心は吐き盡したり。われは起ちて禮をなしたるに、人々は我を圍みて謝したり。姫は我を視て、君は深く我心を悦ばしめ給ひぬといひぬ。我は僅に唇をやさしき手に押し當てたり。

そもく劇は虹の如きものなり。彼も此も天地の間に架したる

橋梁なり。彼も此も人皆仰いで其光彩を喜ぶ。然はあれどその※
 とアヌンチャヤタわさが技とは、其運命實にかくの如し。姫はわがこれ
 を不朽にせんとする心を、この時能くさと曉り得たり。姫が我を解す
 ることの斯く深かりしことは、當時我未だ知ること能はざりしが、
 後に至りて明かになりぬ。

我は日ごとに姫をおとづれき。わづかに残れる謝肉祭の日はい
 つしか夢の如くに過ぎ去りぬ。されどこの間われは遺憾なくこの
 まつりの興を受用し盡せり。そはアヌンチャヤタわさが我に賦ふしたる樂
 天主義たまものの賜なりき。或時ベルナルドオのいふやう。汝はやうやく
 まことの男とならんとす。われ等に變らぬ眞の男とならんとす。
 されど汝はまだ唇を杯の縁にあてしに過ぎず。我は明かに知る、

汝が唇の未だ曾て女子の口に觸れず、汝が頭の女子の肩に倚よらざるを。今若しアヌンチャタまことに汝を愛せばいかに。我。思ひも掛けぬ事かな。アヌンチャタは我が僅に能く仰ぎ見るものゝ名にして、我手の届くべきものゝ名にあらず。彼。あらず。高くもあれ低くもあれ、アヌンチャタとは女子の名なり。汝は詩人にあらずや。詩人は測るべからざる性あるものなり。その女子の胸の片隅を占むるや、その奥に進むべき鍵は、詩人の手にあるものぞ。我。姫がやさしき、賢さかしき、姫が藝術のすぐれたるをこそ慕へ。これに戀せんなどは、われ實に夢にだにおもひしことなし。彼。汝が眞面目なるおも持こそをかしけれ。好しく、我は汝が言を信ぜん。汝は素もとより蛙などに等しき水陸兩住の動物なり。現うつの

世のものか、夢の世のものか、それを誰か能く辨ぜん。汝はまことに彼君を愛せざるべし、わが愛する如く、世の人の戀するときに愛する如く愛せざるべし。されど汝が姫に對する情果して戀に非ずば、今より後彼に對して面をあかめ、火の如き目まなざしゝて彼に向ふことを休やめよ。そは彼君のためにあしかりなん。傍より見ん人の心のおもはれて。されど姫はあさて此地を立つといへば、最早その憂もあらざるべし。基督再生祭の後には歸るといへど、そも恃たのむべきにはあらず。これを聞きたるとき、我胸は躍りぬ。

アヌンチャヤタを見るべからざること五週わたに互わるべし。彼君はフイレンツエの芝居やとに備はれ、斷食日の初にこゝを立つなりとぞ。ベルナルド才は語を繼ぎていはく。かしこに至らば崇拜者の新なる

群は姫がめぐりに集ふべし。さらば舊きは忘れられん。譬へば汝が即興の詩の如きも、その時こそ姫のやさしき目なざしに、汝に謝する色現れつれ、かしこにては思出さるゝ暇なからん。さはあれ一個の婦人にのみ心を傾くるは癡漢ちかんの事なり。羅馬には女子多し。野あまねに遍あまねき花のいろくは人の摘み人の采とるに任するにあらずや。

この夕我はベルナルドオと共に芝居に往きぬ。アヌンチヤタは再びチドとなりて出でぬ。その歌、その振ふり、始に譲らざりき。完備せるものゝ上には完備を添ふるに由なし。姫が技藝はまことに其域に達したるなり。こよひは姫また我理想の女子となりぬ。その本讀の曲にての役やく、その平生の舉動は、例へば天上の仙の暫く

この世に降りて、人間の態をなせるが如くぞおもはるる。その態さまも好し。されどチドの役にては、姫が全幅の精神を見るべし。姫がまことの我われを見るべし。萬客は又狂せり。想ふにこの羅馬の民のむかし該カエザル撤とチツスとを迎へけん歡も、おそらくは今宵の上に出でざるならん。曲を畢りて姫は衆人に向ひて謝辭を陳のべ、再びこゝに來んことを約せり。姫はこよひもあまたゝび呼出されぬ。歸途に人々の車を挽けるも亦同じ。我もベルナルド才と共に車に付き添ひて、姫がやさしき笑顏を見送りぬ。

謝肉祭の終る日

翌日は謝肉祭カルナワレの終る日なりき。又アヌンチヤタが滞留の終る日なりき。我は暇いとまごひにおとづれぬ。市民がその技能に感じて與へたる喝采をば、姫深く喜びたり。フイレンチエはその自然の美しき、その畫廊の備そなはれる、居るに宜よろしきところなれど、再生祭の後こゝに歸らんことは、今より姫の樂むところなり。姫はかしこの景色を物語りぬ。アペンニノの森林、豪貴の人々の別莊の其間に碁布せるピアツツア、デル、グランツカ、其外美しき古代の建築物など、その言ふところ人をして目のあたりに見る心地せしめき。

姫のいはく。我は再び畫廊に往かむ。我に彫刻を喜ぶこゝろを生ぜしめしは彼處かしこなり。プロメテウスが死者に生を與ふるに同じ

く、人間の心の偉大なるを、わが悟りしはかしこなり。彼廊に一室あり。そは最も小なる室にして、わが最も好める室なり。今若し君をかしこに在らしむることを得ば、君は能くわがむかしの喜を解し、又能くわが今日そをおもひおこ想起す喜を解し給はん。この八角に築きたる室には、實に全廊のいうづつ尤物を擢ぬぎんで、陳列せり。されどその尤物の皆けおさるるは、メチチのエヌスの石像あればなり。かくまでに生けるが如き石像をば、われこの外に見しことなし。その目は人を視る如し。あらず。人の心の底を觀る如し。石像の背後には、チチアノの畫けるエヌスの油畫二幅を懸けたり。その色彩目を奪ふと雖いへども、こゝに寫し得たるは人間の美しさにして、彼石の現せるは天上の美しきなり。ラファエロがフォルナリイナ

(作者意中の人)は心を動すに足らざるにあらず。されどエヌスの生けるをば、われあまたゝび顧みざること能はず。否々、おほよそ世に彫像多しと雖、いづれか彼エヌスの右に出づべき。ラオコオンにてはまことに石の痛楚つうそのために泣くを見る。しかも猶及ばざるところあり。獨り我エヌスと美をくら※ぶるは、君も知り給へるワチカアノのアポルロンならん。その詩神を摸したる力量は、彼エヌスに於きてやさしき美の神を造れるなり。我答へて。君の愛めで給ふ像を石膏に寫したるをば、我も見き。姫。否、われは石膏の型かたばかり整はざるものはなしと思へり。石膏の顔は死顔なり。大理石には命あり靈あり。石はやがて肌肉となり、血は其下を行くに似たり。フイレンチエまで共に行き給はずや。さらばわれ君

が案内すべし。我は姫が志の厚きを謝して、さていひけるは、さ
らば再生祭の後ならでは、又相見んこと難かるべしといふ。姫こ
たへて。さなり。聖ピエトロ寺の燈を點し、烟火戲ジランドラを上ぐる折
は、我等が相逢ふべき時ならん。それまでは君われを忘れ給ふな。
我はまたフイレンチエの畫廊に往きて君とけふ物語れることを想
ふべし。われは常に面白きことに逢ふごとに、我友のその樂を分
たざるを恨めり。これも旅人の故郷を偲しのぶたぐひなるべし。我は
姫の手に接吻して、戯に。この接吻をばメチチのエヌスに傳へ給
へ。姫。さては我にとてにはあらざりしか。我は決して私わたくしするこ
となかるべしといひぬ。我は分れて一間を出でしとき夢みる人の
如くなりき。戸の外にて家の媪おうなに出で逢ひ、心の常ならぬけにや

ありけむ、われその手を取りて接吻せしに、これは善き性さがの人なるよとつぶやくを聞きつ。

最後の謝肉祭の日をば、飽く迄樂まむと思ひぬ。唯だアヌンチヤタと別れむことは、猶現うつつとも覺えず。又逢はむ日は遙なる後にはあらで、明日の朝にはあらずやおもはる。假面をば被りたらねど、「コンフエツチイ」の粒擲なぐることは、人々に劣らざりき。道の傍なる椅子には人満ちたり。家ごとの窓よりも人の頭あらはれたり。車のゆきかふこと隙間なく見ゆるに、その餘せる地にはうれしげなる面持したる人肩摩するほどに集へり。歩まむとする人は、車と車との隙を行くより外すべなし。音樂の聲は四面より聞ゆ。車の内よりも「イル、カピタノ」（大尉）の歌洩りたり。陸

に海に立てたる勳いさをしとぞ歌ふなる。腰に木馬を結びたる童あり。首
 と尾とのみ見えて、四足のところは膝かけの色ある巾きれにて掩おほはれ
 たり。童の足二つにて、馬の足の用をなせるなり。かゝるものさ
 へ車と車との間に入れば、混雜はまた一ひとしほ入になりぬ。われは楔くさび
 の如く車の間に介はさまりて、後へも先へも行くこと叶はず。後なる
 車挽ひける馬の沫あわは我耳そに漑そげり。わがこれにえ堪へで、前なる車
 の踏板に飛び乗りたるを、これに乗れる寢衣ねまき着たる翁とやさしき
 花賣娘とは、早くも惡劇いたづらのためよりは避難のためと見て取りぬ
 と覺しく、娘は軽く我手背たを敲たたき、例の玉のつぶて二つ投げかけ
 しのみなれど、翁の打つ飛礫つづては雨の如くなりき。娘もこの攻撃を
 興あることにや思ひけん、遂には翁の所爲なに倣ならひて、持てる籠の

空むなしくならんとするをも厭はで唯だ打ちに打つ程に、我衣は斑々として雪を被かぶれる如くぞなりぬる。われはこの地點を守りかねて、飛びおるれば、戯おどけやつこ奴にいでたちたる男走り來て、手に持てる采配もて、我衣を拂ひ呉れたり。

暫し避けて佇たゞずむ程に、さきの車又かへり路に我を見て、再び

「コンフエツチイ」を投げかけたり。わが未だ迎へ戦ふいとまに違あらざる時、砲聲地に震ひて、くらべ馬始まるをしらせしかば、車は皆狭き横道に入りて、翁と娘とも見えずなりぬ。二人は我を識りたりと覺し。奈何いかなる人にかあらん。ベルナルドオは今日街に見えざりき。かの翁は其人にて、娘はアヌンチヤタにはあらずや。

我は街の角に近き椅子に倚りぬ。砲は再び響きて、競馬は街の

たゞ中をエネチアの廣こうぢさして馳せゆき、荒浪の寄するが如
 き群衆はその後に隨ひぬ。わが踵くびすめぐらを旋かへして還らむとするとき、馬
 よくと呼ぶ聲俄かまびすに喧しく、競馬の内なる一頭の馬、さきなる埒らち
 にて留まらず、そが儘街を引きかへし來れるに、最早馬過ぎたり
 と心許し、群衆は、あわて騒ぐこと一かたならず。吾心頭には稻
 妻の如く昔のおそろしかりしさま浮びたり。瞬またくひまに街の兩側
 に避けたる人の黒山の如くなる間を、兩脇より血を流し、鬣たてがみ戦ぎ、
 口より沫出あわでたる馬は馳せ來たり。されど我前を過ぐるとき、い
 にかにかしけむ銃うたもて撃れたる如く打ち倒れぬ。怪我せし人やある
 と、人々しばしは安き心あらざりしが、こたびは聖母やさしき手
 を信者の頭の上に擴げ給ひて、一人をだに傷け給はざりき。

危さの容易たやすく過ぎ去りしは、祭の興を損ぜずして、却かへりて人の
 心を亂し、人の歡を助けたり。これよりは謝肉祭の大詰なる燭火
 の遊（モツコロ）始まらんとす。今まで列を成したりし馬車は漸
 く亂れて、街上の雜ざつたふは人聲の噪しさと共に加はり、空の暗う
 なりゆくを待ち得て、人々持たる燭に火を點せり。中には一束を
 握りて、こと／＼く燃せるもあり。徒かちなるも車なるも燭を把とり
 たるに、窓のうちに坐したる人さへ火持たぬはあらねば、この美
 しき夜は地にも星ある如くなり。家々より街の上へさし出せる火
 には、いろ／＼なる提ちやうちん灯、燈籠ありて、おの／＼功を争へり。
 さて人々皆おのが火を護りて、人のを消さむとす。火持たぬ人は
 死ね（リア、アムマツアトオ、キイ、ノン、ポルタア、モツコオ

リ）と叫ぶ聲は、次第に喧しくなりまされり。我が持てる燭も、
 人に觸れさせじとする骨折は其甲斐なくて、打ち滅けさるゝこと頻しきり
 なりければ、われ餘りのもどかしさに、智慧ある人は我ならに倣へよ
 と叫びつゝ、柄ながらに投げ棄てつ。道の傍なる婦人數人は、そ
 の燭を家々の窖あなぐらの窓にさし込みて、これをば誰もえ消さじと心安
 んじ、我を指ざして燭なき人の笑止さよと嘲るほどに、家の童ど
 もいつか窖に降り行きて、その燭を吹き滅したり。又高き窓なる
 人々は竿に着けたる堤ひさげとう燈さし出して誇ほこりがほ貌なるを、屋根に
 這ひ出でたる男ども竿の尖てふきに紛て結ひびたるを揮ひて、これをさへ
 拂ひ消すめり。

こごとくにびと

異國人にて此祭見しことなきものは、かゝる折の雜ざつたふを想

ひ遣ること能はざるべし。立りつすゐ錐の地なき人ごみに、燃やす燭の
數限なければ、空氣は濃く熱くのみなり勝まさりぬ。忽ち街の角を曲
らんとする馬車二三輛あるを認めて頭を回しゝに、かの覆面した
る翁と娘とを載せたる車は我側に來りぬ。寢衣ねまき纏ひたる老紳士の
燭は早や消えたり。花賣に扮したる娘は猶四五尺許なる籐とうの竿に
蠟燭幾本か束ねたるを着けて高く翳かざせり。彼の紛てふき※結びたる竿の
長足たけらで、我火をえ消さざるを見て、娘は嬉し氣に笑ひぬ。老紳
士は又娘の火に近づくものありと見るごとに、容赦なく「コンフ
エツチイ」の霰あられを迸とばしらせたり。われはこれをこそと思ひければ、
車の背後に飛び乗り、籐の竿をしかと握るに、娘はあなやと叫び、
男は石膏の丸たまを放つこと雨より繁かりしかど、屈せずしてかの竿

を撓たわませんとせしに、竿は半ばよりほきと折れて、燭たばの束ははたと落つ。群衆は喝采せり。娘はアント二オ、餘りならずやと怨じたり。その聲は我骨を刺すが如く覺えぬ。そはアヌンチヤタが聲なればなり。娘は籠の内なる丸の有らん限を我頭に擲なげ付け、續いて籠を擲げ付けしに、われ驚きて跳をどり下るれば、車ははや彼方へ進み、和睦わぼくのしるしなるべし、娘のうしろざまに投じたる花束一つ我掌に留りぬ。われは車を追はんとせしが、雑沓甚しきため其甲斐なく、遂にとある横街に身を避けつ。

身の周圍の混雜收りて心落つくと共に、心に懸かるはアヌンチヤタあひのりが同乗したる男の上なり。察するにベルナルドオわざが故意と翁に扮したるなるべし。いで二人の家に歸るを待ち受けて確めば

やと人通り少かるべき横街を駈け抜けて、姫が住めるコロナの
 廣こうぢに出で、戸口に立ちて待つほどに、車は果して歸り着き
 ぬ。われは家の僮僕しもべなどの如き様して走り寄りつゝ、車より下る
 二人を援けんとするに、姫は我手に縋らで先づおり立ちぬ。さて
 彼老神士に心を着くるに、その立ちあがりいざりおるゝ様にて、
 わが推せし人ならぬは早く明かになりたりしが、寢衣の裾より出
 でたる褐色の裳もを見るに及びて、姫が家の媼おうななることは漸く知ら
 れぬ。媼はわがさし伸ばす手に縋りて下りぬ。われは姫の供ともした
 る人の男ならざりし嬉しさに、幸あらん夜をこそ祈れと聲高く呼
 びて去らんとせしに、姫進み寄りて、悪しき人かな、早くフイレ
ンチ工に遁のがれ行かばやといひつゝも、手さし出せるを握るに、か

なたも親く握り返しつ。嬉しさに嬉しさの重なりたる我は、火持
 たぬ手うち振りて、火持たぬ人は死ねと叫び行きぬ。我心の中に
 は姫が徳を頌する念満ちたり。その車の傍なる座をば、樂長にも
 許さず、吾友にも許さで、彼媼を伴ひしこそ、姫が心の清き證あかしな
 れ。彼媼は又かゝる遊を喜ぶべき人とも見えぬに、男寢衣を身に
 着けて供せしを思へば、壹もはら姫を悦ばせんがために心を竭つくせるも
 のなるべし。唯だ姫が側なる人をベルナルドオならんと疑ひしと
 き、我心の噪さわがしかりしは、妬ねたみなるか否あらざるか、そはわが考へ定
 めざるところなりき。

われは残れる謝肉祭の時間を面白く過さんとて、假粧舞フエスチノの場には
 に入りぬ。堂の内には處ところ狭せまきまで燈燭を懸け列ねたり。假粧けはひ

せる土地ところの人、素顔のまゝなる外國人と打ち雜まじりて、高き低き棧敷を占めたり。平土間より舞臺へ幅廣はしき梯しをわたしたるが、樂人の群の座はその梯の底となりたり。舞臺には畫紙はを貼はり、環わかざり飾り紐飾を掛けて、客の來り舞ふに任せたり。樂人は二組ありて、代る代る演奏す。今は酒の神なるバツエツツリノコスとその妻なる女神アリアドネとの姿したる人を圍みて、貸車エツツリノの御者に扮したる男あまた踊り狂ふ最中なりき。われは梯を踏みてその群に近づき、引かるゝまゝに共に舞ひしが、心樂しく身輕きに、曲二つまで附き合ひて、夜更けたる後ねぐら疇らに歸りぬ。

眠りしは短き間にて、翌朝は天氣好かりき。姫は今羅馬を立つにやあらむ。華かにして賑はしく、熱して騒がしかりし謝肉祭は、

今我を残して去りぬ。外に出で、風に吹かれなば、心寂しきけふ
 を慰むるに足ることもやと思ひて、獨り街に立ち出でぬ。家々の
 戸は閉されたり。物賣る店もまだ起き出でざりき。昨日は人の波
 打ちしコルソオの大道には、往き交ふ人疎まぼらにして、白衣に藍色あゐの
 縁取りしを衣きたる懲役人の一群、霰あられの如く散りぼひたる石膏たまの丸
 を掃き居たり。塵を積むべき車の轆ながえには、骨ほねたゝ立したる老馬の繫
 がれつゝ、側なる一團の芻秣まぐさを噛めるあり。とある家の戸口には、
 貸車の御者立ちて、あき箱あき籠あまた車の上に載せ、その上を
 ば毛布もて覆ひ、背後に結び附けたる革行李くわの凹くぼくなるまで鐵てつの
 鎖を引き締め居たり。この車は横街より出でたる、同じ様に梱載こり
 せる車と共に去りぬ。ナポリナポリにや行くらん。フライレンチエフライレンチエにや行

くらん。耶蘇更生祭の來ん日まで、羅馬は五週間の長眠をなさんとするなり。

精進日、寺樂

事なくして靜に日を暮せば、その永さの常にもあらで覺えらるゝと共に、謝肉祭の間の珍らしかりし事、その事の中心をなせる姫が上のみ心頭に往來せり。墳墓の如き靜けさは日ごとに甚しくなりぬ。わが胸の空虚は書卷の能く填むるところにあらざりき。ベルナルドオはわが無二の友なり。然るに今はその音容に接することの厭いとはしくなれるぞ怪しき。嗚呼我等二人の間にはアヌンチャ

夕の立てるなり。縦たとひ友を失はんも、彼君のためには惜からじと一たびは思ひぬ。されどつらく思ひ返せば、友は我に先だちて姫と交を結びぬ。わが姫と相識ることを得しは、全く友の紹介の賜たまものなり。われは友に對して、我が姫に運ぶ情の戀にあらず、藝術上の感歎なるを誓ひたり。ベルナルドオはわが無二の友なり。われは今これを欺かんとす。悔恨の棘は我心を刺せり。されどわれは遂にアヌンチャタを忘るゝこと能はず。

アヌンチャタを懷ふはアヌンチャタの我に與へたる歡喜を懷ふなり。されどその歡喜をなしは昔日の事にして、今これが記念を喚よび起せば、一として悲痛に非ざるものなし。譬へば亡なきひと人の肖像の笑へるが如し。その笑はたま／＼以て我を泣かしむるに足

る。學校にありしころ人の世途の難を説くを聞きては、或課題の
 むづかしき、或師匠の意地わるきなどに思ひ比べて、我も亦早く
 其味を知れりといひしことあり。今やその非なるを悟りぬ。われ
 若し能く此戀に克かつにあらずば、此力以て世途の難を排するに足
 るとはいふべからず。試に此戀の前途を思へ。アヌンチャタは尋
 常の歌妓に非ずして、その妙藝は現に天下の仰ぎ望むところなり
 と雖、われ往ゆいてこれに従はゞ、その形迹世の蕩たうし子と擇えらぶことな
 からん。我友はこれを何とか言はむ。加しかのみなら之またず若し心術の上よ
 り論ぜば、我守護神たる聖母もこれよりは復また我を憐み給はざるべ
 し。況いはんや此戀は果して能く成就せんや否や。我は口惜しきことな
 がら、實に未だアヌンチャタの心を知らざりき。我は寺に往きて

聖母の前に叩頭ぬかづき、いかで我に己に克つ力を授け給はれと祈りて、
 さて頭を擧げしに、何ぞ料はからむ聖母の面おもては姫の面となりて我を悦
 ばせ又我を苦めむとは。我は縦たとひ姫再び來んも、誓ひて復た逢は
 じとおもひ定めつ。

我は嘗て古いにしへの信徒むちうの自ら答きざつち自ら傷けしを聞きて、其情を解せ
 ざりしに、今や自らその爲す所に倣ならはんと欲するに至りぬ。燃ゆ
 るが如き我血を冷さんとて、我は聖母の像の下に伏して、我唇を
 その冷ひや、かなる石の足に觸れたり。憶ひ起せば、わがまだ穉をさなき時の心
 安かりしことよ。母の膝下しつかにて過す精進日せじみびは、常にも増して樂たのしき
 時節あたりなりき。四邊の光景は今猶きのふ昨のごとくなり。街の角、四辻な
 どには金紙銀紙の星もて飾りたる常磐木ときはぎの草寮こやあり。處々に懸け

し招牌せうはいには押韻あふあんしたる文もて精進せいじん食しょくの名を列べ擧げたり。夕
 になれば緑葉の下いろどに彩りたる提燈ひさげとうを弔つり。雑食品賣る此頃
 の店は我釋き目に空想界を現あせる如く見えにき。銀紙卷きたる腸
 詰肉を柱とし、ロヂイ産かんらくの乾酪を穹窿としたる小寺院中ブチルロにて酪
 もて塑こねたる羽ある童の舞ふさまは、我最初の詩料なりき。食品
 店の妻は我詩を聞きて、ダンテの神曲なりと稱へき。當時われは
 不幸にして未だこの譽ほまれある歌人のいかに世を動かし、かを知らず、
 又幸にして未だアヌンチャタが如き才貌ある歌妓のいかに人を動
 かすかを知らざりしなり。嗚呼、われは奈何いかにしてアヌンチャタを
 忘るゝことを得べきぞ。

われは羅馬ロオマの七寺を巡りて、行者ぎやうじやと偕ともに歌ひぬ。吾情は眞

にして且深かりき。然るをこれに出で逢ひたるベルナルドオは、刻薄なる語氣もて我に耳語していふやう。コルソオの大道にて戯謔能く人の頤おとがひを解きしは誰ぞ。アヌンチヤタが家にて即興の詩を誦そらんじ座客を驚おどろかしは誰ぞ。今は目に懺悔の色を帯び頬に死灰の痕を印して、殊勝なる行者と伍をなせり。汝はいかなる役をも辭せざる名優なるよ。此の如きは我が遂にアント二オに及ばざるところぞといひぬ。吾友の言ふところは實録なりき。されど當時我を傷やぶること此實録より甚しきはあらざりしなり。

精進せいじんの最後週は來ぬ。外國人は多く羅馬に歸り集つどひぬ。ポ、口門よりもジョワン二門よりも、馬車相驅逐して進み入りぬ。水曜日午後にはワチカアノのシクスツス堂にて「ミゼレエレ」(ミゼ

レエレ、メイ、ドミネ、憐を我に垂れよ、主よの句に取りたるに
 て、第五十頌の名なり）の樂あり。われは樂を聽きて悶を遣らん
 がために往きぬ。聽衆は堂の内外に押し掛け居たり。前なる椅こしか
 榻けには貴婦人肩を連ねたり。色絹、天鵝絨びろうどもて飾れる觀棚さじきの彫
 欄うしろの背後には、外國の王者並び坐せり。法皇の護衛なる瑞西隊スイス
 正裝して、その士官は鍪かぶとに唐頭からのかしらを挿はさめり。この裝束は今若き
 貴婦人に會釋せるベルナルドオには殊に好く似合ひたり。

われ裏面より埒らちに近き處に席を占めしに、こゝは歌者の席なる
 斗としゆつ出せる棚に遠からざりき。背後には許多あまたの英吉利人イギリスあり。こ
 の人々は謝肉祭カルナワレの頃假粧けはひして街頭を彷徨さまよひたりしが、こゝにさへ
 假粧して集ひしこそ可笑しけれ。推するにその打扮いでたちは軍隊の號ウ

ニフオルメ

衣ニフオルメに擬したるものならん。されど十歳許ばかりの童までこれを着け

たるはいかにぞや。その華美ならんことを欲することの甚しきを

證せんがために、こゝに一例を擧げんに、其人の上衣は淡碧うすみどり

にして銀絲の縫ひあり、長靴には黄金を鏤ちりばめ、扁圓なる帽には羽

毛連珠を着けたり。英吉利人のかゝる習をなしは、美しき號ウニフ

衣オルメの好き座席を得しむる利益を知りたるためなるべし。我傍よ

りは笑を抑ふる聲洩れたり。されどわがそを可笑しと見しは、唯

だ一瞬間なりき。

カルヂナアレ

老いたる僧官カルヂナアレ達は紫天鵝絨の袍の領えりに貂エルメリノの白き毛革を付け

たるを穿きて、埒きの内に半圈状をなして列び坐せり。僧官達の裾を

捧げ來し僧等は共足元うづくまに蹲りぬ。贄卓にへづくゑの傍ちさなる小き扉は開き

ぬ。そこより出でたるは、白帽を戴き濃赤色の袍を纏まとへる法皇なりき。法皇は交椅に坐したり。侍者等は香爐を揺り動したり。紅衣の若僧の松まつ明取りたるもの數人法皇と贄卓との前に跪ひざまづけり。

讀どくじゆ誦は始まりぬ。(絃歌に先だちて十五章の讀誦あり。壇上

に巨燭十五枝しを燃やしおきて、一章終るごとに一燭を滅す。)われは心を死せる文字の間に潛むること能はず、魂を彼のミケランジエロが世に罕まれなる丹青の力もて此堂の天井と四壁とに現ぜしめたる幻界に馳せたり。その活けるが如き預言者等の形は一個々皆大冊の藝術論の資をなすに餘あるべし。その力量ある容貌風采とこれを圍める美しき羽ある兒ちごの群とは、我眼を引くこと磁石の鐵を引く如くなりき。こは畫にあらず。活ける神人なり。エワこのみが果

を夫に贈りし智慧の木は鬱蒼として彼處かしこに立てり。父なる神は、
 古の畫工の作れる如く羽ある童に擔はれたるにはあらで、その肢
 體の上、その風ひるがへに翻る衣裳の上に、許多あまたの羽ある童を載せつゝ、
 水の上を天あまかけ翔り給ふ。われはけふ始めて此畫を觀たるにあらず。
 されど此畫の我心を動かすこと今日の如きは未だ有らず。われは
 けふの群集のためにや、わが熱したる情のためにや知らねど、此
 畫中に限なき詩趣あるを認めたり。或は想ふにこは我が抒情の興
 多き心を畫中に投じ入れたるにはあらずや。そは兎まれ角まれ、
 此畫に對して此情をなすは、恐らくは獨り我のみならず、こは我
 に先だてる幾多の詩人の亦免れざるところなりしなるべし。

險けはしきを行くこと夷たひらかなる如き筆力、望みみ瞻はうかうる方嚮ほうかうに従ひて無

遠慮なるまで肢體の尺を縮めたる遠近法は、個々の人物をして躍りて壁面を出でしめんとす。昔基督の山上に在りて言語もて説き給ひし法（馬太マタイ五至七）は、今此大匠によりて色彩と形象ともて現されたるなり。吾人はラファエロと共に膝を此大匠の技倆の前に屈せんとす。此數多き預言者は、一つとして同じ人の石もて刻める摩西モセスに劣ることなし。何等の魁くわい偉ゐなる人物ぞ。堂に入るものゝ心目は先づこれがために奪はるゝなり。

吾人はこゝに心目を淨め畢りて、さて頭を擧げて堂の後壁に向ふなり。下は大床より上は天井に至るまで、立錐りつすゐの地を剩あまさゞるこの大密畫は、即ち是れ一顆くわの寶玉にして、堂内の諸畫は悉くこれを填うづめんがために設けし文飾ある枿わくたるに過ぎず。これを世

の季すゑの審判の圖となす。

判官たる基督は雲中に立てり。使徒と聖母とは不便ふびんなる人類のために憐を乞はんとて手をさし伸べたり。死人は墓碣ぼけつを揺り上げて起たたんとす。恵に逢へる精靈は拜みつゝ高く翔かけり、地獄はそのあぎとを開いて犠牲を吞めり。宣告を受けたる同胞の早く毒蛇に巻かれたるを、雲に駕せる靈の援たすけ出さんとするあり。悔い恨める罪人の拳もて我額を撃ちつゝ、地獄の底深く沈み行くあり。天堂と地獄との間には、或は登り或は降る神將力士あまたありて、例の大膽なる遠近法もて寫し出されたり。優しく人を恤めぐみがほなる天使、再會して相悦べる靈ども、金きん笛てきの響に母の懷に俯したる穉を子さなごなど、いづれ自然ならざるなく、看るものは覺えず身を圖中

に眞おきて、審判のことばに耳を傾く。ミケランジエロは蓋し能く
ダンテの歌ひしところを畫けるなり。

恰も好し將まさに没せんとする夕日はそのなごりの光を最高列の窓
より射込みたり。圖の下の端なる死人の起つあたり、艤ふなよそひせる羅刹らせつ
の罪あるものを拉ひき去るあたりは、早や暗黒裡に没せるに、基督
とその周匝めぐりなる天翔あまがける靈とは猶金色に照されたり。日の入ると共
に最後の燭は吹き滅けされて、讀誦は全く果てたり。暗黒は審判の
圖の全面を覆へり。絲聲肉聲は又湧きて、世の季すゑの審判の喜怒哀
樂皆洋々たる音となりつゝ、われ等の頭上を漲り過ぐ。

法皇は式の衣を脱ぎて、贊にへづくゑ卓の前に立ち、十字架を拜せり。
金笛の響凄じく、「ポプルス、メウス、クキツト、フエチイ、チ

「ビイ」の歌は起りぬ。低階の調に雜まじる軟やはらかなる天使の聲は、男の胸よりも出でず、女の胸よりも出でず、こは天上より來れるなり。

こは天使の涙の解けて旋律に入りたるなり。

われはこれを聽きて、力よみがへづき甦り、この頃になき歡喜は胸に滿

ちたり。われはアヌンチヤタを愛し、ベルナルドオを愛せり。この瞬時の愛はかの天上の靈の相愛するに殊ことならざるべし。祈祷の我に與へざりし安慰は、今音樂にて我に授けられたるなり。

友誼と愛情と

式終りてベルナルドオが許を訪ひぬ。手を握り襟えりを披ひらきて語る

に、高興は能辯の母なるを知りぬ。けふ聞きつるアレエグリー

(寺樂の作者)が曲、我が夢物語めきたる生涯、我と主人との友

誼は我に十分なる談資を與へたり。けふの樂はいかに我憂を拂ひ

し。未だ聽かざりし時の我疑懼ぎく、鬱悶、苦惱は幾いくばく何なりし。わ

れは此等の事を殘なく物語りしが、唯だこれが因縁をなしゝものゝ

主に我友なりしか、又はアヌンチヤタなりしかをば論じ究めざり

き。我が今友に對して展のべ開くことを敢てせざる心の鬩ひだはこれ一

つのみなりき。友は打ち笑ひて、さてく面倒なる男かな、カム

パニアの羊かひの頃よりボルゲエゼの館に招かるゝまで、女子の

手して育てられしさへあるに、「ジエスキタ」派の學校に在りし

なれば、斯くむづかしき性質にはなりしならん、せつかく切角の伊太利

の熱血には山羊の乳を雜まぜられたり、「ラ、トラツプ」派の僧侶
めきたる制欲は身を病ましめたり、馴れたる小鳥一羽ありて、美
しき聲もて汝を喚よび、夢幻境を出で現實界に入らしめざるこそ憾うらみ
なれ、汝が心身の全く癒いえんは人なみになりたる上の事ぞといひ
ぬ。われ。我等二人の性は懸隔すること餘りに甚し。然るを我は
怪しきまで汝を愛せり。折々は共に棲まばやとさへ思ふことあり。
友。そは啻たゞに我等を温めざるのみならず、却りて何時ともなくこ
の交を絶つべし。友誼と戀情とは別離によりて長ず。我は時に夫
婦の生活のいかに我を倦うましむべきかを思へり。斷えず相見て互
に心の底まで知りあはむ程興なき事はあらざるべし。さればおほ
かたの夫婦は幾いくばくもあらぬに厭あき果つれども、名みやうもん聞はを憚はると人

よきとにて、其縁えにしの絲は猶繋がれたるなり。我は思ふに、我情いかに一女子のために燃えんも、その女子の情いかに我に過ぎたらんも、そのほのほの相合ふ時は即ち相滅する時ならん。愛とは得んと欲する心なり。得んと欲する心は既に得て止むべし。われ。若し汝が妻アヌンチャタの如く美しく又賢からむには奈何いかん。友。其薔薇花の美しき間は、わが愛づべきこと慥なり。されど色香一たび失せたらむ日には、われは我心のいかなり行くべきを知らず。汝はわが今何事を思ひしかを知るや。この念は忽ち生じ忽ち滅すれど、今始て生ぜるにはあらず。われは汝の血のいかに赤きかを見んと願ふことあらむも計られず。されどわれには智あり。汝は我友なり。わが潔白なる友なり。縦令よしやわれ等二人同じ女に懸想けさうす

ることあらんも、相鬪ふには至らざるべし。斯く言ひつゝ友は聲高く笑ひ、我首を抱きて戯れながらにいふやう。我に馴れたる小鳥ありて、その情はいと濃こまやかなれど、この頃は些すこし濃かなるに過ぎて厭はしくなりぬ。思ふに汝には氣に入るべし。こよひ我と共に來よ。親友の間には隠すべきことなし。面白く一夜を遊び明さむ。さて日曜日になれば、法皇は我等が罪を洗ひ淨め給ふべきぞ。われ。否、我は共に往かざるべし。友。そは卑怯なり。汝は汝の血を傾け盡して、只だ山羊の乳のみを留めんとするか。汝が目は我目に等しく耀かゞやくことあり。われは嘗てこれを見き。汝が鬱悶、汝が苦惱、汝が懺悔ざんげ、是れ畢竟何物ぞ。われあからさまに言ふべきか。是れ得んと欲して得ざるところあるなり。その得ざるとこ

ろのものは、赤き唇なり、軟なる膚なり。汝が假面の被りかぶぎつたま拙
 ければ、われは明白に看破せり。いざ往いてその得んと欲する所
 のものを得よ。汝否といはゞ、それは卑怯なり、臆病なり。われ。
 止めよ。それは餘りなる詞なり。それは我を辱むはづかしる詞なり。友。され
 ど汝はその辱を甘んじ受けざるはづかしめこと能はざるべし。これを聞きし
 とき、我血は上りて頭を衝つきしが、我涙も亦湧きて目に溢れたり。
 いかなれば汝はかくまでに無情なる。我は汝を愛し汝は我を弄ぜ
 んとす。アヌンチャタと汝との間にわれ立てりと思へるにはあら
 ずや。アヌンチャタの我を視ること汝より厚しとおもへるにはあ
 らずや。友。否、決して然らず。わが空想家ならずして思おもひ遣やり
 少きは汝も知りたらん。されど女の事をば姑しほくらく置け。唯だ心得が

たきは、汝がいつも愛々といふことなり。我等二人は手を握りて友となりたり。その外には何も無し。我は汝と共にくわちやう 夸張する
 こと能はず。我をばたゞ此儘にてあらせよ。對話はおほよそ此の
 如くなりき。ベルナルドどくやオが毒箭は痛く我胸を傷けしが、別に臨
 みて我に握らせたる手は、遂にわれ等が交情を滅するに至らずし
 て止みぬ。

をさなき昔

翌日は木曜の祭日なりき。鐘の音は我を聖サンピエトロの寺に誘ひ
 ぬ。嘗て外國人とつくにびとありて此寺の堂奥はこゝに盡きたりとおもひぬ

といふ、いと廣き前廳まへにはに、人あまた群むれたるさま、大路おほぢの上又
 天使橋の上に殊ならず。羅馬の民はけふ悉くこゝに集へるなり。
 されば彼外國人ならぬものも、おなじ迷を起すべう思はる。何故
 といふに、人愈おほ衆おほくして廳は愈ひろ闊ひろしと見ゆればなり。

歌は頭の上に起りぬ。伶人の群をば棚の二箇處に居らせて、其
 聲相應ずるやうにせり。群衆は洗足の禮の今始まるを見んとて押
 し合へり。(此日法皇老若の僧徒十三人の足を洗たまはひ、僧徒は法皇
 の手に接吻して、おのゝ「マチオラ」の花束を賜たまはり退くことな
 り。)偶 《たま〜》貴婦人席より我に目禮するものあり。誰
 ぞと視ればアヌンチヤタなりき。彼君は歸りぬ。彼君は此堂にあ
 り。我胸はいたく騒げり。その席幸に遠からねば、我等は詞を交

すことを得たり。姫は昨日歸りしかど、樂ははや果てし後にて、
 僅に「アエ、マリア」の時此寺には來ぬとなり。

姫。此寺の光景はきのふ暗くて見しかた、けふのめでたきにも
 増してめでたかりき。聖ピエト口の墓の前なる一燈の外には何の
 光もなく、その光さへ最近き柱を照すに及ばざる程なるに、人々
 跪ひざまづきていの禱れば、われも亦跪ひざまづきぬ。緘かん默もくの裡うちに無量の深祕あるを
 ば、その時にこそ悟り侍りしかといふ。側にありし例の猶太婦人ユダヤ
 は、長き紗もて面を覆ひたれば、今までそれと知らざりしに、優
 しく我に會釋しつ。式は早や終りぬれば、姫はおのれを車に導く
 べき従者や來ると顧みたれど、その影だに見えず。若き人々の姫
 を認めて耳語ささやき合ふもあれば、姫は早くこの堂を出でんとおもへ

る如し。われは車に導かんことを請ひしに、猶太婦人は直ちに手
 を我肘に懸け、姫は我と並びて行けり。我は姫に我肘に倚らんこ
 とを勧むる膽なかりき。されど表口の戸に近づきて、人の籠み合
 ふこと甚しかりしとき、姫は手を我肘に懸けたり。我脈には火の
 循り行くを覺えき。車をば直ちに見出だしつ。わが暇を告げんと
 せしとき、姫今は精進の時なれば何もあらねど、夕餉參らすべ
 れば來まさずやと案内したるに、媼は快手くおのれが座の向ひな
 る榻に外套、肩掛などあるを片付け、こゝに場所あり、いざ乗り
 給へと、我手を把りぬ。共に車に載せんといひしならぬを、媼の
 耳疎くしてかく聞き誤りたるなれば、姫ははしたなくや思ひけん、
 顔さと赧めたり。されど我は思慮する違もあらで乗り遷り、御

者やも亦早く車を驅りぬ。

膳は豊なるにはあらねど、一として王侯の口に上のぼすとも好かるべき贅澤品ならぬはなし。姫はフイレンチエにての事細かに語りて、さて精進日の羅馬はいかなりしと問ひぬ。こは我がためにはあからさまに答ふべくもあらぬ問なりき。

われ。土曜日には猶太教徒の洗禮あるべし。君も往きて觀給ふべきか。此詞は料はからず我口より出でしが、われは忽ち彼媼の側にあるを思ひ出だして、氣遣はしげにかなたを見き。姫。否、心に掛け給ふな。御身の詞は聞えざりき。されど聞ゆとも悪しく聞くべうもあらず。唯だ彼人の往かんは妥おだやかならねば、我もえ往かざるべし。そが上コンスタンチヌスの寺なる彼儀式は固より餘り愛めで

たからぬ事なり。(この儀式は歳ごとに基督再生祭に先だつこと
 一日にして行へり。猶太教徒若くは回々ファイファイ教徒數人すにんをして加特カトリコ
 力オ教に歸依きえせしめ、洗禮を行ふなり。羅馬年中行事に「シイ、
 アフ、イル、バツテシイモ、ヂイ、エブレイ、エ、ツルキイ」と
 記せり。)僧侶は異教の人の歸依せるをもて正法の功力くりきの所爲と
 なし、看る人に誇れども、その異教の人のまことに心より宗旨を
 改むるは稀なり。われもをさなき時一たび往きて觀しことあり。
 その折の厭ふべき摸様は今に至るまで忘れず。拉ひき來りしは六
 つ七つばかりの猶太人の童なりき。櫛の痕なき頭髮の蓬々たるに、
 寺の贈なる麗しき素絹の上衣を纏へり。靴くつしたと鞮くつしたとは汚れ裂けたる
 まゝなり。後に跟つきて來たるは同じさまに汚れたる衣着たる父母

なりき。この父母はおのれ等の信ぜざる後世ごせのために、その一人の童を賣りしなるべし。われ。君はをさなき時この羅馬にありてそを見きとのたまふか。姫。然なり。されど我は羅馬のものにはあらず。われ。我は始て君が歌を聴きしとき、直ちに君のむかし識りたる人なることを想ひき。それを何故とも言ひ難けれど、この念は今も猶失うすることなし。若しわれ等輪りんね 應報の教を信ぜば、われも君も前生は小鳥にて、おなじ梢に飛びかひぬともいひつべし。君にはさる記念なしや。何處にてか我を見しことありとはおぼさずや。姫は我と目を見あはせて、絶てさる事なしと答へき。われ詞を繼ぎて。初めわれ君は穉きときより西班牙スパニアに居給ひぬと思ひしに、今のおん詞にては羅馬にも居ましゝなり。我惑はいよ

く深くなりぬ。君既にをさなくして此都に居給ひきといへば、
 若しこの稚き子等と共に、「アラチエリ」の寺にて説教のまね
 し給ひしことあらずや。姫。ありく。まことにさやうなる事侍はべ
 りき。さてはかの折人々の目に留まりし童はアントニオ、おん身
 なりしか。われ。いかにも初め目に留まりしは我なりき。されど
 勝をば君に譲りしなり。姫はげに思ひも掛けぬ事かなと、我兩手
 を把りて我面を見るに、媼さへその氣色けしきの常ならぬを訝りて、椅
 子をいざらせ、我等が方をうちまもりぬ。姫は珍らしき再會の顛も
 末とすゑを媼に説き聞きかせつ。われ。我母もその外の人々も暫くは君が
 上をのみ物語りぬ。その姿のやさしさ、その聲の軟さをば、釋き
 我心にさへ妬ねたましきやうに覺えき。姫。その時君は金かねの控鈕ボタン付き

たる短き上衣を着たまひしこと今も忘れず。その衣をめづらしと
 見しゆゑ、久しく記憶に残れるなるべし。我。君は又胸の上に美
 しき赤き鈕ひもを垂れ給ひぬ。されど最も我目に留まりしはそれには
 あらず。君が目、君が黒髪なりき。人となり給へる今も、その倂おもかげ
 は明に残れり。始て君がチドチドに扮し給へるを見しとき、われは直
 ちにこの事をベルナルドオに語りぬ。さるをベルナルドオはそを
 我迷ぞといひ消して、却りておのれが早く君を見きと覺ゆる由を
 語りぬ。姫、そは又いかにしてと問ひしが、その聲うち顫ふ如く
 なりき。われ。ベルナルドオが君を見きといふは、いたく變りた
 る境界なり。悪しくな聞き給ひそ。ベルナルドオも後に誤れるこ
 とを覺りぬ。君が髪の色濃きなど、人にしか思はるゝ端となりし

なるべし。君は、君はわが加特力教の民にあらず、されば「アラ
チエリ」の寺にて説教のまねし給ふ筈なしとの事なりき。姫は媼
の方を指ぎして、さては我友とおなじ教の民ぞといひしなるべし
といふ。われは直にその手を取りて、わが詞のなめしきを咎め給
ふなど謝したり。姫微笑みて、君が友の我を猶太少女とおもひき
とて、われ争い、かででか心に掛くべき、君は可笑しき人かなといひぬ。
この話は我等の交を一と際深くしたるやうなりき。わが日頃の憂
さは悉く散じたり。さてわが再び見じとの決心は、生憎あやにくにまた
悉く消え失せたり。

姫はふと基督再生祭前のこの頃閉館中なる羅馬の畫廊の事を思
ひ出で、かゝる時好き傳つてを得て往き看みば、いと面白かるべしと

いふに、姫の願としいへば何事をも協へんとおもふわれ、幸にポ
 ルゲエゼの館の管守、門番など皆識りたれば、そは容易たやすき事なり
 とて、あくる朝姫と媼とを伴ひ往かんことを約しつ。かの館は羅
 馬の畫廊のうちにて最も備れる一つなり。フランチエスカの君の
 穉をさなき我を伴ひ行き給ひしはかしこなれば、アルバニが畫の羽ある
 童は皆わが年ごろの相識なり。

靜なる我室に歸りて、つらく物を思ふに、ベルナルドオはま
 ことに彼君を戀ふるに非ず。卑しき色慾を知りて、高き愛情を解
 せざる男の心と、深けれども能く澹泊たんぱくに、大いなれども能く抑よ
 遜くそんせる我心とは、日と同じくして語るべからず。さきの日の物
 語の憎かりしことよ。彼はたゞ驕けうまん慢なり。彼はたゞ放縱なり。

かくて飽くまで我を傷けたり。そはアヌンチャタの我に優しきを
 妬ねたみてなるべし。初め我を紹介せしは、いかにも彼男なりき。さ
 れど今その心を推すすれば、好意とはおもはれず。おのが風采態度
 のすぐれたるを彼君に見するとき、その側に世馴れぬ我を居らせ
 て反映せしめんためにはあらずや。さるを我歌我詩は端はしなく彼君
 の心になほひぬ。妬の心はこれより萌きせるならん。さて我を又姫
 に逢はせじとて、かくは我を脅しゝなるべし。幸にわれ好き機會
 を得て、今は姫との交いと深くなりぬ。姫は我を憐あはれり。加しかのみ
 之ならず姫は我戀を知りたり。かく思ひつゞけつゝ、我は枕に接吻
 せり。さるにても口惜しきは、わが意氣地なき性質なり。いかな
 れば我は先の日直ちに彼の無禮を責めざりしぞ。かの詞にはかく

答ふべかりしなり。かの辱はづかしめをばかく雪そぐべかりしなり。我血は湧き上りたり。無上の快樂に無比の慙恨打ち雜りて、我は睡ること能はざりしが、曉近くおもひの外おだやかに妥あらかじなる夢を結びぬ。

翌朝は夙はやく起き、管守を訪ひて預あらかじめことわりおき、さて姫と媪とを急がせつゝ共にボルゲエゼの館に往きぬ。

畫廊

畫廊はわが穉かりしとき、惠深き貴婦人の我を伴ひ往きて、おろかなる問、いまだしき感の我口より出で我言に發するごとに、面白しとて嬉たのしみ笑ひ給ひしところにして、又わが獨り入りて遊び

暮らしゝところなれば、今アヌンチャタを導き往くことゝなりたる我胸には、言ひ知らず怪しき情漲り起れり。既に入りて畫を看れば、幅ふくごとに舊知なるごとく思はる。されど姫は却りてこれを知ることを我より深かりき。姫は生れながらの官能に養ひ得たる鑿か識しきをさへ具へたれば、その妙處として指し示すところは悉く我を服せしめ、我にその神會しんゑの尋常に非ざるを歎ぜしめたり。

姫はジエラルドオ・テル・ノツチイの名ある作なる口オト（ソドムに住みしハランの子）とその女兒との圖の前に立てり。われはをゝしき父の面、これに酒を勸むる樂しげなる少女の姿、暗く繁りあひたる木立のあなたに見ゆる夕映の空などめでたしと稱へしに、姫我ことばを遮さへぎりて、げにゝ奇なる才激せる情もて畫け

るものと覺し、作者の筆の傳ふしよく色表情の一面は寔まことに貴むべし、さ
 るを此の如き題（ロオトは其女子と通じたり）を選みしこそ心得
 られね、畫にも禮儀あり、品性あらんは我がつねに望む所なり、
コルレジヨオがダナエなども、己れは人の愛めづらんやうには愛で
 ず、少女（ダナエを謂ふ、希臘諸神の祖なるチエウス黄金の雨と
 なりてま邁まき給ひ、ペルセウスを生ませ給ふ）の貌はいかにも美し
 く、臥床ふしどの上にて黄金搔かき集むる羽ある童の形もいと神々しけれ
 ど、その事餘りにみだりがはしくして、興おこさむる心地す、ラファ
エロの大なるはこゝにあり、わが知れる限は、その採るところの
 題、毎つねに高雅にして些いさの穢かけれだになし、かくてこそめでたき聖母
 の面影をば傳ふべかりしなれといふ。われ。仰せは理あるに似た

れども、畫の妙は題の穢を忘れしむることあるべし。姫。そはきはめて有るべからざる事なり。藝術はその枝その葉の末までも、清淨醇じゆんぱく白なるべきものにて、理想の高潔は人を動かすこと形式の美麗に倍す。古の作者の手に成りし聖母の像を視るに、すべて硬く鋭くして、支那人の畫もかくやとおもはるれども、我はこれに打ち向ふごとに、必ず心の底に徹する如き念をなせり。この高潔といふものは、その作畫者のために缺くべからざること、度ときよくしや曲者に於けると同じ。名作中こゝかしこに稍過ぎたりと見ゆる節あるをば、その作者の一時の出來心と看做みなして、恕ゆるすこともあるべけれど、その疵瑕しかは遂に疵瑕たることを免るべからず。わがまことに愛づるは無瑕の美玉にこそ。われ。さらば君は變化を

命題の間に求めんことをば是とし給はずや。いかなる大家きよしや鉅匠う

匠うにても、幅ぶごとに題を同うせば人の厭倦を招くなるべし。姫。

否々、そは我が言はんと欲せしところにあらず。わが本意は畫工

に聖母のみ畫かせんとはあらず。めでたき山水も好し。賑はし

き風俗畫、颶風ぐふうに抗あらがふ舟の圖も好し。サルワトオレ・ロオザが山

賊の圖もいかでか好からざらん。われは唯だ藝術の境に背徳を容

れじとこそ云へ。わが趣味より視れば、かの「シヤリア」宮なる

シドオニイの畫の如きすら、その巧緻をわいその汚穢おほを掩ふに足らず。

君は猶彼圖を記し給ふや。うさぎこつまの驢に騎りたる農夫二人石垣の下を過ぐ。

垣の上に髑髏どくろありて、一※の「ひオリノ」弾きの隣に懸けられた

るを、われも記憶す。姫。さなり。そのラフアエロが落らくくわん欵の

見苦しき彼圖の上邊にあるこそ憾うらみなれ。

既にしてわれ等はフランチエスコ・アルバニイが四季の圖の前に來ぬ。われは昔穉かりし日にこゝに遊び、この圖の中なる羽ある童を見て感ぜし時の事を語りぬ。姫は君が穉くて樂しき日を送り給ひしこそ羨ましけれといひて、憂をかくすやうなるさまなり。昔の身の上にや思ひ比べけんと、あはれに覺ゆ。われ。君とても樂しき日少なからざりしならん。わが初めて相見しときは、君は幸ありげなるをさな子なりき、人々に感めでくつがへ覆つがへられたるをさな子なりき。わが再び相逢ふ日は、羅馬全都の君がために狂するを見る。餘所目よそめには君、まことに樂しく見え給へり。さるを心には樂しとおもひ給はずや。かく問ひつゝ、我は頭を傾けて姫の面を俯ふ

し視たるに、姫はそのそこひ知られぬ目^まなざしもて打ち仰ぎ、そのめでくつがへられたるをさな子は、父もなく母もなきあはれなる身となりぬ、譬へば木葉落ち盡したる梢にとまる小鳥の如し、それを籠^この内に養ひしは世の人にいやしまれ疎^{うと}まるゝ猶太教徒なり、その翼を張りておそろしき荒海の上に飛び出でたるはかの猶太教徒の恵なりといひかけて、忽ち頭を掉^ふり動かし、あな無益^{むやく}なる詞にもあるかな、由縁^{ゆかり}なき人のをかしと聞き給ふべき筋の事にはあらぬをといふ。由縁なき人とはわれかと、姫の手首とりてさゝやくに、暫しあらぬ方打ち目守^{まも}りてありしが、その面には憂の影消え去りて、微笑の波起りぬ。否々、われも樂しかりし日なきにあらず、その樂しかりし日をのみ憶ひてあるべきに、君が昔話を聞

きて、端なくもわが心の裡に彫ゑられたる圖を繰りひろげつゝ、身のめぐりなるめでたき畫どもを忘れたりとて、姫は我に先だちて歩を移しき。

わがアヌンチャタと老媪おうなとを伴ひて旅館にかへりしとき、門守る男はベルナルドオが留守におとづれしことを告げたり。我友はこの男の口より二婦人を連れ出だしゝものゝ我なるを聞けりといふ。友の怒は想ふに堪へたり。かゝる事あるごとに、我は前さきの日には必ず氣遣ひ憂ふる習なりしが、アヌンチャタに對する戀は我に彼友に抗する心を生ぜしめき。さきには友我を性格なし、意志なしと罵りき。今はわれ友に見しめすに我性格と我意志とをもてすべしとおもひぬ。

姫が猶太教徒の籠の内に養はれきといふ詞は、絶えず我耳の根
 にあり。依りておもふに、友がハノホの許にて見きといふ少女は
 アヌンチヤタなりしならん。されど又姫にそれを問ふ機會あるべき
 か、心こころもと許なし。

あくる日往きしときは、姫は一間にありて某それの役を浚さらひ居たり。
 われはおうなに物言ひこゝろみしに、この人はおもひしよりも耳
 疎かりき。されどそのさま我が詞を交ふるを喜べる如し。われは
 前さきの日即興の詩を歌ひしとき、この人の嬉たのしみ聽けるさまなりしを
 おもひ出で、その故をたづねしに、あやしとおもひ給ひしも理ことわ
 りなり、君の面を見、君の詞の端々を聞きて、おほよそに解げした
 るなり、さてその解したるところはいとめでたかりき、平生アヌ

ンチヤタが歌うたふを聴くときも亦同じ、耳の遠くなりゆくまゝに、目もて人の聲を聞くすべをば、やうく養ひ成せりといふ。

媼はベルナルドオが上を問ひ、そのきのふ留守の間におとづれて、共に畫廊に往くこと能はざりしを惜みき。われ媼がベルナルドオを喜べるゆゑを問ふに、かの人の心ざまには優れたるふしあり、われその證を見しことあればよく知りたり、猶太の徒も基督の徒も、神の目より視ば同じかるべければ、彼人の行末を護り給ふならんといふ。やうやくにして媼はことば多くなりぬ。その姫を愛でいつくしむ情はいと深しと見えたり。物語のはし／＼より推するに、姫が過ぎ來し方のおほかたは明かになりぬ。姫は西班牙スパニアに生れき。父も母も彼國の人なり。釋くて羅馬に來つるに、ふた

親はやく身まかりて、頼るべき方もなし。猶太の翁ハノホは西班牙に旅せしころ、彼親達を識りつれば、孤兒を引き取りて養へりしに、故郷なる某それの貴婦人あはれがりて迎へ歸り、音樂の師に就きて學ばしめき。その頃某の貴公子この若草手に摘まばやとてさま／＼のてだてを盡しゝに、姫の餘りにつれなかりしかば、公子その恨にえたへで、果はおそろしき計はかりごとをさへ運めぐらしつ。その始末をば媪深く祕めかくす様なれど、姫の命も危あやふかるべき程の事なりきとぞ。姫は彼公子に索たづね出されじとて、再び羅馬に逃れ來たり。かくて昔のやしなひ親にたよりて、人目少き猶太廓ゲットオに潛み居たるは、一年半ばかり前の事といへば、ベルナルドオが逢ひしは此時なり。幾いくばくもなくして彼公子身まかりぬ。姫はこれより一身を

ミネルワの神（藝術の神）に捧げまつりて、その始て桂冠を戴きしはナポリにての催しなりき。媼はその頃より姫のほとりを離れずといふ。語り畢りて媼は、姫の才あり智ありて、敬神の心いよく深きを稱ふること頻りなりき。

旅館を出でしは祝射の眞盛なりき。玄關よりも窓よりも、

小銃拳銃などの空射をなせり。こは精進日の終を告ぐるなり。寺々の壁畫を覆へる黒布をば、此聲と、もに截りて落すなり。鬱陶しき時はけふ去りて、蘇生祭のうれしき月はあすよりぞ來るなる。その嬉しきはアヌンチャタと媼とを祭見に誘ひ得たるにて、又一層を加へたり。

蘇生祭

祭の鐘は鳴りわたれり。僧カルヂナアレ官レを載せたる彩車は聖サンピエトロの寺に向ひて奔はしりゆく。車の後なる踏板には、式の服着たる僮僕しもべあまた立てり。外國人の車馬、ところの子女の裙履くんげきに、狭き巷の往來はむづかしき程になりぬ。神使の丘の巔いたゞきには、法皇の徽章、マドンナ聖母の肖像を染めたる旗閃き動けり。ピエトロの辻には樂人の群あり。道の傍には露ほしみせ肆をしつらひて、もろ手さし伸べたる法皇授福の木板畫、念珠などを賣りたり。噴水の銀線は日にかゞやけり。柱せりもち弓の下には榻たふあまた置きたるに、家の人も賓客も居ならびたり。群衆は忽ち寺門より漲みなぎり出でたり。供養の儀式聲樂を

見聞き、たくちゆう磔柱てつていの鐵釘、長鎗などありがたき寶物を拜み得しなるべし。廣き十字街は人の頭の波打ちて、車は相倚りて隙間なき列をなせり。さうふ僧父少童には石像だいいしの趺よに攀よぢ上れるあり。全羅馬なりはひの生活の脈は今此辻に搏動するかと思はる。既にして法皇の行列寺門を出づ。藍色の衣を纏へる僧六人に昇かかせたる、華美なる手輿てごしに乗りたるは法皇なり。若僧二人大なる孔くしやく雀の羽もて作りたる長柄の翳えいを取りて後に隨ひ、香爐揺り動かす童子は前に列びてぞゆく。輿に引き添ひて歩めるは

カルチナアレ

僧官カルチナアレ達なり。行列の門を出づるや、樂隊は一齊に聲を揚ぐ。

輿を大理石階の上に昇き上げて、法皇の姿廊の上に見ゆるを相圖として、廣き辻なる老若の群集ひぎまづは跪けり。隊伍をなせる兵士もこ

れに倣^{なら}へり。こゝかしこに立てる人の残りしは、新教を奉ずる外國人なるべし。アヌンチヤタは停めたる車の内に跪きて、その美しき目を法皇の面に注げり。われは見るべからざる法雨のこの群の上に降り灑^そぐを覺えき。廊の上より紙二ひら翩^{ひるがへ}り落つ。一は罪障消滅の符、一は怨敵調伏の符なり。衆人はその片端を得んとてひしめきあへり。鐘の音再び響き、奏樂又起りぬ。われ等の乗れる車の此辻を離るゝとき、ベルナルドオが馬、側を過ぎたり。馬上の友はアヌンチヤタと媪^{おや}とに禮して、我をば顧みざりき。姫は君が友の色の蒼さよ、病めるにあらずやとさゝやきぬ。われはたゞさることはあらざるべしと答へしが、我心は明に友の面色土の如くなりし所以^{ゆゑん}を知りたり。而してわれは我決心の期^ご到れるを覺え

き。

わが姫を慕ふ情は甚だ深し。姫にしてわれを棄てずば、我は一生を此戀に委ぬとも可なり。われは嘗て我才の戲場に宜くして、
 我^{のんど}吭の喝采を博するに足るを驗^{ため}し得たれば、一たび意を決して俳
 優の群に投ぜば、多少の發展を見んこと難^{かた}からざるべし。ベルナ
 ルド才畢竟何^{なに}爲^{するもの}者ぞ。その年ごろ姫に近づかんとする心にして、
 公正なる情ならば、われ決してこれが妨碍^{ばうげ}をなさじ。友と我との
 間に擇^{えら}ばんは、一にアヌンチャタが寸心に存ず。姫我を取らば友
 去れかし。友を取らば我退^ひかん。この日われは机に對^{むか}ひて書を裁
 し、これをベルナルド才が許に寄せたり。筆を落すに臨みて舊情
 を喚び起せば、不覺の涙紙上に迸りぬ。發送せし後は心や、安き

に似たれど、或は姫を失はんをりの苦痛を想ひ遣りて、プロメテ
 ウスの驚の嘴くちばしに刺さるゝ如き念おもひをなし、或は姫に許されて戲場を
 雙棲のところとなさん日の樂奈何いかなるべきと思ひ浮べて、獨り微
 笑を催すなど、ほとほど心亂れたる人に殊ならざりき。

燈籠、わが生涯の一轉機

夕の勤ごんぎやう行の鐘響く頃、姫と媼とを伴ひて御寺みでらの燈籠見に往
 きぬ。聖ピエトロの伽藍がらんには中央なる大穹窿、左右の小穹窿、正
 面の簷端のきば、悉く透き徹とほりたる紙もて製したる燈籠を懸け連ねたる
 が、その排置いと巧なれば、此莊嚴なる大廈は火の輪廓もて青

空に畫き出されたるものゝ如くなり。人の群れ集つどへること、晝の
 祭の時には増されるにや、車をば並なみあし足あしにのみ曳かせて、僅に進
 む事を得たり。神使の橋の上より、御寺の全景を眺むるに、燈の
 光は黄なるテエエエル河の波を射て、遊たのしび嬉しむ人の限を載せたる無
 數の舟を照し、爰こゝに又一段の壯觀をなせり。樂の聲、人の歡び呼
 ぶ聲の満ちわたれるピエト口の廣ひろこうぢに來りし時、火を換ふる
 相圖あひづ傳へられぬ。御寺みでらの屋根々々に分ち上したる數百の人は、一
 齊に鐵盤中なる松脂環やにのわかざり飾しに火を點ず。小き燈のかずく、忽ち大
 火と化したる如く、この時聖サンピエト口の寺は羅馬の大都を照す
 こと、いにしへベトレヘムの搖籃の上に照りし星にもたとへつべ
 きさまなり。(原註。寺院もそのめぐりなる家屋も、皆石もて築

き立てたるものなれば、この盤中の火は松脂の盡くるまで燃ゆれども、火^{くわく}虞あるべきやうなし。群衆の歡び呼ぶ聲はいよく盛になりぬ。アヌンチヤタこの活劇を眺めたるが、遽^{にはか}に我に向ひていふやう。かの大穹窿の上なる十字架に火皿を結び付くる役こそおそろしけれ。おもひ遣るに身の毛いよ^た豎つ心地す。われ。げに埃^{エデプト}及の尖塔にも劣らぬ高さなり。かしこに攀^よぢしむるには^{きも}膽だましひ世の常ならぬ役夫を選むことにて、預^{あらかじ}め法皇の手より膏油の禮を受くと聞けり。姫。さてはひと時の美觀のために、人の命をさへ賭^とするなりしか。われ。これも神徳をかゞやかさんとての業なり。世には卑しき限の事に性命を危くする人さへ少からず。かく語るうち、車の列は動きはじめたり。人々はモンテ、ピンチ

ヨオの頂にゆきて、遙かにかゞやく御寺と其光を浴あむる市とを見んとす。われ重ねて。御寺に光を放たせて、都の上に照りわたらしむるは、いとめでたき意匠にて、コルレジヨオが不死の夜の傑作も、これよりや落想しつるとおもはる。姫。さし出でがましければ、そのおん説は時代たがへり。彼圖は御寺に先だちて成りたり。作者は空くうに憑よりて想ひ得しなるべく、又まことに空に憑りて想ひ得たりとせんかた、藍らんぼん本ありとせんよりめでたからん。モンテ、ピンチヨオは餘りに雜ざつたふすべければ、やゝ遠きモンテ、マリヨへ往かばや。こゝより市門まではいと近ければといふ。われは馭者に命じて、柱廊の背後を　らしめ、幾ほどもなく市外に出でたり。丘の半腹なる酒店の前に車を停めて見るに、穹窿の火の美し

さ、前に見つるとはまた趣を殊にして、正面の簷のきこそは隠れたれ、星を聯つらねたる火輪の光の海に漂たぐよへるかとおもはる。この景色は四あ邊たりのいと暗くして、大空なるまことの星の白かねの色をなして、高く隔たりたる處に散布せるによりて、いよくその美觀を添へ、人をして自然の大なるすら羅馬の蘇生祭には歩を譲りたるを感じしむ。鐘の響、樂の聲はこゝまでも聞えたり。

われは車を下りて、些の稍事せうじを買はゞやと酒店の中に入りぬ。店の前には狭き廊ありて、小龕せうがんに聖母を崇いっきまつり、さゝやかなる燈を懸けたり。わが店を出でんとて彼龕の前に來ぬるとき、忽ちベルナルドオが吾前に立ち塞がりたるを見き。その面の色は、むかし「ジエスキタ」派の學校のこゝろみの日に、桂冠を受け戴

きしをりに殊ならず。眼は熱を病める如くかゞやけり。物狂ほし
 く力を籠めて我臂を握り、あやしく抑へ鎮めたる聲して、アント
 二オ、われは卑しき兇行者たらんを嫌へり、然らずば直ちに此劍
 もて汝が偽多き胸を刺すならん、汝は臆病ものなれば辭まむも知
 れねど、われは強ひて潔き決闘を汝に求む、共に來れといふ。わ
 れは把られたる臂を引き放さんとすまひつゝ、ベルナルドオ、物
 にや狂へると問ふに、友は焦燥つ聲を抑へて、叫ばんとならば叫
 べ、男らしく立ち向ふ心なくば、人をも呼べ、この兩腕の縛らるゝ
 迄には、汝が息の根とめでは置かじ、兵はこゝにあり、我に恥あ
 る殺人罪を犯させじとおもはゞ疾く來れといひつゝ、拳銃一つ我
 手にわたし、われを廊の外に拉き行かんとす。われは遞與された

る拳銃を持ちながら、猶身を脱せんとして争へり。友。彼君は淺はかにも汝に靡なびきしならん。汝は誇らしくも、それを我に、それを羅馬の民に示さんとす。われを出し抜きしは猶忍ぶべし。いかなれば我に弔辭くやみめきたる書を贈りて、重ねて我を辱めたる。われ。ベルナルドオ、そは皆病める人の詞なり。先づその手を弛ゆるめずや。われは力を極めて友の體を撥ね退けたり。

その時われは銃聲の耳邊に轟くを聞きたり。我右臂には衝動を感じたり。烟は廊わたどのみち道に満ちたり。われは又叫ぶに似て叫ぶにあらざる一種の氣息を聞きたり。この氣息の響は我耳を襲ふよりは寧ろ我心を襲ひき。發したるは我手中の銃にして、黒く數石を染めたる血に塗まみれて我前に横れるは我友なり。われは喪心者の如

く凝立して、拘攣こうれんせる五指の間にかた牢く拳銃を攫つかみたり。

わが此不慮此不幸の全範圍を感ぜしは、酒店の人の罵りさわ噪ぎつゝ
 走り寄りアヌンチャタと媪との我前に來るを見し時なりき。わが
 ベルナルドオと叫びて、その軀からだに抱き付かんとするに先だちて、
 姫は早くもその傍に跪き、鮮血湧き出づる創口を押へたり。姫は
 かく我友をいたはりつゝ、血の色全く失うせたる面を擧げて、我を
 凝視せり。媪は我臂を揺り動かして、疾とく此場をと呼べり。

われは胸裂くるが如き苦痛を覺えき。われは叫び出せり。思ひ
 掛けぬ怪我なり。殺さんと欲せしは他かれなり。銃は他の我にわたしゝ
 なり。われは身を脱せんとして撥はつてう條に觸れたり。アヌンチャタ
 聞き給へ。我等二人は命に懸けて君を慕ひしなり。君がために血

を流さんことは、われも厭はざるべきこと、我友と同じ。われはおん身が一言を聞きて去らん。おん身は我友を愛し給ひしか、我を愛し給ひしか。

友の介抱に餘念なき姫は、詞のあやもしどろに、疾く行き給へといひて、手を揮^ふりたり。姫は行き給へと繰反したり。われは心もさらに再び、友なりしか我なりしかと叫びたり。

その時われはアヌンチャヤタが友の上に俯して唇をその頰^{ひたひ}に觸るゝを見、その聲を呑みて微かに泣くを聞きたり。

次第に集りたる衆人の中より、忽ち邏卒^{らそつ}々々と呼ぶ聲を聞けり。われは目に見えぬ幾條の腕もて拉^ひき去らるゝ心地して、此場^{のが}を遁^{のが}れたり。

基督の徒

愛せられしは友なり。この一條の毒箭どくやは我渾身の血を濁して、人を殺せり友を殺せりといふ悔悟の情の頭を擡もたぐるをさへ妨げんとす。灌木雜草を踏みしだき、棘いばらに面を傷きずつけ、梢に袖を裂かれつゝも、幾畝の葡萄畠を限れる低き石垣を乗り越え乗り越え、指すかたをも分かでモンテ、マリヨの丘を走り下るに、聖ピエトロの御寺の火は、昔カインの奔はしりしとき、同胞の軀からだを供へたる贄にへづ卓くゑの火のゆくてを照し、如くなり。（譯者云。カインは亞當アダムが第一の子にして、弟を殺して神に供へき。）この間幾時をか經た

る、知らず。わが足を駐めしは、黄なるテエエルの流の前を遮るさへぎを見し時なりき。羅馬より下、地中海の荒波寄するあたりまで、この流には橋もなし、また索もとむとも舟もあらざるべし。この時我は我胸を噬かむ卑怯の蛆うじの兩斷せらるゝを覚えしが、そは一瞬の間の事にて、蛆は忽たちま又蘇あみりたり。われは復またいかなる決斷をもなすこと能はざりき。

われはふと首かうべを回めぐらしてあたりを見しに、我を距ること數歩の處に、故墳の址あり。むかしドメニカが許に養はれし時、往きて遊あそびし冢つかに比ぶれば、大さは倍して荒れたることひとしほ一入ひとしほなり。頰くづれ墮おちたるついでつの石に、三頭の馬を繋つぎたるが、皆おのゝさいか願下つに吊りたる一束の芻まぐさを嚙かめり。

墓門より下ること二三級なる窪みに、燃え残りたる焚火を圍める三個の人物あり。その火影の早く我目に映らざりしにても、我が慌てたるを知るに足るべし。火の左右に身を横よこたへたる二人は、たく遅ましげに肥えたる農夫なるが、毛を表にしたる羊かはごろもの裘を纏ひ、太き長靴を穿き、聖母の圖を貼つけたる尖帽を戴き、短き烟管きせるを銜ふくみて對むかひあへり。第三個は鼠色の大外套にくるまり、帽をまぶかに被りてついちに靠よりかゝりたるが、その身みのたけ材はやゝ小く、瓶へいを口にあてゝ酒飲み居たり。

わが渠等かれらを認めしとき、渠等も亦我を認めき。肥えたる二人は齊ひとしく銃とを操りて立ち上りたり。客人は何の用ありてこゝに來しぞ。われ。舟をたづねて河をこさんとす。三人は目を合せたり。

甲。むづかしきたづねものかな。挈さげ持ちて旅するものは知らず。こゝ等には舟も筏いかだもなし。乙。客人は路にや迷ひ給ひし。こゝは物騒なる土地なり。テ・チエザアリが夥伴なかまは遠き處まで根を張れば、法皇はいかに鋤すきを揮ふり給ふとも、御腕の痛むのみなり。甲。客人はなどで何の器械えものをも持ち給はぬ。見られよ、この銃は三連發なり。爲損しそんじたるよきの用心には腰なる拳銃あり。丙。この小こ刀がたなも馬鹿にはならぬ貨物しろものなり。(かの身材小き男は氷こほりの如き短劍を抜き出だして手に持ちたり。)乙。早く※さやに納めよ。年若き客人は刃物は嫌ひなるべし。客人、われ等に逢ひ給ひしは爲し合せあはなり。若し悪棍わるものなどに逢ひ給はゞ、素裸にせられ給はん。金あらば我等にあづけ給へ。

われは今三人の何者なるかを知りたり。我五官は鈍りて、我性命は價なきものとなりぬ。諸君よ、わが持てる限の物をば、悉く贈るべし、されどおん身等を饜あかしむるに足らざるこそ氣の毒なれと答へて、われは進寄りつゝ、手を我衣兜かくしにさし籠こみたり。われは兜兒かくしの中に猶盾たてぎん銀二つありしを記したり。而るに我手に觸れたるは、重みある財布なりき。抽ひき出して見れば、手組てあみの女ものなるが、その色は曾てアヌンチャタが媪の手にありしものに似たり。落おちうど人の盤纏ろようにとて、危急の折に心づけたる、彼媪の心根こそやさしけれ。三人ひとしくさし伸ぶる手を待たで、われは財布の底を掴みて振ひしに、焚火に近き匾ひらいし石の上に、こがねしろかね散り布けり。眞物ほんものぞと呼びつゝ、人々拾ひ取りて勿體なき

事かな、盗人などに取られ給はゞいかにし給ふといふ。われ。貨もの物はそれ丈なり。疾とく我命を取り給へ。生甲斐なき身なれば毫すこしも惜しとはおもはず。甲。思ひも寄らぬ事なり。我等は口ツカ・デル・ペアパに住める正直なる百姓仲間なり。同じ教の人を敬ふ基督の徒なり。酒少し残りたり。これを飲みて、かく怪しき旅し給ふ事のもとを明し給へ。われ。そはわが祕ひめごと事なり。かく答へて我は彼瓶を受け、燥かわきたる咽を潤したり。

三人は何事をかさゝやきあひしが、小男は嘲あざみ笑ふ如き面持して我に向ひ、煖あた、かき夕のかはりに寒き夜をも忍び給へといひて立ちぬ。渠かれは驅かけ歩あしの蹄の音をカム・パニアの廣野に響かせて去りぬ。

甲。いぎ客人、船を待ち給はんは望なき事なり。我馬の尾に縋すがり

ておよ泓がんこともたやすからねば、鞍の半を分けて參らすべし。渠
 は我うしろを後ぎまに馬の脊に搔き載せて、おのれは前の方に跨り、水
 に墜おとさぬ用心なりとて、太き綱を我胸むちと肘ひぢとのめぐりに巻きて、
 脊中合せにしかと負ひたり。我には手先を動かす餘地だになかり
 き。逞たくまましき馬は前脚もて搜さがりつゝ流に入りしが、水の脇腹に及
 ぶころほひより、巧に泳ぎて向ひの岸に着きぬ。渠かれは河がごしは濟
 みたりと笑ひて、綱なわを弛ゆるむる如くなりしが、こたびは我脊せきを緊きびし
 く縛りて、その端を鞍くらに結ゆひつけ、鞍をしかと掴みておはせ、墜
 ちなば頸の骨をや摧くだき給はんといひて、靴の踵を馬の脇に加ふれ
 ば、連なる男も同じく足をはたらかせたり。かくて二匹の馬三個
 の人は、弦つるを離れし矢の如くカムパニアの原野を横よこぎりたり。前

なる男の長き髪は、風に亂れて我頬を拂へり。頰くづれたる家の傍、
 斷せりもちえたる水道の柱ほとり弓の畔を、夢心に過ぎゆけば、血の如く紅な
 る大月たいげつ地平線より輾まろがり出で、軽く白き靄もやのりて騎者の首かうべめぐを繞りてひら
 めき飛べり。

山塞

友を殺し、女に別れ、國を去りて、兇賊の馬背いましに縛められ、カ
 ムパニアの廣野を馳はす。一切の事、おもへば夢の如く、その夢は
 又怪しくも恐ろしからずや。あはれ此夢いつかは醒さめん、醒めて
 この怖るべき形ぎやうさう相はは消え淪ほろびなん。心を鎮めて目を閉づれば、

冷^{ひや}なる山おろしの風は我頬^{めく}を繞りて吹けり。

山路にさしかゝると覺しき時、騎者^{のりて}は背後なる我を顧みて詞を

かけたり。程なく大母^{おほば}の蔽^{まへだれ}膝の下に息^{やす}らふべければ、客人も心

安くおぼせよ。良き馬にあらずや。この頃^{サン}聖アントニオの禳^{はらひ}を受

けたり。小童^{こわつば}の絹の紐もて飾りて牽^ひき往きしに、經を聽かせ水

を灌^{あび}せられぬれば、今年中はいかなる惡魔の障碍をも免るゝなら

ん。

岩間の細徑に踏み入る頃、東の天は白みわたりぬ、連^{つれ}なる騎者

馬さし寄せて、夜は明けんとす、客人の目疾^{めやみ}せられぬ用心に、涼^ひ

傘^{かさ}さゝせ申さんと、大なる布を頭より被せ、頸のまはりに結びた

れば、それより方角だに辨^{わきま}へられず。諸手^{もろて}をば縛^{いまし}められたり。我

身上みのうへは今や獵夫さつをに獲られたる獸にも劣れり。されど憂くらに心味くらみ
 たる上なれば、苦しとも思はでせくゞまり居たり。馬の前足は大
 方仰ぐのみなれど、ともすれば又暫し阪道を降る心地す。茂りあ
 ひたる梢は頻りに我頬うを拊うてり。道なき處をや騎のり行くらん覺おぼつ
 束かなし。

久しき後馬より卸おろして、我を推して進ましむ。かれこれ復た隻せ
 語きごを交へず。狭き門を過ぎて梯はしごを降りぬ。心神定まらず、送迎いそが
 はしき際の事とて、方角道みちのり程よくも辨へねど、山に入ること太はなは
 だ深きにはあらずと思はれぬ。わがその何れの地なるを知りしは、
 年あまた過ぎての事なり。後には外國とつくにびと人も尋ね入り、畫工の筆
 にも上りぬ。こゝは古いにしへのツスクルムの地なり。栗の林、丈高き月ラ

ウレオ

桂むらだちの村立

ある丘陵にて、今フラスカアチと呼ばるゝ處の背後

にぞ、この古跡はあなる。「クラテエグス」、野薔薇などの枝生

ひ茂りて、重圈をなせる榻たふれつ列の石級を覆へり。山のところどこ

ろには深き洞穴あり、石の穹窿あり。皆草くさむら叢おほまに掩はれて、迫り

視るにあらでは知れ難かるべし。谷のあなたに聳そぼだてるはアプルツ

チイせうたくの山にて、沼澤を限り、この邊の景に、物凄き色を添ふ。

あはれ此山の容かたちよ。この故址こし斷礎の間より望むばかり、人を動す

ことは、またあらぬなるべし。

騎者等の我を拉ひき往くは、とある洞窟の一つにて、その入口は

石エピゲエア楠エアの枝といろくつるくさなる蔓艸つるくさとに隠されたり。我等は足を

駐とゞめつ。徐しづかに口笛吹く聲と共に、扉を開く響す。再び數級の石せ

磴きとうを下る。數人すにんの亂れ語る聲我耳に入りし時、頭に纏まとへる布は取り除けられぬ。わが身は大穹窿うちの裏に在り。中央なる大卓の上しんちゆうに眞しんちゆう鍬くわの燈二つ据ゑて、許多あまたの燈心に火を點じ、逞しげなるおほをとこ

大漢 數人の羊かはごろもの裘着たるが、圍み坐して骨牌かるたを弄もてあそべり。火光の照し出せる面おもざしは、苦にがみばしりて落ち着きたるさまなり。人々は生面の客あるを見ても、絶て怪いぶかみ訝ぶかることなく、我こしかけに榻たを與へて坐せしめ、我さかづきに盞せんを與へて飲ましめ、肴さかなせんとて鹽肉團サラメをさへ截きりてくれたり。その相語るを聞くに、方言にて解すべからず、されど我上かに關かはらざる如くなりき。

我は飢を覺えずして、たゞ燃ゆる如き渴を覺えしかば、酒を飲みつゝ四邊あたりを見たり。隅々には脱ぎ棄てたる衣服と解き卸したる

兵器とあるのみ。一角に龕がんの如く窪みたる處あり。その天井には半ば皮剥ぎたる兎二つ吊り下げたり。初め心付かざりしが、その窪みたる處には一人の坐せるあり。年老いたる媪おうなの身うち痩せ細りたるが、却りて脊直せすぐにすくやかげなる坐りざまして、あたりに心留めざる如く、手はゆるやかに絲車を せり。銀の如き髪かみの解けたるが、片頬に墜おちかゝりて、褐色なる頸のめぐりに垂るゝを見る。その墨の如き瞳は、とこしへに苧環をだまきの上に凝注せり。焚たきさしたる炭の半ば紅なるが、媪の座の畔ほとりにちりぼひたるは、妖魔の身邊に引くといふ奇くすしき圈わとも看みな做なさるべし。まことに是れ一幅クロトの活畫像なり。(譯者云。古説に三女ありて人生運命の泰否つかさどを掌る。性命の絲を繰るをクロトと曰ひ、これを撮みたる

をラヘシスと曰ひ、これを斷つをアトロポスと曰ふ。姉妹神なり。

人々の我事にかゝづらはざりしは、久しからぬ程なりき。忽ち
きうもん 糺問は始まりぬ。職業は何ぞ、資産ありや否や、親戚ありや否
など や抔いふことなりき。我は徐かに答へき。わが帯び來たるところ
 のものをば、最早君等に傾け贈りぬ。かくてこの身はやうなき貨しろもの
 となりぬ。縦たとひ羅馬ロオマわたりに持ち往きて沽うらんとし給ふとも、盾た
てぎん 銀一つ出すものだにあらじ。廉かどある生なりはひ活わぎの業をも知らず。頃こ
のころ 日は拿破里ナポリに往きて、客に題をたまはりて、即座に歌作りて謳うた
 はんと志したり。斯く語るついでに、われはこたび身を以て逃れ
 たる事のもとさへ、包み藏かくさずして告げぬ。唯だアヌンチャタが

上をば少しも言はざりき。さてわが物語の終は、この上殊なる望なければ、この身を官府に引き渡して、褒美にても受け給へといふことなりき。

一人の男のいはく。さりとは珍らしき望なるかな。想ふに羅馬市には、黄金こがねの耳環みくわを典して、客人を贖あがなひ取ることを吝をしまざる人あるならん。拿破里ナポリの旅たび稼かせぎは、その後の事とし給はんも妨さまたげあらし。さはあれ強ひて直ちに拿破里に往かんとならば、あぶなげなく疆さかひを越させ申さんことも、亦我等の手中に在り。留りて此樂園に居らんとならば、それも好し。こゝに在るは善き人々なるをば、客人も夙とく悟り給ひしならん。されど此等の事思ひ定め給はんには、先づ快く一夜の勞を醫いし給ふに若かず。こゝに佳よき牀とこ

あり。そのみならず、來歴ある好き衾ふすまをも借し參らせん。巽シロツ
 風吹く頃の夕立をも、雪ふゞきをも凌しのぎし衾ぞとて、壁よりは
 づして投げ掛くるは、褐色なる大外套なり。牀といふは卓の一端
 の地上に敷ける藁わらむしろ 蓆なり。その男は何やらん一座のものに言
 置き、「ヂツセンチイ、オオ、ミア、ベツチイナ」（降おり來よ、
 やよ、我戀人）と俚歌ひなうた口ずさみて出行きぬ。

血書

われは眠ることを期せずして、身を藁蓆の上に僵たふしゝに、前さきの
 日よりの恐ろしき經歷は魘夢えんむの如く我心おびやかを劫おびやかし來りぬ。されど氣

疲れ力衰へたればにや目眈まぶたおのづから合ひ、いつとは知らず深き眠に入りて、終日復た覺むることなかりき。

醒めたる時は心地爽さはやかになりて、前に心身を苦めつる事ども、唯だ是れ一場の夢かと思はるゝ程なりき。然はれそは一瞬の間にして、身の在るところを顧み、四邊なる男等の蹙しかみたる顔付を見るに及びては、我魘夢の儼然として動うごすべからざる事實なるを認めざることを得ざりき。

一客あり。灰色の外套を偏肩に引掛け、腰に拳銃を帶びたるが、馬に騎のりたる如く長椅またがに跨りて、男等と語れり。穹窿の隅の方に、彼の雜種あひのこいろしたる老女の初の如く坐して繰くりぐる車ままはせるあり。黒地くろぢに畫ける像の如し。座のめぐりには、新き炭を添へ

て、その煖氣は室に満ちたり。われは客の、たま彈は脇を擦過りたり、
いさゝか些の血を失ひつれど、一月の間には治すべしといふを聞き得たり。

わが頭を擡げしを見て、われを鞍に縛せし男のいふやう。客人
 醒め給ひしよ。十二時間の熟睡は好き保養なるべし。こゝなるグ
 レゴリオは羅馬より好き信たよりをもて來たり。そはおん身の喜び給ふ
 べき筋の事なり。手を下し、はおん身に極つたり。時も所も符を
 合す如し。驕りたる評議廳の官人は、おん身がために、容赦なく
 その長裾ちやうきよを踏まれぬと見えたり。お身の大膽なる射撃に遭ひ
 しは、評議官の従子をひなりき。これを聞きてわれは僅に、命にはさ
 はらずやと問ふことを得き。グレゴリオの云はく。先づ死なで濟
 むべし。醫者は然しか云ひきとぞ。鶯の如き吭のどありといふ、美しき外

國婦人の夜を徹してとほ護り居たるに、醫者は心を勞し給ふな、本ほんぶ
 復く疑なしといひきとぞといふ。我を伴ひ來し男の云はく。われ
 おもふに、君は男の身を錯り射給ひしあやまのみにあらず、女の心をも
 亦錯り射給ひしなり。雌雄めをは今雙び飛ぶべし。君は唯だこゝならに在いま
 せ。自由なる快活なる生計たつきなり。君は小なる王者たることを得べ
 し。而してその危さは決して世間の王位より甚しからず。酒は酌
 めども盡きざるべし。女は君を欺あざむきし一人の代りに、幾人をも寵
 し給へ。同じく是れ生活なり、餘瀝よれきを嘗むると、滿椀を引くと、
 唯だ君が選み給ふに任すと云ひき。

ベルナルドひとオは死せず。我は人を殺さず。この信は我がために
 起死の藥に俸ひとしかりき。獨りアヌンチャタを失ひつる憂に至りて

は、終に排するに由なきなり。われは猶豫することなく答へき。

我身は只君等の處置するに任すべし。されどわが嘗て受けし教と、

現げんに懷いだける見けんとは、俘囚とりこたるにあらずして、君等が間に伍すべき

やうなし。これを聞きて、我を伴ひ來し男の顔は、忽おごち嚴そなる色

を見せたり。盾たて銀ぎん六百枚は定まりたる身のしろなり。それを六日

間に拂ひ給はゞ、君は自由の身なるべく、さらば君が身は、生

きながらか、殺してか、我物とせではおかじ。こは此處おきての掟なれ

ば、君が紅顔も我丹心も、寬くわん假かの縁えんとはならぬなるべし。六百

枚なくば、我等の義兄弟となりて生きんとも、彼處かしこなる枯井の底

にて、相擁して永く眠れる人々の義兄弟となりて終らんとも、二

つに一つと思はれよ。身のしろ求むる書をば、友達に寄せ給はん

か、又彼歌女に寄せ給はんか。おん身の一撃なかつ媒となりて、二人はその心を明しあひつれば、さばかりの報恩をば、喜びてなすなるべし。斯く語りつゝ、男は又からくくと笑ひて云ふ。廉やすき價なり。この宿の客人に、還かんぢやう 錢のかく迄廉やすきことは、その例少からん。都よりの馬のしろ、六日の旅籠はたごを思ひ給へ。われ。我志をば既に述べたり。我はさる書をも作らざるべく、又君等が夥伴なかもにも入らざるべし。男。さてく強情なる人かな。されどその強情は憎くはあらず。我彈丸たまの汝が胸を貫かんまでも、その心をば讃めて進ずべし。命惜まぬ客人よ。生くといふには種々あり。少年の心は物に感じ易しといふに、吾黨わがらひがかく累さはりなく障なき世渡するを見て、羨ましとは思はずや。そが上おん身は詩人にて、即興詩もて口を

糊せんといふにあらずや。吾黨の自由不羈ふきの境きやう界がいを見て心を
 動すことはなきか。客人試みに此境界を歌ひ給へ。題をば巖穴の
 間なる不撓ふたうの氣象とも曰ふべきならん。客人若しこれを歌はゞ、
 彼生活といひ性命といふものゝ、樂む可く愛す可きを説かざるこ
 とを得ぬなるべし。その杯を傾けて、歌ひて我等に聽せ給へ。出
 來好くば六日の期を一日位は延ばすべしといふ。男は手をさし伸
 べて、壁上なる「キタルラ」を取りて我に授けつ。賊の群は立ち
 て我席を繞めぐりたり。

われはそを把とりて暫く首を傾けたり。課する所の題は巖穴山野
 にて、こは我が曾て經歷せざるところなり。前の夜こゝに來し時
 は、目を掩おほはれたれば甲斐なし。昔見しところを言はゞ、羅馬の

ボルゲエゼ、パムフィリの兩苑に些の松林ありしに過ぎず。まこと
 の山とては、幼かりし程ドメニカが家の窓より望みしより外知
 らず。已むことなくば只だ一たび山を見き。ジエンツアノの花祭
 に往きし途すがらの事なり。ネミ湖畔の高原を歩みしに、道は暗
 く静けき森林の間を通じたり。彼祭はわが爲には悲き祭なりけれ
 ば、湖畔の道にて花束つくりしことをさへ、今猶忘れでありしな
 り、景は心目に上り來れり。今かく物語する時間の半をだに費さ
 ずして、景は情を生じ、情は景を生ずるほどに、我は絃を撥はじきた
 り。情景は言の葉となり、言の葉は波起り波伏す詩句となりぬ。
 且我が歌ひしところを聽け。深き湖あり。暗き林はそを環めぐれり。
 湖の畔なる巖は聳そばだちて天を摩せんとす。こゝに暴あらわし鷲の巢あり。

母鳥は雛等に教へて、をさな穉き翼を振はしめ、またその目を鋭くせん
 ために、日輪を睨ましめき。さて扱母鳥の云ひけるやう。汝達は諸鳥
 の王なるぞ。目は利く、と拳は強し。いでや飛べ。飛びて母の側を
 去れ。我目は汝を送り、我情は彼の死に臨める大鵝のたいが簧舌の
 如く汝が上を歌ふべし。その歌は不撓の氣力を題とせんといひき。
 雛等は巢立せり。一隻ははね翅を近き巖の頂にをさ斂めて、晴れたる空の
 日をぎようしよく凝矚すること、其光のあらん限を吸ひ取らんと欲する如
 くなりき。一隻は高く虚空にかけ翔りて、大圈を畫し、林りん樾沼澤を
かかん下瞰するが如くなりき。岸に近き水面には緑樹の影を倒せるあり
 て、その中央には碧空の光をひたすを見る。時に大魚の浮べるあり。
 その脊はくつがへ覆りたる舟の如し。忽ち彼雛鷺は電の撃つ勢もて、さと

卸し來つ。おろ刃やいばの如とづめき利爪つかは魚の背を攫つかみき。母鳥は喜、色あらはに形れ
 たり。然るに鳥と魚とは力相若あひしくものなりければ、鳥は魚を擧ぐ
 ること能はず、魚は鳥を沈むること能はず、打ち込みたる爪の深
 かりしために、これを抜かんとするも、亦意の如くならず。こゝ
 に生死の争は始まりぬ。今まで靜なりける湖水の面は、これがた
 めに揺り動され、大圈をなせる波は相重りて岸に迫れり。既にし
 て波上の鳥と波底の魚と、一齊に鎮しづまり、鷺の翼の水面みのもを掩おほふこ
 と蓮葉はちすはの如くなりき。忽ち隻翼は又聳そばだち起り、竹を割さく如き聲
 と共に、一翼はひたと水に着き、一翼は劇はげしく水を鞭うち沫しぶきを飛ば
 すと見る間に、鳥も魚も沈みて痕なくなりぬ。母鳥は悲鳴して、
 巖角なる一隻の雛を顧みるに、こもいつか在らずなりて、首を仰

いで遠く望めば、只だ一黒斑の日に向ひて飛ぶを見き。母鳥は悲
 を轉じて喜となしたり。その胸は高く躍りて、その聲は折るれど
 も撓たわまぬ力を歌ひぬ。我歌はこゝに終り、喝采の聲は座に滿ちぬ。
 獨り我はまたゝきもせで、龕がんの前なる老女をまもり居たり。そは我が
 歌ひて半に至りし時、老女の絲繰る手やうやく緩く、はては全く
 歇やみて、暗き瞳の光は我面を穿うがつ如く、こなたに注がれたればな
 り。又我が能く少時の夢を喚よび起して、この詩中に入るゝことの、
 かくまで細かなることを得しは、この老女の振舞あづかりて力ありけ
 ればなり。

おうな媼は忽ち身を起し、すこや健かなる歩みぎまして我前に來て云ふやう。
 能くも歌ひて、身のしろを贏かち得つるよ。吭のどの響はやがて黄金こがねの

響ぞ。鳥と魚との水底に沈みし時にこそ、この姥うばは汝が星の躡やどるところを見つれ。驚よ。いで日に向ひて飛べ。老いたる母は巢にありて、喜の目もてそを見送らんとす。汝が翼をば、誰にも折らせじといふ。我に勧めて歌はせし男うやく恭しく媼の前に 美しき花の環を作るならん。その臂ひぢを縛いましむべきことかは。六日が程は巢にあればかし。脊に爪打ち込みしにはあらず。六日立たば、汝この雛を放ち遣りて、日の邊へ飛ばしめよ。斯くつぶやきつゝ、媼は壁の前なる筐はこを探りて、紙と筆とを取り出でつ。あな、やくなし。墨は巖の如くなりぬ。コスモよ。人の上のみにはあらず。汝が腕の血を呉れずやといふ。コスモと喚よばれし彼男は、一語をも出さで、刀を抜き浅くその膚を截きりたり。媼はその血に筆を染めて我に

わたし、「往ゆく拿破里ナポリ」と書して名を署せしめて云ふ。好し好し、法皇の封傳てがたに劣らぬものぞとて、懷なごにをさめつ。傍なる一人の男、その紙何の用にか立つべきとつぶやきしに、媼目を見張りて、蛆うぢのもの言はんとするにや、大いなる足の蹂躪ふみにじ、躪しんじらんを避けよといふ。コスモは首かうべを低たれて不いかでか敢いかでか不いかでか敢いかでか汝の命は神璽靈寶しんじにも代へじといひき。人々と媼との物語はこれにて止み、卓を圍める一座の興趣は漸くに加はりて、瓶へいは手より手にと忙はしく遣り取りせらるゝことゝなりぬ。さて食を供するに至りて、賊の中にはわが肩を敲たたきて、皿に肉塊を盛りて呉るゝもありき。唯だ彼媼は故もとの如く、室隅に坐して、飲食の事には與あづからざりき。賊の一人は火をその坐のめぐりに添へて、大母よ、汝は凍こゆるならんといひき。

我は媼の詞につきて熟 《つらく》おもふに、むかし母とマリ
 ウチアとに伴はれて、ネミ湖畔に花束作りし時、わが上を占ひし
 ことあるは此媼なりしなるべし。我運命の此媼の手中にありと見
 ゆること、今更にあやしくこそ覺えらるれ。媼はわれに往拿破里
 と書かしめき。こは固もとより我が願ふところなり。されど封傳てがたなく
 して、いかにして拿破里には往かるべきぞ。又縦令よしやかしこに往き
 着かんも、識る人としては一人だに無き身の、誰に頼りてか活なりはひをな
 さん。前にはわれ一たび即興詩もて世を渡らんとおもひき。され
 ど羅馬にて人を傷けたりと知られんことおそろしければ、舞臺に
 出づべきこゝろもなし。されど方言をばよく知りたり、聖母のわ
 れを見放ち給ふことだにあらずば、ともかくもして身を立てんと、

強ひて安堵の念を起しつ。あはれ、あやしきものは人のこゝろにもあるかな。この時ア又ンチャタが我をしりぞけて人に従ひし悲痛は、却りて我心を押し鎮むる媒なかだちとなりぬ。我がこの時の心を物に譬へて言はゞ、商人のおのが舟の沈みし後、身一つを三版はぶねに助け載せられて、知らぬ島根に漕ぎゆかるゝが如しといふべき歟か。

かくて一日二日と過ぎ行きぬ。新に來り加はる人もあり、又もとより居たる人の去りていづくにか往けるもあり。ある日彼媪さへ、ひねもす出でゝ歸らざりしかば、我は賊の一人とこの山寨さんさいの留守することゝなりぬ。この男は年二十の上を一つばかりも超えたるならん。顔は卑しげなるものから、美しき髪長く肩に掛かり、その目まなざしには、常にいと憂はしげなる色見えて、をりノ

\は又手負ひたる獸などの如きおそろしき氣色現るゝことあり。
 我と此男とは暫し對^{むか}ひ坐して語を交ふることなく、男は手を額に
 加へて物案ずるさまなりしが、忽ち頭を擧げて我面をまもりたり。

花ぬすびと

若者はふと思ひ付きたる如く。おん身は物讀むことを能くし給
 ふならん。此卷の中なる祈誓の歌一つ讀みて聞せ給へとて、懷よ
 り小き讚美歌集一卷取出でたり。われいと易き程の事なりとて、
 讀み初めしに、若者の黒き瞳子^{ひとみ}には、信心の色いと深く映りぬ。
 暫しありて若者我手を握りて云ふやう。いかなれば汝は復た此山

を出でんとするか。人情の詐多きは、山里も都大路も殊なることなけれど、山里は爽かに涼しき風吹きて、住む人の少きこそめでたけれ。汝はアリチアの婚禮とサエルリ侯との昔がたりを知らん。婿は卑しき農夫なりき。婦は貧しき家の子ながら、美しき少女なりき。侯爵の殿は婚禮の筵にて新婦が踊の相手となり、宵の間にしばし花園に出でよと誘ひ給へり。婿この約を婦に聞きて、婦の衣裳を纏ひ、婦の面紗を被りて出でぬ。好くこそ來つれと引き寄せ給ふ殿の胸には、匕首の刃深く刺されぬ。これは昔がたりなり。われも此の如き貴人を知りたり。そは某といふ伯爵の殿なりき。又此の如き婿を知りたり。唯だ婦は此の如く打明け物言ふ性ならねば、新枕の楽しさを殿に譲りて、おのれは

新しんぼとけ佛の通夜することゝなりぬ。刃いっはりの詐多いき胸を貫きし時、膚はだへは雪の如くかゞやきぬとぞ語りし。

わが心中には畏怖と憐愍と交 《こも／＼》起りぬ。われは

詞はなくて、若者の面を打まもりしに、若者又云ふやう。彼も一時なり。此も一時なり。われを女の肌知らぬものと思ひ給ふな。

英吉利イギリスの老婦人ありて、年若き男女と共に、拿破里ナポリへ往かんと、

此山の麓を過ぎぬ。我等は此一群を馬車より拉ひき卸おろしたり。我等

は三人を擒とりこにして、財物を掠かすめ取りつ。少女をとめは若き男の許いひなづけ嫁

の婦よめなりしならん。顔ばせつやゝかに、目なざし涼しかりき。男

をば木に括くくりたり。女は猶處子なりき。われはサエルリ侯に扮す

ることを得たり。賠つくのひの金届きて一群の山を下りし時、少女の顔

は色褪あせて、目は光鈍りたりき。深山は蔭多きけにやあらん。

この物語にわれは覺えず面をそむけしかば、若者は分いひわけ疏らし
 く詞を添へて、されど新教の女なりき、惡魔の子なりきとつぶや
 きぬ。われ等二人はしばし語なくして相對むかへり。若者は今一つ讀
 み給へと乞ひぬ。われは喜びて又尊き書を開きつ。

封傳

夕ぐれにフルヰアの媪歸りて、われに一ひとつ 裏みの文書もんじよを遞わた與
 して云ふやう。山々は濕ぬれ 衾ふすまを被かきたるぞ。巢立するには、好
 き折なり。往方ゆくては遙なるに、禿かげたる巖いわの面おもてには麩包パンの木生ふる

ことなし。腹よく拵へよといふ。若者のかひ／＼しく立ち働き
 て、忙しげに供ふる饌ぜんに、われは言はるゝ儘に飢を凌しのぎつ。媼は
 古き外套を肩に被き、手を把とりて暗き廊わたどの道みちを引き出でつゝ云
 ふやう。我雛驚よ。疆さかひ守つはもる兵も汝が翼を遮ることあるまじきぞ。
 その一裏は尊き神符にて、また打出の小槌なり。おのが寶を掘り
 出さんまで、事闕かくことはあらし。黄金も出づべし、白銀しろかねも出
 づべしといふ。媼は瘦せたる臂ひぢさし伸べて、洞門おほを掩つたへるかつ 蔦
ら 蘿とばりの帳とのもの如くなるを推し開くに、外面とのもは暗夜なりき。濕りたる
 濃き霧は四方の山岳めぐを繞めぐり。媼の道なき處を疾とく奔はしるに、われ
 はその外套の端を握りて、やう／＼隨つひ行きぬ。木立草むらを左
 右に看過して、媼は魔神の如くわれを導き去りぬ。

數時の後挾き山の峽かひに出でぬ。こゝに伊太利イタリヤの澤池にめづらし
 からぬ藁小屋一つあり。籐とうに藁まぜて、棟より地まで葺ふき下せり。
 壁といふものなし。燈の光は低き戸の隙間洩りたり。媼は我を延ひ
 きて進み入りぬ。小屋の裡うちは譬へば大なる蜂はちのす窩すの如くにして、
 一方口より出で兼ねたる烟は、あたりの物を残なく眞黒まぐろに染めた
 り。梁柱うつぱりはいふもさらなり、籐とうの一ひとすぢ條ちゆうだに漆うるしの如く光らざる
 もものなし。間まの中央に、長さ二三尺、幅これに半ばしたる甗せんろ爐ろあ
 り。炊かしぐも煖あたたかむるも、皆こゝに火焚きてなすなるべし。炭と灰と
 はあたりに散りぼひたり。奥に孔ありて小き間につゞきたるが、
 そのさま芋塊いもくわいに小芋の附きたる如し。その中には女子こや一人臥ふして、
 二三人の小兒はそのめぐりに横よこたはれり。隅すみの方に立たてる驢うさぎうまは、頭を

延べて客を見たり。主人なるべし、腰に山羊やぎの皮を巻き、上半身は殆ど赤條あかはだか々なる老夫は、起ちて媼の手に接吻し、一語を交へずして羊の皮をはふり、驢を門口に率ひき出し、手まねして我に騎のれと教へぬ。媼は我に向ひて、カムパニアの馬に勝まさるべき足どりの駒なり、幸運の門出は今ぞとさゝやきぬ。われはその志の嬉しければ、媼の手に接吻せんとせしに、媼は肩に手を掛け、額髪おし上げて、冷なる唇を我額に當てたり。

老夫は鞭うさぎごうまを驢うさぎごうまに加へて、おのれもひたと引き添つひつゝ、暗みちき徑みちを馳はせ出せり。われは猶媼の一たび手もて揮さしくを見しが、その姿忽かさなち重かさなる梢かに隠れぬ。心細まごさに馬夫まごに物言まごひ掛まごくれば、聞き分まごき難まごき聲立まごてゝ、指を唇まごに加へたり。さては 《たま〜》山腹まごに

火を焚くものあり。その黄なるは晴天の星の如くなりき。われは覺えず驢背に合掌して、神の恵の大なるを謝したり。

われは漸くにして媪たまものの賜を見ることを得き。その一通の文書は羅馬警察衙ロオマの封傳がてがたにして、拿破里ナポリ公使の奥がきあり。旅人の欄には分明に我氏名を注したり。一通は又拿破里フアルコネツト才銀行に振り込みたる爲換金かはせ五百「スクヂイ」の券なり。これに添へたる紙片に二三行の女文字あり。手負ひたる人の上をば、みこゝろ安く思されよ。遠からぬ程に癒いゆべしと申すことに侍り。されどしばらくは羅馬に歸り給はぬこそよろしく侍らめとあり。フルルニアは我を欺かざりき。わがためには、これに増す神符あらじとおもひぬ。

道は少し夷たひらかになりぬ。とみれば一群の牧者あり。草を藉しきて朝あ
 餉さげたうべて居たり。我馬夫は兼て相識れるものと覺しく、進み寄
 りて手まねするに、牧者は我等にその食を分たんといふ。水牛の
 乾酪と麪包パンとにて飲ものには驢の乳あり。われは快く些の食事を
 したゝめしに、馬夫まごは手まねして別を告げたり。さて牧者のいふ
 やう。この徑こみちを下りゆき給へ。只だ山を左に見て行き給はゞ、小
 河の流に逢ひ給はん。そは山より街道に出づる水なり。霧晴れな
 ば、そこより街榭なみきの長く續けるを見給ふならん。流に沿ひて街榭
 の方へ行き給はゞ、程なく街道の側なる廢寺の背後うしろに出で給はん。
 その寺今は「トルレ、ヂ、トレ、ポンテ」とて旅籠屋はたごやとなりたり。
 目の暮れぬ内にテルラチナに着き給ふべしといひぬ。我は此人々

に報せんとおもふに、拿破里にて受取るべき爲換の外には、身に附けたるものなし。されど財布をこそ人にやりつれ、さきに兜兒の裡に入れ置きし「スクヂイ」二つ猶在らば、人々に取らせんものをと、かい探ぐるにあらず。馬夫には領なる絹の紛※解きて與へ、牧者等と握手して、ひとり徑を下りゆきぬ。

大澤、地中海、忙しき旅人

世の人はボンチネの大澤たいたく（パルウヂ、ボンチネ）といふ名を聞きて、見わたす限りの曠野あらのに泥まじりの死水をたゝへたる間を、旅客の心細くもたどり行くらんやうにおもひ做なすなるべし。そは

いたく違へり。その土地の豊腴ほうゆなることは、北伊太利ロムバルヂ
 アに比べて猶優りたりとも謂ふべく、茂りあふ草は莖肥さかんえて勢旺
 なり。廣く平なる街道ありてこれを横斷せり。(耶蘇ヤソ紀元前三百
 十二年アピウス・クラウヂウスの築く所にして、今猶アピウス街
 道の名あり。)車にて行かば坐席極めて妥おだやかなるべく、菩提樹なの街
 榭みきは鬱蒼として日を遮り、人に暑さを忘れしむ。路傍は高たか萱がやと
 水草と、かはる／＼濃淡の緑を染め出せり。水は井字の溝かうきよ
 洫くに溢れて、處々の澱よどみには、丈高き蘆葦あし、葉闊ひろき睡蓮ひつじぐさ
 (ニユムフエア)を長ず。羅馬の方より行けば左に山岳の空に聳そび
 ゆるあり。その半腹なる村落の白壁は、鼠いろなる岩石の間に亂
 點して、城郭かとあやまたる。左は海に向へる青野のあなたに、

チルチエオの岬みさき（プロモントリオ、チルチエオ）の隆たかく起れるあり。こは今こそ陸つゞきになりたれ、古のキルケが島にして、オヂツセウスが舟の着きしはこゝなり。（ホメロスの詩に徴するに、トロヤの戦果てゝ後、希臘ギリシアイタカ王オヂツセウスこの島に漂流せしに、妖婦キルケ舟中の一行を變じて豕いのことなす、オヂツセウス神傳の藥草にて其妖術を破りぬといふ。）

霧は歩むに従ひて散ぜり。晒さらせる布の如き溝渠こうきよ、緑なる氈かもの如き草原の上なる薄ぎぬは、次第に褰かげ去られたり。時はまだ二月末なれど、日はやゝ暑しと覺ゆる程に照りかゞやきぬ。水牛は高草の間に群れり。若駒の馳せ狂ひて、後脚とももて水を蹴るときは、飛沫ほとばし高く迸り上れり。その疾とく捷はやき運動を、晝かく人に見せばや

とぞ覺ゆる。左の方なる原中に一道の烟の大なる柱の如く騰あがれるあり。こはこの地の習にて、牧者どものおのが小屋のめぐりなる野を燒きて、瘴しやうき氣を拂ふなるべし。

途にて農夫に逢ひぬ。その瘦せたる姿、黄ばみし面は、あたりの草木のすくやかに生ひ立てると表裏うらうへにて、冢つかを出でたる枯骨にも譬へつべし。驪くろうまに騎りて、手に長き槍めきたるものを執れるが、こは水牛を率あて返るとき、そは驅り集むる具なりとぞ。げにこゝらの水牛の多きことその幾いくばく何といふことを知らず。草むらを見もてゆけば、斗はからず黒く醜みにくき頭と光る眼とを認め得て、こゝにも臥したるよと驚くこと間々あり。

道に沿ひて處々に郵亭を設けたり。その造りざま、小さながら

三層四層ならぬはなし。こは瘴氣しやうきを恐るればなり。亭は皆白壁なれど、礎いしずゑより簷端迄のきば、緑いろなる黻隙間かびなく生ひたり。人も家も、渾すべて腐朽の色をあらはして、日暖に草緑なる四邊あたりの景と相容れざるものゝ如し。わが病める心はこれを見て、つく／＼人生の頼みがたきを感じたり。

「アエ、マリア」の鐘響くに先だつこと一時ばかりにして、澤地のはづれに出でぬ。山脈の黄なる巖いはほは漸く迫り近づきて、南國の風光に富めるテルラチナの市は、忽ち我前に横りぬ。三株の棕しゆうろ欄樹のき高く道の傍に立てるが、その實は累々として葉の間に垂れたり。山腹の果圃くわほは黄なる斑紋ある青氈あをがもに似たり。その斑紋は檸檬リモネ、柑子かうじなどの枝たわむ程みのりたるなり。一農家の前に熟し

落ちたる檸檬を堆く積みたるを見るに、餘所にて栗など揺りおとして掃き寄するさまと殊なることなし。岩石のはざまよりは、青き迷迭香まんねんらふ（ロスマリヌス）、赤き紫羅欄花あらしいとうなど生おひ上りたるが、その巔いたゞきにはチウダレイクスが廢城の殘壁ありて、猶巍々ぎゞとして雲を凌しのげり。（譯者云。東「ゴトネス」族の王なり。西曆四百八十九年東羅馬帝の命を奉じて敵を破り、伊太利を領す。）

我心は景色に撲うたれて夢みる如くなりぬ。忽ち海の我前に横はるに逢ひぬ。われは始て海を見つるなり、始て地中海を見つるなり。水は天に連りて一色の琉璃るりをなせり。島嶼たうしよの碁布きふしたるは、空に漂ふ雲に似たり。地平線に近きところに、一條の烟立ちのぼれるは、エズヰオの山（モンテ、エズヰオ）なるべし。沖の方は

平なること鏡の如きに、岸邊には青く透きとほりたる波寄せたり。その岩に觸るゝや、鼓つづみの如き音立てゝぞ碎くる。われは覺えず歩を駐とゞめたり。わが満身の鮮血は蕩とろけ散りて氣となり、この天この水と同化し去らんと欲す。われは小兒の如く啼きて、涙は兩頬に垂れたり。市に大なる白しろつち聖の屋ありて、波はその礎いしずゑを打てり。下の一層は街に面したる大弓道をなして、その中には數輛の車を並べ立てたり。こはテルラチナの驛舎にして、羅馬拿破里ロオマナポリの間第一と稱へらる。

鞭べんせい聲の反響に、近き山の岩壁を動かして、駟馬しばの車を驛舎の前に駐とゞむるものあり。車座の背後うしろには、兵器うちものを執りたる從卒す數人にん乗にんりたり。車中の客を見れば、瘦せて色蒼き男の斑まだらに染めたる

寝衣ねまきを纏まとひて、懶ものうげに倚より坐せるなり。馭よ者は疾く下りて、又二たび三たび其鞭を鳴し、直ちに馬を續つぎ替へたり。さて護衛の士兵ありやと問へば、十五分間には揃ふべしと答へぬ。こはゆくての山路に、フラア・ヂヤフロ、デ・チエザレの流を汲むものありとて、當時こゝを過ぐる旅客の雇ふものとぞ聞えし。（前者は伊太利大盜の名にして、同胞魔君の義なり。實の氏名をミケレ・ペツツアといふ。千七百九十九年夥伴なかまを率ひきゐて拿破里王に屬し、佛兵と戦ひて功あり。官職を授けらる。後佛兵のために擒とりこにせられて、千八百六年拿破里に斬首せらる。後者も亦名ある盜なり。）客は英吉利語に伊太利語まぜて、此國の人の心鈍く氣長き爲に、旅人の迷惑いかばかりぞと罵りしが、やうやく思ひあきらめたり

と覺しく、大なる紛てふぎ※を結びて頭巾となし、兩の耳も隠るゝやうに被り、眼を閉ぢて黙坐せり。馭者の語るを聞けば、この英人は伊太利に來てより十日あまりなるべし。北伊太利、中伊太利をばことごとく見果てつ。羅馬をば一日に看盡したり。此より拿破里にゆきて、エズ中才マルセイユに登り、汽船にて馬耳塞マルセイユに渡り、南佛蘭西を遊歴すべしとなり。士兵八騎はいかめしく物具して至れり。馭者は鞭を揮ふるへり。馬も車も、忽ち黄なる岩壁にそひたる閩門りよもんを過ぎ去りぬ。

一故人

客舎の前にはたけ矮く^{ひく}逞ましげ^{たく}なる男ありて、車の去るを見送りたるが、手に持てる鞭を揮ひて鳴らし、あたりの人に向ひていふやう。護衛はいかに嚴めしくとも、兵器^{うちもの}の數はいかに多くとも、我客人となりて往くことの安穩なるには若^しかじ。英吉利人ほど心忙しきものはなし。馬はいつも驅^{かけ}歩^{あし}なり。氣まぐれなる人柄かなと嘲^{あざ}み笑へり。われこれに聲かけて、おん身の車には既に幾^{いく}位^{たり}の客人をか得給ひしと問へば、隅ごとに眞^{まごころ}心一つなれば、四人は早く備りたり、されど二輪車の中は未^{まだ}一人のみなり。ナポリへと志し給はゞ、明後日は旭日^{あさひ}のまだサンテルモ城（ナポリ府を横斷する丘陵あり、其巔^{いたゞき}の城を「カステル、サンテルモ」といふ）に刺さぬ間に送り届け參らすべしと答ふ。爲^{かはせ}換ありて現金な

き我がためには、此勸めのいと嬉しく、談合は忽ちに纏まりぬ。

(原註。伊太利の旅を知らぬ人のために註すべし。彼國の車エツツリ

主は例として前金を受けず、途中の旅籠はたご一切をまかなひくれたる上、小使錢さへ客に交付わたし、安着の後決算するなり。)

車主は客人も零錢こせにの御用あるべければとて、五「パオリ」の銀貨一枚撮つまみ出して我に渡しつ。われ。さらば食卓の好き座席と臥ふ床しどとを頼むなり。明日は滞とゞこほりなく車を出してよ。車主。勿論にこそ候へ。聖サンアントニオと我馬との思召だにくるはずば、正三時には出で立つべし。されど明日はむづかしき日にて候ふ。税關の調べ二度、手形の改め三度あるべし。さらば、平かに憩はせ給へとて、車主は手を帽底ぼうひに加へ、軽く頷きて去りぬ。

誘はれたる部屋は海に向へり。折しも風軽く起りて、窓の下には長き形したる波の寄ては又返すを見る。こゝの景色はカムパニアの景色とは全く殊なるに、いかなれば吾胸中には、少時の住家の事、ドメニカおうなの媪おうなの事など浮び出でけん。世の中は廣けれど、眞ごゝろより我上を氣遣ひ呉るゝ人、彼媪の如きはあらし。近きところに住みながら、屡 往きて訪ふことだになかりしは、我と我身の怪まるゝばかりなり。彼フランチエスカの君の如きは、我を愛し給はざるにあらねど、凡そ恩をきるものと恩をきするものとの間には、未だ報恩の志を果さざる限は、大なる溝渠ありて、縦たとひ優なしき情なの蔓草の生ひまつはりて、これを掩おほふことあらんも、能く全くこれを填うづむることなし。漸くにして、ベルナルドオとア

ヌンチヤタとの上に想ひ及ぶとき、われは頬ほの邊うらほの沾つふを覺えき。涙にやありし、又窓の下なる石垣いしがきに中あたりし波の碎け散りて面そこに濺そぎたるにやありし。

翌日は夜のまだ明けぬに、車に乗りてテルラチナを立ちぬ。領分境に至りて、手形改めあるべしとて、人々車を下りぬ。此の時始めて同行の人を熟視したるに、齡よほひ三十あまりと覺しく、髪の色あか明ひとみく瞳子青き男我目にとまれり。何處にてか見たりけん、心におぼえある顔なり。その詞を聞けば外國音とつくにおんなり。

手形は多く外國文とつくにおんもて認しためたるに、境守る兵士は故里ふるさとの語だによくは知らねば、檢閱は甚しく手間取りたり。瞳子青き男は帖てふ一つ取出で、あたりの景色を寫せり。げに街道に据ゑたる關

の、上に二三の尖れる塔とがを戴きたる、その側なる天然の洞穴、遠景たるべき山腹の村落、皆好畫料とぞ思はるゝ。

わが背後うしろよりさし覗きし時、畫工はわれを顧みて、あの大きな

洞ほらの中なる山羊やぎの群のおもしろきを見給へと指さし示せり。その

詞未だ畢をはらざるに、洞の前に横へたる束たばね藁わらは取り除のけられた

り。山羊は二頭づゝの列をなして洞より出で、山の上に登りゆけ

り。殿しんがりには一人の童子あり。尖りたる帽を紐もて結び、褐かちいろ色の

短き外套を纏ひ、足には汚れたる鞞くつしたはきて、鞋わらぢくを括り付けたり。

童は洞の上なる巖頭に歩を停めて、我等の群を見下せり。

忽ち車エツツリノ主の一聲の因マレデツトオ業を叫びて、我等に馳せ近づくを

見き。手形の中、不明なるもの一枚ありとの事なり。われはその

一枚の必ず我券なるべきを思ひて、満面に紅を潮さしたり。畫工は券の悪しきにはあらず、吏のえ讀まぬなるべしと笑ひぬ。

我等は車主の後につきて、彼塔の一つに上りゆき戸を排して一堂に入りて見るに、卓上に紙を伸べ、四五人の匍匐はらばふ如くにその上に俯したるあり。この大官人中の大官人と覺しく、豪えらさうなる一人頭を擡もたげて、フレデリックとは誰ぞと糺きうもん問せり。畫工進み出で、御免なされよ、それは小生わたくしの名にて、伊太利にていふフエデリゴなりと答ふ。吏。然らばフレデリック・サイズとはそこなるか。畫工御免なされよ。それは券の上の端に記されたる我國王の御名なるべし。吏。左様か。(と聲せきばらひ 咳 一つして讀み上ぐるやう。)「フレデリック、サイズ、パアル、ラ、グラアス、

ド、ヂヨオ、ロア、ド、ダンマルク、デ、ワンダル、デ、ゴオト。
 「さてはそこは「ワンダル」なるか。「ワンダル」とは近ごろ
 聞かぬ野蠻人の名ならずや。畫工。いかにも野蠻人なれば、こた
 び開化せんために伊太利には來たるなり。その下なるが我名にて、
 矢張王の名と同じきフレデリツクなり、フエデリゴなり。（「ワ
 ンダル」は二千年前の日耳曼種ゲルマンの名なり。文に天祐に依りて璉デンマ
 馬ルクの王、「ワンダル」、「ゴオツ」諸族の王など、記するは、
 彼國の舊例なり。）書記の一人語を挿みて、英吉利人なりしよと
 云へば、外の一人冷あざわら笑ひて、君はいづれの國をも同じやうに視
 給ふか、券面にも北方より來しことを記せり、無論魯西亞ロシア領なり
 といふ。

フエデリゴ、デンマルク璉馬、この數語はわが懐しき記念を喚び起し

たり。璉馬の畫工フエデリゴとは、むかし我母の家に宿り居たる

人なり、我を窟カタコムバ墓カバに伴ひし人なり。我がために畫かき、我に

ぎんどけいおく銀※を貽りし人なり。

關守る兵卒は手形に疑はしき廉かどなしと言渡しつ。この宣告の早

かりしにはフエデリゴの私ひそかに贈りし「パオロ」一枚の效驗もあ

りしなるべし。塔を下るとき、われフエデリゴに名謁なのりしに、こ

の人は想ふにたがはぬ舊相識にて、さては君は可哀かはゆき小アントニ

オなりしかと云ひて我手を握りたり。車に上るとき、人に請ひて

席を換へ、われとフエデリゴとは膝を交へて坐し、再び手を握り

て笑ひ興じたり。

われは相別れてより後の身の上をつゞまやかに物語りぬ。そはドメニカが家にありしこと、羅馬に返りて學校に入りしことなどにて、それより後をばすべて省きつるなり。我は詞を改めて、さてこれよりはナポリへ往かんとすと告げたり。

むかし畫工と最後に相見たるは、カムパニアの野にての事なりき。その時畫工は早晩一たび我を羅馬に迎へんと約したり。畫工は猶當時の言を記し居りて、我にその約を履ふまざりしを謝したり。君に別れて羅馬に歸りしに、故郷の音信ありて、直ちに北國へ旅立つことゝなりぬ。その後數年の間は、故里ふるさとにありしが、伊太利の戀しさは始終忘れがたく、このたびはいよく思ひ定めて再遊の途に上りぬ。こゝはわが心の故郷なり。色彩あり、形相ぎやうさう

あるは、伊太利の山河のみなり。わが曾遊の地に來たる楽しさをば、君もおもひ遣り給へといふ。

彼問ひ我答ふる間に、路程の幾いくばく何をか過ぎけん。フオンヂイの税關の煩ひをも、我心には覺えざりき。途上一微物に遭ふごとに、友はその詩趣を發揮して我心を慰めたり。この憂き旅の道づれには、フエデリゴこそげに願ひても無かるべき人物なりしなれ。友は往手ゆくてを指ぎしていふやう。かしこなるが我が懐かしき穢きたなきイトリの小都會なり。汝は故里の我が居る町をいかなる處とかおもへる。街衢がいくの地割の井然せいぜんたるは、幾何學の圖を披ひらきたる如く、軒は同じく出で、梯はしごは同じく高く、家々の並びたるさまは、檢閲のために列をなしたる兵卒に殊ならず。清潔なることはいかにも

清潔なり。されどかくては復た何の趣をかなさん。イトリに入りて灰色に汚れたる家々の壁を仰ぎ見よ。その窓には太だはなは高きあり、太だ低きあり、大なるあり、小なるあり。家によりては異様に高き梯の巔いたゞきに門口を開けるあり。その内を望めば、いとぐるま車の前に坐せる老女あり。側なる石垣の上よりは黄に熟したる木の實の重げに生なりたる枝さし出でたるべし。この參差錯落しんしざくらくたる趣ありてこそ、好畫圖とはなるべきなれといふ。

車のイトリに入らんとするとき、同じく乗れる一客は、これブラア・ヂヤヲロの故郷なりと叫びぬ。この小都會は削立さくりつ千尺の大岩石の上やにあり。これを貫ける街道は僅に一車を行るべし。こゝ等の家は、概ねおほむ皆平家ひらやに窓を穿うがつことなく、その代りには戸口を

大いにしたり。戸の内なる泣く小兒、笑ふ女子は、皆檻つづれを身に纏ひて、旅人の過ぐるごとに、手を伸べ錢もんを索む。馬の足搔あがきの早きときは、窓より首を出すべからず。石垣に觸るゝ虞おそれあればなり。時ありて出窓でまどの下を過ぐるときは、隧すゐだう道の中を行くが如し。唯ただ黒烟とまどの戸窓より溢れて、壁に沿ひて上るを見るのみ。

閩門りよもんを出づるに及びて、友は手を拍うちつゝ、美なる都會かな

と叫びぬ。車エツツリノ主は顧みて、否、盜ぬすびと人の巢うなり、警察わづらひの累絶

ゆる間なければとて、一たび市民の半を山のあなたに徙うつし、その跡へは餘所より移住せしめしことあり、されどそれさへ雜草くさむらの叢に穀物の種を蒔きしに似て、何の利益もあらで止みぬ、兎角は貧さの上の事にて、貧人の根絶やし出來ねば、無駄なるべしと、諭さとし

顔に物語りぬ。

げにも羅馬とナポリとの間ほど、劫掠ひはぎに便よきところはあらざるべし。奥の知られぬ橄欖オリワの蒼林、所々に開ける自然の洞窟より、昔がたりの一目の巨人が築きぬといふ長壁のなごりまで、いづれか身を隠し人を覗よふに宜よろしからざる。

友は 蔦つた 蘿かづら の底に埋れたる一堆たいの石を指ぎして、キケロの墓を見よといへり。是れ無慙むざんなる刺客せきかくの劍の羅馬第一の辯士の舌もたを黙もせしめし處なりき。(キケロの別墅べつしょはこゝを距ること遠からざるフォルミエにあり。該撤歿ケエザル後、アントニウス一派の刺客キケロを刺さんと欲す。キケロ身を以て逃れ、將まさにブルツスの陣に投ぜんとして、遂に刺客の及ぶところとなりぬ。時に西曆前四十

三年十二月七日なり。友は語をつぎて、車主はこたびもモラ、
 子、ガエタ（即ち昔のフオルミエ）の別墅に車を停むるならん、
 今は酒店となりて、眺望好きがために人に知らるといひぬ。

旅の貴婦人

山嶽は秀で、草木は茂れり。車は月桂ラウレオの街 肥えたる一夫人
 あるを見て進み近づき、扶たすけて下らしめ、ことさらに挨拶す。相
 識の客なればなるべし。夫人の顔色は太はなはだ美し。その瞳子ひとみの漆うるしの
 如きにて、拿破里ナポリうまれの人なるを知りぬ。

われ等の衆人と共に、門口に近き食堂に入る時、夫人は房奴に

語りぬ。こたびの道づれは婢一人のみ。例の男仲間は一人だになし。かく膽太く羅馬拿破里の間を往來する女はあらぬならん、奈何などいへり。

夫人は食堂の長椅子に、はたと身を倚せ掛け、いたく倦じたる體にて、圓く肥えたる手もて頬を支へ、目を食單に注げり。

「ブロデツトオ、チポレツタ、フアジヲロ」とか。わが汗を嫌ふをば、こゝにても早く知れるならん。否々、わが「アムボンポア」の「カステロ、デ、ロヲオ」の如くならんは、堪へがたかるべし。「アニメルレ、ドオラテ」に「フィノツキイ」些計あらば足りなん。まことの晚餐をばサンタガタにてしたゝむべし。こゝは早く拿破里の風の吹くが快きなり。「ベルラ、ナポリ」と

呼びつゝ、夫人は外套の紐を解き、苑そのに向へる廊わたしのの扉を開き、も
 ろ手を擴げて呼吸したり。（此詞の中には食單の品目に見えたる
 料理の稱多し。「ブロデツトオ」は卵の※きみを入れたる稀うすき肉羹汁スウプ、
 「チポレツタ」は葱、「ファジヲロ」は豆、「カステロ、デ、ロ
 ヲオ」は卵もて製したる菓子、「アニメルレ、ドオラテ」は犢こうしの
 臟腑の料理、「フイノツキイ」は香料なり。「アムボンポアン」
 は肥胖ひはん、「ベルラ、ナポリ」は美しき拿破里といふ程の事なり。）
 われは友を顧みて、拿破里は最早こゝより見ゆるかと問ひしに、
 友は笑ひて、まだ見えぬ、されどヘスペリアは見ゆるなり、アル
 ミダの奇くしき園そのは見ゆるなりと答へき。（譯者云。ヘスペリアは
 希臘語、晚國、西國の義なり。或は伊太利を斥さして言ひ、或は

西班牙スパニアを斥して言ふ。されどこゝには、希臘神話にヘスペリアと

いふ女神ありて、西方の林檎園を守れるを謂ふならん。アルミダ

はタツソオが詩中の妖艶なる王女なり。基督教徒を惑はし、丈ますら

夫をリナルドオをアンチオヒアの園に誘ひて、酒色に溺れしむ。

フエデリゴが詞の意は、山水を問ふこと勿れ、彼美人を見よとな
り。）

友と廊に出で、望むに、その景色の好きこと、想像の能く及ぶ

所にあらず。脚の下には柑子かうじ、檸檬リモネなどの果樹の林あり。黄金い

ろしたる實の重きがために、枝は殆ど地に低たれんとす。丈高き針

葉樹の園を限りたるさまは、北伊太利の柳と相似たり。この木立

の極めて黒きは、これに接したる末遙なる海うなばら原の極めて明あかけれ

ばなり。園のかたほとり一邊の石垣の方を見れば、寄せ來る波は古の神
 祠温泉いでゆの址あとを打てり。白帆懸けたる大舟小舟は、徐しづかに高き家の
 軒を並べたるガエタいりえの灣いりえに進み入る。(原註。ガエタはカエタよ
 り出でたる名なりといふ。是れヰルギリウスが詩の主人公エネエ
 アスめのとが乳媪いのちの名にして、此港を以て其埋骨の地となせるなり。) いりえうしろ
 灣の背後に一山の聳ゆるありて、その嶺には古壘壁を見る。友は
 左の方を指してエズヰ才いの烟を見よといふ。眸を轉じて望めば、
 火山の輪廓は一抹の輕雲の如く、美しき青海原の上に現れたり。
 われは小兒の情もて此景物を迎へ、心の裡うちに名状すべからざる喜
 を覺えき。

われ等は相携へて果園に下りぬ。われは枝上このみの果に接吻して、

又地に墜ちたるを拾ひ、毬まりの如くに玩もてあそびたり。友の云ふやう。げ
 に伊太利はめでたき國なる哉。北方の故郷に在りし間、常に我懷おもひ
 に往來ゆききせしものはこの景なり、この情なり。嘗て夢裡に呑みつる
 霞は、今うつゝに吸ふ霞なり。故郷の牧を望みては、此橄欖オリワの林
 を思ひ、故郷の林檎を見ては、此柑子かうじを思ひき。されど北海の緑
 なる波は、終に地中海の水の藍碧なるに似ず、北國の低き空は、
 終に伊太利の天そらの光彩あるに似ざりき。汝はわが伊太利を戀ひし
 情のいかに切なりしかを知るか。一たび淨土を去りたるものゝ不
 幸は、嘗て淨土を見ざりしものゝ不幸より甚し。我故郷なる璉デンマ
ルケ馬は美ならざるに非ず。山毛櫨なの林の鬱として空を限るあり。
 東海の水の闊ひろくして天つらなに連るあり。されど是れ皆猶なほ人界の美のみ。

伊太利は天國なり、淨土なり。かへす／＼も嬉しきは再び斯土このに來しことぞと云ふ。友はわれと同じく枝なる果に接吻し、又目に喜の涙を浮べて、我項うなじを抱き我額に接吻せり。

火は火を呼び、情は情を呼ぶ。われは最早此舊相識に對して、胸臆を開き緘かんもく嘿を破ることを禁じ得ざりき。われは我が羅馬に在りての遭遇を語りて、高くアヌンチヤタの名を唱へたり。人を傷けて亡命せしこと、身を賊寨ぞくさいに托せしことより、怪しき媼おうなの我を救ひしことまで、一も忌み避くることなかりき。友の手は牢かたく我手を握りて、友の眼光まなざしは深く我眼底を照せり。

忽ち啜すゝりなき泣なの聲こゑの背後うしろに起るあり。背後はキケロの温泉いでのゆの入口にて、月桂ラウレオザボン朱欒の枝繁りあひたれば、われは始より人あるべ

しとは思ひ掛けざりしなり。枝推し分けて見れば、彼温泉の入口なる石に踞して泣く女あり。そは前のさき拿破里の夫人なりき。

夫人は涙の顔を擧げて我に謝して云ふやう。我が無禮なめなるを怨ゆる

し給へ。君等の歩み寄り給ひしときは、われ早くこゝに坐して涼むさほを貪り居たり。御物語の祕ひめごと事と覺しきには、後に心付きしが、

せんすべなかりしなり。されど哀れ深き御物語を聞きつとこそ思ひまゐらすれ、人に告ぐべきにはあらねば、悪しく思ひ取り給ふなどいふ。われは間まの悪さを忍びて夫人に禮を施し、友と共に踵くびすを旋めぐらしたり。友は我を慰めて云ふやう。彼夫人の期せずして我等

と物言ひしは、或は他日我等に利あらんも知るべからず。斯く言へば土耳其トルコ人めきたれど、われは運命論者なり。且汝の語りし所

は國家の祕密などにはあらず。誰が心中の帳簿にも、此種の暗黒文字數葉なきことはあらざるべし。彼夫人の汝が言を聞きて泣きしは、或は他人の語中より自家の閱歷を聽き出し、他人の杯酒もて自家の磊塊らいくわいに澆そぎしにはあらずや。涙は己れのために出で易く、人のために出で難きこと、なべての情なればといひき。

我等は再び車に乗り途とに上りぬ。四邊あたりの草木はいよ／＼茂れり。車に近き庭園、田圃の境には、多く蘆薈ろくわいを栽うゑたるが、その高さ人の頭を凌あげり。處々の垂楊の枝は低たれて地に曳ひかんとせり。

日の夕ゆふべにガリリヤノの河を渡りぬ。古のミンツルネエ（羅馬の殖民地）は此岸にありしなり。我好古の眼まなこもて視るときは、是れ猶古いにしへのリリース河にして、其水は蘆荻叢間ろてきの黄濁流をなし、敗將マ

リウスが殘忍なるズルラに追躡せられて身を此岸に潜めしも、
 昨の猶きのふことくぞおもはるゝ。(紀元前八十八年ズルラ政柄せいへいを得つる
 時、マリウスこれと兵馬の權を争ふ。所謂第一内訌ないこう是なり。マ
 リウス敗れて此河岸に潜み、萬死を出で一生を得て、難を亞弗利
 加カに避けしが、その翌年土を捲きて重ねて來るや、羅馬府を陥
 れ、兵を縦はなちて殺戮さつりくせしむること五日間なりき。)此よりサン
 タガタまでは、まだ若干の路程あるに、闇やみは漸く我等の車を罩つま
 んとす。馭者は畜マレデツトオ生を連呼して、鞭策べんさく亂下せり。拿破里ナポリの
 夫人は心もとながりて、頻りに車窓を覗き、賊の來りて、行李を
 括くり付けたる索さくを截きらんを恐るゝさまなり。われ等は纔わづかに前面に
 火光あるを認めて、互に相慶したり。須臾しゆゆにして車はサンタガタ

に^{いた}抵りぬ。

晚餐の間、夫人は何事をか思ふさまにて、いともの静なりき。

さるをその目の断えずわが方に注げるをば、われ心に訝^{いぶか}りぬ。翌

朝車の出づべき期^ごに迫りて、われは一盞の珈琲^{カッフエ}を喫せんために、

食堂に下りしに、堂には夫人只一人在りき。優しく我を迎へて詞を掛け、われを悪しく思ひ給ふな、總べて思ひ設けぬ事なりしなればと云ふ。われは夫人を慰めて、否、あしき人に聞かれたりとは思ひ候はず、言はであるべき事をば言ひ給ふべき方ならねばと答へき。夫人。さなり。おん身はまだ我をよくも識り給はず。或は我を識り給ふ期^ごあらんも知るべからず。おん身は知らぬ大都會に往き給ふといへば、かしこにて一度我家におとづれ、我夫と相^さ

識うしきになり給はんかた宜しからん。交際は無くて協かなはぬものにて、
 又一たび誤りてあらぬ人と相結ぶときは、悔あるべきことなりと
 いふ。われは深くその好意を謝して、善人は隨處ことわざにありといふ諺
 の虚むなしからぬを喜びぬ。夫人は我側に寄りて、兼ねても聞き給ふ
 ならん、拿破里は少わかき人には危き地なりなど云ひ、猶何事をか告
 げんとせしに、フエデリゴも房へやより出でしかば、物語はこゝに絶
 えぬ。

我等は又車に乗りたり。今は車中の客も漸く互に打解けて、は
 かなよがりき世語よがりなどしつゝ拿破里の市まちに近づきぬ。偶うさぎうまの驢うさぎうまのに騎りた
 る一群の過ぐるあり。我友はこれを見て、いたくめでたがりたり。
 紅の上衣を頂より被りて、一人の穉をさなご兒をさなごには乳房ふくを啣くませ、一人

の稍 年たけたる子をば、腰の邊あたりなる籠この中に睡すらせたる女あり。又一家族を擧げて一驢の脊せきに托たくしたりと覺しく、眞中には男騎りて、背後なる妻は臂ひぢと頭とを夫の肩かたに倚よせて眠り、子は父の膝の間に介はさまれて策むちを手まさぐり居ゐたるあり。いづれもピニエルピニエルが風俗畫の抜け出でたるかと怪あやまるゝばかりなり。

空氣は鼠色にて雨少し降り。エズヰオエズヰオの山もカプリカプリの島も見えず。葡萄の纏まとひ付きたる高き果樹と白楊との間には、麥の露つゆけく緑なるあり。夫人我等を顧みて、見給へ、此野はさながらに饗應きやうおうのむしろなり、麪包パンあり、葡萄酒あり、果このみあり、最早わが樂たのしき市まちと美しき海との見ゆるに程ほどあらじといひぬ。

夕に拿破里に着きぬ。トレドトレドの街の壯觀は我前に横よこはりぬ。

(原註。羅馬及ミラノにては おほどほり 大 街 をコルソオと曰ひ、パレル

モにてはカツサロと曰ひ、拿破里にてはトレドと曰ふ。) 硝子燈

いろどと彩りたる燈籠とを點じたる店相並びて、卓つくゑには柑子かうじ無花果いちじゆくな

うづたかど堆く積み上げたり。道の傍には又魚蠟を焚き列ねて、見渡す限、

火の海かとあやまたる。兩邊の高き家には、窓ごとに床張り出し

たるが、男女の群のその上に立ち現れたるさまは、こゝは今も謝カ

ルネワレ

肉祭の最中にやとおもはるゝ程なり。馬車あまた火山の坑あなより

熔け出でし石を敷きたる街を馳はせ交かひて、間 馬のその石面なめちかの滑

なるがために躓つまづくを見る。小なる雙輪車あり。五六人これに乗り

て、背後には檻ぼろ褌着たる小兒をさへ載せ、又この重荷の小づけに

は、網床めくものを結び付けたる中に半ば裸なる ラツッアロオネ 賤 夫 のい

と心安げにうまいしたるあり。挽くものは唯だ一馬なるが、その足はかけあし驅歩なり。一軒の角屋敷の前には、焚火して、およぎばかま泓袴ボタンに扣鈕一つ掛けし中單着たる男二人、チヨキ對ひ居て骨牌を弄べり。風琴、「オルガノ」の響喧しく、女子のこれに和して歌ふあり。兵士、ギリシア希臘人、トルコ土人格人、あらゆるとづくにひと外國人の打ち雜りて、且叫び且走る、その熱鬧ねつたう雜沓ざつたふの状さま、げに南國中の南國は是なるべし。この嬉笑怒罵の天地に比ぶれば、羅馬は猶幽谷のみ、墓田のみ。夫人は手を拍うち鳴して、拿破里々々々と呼べり。

車はラルゴ、デル、カステル口に曲り入りぬ。(原註。拿破里ナポリ

おほどほり大街の一にして其末は海岸に達す。) 同じてんいつ溢、同じ喧けんが

う囂は我等を迎へたり。劇場あり。軒燈籠懸け列ねて、彩色せる

繪看板を掲げたり。輕かるわぎ技の家あり。その群の一家族高き棚の上
 に立ちて客を招けり。婦をみなは叫び、夫は喇叭らつぱ吹き、子は背後より長
 き鞭を揮ふるひて爺やぢやう嬢を亂打し、その脚下には小き馬の後脚にて立
 ちて、前に開ける簿冊を讀む眞似したるあり。一人あり。水夫の
 環坐せる中央に立ちて、兩りやうひぢ臂を振りて歌へり。是れ即興詩人
 なり。一翁あり。卷を開いて高く誦すれば、聽衆手を拍ちて賞讚
 す。是れ「オランドオ、フリオゾ」を讀めるなり。（譯者云。わ
 が太平記よみの類たぐひなるべし。讀む所はアリオストオの詩なり。）
 夫人は忽ちエズ中ちゆう才と呼びぬ。げに／＼廣こうぢの盡くる處に、
 彼の世界に名高き火山の半空に聳ゆるを見る。熔けたる巖いはほの山腹
 を流れ下るさま、血の創より出づる如し。嶺の上に片雲あり。そ

の火光を受けたる半面は殷あんこう紅なり。されど此偉觀の我眼に入りしは一瞬間なりき。車は廣こうちを横ぎりて、旅店「カアザ、テデスカ」の前に駐とまりぬ。店の隣には、小き傀儡場くぐつばあり。一人ありてその前に立ち、道化役プルチネルラにんぎやうの偶人を踊うらせ、且泣き且笑ひ、又可笑をかしき演説をなさしめたり。衆人は環めぐり視て笑へり。向ひの家の石級には一僧あり。船頭らしき、肩幅闊ひろく逞たくましげなる男に、基督の像を刻み附けたる十字架を捧げさせて説教せり。此方こなたには聽衆いと少し。

僧は目を瞋いからして傀儡師の方を見やりて云ふやう。斯くても精せい進じみび日なるか。天主に仕ふる日なるか。反省して苦行する日なるか。汝なんたち達だがためには、春の初より冬の終迄、日として謝肉祭カルネワレなら

ぬはなし。斯く跳り狂ひ笑み戯れて、一步一步地獄に進み近づく
なり。疾く奈落の底に往きて狂ひ戯れよといふ。僧の聲は漸く大
に、我耳はこの拿破里訛を聞くこと、一篇の詩を聞く如くなりき。
されど僧の叫ぶこと愈 大なれば、偶人の跳ること愈 忙しく、
群衆は舊に依りて傀儡師に面し談義僧に背けり。僧は最早え堪へ
ずして、石級を飛び下りさまに連なる男の手より聖像を奪ひ取り、
そを高くかざして衆人の間に分け入りたり。見よく。これがま
ことの傀儡なり。汝達に眼あるは、これを視んためなり。耳ある
はこれの教を聽かんためなり。「キユリエ、エレイソン」（主よ、
慈を垂れよの義にして、歌頌の首句）とぞ唱へける。聖像は流石
人に敬を起さしめて、四圍の群衆忽ち跪けば、傀儡師も亦壇を下

りて跪きぬ。

われは車の側に立ちてこれを見つゝ、心に神恩の深きと人心のやさしきとを思へり。フエテリゴは夫人のために辻の馬車を雇へり。夫人は友の手を握りて謝すと見えしが、その軟き兩臂は俄に我頸うなじを巻ききて、我唇の上には燃ゆる如き接吻を覺えき。

慰籍

友の眠に就きし後、われは猶やゝ久しく出窓に坐して、外との方かたを眺め居たり。こゝよりは啻たゞに廣ひろこうぢの隈くま々々、迄見ゆるのみならず、かのエズキオの山さへ眞向まむきに見えたり。夢の裡うちに移り來し

にはあらずやと疑はるゝ此境の景色は、われをして容易く臥床に
 上ることを得ざらしめしなり。目の下なる街は漸く靜になりて、
 燈火ともしびの數も亦減ぜり。最早眞夜中過ぎたるなるべし。

エズ申才たとへの山の姿は譬ば焰もて晝きたる松柏の大木の如し。直
 立せる火柱はその幹、火光を反射せる殷紅あんこうなる雲の一群ひとむらはそ
 の木の巔いたゞき、谷々を流れ下る熔巖ラワはその闊く張りたる根とやいふべ
 き。わがこれに對する情をば、いかなる詞もて寫し出すべきか、
 われは神と面相向おもへり。神の聲は彼火坑より發して直ちに我耳に
 響けり。神の威力、智慧、矜恤きょうじゆつ、愛憐は我胸に徹したり。そ
 の迅雷じんらい風烈を放ち出す手は、また一隻の雀をだに故なくして地
 に墮おとすことなきなり。わが久しき間の經歷は我前に現じて一瞬時

の事蹟に同じく、神の扶掖嚮導ふえききやうだうの絲は分ぶん明みやうに辨識せられ
 たり。われは敢て自家を以て否運の兒となさじ。神の禍わざはひを轉じて
 福さいはひとなし給へる迹あとは掩おほふ可からざるものあればなり。初めわれ不
 測の禍のために母上を喪うしなひまゐらせき。されど故わざとならぬ其罪を
 贖あがなはんとてこそ、車上の貴あてびと人は我に字を識り書を讀むことを教
 へしめ給ひしなれ。マリウチアとペツポとのわが身を争ひて、わ
 が全く寄邊よるべなき身の上となりしは、寔まことに限なき不幸なりき。され
 ど斯くてわれカムパニアの曠野あらのに日を送ることなくば、かゝる貴
 人の争いでか我を認め得給はん。此の如く因果の鎗くさりを手繰りもて行
 くに、われは神の最大の矜恤、最大の愛憐を消受せしこと疑ふべ
 からず。唯だ凡慮に測り知られぬは我とアヌンチャタとの上なり。

ベルナルドオが姫を得んと欲せしは卑陋ひろうなる色慾しよくにして、縦たとひ渠かれ一たびその願の成らざるを憂ふとも、渠は月日を費すことなくして、その失望を慰めその遺憾を忘れしならん。わが情はいと高くいと深くして、われ若し姫を獲たらんには、此世の中には最早何の欲望をも残さざりしならん。さるを姫は我を棄て、渠を取りたり。我黄金こがねなす夢は一旦にして塵芥ちんがいとなり畢をはぬ。こはそもいかなる故ぞや。此煩惱の間、我は忽ち「キタルラ」の音の街上がうじやうに起るを聞く。見下せば肩に軽く一領の外套を纏ひて、手に樂器を把とり、戀の歌の一曲を試みんとする男あり。未だ數彈ならざるに、對むかひの家の扉は響あなくして開き、男の姿は戸に隠れぬ。想ふに此人を待つものは、優しき接吻と回抱となるべし。われは星斗のきらめ

ける空を仰ぎ、又熔巖の影處々に紅くれなるを印したる青海原を見遣りたり。好し々々、我は我戀人を獲たり。我戀人は自然なり。自然よ。汝はわがためにその霽はれやかなる天そらを打明けて何の隠すところもなし。汝はそよ吹く風の優しきを送りて、我額我唇に觸るゝことを嫌はず。我は汝が美しさを歌はん、汝が我心を動す所以ゆゑんを歌はん。言ふこと莫なれ、汝が心の痕きずは尚血したゝを瀝らすと。針つらぬに貫かれたる蝶の猶なほその五彩の翼を揮ふるふを見ずや。落ちたぎつ瀧の水しぶきの沫と散りて猶なほ麗うるはしきを見ずや。これはこれ詩人の使命なり。この世は束つかの間の夢まなり。あの世に到らんには、アヌンチヤタも我も淨きよき魂たまにて、淨き魂は必ず相愛し相憐み、手に手を取りて神のみまへに飛び行かむ。

氣力と希望とは再び我胸に入り來れり。わが此より即興詩人と
 して世に立たんは、なか／＼に樂しかるべき事ぞと思ひ返されぬ。
 只だ猶心に懸るは、恩人なる貴人あてびとの思ひ給はん程いかゞ奈何なるべき
 といふ事なり。彼人はわれ舊に依りて羅馬にありて書ふみを讀めりと
 おもひ給ふならん。彼人のわが都を逃れしさまと我新境きやうがい界と
 を聞き知り給はんには、果して何とか言はるべき。われは今宵を
 過ごさで書を裁して、人々に我未來の事を認め許されんことを請こ
 ふことゝなしたり。我書には、子の母に言はんが如く、些いさゝかの繕ふ
 ことなく有の儘に、我とアヌンチヤタとの中を語り、我が一たび
 絶望の境に陥りて後、今又慰藉を自然と藝術とに求むるに至れる
 顛末てんまつを敘して、さて人々の憐を垂れてわが即興詩人となること

を許されんを願ひぬ。われはその答を得ん日までは、敢て公衆のために歌はざるべしと誓へり。これを書く時、涙は紙上に墜ちておまだら斑をなし、われは心の中に答書の至らんこと一月の間にあらんことを祈るのみなりき。書き畢りて、われは久し振にて心安く眠に就きぬ。

翌日フエテリゴはとある横町なる賃房かしべやに移り、己れは猶さきの獨逸宿屋ドイツなる、珍らしき山と海との眺ある一間に留まりぬ。われは聚珍館しうちんくわん（ムゼオ、ボルボニイコ）、劇場、公苑など尋ねめぐりて、未だ三日みかならぬに、早く此都會の風俗のおほかたを知ることを得たり。

考古學士の家

或日房カメリエリ奴エリは我に一封の書ふみをわたしたり。披ひらきて讀めば、博士マレツチイと夫人サンタとの案内状にして、フエデリゴ君をも伴ひて來ませとあり。初めはわれこは届先を誤りたる書ならずやと疑ひぬ。宿屋の人に博士はいかなる人ぞと問ふに、いと名高き學者にて、考古學とやらんに長たけ給ふと聞ゆ、その夫人近きころ羅馬より歸り給ひしなれば、客人は途上にて相識になり給ひしにはあらずやといふ。嗚呼あゝ、われこれを獲たり。これこそ前の拿破ナポ里リの貴婦人なるらめ。

夕暮にフエデリゴを誘ひて往きぬ。いと廣き間に客あまた集へ

り。^{なめらか}滑なる大理石の床は、蠟燭の光を反射し、鐵の格子を繞^{めぐ}らしたる火鉢（スカルヂノ）は、程好き^{あたゝか}煖さを一間の内に^{わか}頒てり。

サンタと名^な告れる夫人は、嬉^{すこ}しげに我等二人を迎へて、一坐の客達に引合せ、又我等に、毫^{すこ}しも心をおかで家に在る如く振舞はんことを勧めたり。夫人は今宵空色の衣^{きぬ}を着たるが、いと善く似合ひたり。我等は若し此人をして少し瘦せしめば、第一流の美人たるべきものをとさゝやきたり。

我等は夫人に促されて坐せり。此時一少女ありて「ピアノ」に對^{むか}ひ、短歌^{アリア}を唱^{うた}ひ出せり。その曲は偶々《たま〜》アヌンチャタがチドに扮して唱ひしものと同じけれども、その力を用ゐる多少と人を動^{うごか}す深淺とは、固^{もと}より日を同うして語るべきならず。わ

れは只だ衆のなすところに倣ならひて、共に拍手したるのみ。少女をとめは又輕快なる舞の曲を弾じ出せり。男客をとこきやくの三人四人は、急かたはらに傍はらなる婦人を誘いざなひて舞ひはじめたり。われは避けて、とある窓龕さうがんに躲かくれたり。

初めわれは席に入りしとき、瘦せたる小男の眼鏡懸けたるが、忙せはしげに此間こゝに出入するを見たり。この男わが窓龕さうがんにかくれしを見て、我前に立ち留まり、慇懃いんぎんなる禮をなせり。われはその何人なるを知らねども、姑しぼらく共に語らばやおもひて、エズ申まを才さいの山の噴火の事を説き、その熔巖の流れ下る状さまなど、外より來るもの、目を驚かす由を云ひたり。小男の答ふるやう。否。今の噴火の景などは言ふに足らず。プリニウスの書ふみに見えたる九十六年の

破裂は奈何いかげなりけん。灰はコンスタンチノポリスにさへ降りしなり。近き年の破裂の時も、我等拿破里人は傘さして行きしが、均ひとしく灰降るといふも、拿破里に降るとコンスタンチノポリスに降るとは殊なり。何事によらず、今の世は遠く古の希臘ギリシア羅馬ロオマの世に及ばずと知り給へ。澆季げうきの世は古に復さんよしもなしと、かこち顔なり。われ芝居話に轉ずれば、彼は遠くテスピスの車さかのぼに遡りて、（世に傳ふ、テスピスは前五四〇年頃の雅典アテエンびとにして、舞臺を車上にしつらひ、始て劇を演じたりと）希臘俳優かぶの被りぬといふ、悲壯劇の假面と滑稽劇との假面とを列舉せり。われ又近頃この頃禁軍の檢閲ありしを聞きつと噂すれば、彼は希臘の兵制を論じて、マケドニア歩兵フアランクスの方陣さまの操練を細敘すること目撃の状さまの如く

なり。既にして彼は我に考古學又は美術史を研究し給ふやと問ひぬ。われ答へて、己れは専門の學をなさずと雖、凡そ宇宙の事は一として我研究の資料ならぬはなし、己れは詩人たらんと心掛くるなりと云へば、彼手を拍ちて喜び、ホラチウスが句を朗誦し、我琴を以てヨニスヨニスの神の龜甲琴リテに比したり。

忽ちサンタ我前に來て云ふやう。さては終に生捕いけどられ給ひしよ。

おん身等の物語は、定めてセソストリス時代の事なるべし。(希

臘傳説に見えたる埃エヂプト及王の名なり。前十四五紀の間の名ある王

二人の上を混じて説けり。)客人まらうどには現世の用事あり。かしこ

に少わかき貴婦人の敵手あひてなくて寂しげなるあり。願はくは誘ひ出して

舞の群に入り給へとなり。われ遂しりごみ巡して、否われは舞ふこと能

はず、曾かつて舞ひしことなしと答ふれば、サンタ重ねて、家のある
 じたる我身おん身に請はゞ奈何いかにといふ。われ。まことに濟まぬ事
 ながら、われ若し強ひて踊り出では、おのれ一人つまづ跌き轉ぶのみな
 らず、敵手の貴婦人をさへひ拉き倒すならん。夫人打ち笑ひて、そ
 は好き見ものなるべしといひつゝ、フエデリゴの方に進み近づき、
 直ちに伴ひて舞の群に入りぬ。小男は我を顧みて、氣輕なる女な
 り、されど貌かほは醜からず、さは思ひ給はずやといふに、我はまこ
 とに仰おほせの如く、めでたき姿なりと讚め稱たへき。此よりいかなる話
 の運はこびなりしか知らねど、我等二人は忽ち又古のエトルリヤ人（昔
 羅馬の北に住みし民）の遺し、陶器すゑものの事を論ぜざるべからざる
 ことゝなりぬ。彼は此地の聚珍館内なる瓶へい又は壺の數々を擧げて、

これに畫きし畫工に説き及ぼし、次いでその畫工の技巧を辯明したり。此等の陶畫すゑものゑは、皆濕に乗じて筆を用ゐるものなれば、

一點一畫と雖、漫然これを下すべきにあらずなど云へり。彼は猶つまびらか其詳なるを教へんために、不日我を聚珍館に連れ往かんと約せり。

夫人は再び我前に來て、さては論文はまだ結局とならぬにや、以下次號とし給へと呼び、急に我手を把りて拉き去りつゝ、聲を低うして云ふやう。おん身は餘りに人好きにはあらずや。我夫はいつも此の如くなれば、うるさき時は忍びて聽き給ふには及ばず。おん身の兎角沈み勝になり給ふは悪しき事なり。人々と共に樂み給へ。いざ我身おん相手となるべければ、何にても語り聞せ給へ。こゝに來給ひてより、何をか見給ひし、何をか聞き給ひし、何を

か最もめでたしと思ひ給ひしといふ。われ。兼ておん身の告げ給ひしに違はず、拿破里はいとめでたき地なり。今日の午過ぎなりき。獨り歩みてポジリツポの巖窟いはやに往きしに、葡萄の林の繁れる間に古寺の址あとあり。そこに貧しき人住めり。可哀げなる子供あまた連れたる母はなほ美しき女なりき。我は女の注つぎくれたる葡萄酒を飲んで、暫くそこに憩ひしが、その情その景、さながらに詩の如くなりきと語りぬ。夫人は示ひとさし指ゆびを豎たて、笑ゑみつゝ我顔を打守り、油斷のならぬ事かな、さるいちはやき風流みやびをし給ふにこそ、否々、面をあかめ給ふことかは、君の齡よはひにては、精進日せじみびの説法聞きて心を安じ給ふべきにはあらぬものとさゝやきぬ。

夫婦の上にて、此夕わが知ることを得たるところは、いと少か

りき。されどサンタが性の拿破里婦人の特色と覺しく、語を出すことばに輕快にして直ちよくせつ截せつなる、人に接するに自然らしく情ありげなるは、深く我心に銘せり。その夫は博學の人と見えたり。共に聚珍館に遊ばんには、これに増す人あるべからず。

われは次第に足近く彼家に出入するやうになりぬ。サンタの待遇は漸く厚く親くなりて、われは早くも心の底を打明けて此婦人に語りぬ。後に思へば、われは世馴れぬ節多く、男女なんによの間の事などに昧くらきは、赤子に異ならぬ程なれば、サンタの如き女に近づくことの、多少の危険あるべきを知るに由なかりしなり。サンタが夫は卑しき饒舌ぜうぜつか家ならずして、まことに學殖ある人なりしこと、此往來ゆききの間に明になりぬ。

或日われはサンタに語るに、アヌンチャタと別れし時の事を以てせり。サンタは我を慰めて、ベルナルドオの心ぎまを難じ、又アヌンチャタの性をさへさがしおとしめ言へり。そのベルナルドオを難ずる詞は、多少我創痍さういに灌ぐ薬油となりたれども、アヌンチャタをおとし貶むる詞は、わが容易たやすく首肯し難きところなりき。

サンタのいふやう。彼女優をばわれも屡見き。舞臺に上る身としては、丈餘たけりに低く、肌餘りに瘦せたりき。拿破里にありても、若き人々の崇拜よのつね尋常ならざりしが、そは聲の好かりしたためなり。アヌンチャタが聲は人を空想界に誘ひ行く力ありき。而してその小く瘦せたる身も亦空想界に屬するものゝ如くなりしなり。おん身若し我言を非たがへりとし給はゞ、そは猶肉身なくて此世に在

らんを好しとし給ふごとくならん。假令われ男に生るとも、抱かば折るべき女には懸想せざるべしといへり。われは覺えず失笑せり。想ふにサンタは話の理に墜つるを嫌ふ性なれば、始より我を失笑せしめんとて此説をなしゝならんか。奈何といふにサンタもアヌンチャタが品性の高尚なると才藝の人に優れたるとをば一々認むといひたればなり。

或時われは詩稿を懷にして往きぬ。こは拿破里に來てよりの近業にて、獄中のタツソオ、托鉢僧など題せる短篇の外、無題一首ありき。われは愛情の犠牲なり。わが曾て敬し曾て愛しつる影像是、皆碎けて塵となり、わが寄邊なき靈魂は其間に漂へり。われはサンタに向ひ居て詩稿を讀み始めしに、未だ一篇を終らずして、

情迫り心激し、われは嗚咽をえつして聲を續つぐことを得ざりき。サンタは我手を握りて、我と共に泣きぬ。わがサンタに親むことは、此より舊に倍したり。

サンタの家は我第二の故郷となりぬ。われは日ごとにサンタと相見て、日ごとに又その相見ることの晩おそきを恨みつ。この婦人の家にあるさまを見るに、其戲謔も愛すべく其氣儘も愛すべし。これをアアンチャタの一種近づくべからず褻なるべからざる所ありしに比ぶれば、固もとより及ぶべくもあらねど、かの捉へ難き過去の幻影には、最早この身近き現在の形ぎやうさう相しりぞを斥くる力なかりしなり。

或時我は又サンタと對坐して語り。夫人。近ごろポジリツポの眺好き家と顔好き女とを尋ね給ひしか。われ。否、前後二たび

往きしのみ。夫人。女は最早餘程おん身になじみしならん。子供は案内者に雇はれ、主人は漁すなどりに出で、在らざりしにはあらずや。用心し給へ、拿破里ナポリの海の底は、やがて地獄なりといへば。われ。否、我心を引くものは唯景色のみなり。かの賤しづのめ女いかに美しとて、決して我を誘ひ寄すること能はざるべし。夫人。吾友よ、われは明におん身の心を知れり。曩さきにはその心に初戀の充きざしたるため、些の餘地あひてだになかりき。われは君が初戀を陋いやしとせざるべし。されどその敵手あひてなる女の、君の直きが如く直からざりしは、争ふべからざる事實なるべし。否、我話の腰を折り給ふな。さてその初戀の眞あたひとの價は兎まれ、角かくまれ、その君が心に充したるもの、今や無慙むざんにも引き放ちて棄てられ、その跡は空虚になりぬ。

この空虚は何物もて填むべきか。君は昔こそ書を讀み空想に耽りて自ら足りりとし給ひけめ、彼女優の一たび君を現實世界に引き出したる上は、君も亦我等と同じく血あり肉ある人となり給ひて、その血その肉はその本來の權利を求めでは止まざるべし。少壯幾時かある。男兒何の敢てすべからざる事かあらん。されば我に物隠さんとし給ふには及ばざるにあらずや。われ。おん説の前半は、げにさもあるべく思はれて、空虚の事などは首肯しても好し。されどそを填めん策をば未だ講ぜしことあらず。夫人。さらば君は猶我説を問はんとし給ふか。君の既に一たび空想を出でながら、猶再びこれに還りて、一個の空想人物とならんとし給ふが怪しきなり。アヌンチャタは君が理想の女ならずや。高尚なる人物なら

ずや。それすら空想人物のアント二オの君を棄て、人柄下りたるベルナルドオを取りしなり。アヌンチヤタも男欲しかりしなり。斯く言ひ掛けて、サンタは愛らしき聲して笑ひ、おん身の餘りに罪なき性さがなるため、我に女の口より言ひ難き事さへ言はしめ給ふこそ憎はじけれとて、指もて我頬を弾はじきたり。

旅店に還りて獨り思ふに、サンタの我を評する言は、昔ベルナルドオの我を評せし言と同じ。此頃又フエデリゴの話聞きしに、その羅馬にありし日の經歷には、我の夢にだに知らざるやうなることもありて、賤いやしきマリウチアさへその事に與あづかれりといふ。世の人はわが厭いやひおそるゝところのものを悦よろこび樂たのむにや。アヌンチヤタの我を棄て、ベルナルドオを取りしなどは、現げにもこれを證

して餘あるが如くなり。果して然らばアヌンチャタは我感情を愛して我意志を嫌ひしにやあらん。あらず、わが意志の闕乏けつぼうを嫌ひしにやあらん、いと覺束おぼつかなく心こころもと許なき事にこそ。

絶交書

拿破里ナポリに來てより既に一月を經ぬ。さるにアヌンチャタとベルナルドオとの上に就きては、何の聞くところもあらず。或夕一封の書は到りぬ。何人のいかなる便するにかと、打ち返してこれを見るに、印はボルゲエゼ家の印にして、筆は主公の筆なり。われは心に聖母マドンナを祈りつゝ、開いてこれを讀みたり。其文に曰く。

御書状拜讀 仕候つかまつりそろ。素と拙者の貴君の御世話可致いたすべくと決

心候節、貴君の爲めに謀候はかりは、當地に於いて正當なる教育を受

けられ、社會に益ある一人物となられ候様にと希望候儀これあに有

之候り。然處しかるところ貴君の行跡全く此希望と相あひそむき反候は、今更

是非なき次第と諦あきらめ念候まうしより外無之候。當初御萱堂不幸之砌みぎり

存寄ぞんじよらざる儀とは申ながら、拙者の身上共禍因と連係候故、

報謝の一端にもと志候御世話も、此の如く相終候上は、最早債

をつぐのふだを償なひ券を折候と同じく、何の恩讐おんしうも無之、一切事ことずみ濟みと看

做候なて宜よかるべしと存候。然上しかるうへは即興詩人と爲り藝人と爲

りて公衆の前に出でられ候とも、拙者に於いて故障等可申には

無之候。唯此際申入置度は、後日貴君の拙者一家に於ける從來

の關係等、一切口外下さる間敷儀ましきに御座候。生涯當家の恩義忘却致さずとは先年度々申聞けられ候處に有之候へども、拙者に報ずる所以の最大事件たる學問修行をば塵芥の如く棄てられ候て、今は其最小事件即ち拙者を呼ぶに恩人を以てせられ候儀さへ、拙者の心いさぎよしに屑とせざるものと成果候段なりはて、歎息の外無之候。草々不宣。

われは血の胸に迫るを覺えて、兩手もろては力なく膝の上に垂れたり。泣かば心鎮まるべけれども涙出でず、祈らば力着くべけれども語ことば出でず。我は悶絶せる人の如く、頭を卓上に支へて坐すること良
 《やゝ》久しかりしが、其間何の思ふところもあらざりき。われは痛苦をだに明には覺えざりしなり。只だ心の底には言ふべか

らざる寂しきを感じて、今は聖^{マドンナ}母さへ世の人と同じく我を見放し給ふかと疑ひおもへり。

フエデリゴはこゝに來ぬ。進みて我手を握りて云ふやう。病めるか、アントニオ。獨り物思ふは悪しき事なり。汝はアヌンチャタを失ひて不幸なりといへど、我は汝のアヌンチャタを得て幸なるべかりしや否やを知らず。我經歷に徴するに、大抵わが遭逢せし所は、後に顧みるにわが最も宜^{よろ}しき所なりし也。然れども運命の人を引き^{すこぶ}頗る手荒きものにて、人はこれを痛苦とし不幸とするなりといふ。我は詞なくて、卓上の書状を指し、友のこれを讀む間、これに背^{そむ}きて涙を拂ひつ。友は我肩を撫で、泣くが好し、泣かば心落着くべしと云へり。暫しありて友は我に、此書状を見

たる後、既に思ひ定むる所ありやと問ひたり。此時われは忽ち思
 ひ付くよしありて、友に向ひて語り出でぬ。聞け吾友、われは僧
 とならんとす。我は幼きより聖母マドンナに仕へたるが、今思へば淺か
 らぬ縁えにしありしならん。聖母の慈悲は廣大なれば、縦たとひ一たび我を
 棄て給ふとも、いかでか我懺悔を聞き給はざることあらん。われ
 は空想人物にて、汝等と同じからず。世間に立ち交まじるとも、何の
 益かあるべき。若しかじ、今の機到り縁熟せるを幸として、平和を
 寺院の中に求めんには。友。おろかなり、ア|ントニオ。否運ひうんに遭あ
 ひて志を屈せずしてこそ人たる甲斐はあれ。汝の氣力あり技倆あ
 るを、傲慢なる羅馬の貴人あてびとに見せよ、世間に見せよ。詩人は賤いや
 しき業わざにあらず。汝は才あり學あればこそ、詩人とならんとは思

ひ立ちしなれ。汝が前途は多望なり。されどわれおもふに、わが
 斯く辭ことばを費すはいたづら事にはあらずや。汝が僧とならんといふ
 は、けふの黄たそがれ昏の暗黒なる思案にて、あすは旭日の光に觸れて
 泡沫のごとく消え去るべきものにはあらずや。兎まれ角まれ、汝
 が病をばわが手ぬかりにて長じたりと覺おぼし、汝は獨り籠り居て蟲
 をおこしたるならん。あすは車一輛こ倩ひて、エルコラノ、ポムペ
 イに往き、それよりエズエズ才才の山に登るべし。先づ今宵は大路トレドま
 で出で、面白く時を過さん。世の中は驅かけ足あしして行く如し。而
 して人々のおのが荷を負ひたり。鉛の重さなるもあり。翫おも具ちやと
 一般なるもあり。友は斯く語りつゝ我を促し立て、出で行かんと
 せり。嗚呼、我にも猶此の如く慰め呉るゝ友あるこそ嬉しけれ。

我は黙して帽を戴き、友の後に跟きて出でぬ。

好機會

戸を出づれば小屋掛こやがけの小劇場より賑かなる音樂の聲聞ゆ。われ等二人は群集の間に立ちてその劇場の状さまを看たり。夫婦と覺しきなんによ男女、表おもてをのみ飾りたる衣を纏まとひて板敷の上に立ちたるが、客を喚よぶことの忙しさに、聲は全く噎かれたり。色蒼ざめたる一童子「ピエロオ」（滑稽役）の服を着けて、悲しげに「オオリノ」弾けば、姉妹なるべし、少女をとめ二人のこれを繞めぐりて踊るを見る。哀なるかな此人々。その運命のはかなきこと我と同じきなるべし。我

は大息ためいきを抑へて友の肩よに倚りたり。友は慰めて云ふやう。物思ものもひ
 も好き程にせよ。暫くこの邊あたりを漫歩そゞろあるきして、汝が目の赤きを風
 に吹き消させ、さて共にマレツチイ夫人の許に往かん。夫人は汝
 と共に笑ひ共に泣きて、汝が厭ふをも知らぬなるべし。こは我が
 能くせざるところにして夫人の能くするところなり。いざ／＼と
 勧めつゝ、友は我を拉ひきて街上を行き巡り、遂に博士の家に入り
 ぬ。

夫人は出で迎へて、好くこそ來給ひたれ、君等の定さだめの日を待た
 で來給はんは何時いつなるべきと、兼ねてより思ひ居たりといふ。友。
 わがアントニオは又例の物の哀あはれといふものに襲はれ居れば、そを
 少し爽かなる方に向はせんは、おん宅ならではと思ひて參りしな

り。明日は共にエルコラノとポムペイとに往きて、エズ聃才の山にも登らんとす。折好く噴火の壯觀あれかすと願ふのみといふ。博士聞きて友に對ひて云ふやう。そはいと好き消遣せうけんの法なり。われも暇いとまあらば共にこそ往かまほしけれ。エズ聃才に登らわづらんは煩はしけれど、ポムペイの發掘の近状を見んこと面白かるべし。われはかしこより彩色ガラスうつはの硝子器數種を得たれば、この頃じだいそれを時じだい代別わけにして小論文一篇を作りぬ。今君に見せて、彩色に關する二三の疑を質たゞさばやと思ふなり。アントニオ君はしばし妻の許に居給へ。後には集りて一瓶の「ファレルノ」(ファレルナに産する葡萄酒)を傾け、ホラチウスが詩を歌はんと云ふ。かくて主人は友を延ひいて入り、我をばサンタ夫人の許に留め置きぬ。

夫人。君は又新しき詩を作り給ひしならん。君が面を見るにその經營慘憺とやらんいふことの痕深く刻まれたる如きを覺ゆるなり。さきにはタツソオの詩を誦ずして聞せ給ひしが、その句は今も我懷おもひに往來して、時ありては獨り涙を墮おとすことあり。そはわが泣蟲なるためにはあらず。など少しく氣を霽はれやかにして我面を見て面白き事を語り聞せ給はざる。尚默もだして居給ふか。若し言ふべきことなくば、わがこの新しき衣きぬをだに響ほめ給へ。好く似合ひたるにあらずや。體にひたと着つきてめでたからずや。詩人はかゝる些細なる事をも心に留めでは叶はぬものなり。我姿のすらりと痩せて「ピニヨロ」の木の如くなるを見給はずや。われ。そは直ちに心付き候ひぬ。夫人。おん身はまことに世辭せじ好き人なり。我姿は

いつもの通りなり。衣は緩く包みし袷の如し。否々、面を赤うし
 給ふことかは。おん身も年若き男達の癖をばえ逃れ給はずと思は
 る。今少し多く女子をなごに交り給へ。われ等はおん身を教育すべし。
 おん身の友と我夫とは、今その考古學の深みに嵌まり居て、身動
 きだにせざるならん。いざ共に「フアレルノ」を飲まん。後には
 人々と同じく改めて杯を把り給ひても好しといふ。夫人に斯く勸
 められて、われは急に酒飲むことを辭いなみ、世の常の物語せばやと、
 一言二言いひ試みしが、胸の憂ことほじに詞淀みて、いかにも心苦しけれ
 ば、夫人よ恕ゆるし給へ、われは今快からず、さるを強ひて物語せば、
 そは徒いたづらにおん身を惱ますに近からんと云ひつゝ、起ちて帽を取ら
 んとせしに、夫人は忽ち我手を把りて再び椅子に着かしめ、優し

く我顔を目守りて云ふやう。今は歸し參らせじ。おん身は何事にか遭ひ給ひしならん。心を隔て給ふことかは。わが氣輕なる詞つきは、おん身の心を傷つけたらんも計られねど、そは稟うまれつき賦なれば、是非なし。われはまことにおん身の上を氣遣へり。何事にか遭ひ給ひしならば、包まずわれに語り給へ。故里ふるさとの文をや得給ひし。ベルナルドオが創のためにみまかりしにはあらずやと云ふ。初めわれは主公の書ふみを得たることを此人に告げん心なかりしが、斯く問はれて心弱く、有の儘に物語りぬ。さて詞を續ぎて、われは全く世に棄てられたり、世には一人の猶我を愛するものなしと歎なげんで叫びし時、否、アント二才と云ふ聲耳に響きて、われは温き掌の我額を撫で、忽たちまち又熱き唇の其上に觸るゝを覺えき。

否、アントニオ猶おん身を愛する人あり。おん身は善き人なり、可哀き人なり。夫人はかく言ひつゝ、もろ手もて我頭を抱き、その頬は我耳の邊に觸れたり。我血は湧き返りて、渾身震ひ氣息塞がりたり。此時人の足音して一間の扉は外より開かれ、主人はエデリゴと共に入り來りぬ。サンタ夫人は徐に友を顧みて、好き處に來給ひたり、アントニオ君は熱を患へ給ふにやあらん、心地悪しとのたまひつゝ、忽ち青くなり又赤くなり給ふ故、安き心はあらざりきなど云ひ、又我に向ひて、いかに、今は前の如くにはあらざるならんと云ふ。その面持すこしも常に殊ならず。われは心の底に、言ふべからざる羞と憤とを覺えて、口に一語をも出すこと能はざりき。博士は例の古語を引きて、客人心地はいかな

るにか、クピド（愛の神）の磨く箭やにや中あたり給ひしなどいひつゝ、
 われ等に酒を勧めたり。夫人はわれと杯を打うちあはせて、意味あり
 げなる目を我面に注ぎ、これを乾ほさばや、好機よきをり會のためにと云ふ
 に、我友うなづ點頭うなづきてげに好機會は必ず來べきものぞ、屈せずして待
 つが丈ますらを夫の事なりと云ふ。この時博士も亦杯を擧げて、さらば
 我もその好機會のために飲まんと云ひぬ。夫人は高く笑ひて手も
 て我頬を撫でたり。

古市

翌朝フエテリゴは博士マレツチイと共に我客舎うながに來て促し立て、

打ち連れて馬車に上りぬ。車は拿破里ナポリの入江を匝めぐりて行くに、爽かなる朝風は海の面より吹き來れり。友は遙にエズエズ才才の山を指さして、あの烟の渦巻き騰あがる状さまを見よ、今宵は興ある遊となるべきぞと云ひしに、博士首かうべを掉ふりて、かばかりの烟は物の數ならず、紀元七十九年の噴火の時を想ひ見給へと云ひぬ。拿破里の町はづれを過ぎて、程なくサンジヨワンニイ、ポルチチ、レジナレジーナの三市の相連れるを見る。そのさま一市をなせるが如し。レジナレジーナに至りて車を下れば、われ等の踐ふめる所の脚下は、早く是れ熔巖熱灰のために埋没せられしエルコエルコラノの古市なり。

博士に延ひかれて一家に入れば、その中庭に大なる枯井あるを見

る。井の裏には螺旋梯らせんばしを架したり。博士われ等を顧みて云ふや
 う。見給へ人々。これこそ紀元千七百二十年エルボヨフ公の掘ら
 せし井なれ。穿つこと僅に數尺にして石人現れければ、その工事
 は遽にはかに止められき。これより人の手を此井に觸れざること三十年。
 西班牙王カルロス此こゝに來て猶深く掘らせしに、見給へ、かしこの
 奥に見ゆる石階に掘り當てたりと云ふ。われ等はその井をさし覗のぞ
 くに、日光はエルコラノの市まちなる大劇場の石階の隅を照せり。案
 内者は燭を點して、われ等をして各これを手にしせしめつ。降り
 て石階の上に立てば、誰か能く懷舊の情の胸間に叢むらり起るを覺え
 ざらん。是れ千七百載の昔、羅馬の民の集つどひ來て、齊ひとしく眸ひとみを舞
 臺の光景に凝こらし、共に笑ひ共に感動し共に喝采歡呼せし處なるに

あらずや。側なる低く小き戸を過ぐれば、闊ひろき廊わたあり。われ等は
オルヘストラ舞庭に下りぬ。(舞臺と觀棚さしきとの間に在り。)樂人房、衣房、
 舞臺などを見めぐるに、其結構の宏壯なるは、深く我心を感ぜし
 めき。燭光の照すところは數歩の外に出でざれども、われはその
 大き「サン、カルロ」座に踰こゆべしと想ひぬ。われ等の四邊あたりは空
 虚幽暗寂寥にして、われ等の頭上には別に一箇の熱ねつ鬧たう世界ある
 なり。世には既に死したる人のわれ等の間に迷ひ來て相交ること
 ありとおもへるものあり。われは今これに反して、獨り泉下に入
 りて身を古の羅馬人の精靈の間に寘おきたりとおもひぬ。われは人
 々を促して梯を登りぬ。

右に轉じて一小巷に入れば、古市の一小部の發掘せられたるあ

り。數條の徑みち、小房多き數軒の家あり。その壁には丹青の色残り。エルコラノの市の天日に觸るゝ處は唯だこれのみなりといへば、工事の未だはかどらざることポムペイたぐひの比たぐひにあらざと覺し。

レジナを背にして車を馳すれば、目の及ばん限、只だ大海の忽ち凝こりて黒がねとなれるかと疑はるゝ平原を見るのみ。半ば埋れたる寺塔は寂しげに道の側に立てり。處々に新に造りたる人家と葡萄園ぶどうばたけとあり。博士われ等を顧みて云ふやう。この境の慘状をばわれ目まのあたり見ることを得たり。われは猶幼かりき。この車轍の過ぐるところは、其時火の海をなし、その怖ろしき流は山岳の方より希臘塔市（トルレ、デル、グレコ）の方へ向ひたり。葡萄園は多く熔巖おほに掩はれ、父とわれとの立てる側なる岩は其光

を受けて殷紅あんこうなり。寺院の火海の中央に漂へるさまはノアの船に異ならず、その燈の未だ滅せざるが微かに青く見えたり。われは生涯その時の事を忘れず。父の焼け残りたる葡萄を摘みてわれに食はせしは、今も猶昨きのふのごとしと云ひぬ。

凡そ拿破里ナポリの入江の諸市は、譬へば葡萄の蔓の梢より梢にわたりて相連つらなれるが如く、一市を行き盡せば一市又前に横よこたはる。(希臘

塔市の次は即トルレ、デル、アヌンチヤタの市なり。)道は此熔巖の平野に至るまで、都會の大おほどほり街に異ならず。馬に乗る人、驢うまぎうまに騎る人、車を驅る人など絶えず往來して、その間には男女なんによ打ち雜りたる旅人の群の一しほの色彩を添ふるあり。

初めわれはエルコラノもポムペイも深く地の底に在りと思ひき。

されど其實は然らず。古のポムペイは高處に築き起したるものにして、その民は葡萄園のあなたに地中海を眺めしなり。われ等は漸く登りて、今暗黒なる燼餘の灰壘を打ち抜きたる洞穴の前に立てり。洞穴の周圍には灌木、草綿など少しく生ひ出で、この寂しき景に些の生色あらせんと勉むるものゝ如し。われ等は番兵の前を過ぎて、ポムペイの市の口に入りぬ。

博士マレツチイは我等を顧みて、君等は古のタチツスをもプリニウスをも讀み給ひしならん、凡そ此等の書の最も好き註脚は此市なりと云ひたり。われ等の進み入りたる道を墳墓街と名づく。あまたの石碣並び立てり。二碑の前に彫鏤したる榻あり。是れポムペイの士女の郊外に往反するときしばらく憩ひし處なるべ

し。想ふに當時この榻こしかけに坐するものは、碑碣のあなたなる林木郊野を見、往來織るが如き街道を見、又波靜なる入江を見つるならん、今は唯だ窓　當時普請ふしんの半ばなりし家ありて、彫りさしたる大理石塊、素燒の模型などその傍かたはらに横れり。

われ等は漸くにして市の外垣に到りぬ。これに登るに幅廣き石級あり。古劇場の觀棚さしきの如し。當面には細長き一條の町ありて通ず。熔巖の板を敷けること拿破里の街衢がいくと異なることなし。蓋けだしこの板は遠く彼基督紀元七十九年の前にありて噴火せし時の遺物なるべし。今その面を見るに、深く車轍を印したればなり。家壁には時に戸主の姓氏を刻めるを見る。又招牌かんばんの遺れるあり。偶た々まくその一を讀めば、石目細工の家と題したり。

家裏やぬちを窺ふに、多くは小房なり。門扇上若くは仰塵てんじやうより光

を採りたり。中庭の大きは大抵僅に一小花壇若くは噴水ある一水盤を容るゝに足り、柱廊ありてこれを繞めぐれり。壁又歩牀ゆかには石目もて方圓種々の飾文を作る。白青赤などの顔料もて畫ける壁を見るに、舞妓、神物の類猶頗る鮮明なり。博士とフエデリゴとはこの美麗にして久しきに耐ふる顔料の性状を論ずと見えしが、いつかバヤルヂイが大著述の批評に言ひ及びて、身の何いづれの處に在るかを忘るゝものゝ如くなりき。(バヤルヂイの著カタロオゴ、デリ、アンチイキイ、モヌメンチイ、デルコラノは大判紙十卷ありて千七百五十五年の刊行なり。)幸に我は平生多く書ふみを讀まざりしかば、此物語に引き入れらるゝ虞おそれなく、詩趣ゆたかなる四圍あたりの光ありさ

景は、十分に我心胸に徹して、平生の苦辛はこれによりて全く排せられ畢ぬ。をほん

われ等はサルルストが故宅の前に立てり。博士帽を脱して云ふやう。縦たとひ靈魂は逸し去らんも、吾あに豈その遺骸を拜せざらんやと。前壁には、チアナとアクテオンとの大圖を畫けり。(アクテオンは、希臘の男神の名なり、女神チアナを垣かいま間見て、罰のために鹿に變ぜられ、畜やしなふ所の群犬に噬かまる。)二個の「スフィンクス」(女首獅身の石像)を脚としたる大理石の巨卓おほづくゑあり。傳へいふ、初めこの皓こうけつ潔玉の如き卓を發掘せしとき、工夫は驚喜の餘、覺えず聲を放ちて叫びぬと。されど我を動すことこれより深かりしは、色褪せたる人骨と灰に印せる美しき婦人の乳房となりき。

われ等は廣こうちを過ぎて、ユピテルの祠ほこらの前に至りぬ。日は
 白き大理石の柱を照せり。其背後うしろにはエズキオの山あり。巔いたゞきより
 は黒烟を吐き、半腹を流れ下る熔巖の上には濃き蒸氣むら簇れり。

われ等は劇場に入りて、磴とうきふ級をなせる石榻せきたふに坐したり。舞

臺を見るに、その柱の石障石扉、昔のまゝに残りて、羅馬の俳優
 のこゝに演技せしは昨きのふの如くぞおもはるゝ。されど今は音樂の響

も聞えず、公衆の喝采に慣れたるロスチウスが聲も聞えず。わが
 観るところの演劇は、緑肥えたる葡萄園ぶどうばたけ、行人絡繹らくえきたるサレ

ルノ街道、其背後の暗碧なる山脈等を道具立書割として、自ら悲

壯劇の舞群ホロスとなれるポムペイ市の死の天使の威を歌へるなり。わ

れは覲てきめん面に死の天使を見たり。その翼は黒き灰と流るゝ巖いはほとに

して、一たびこれを開張するときは、幾多の市村はこれがために埋めらるゝなり。

噴火山

熔巖は月あかりにて見るべきものぞとて、我等は暮に至りてエズ^ズエ^エオ^オに登りぬ。レ^レジ^ジナ^ナにて驢^{うさぎうま}を雇ひ、葡萄圃、貧しげなる農家など見つゝ騎^のり行くに、漸くにして草木の勢衰へ、はては片端^{かたは}になりたる小灌木、半ば枯れたる草の莖もあらずなりぬ。夜はいと明け^{あか}けれど、強く寒き風は忽ち起りぬ。將^{まさ}に没^ませんとする日^{さかり}は熾なる火の如く、天をば黄金色ならしめ、海をば藍碧色ならしめ、海

の上なる群れる島嶼たうしよをば淡青なる雲にまがはせたり。眞に是れ
 一の夢幻界なり。灣いりえに沿へる拿破里の市まちは次第に暮色微茫の中に
 没せり。眸ひとみを放ちて遠く望めば、雪を戴けるアルピイの山脈氷も
 て削り成せるが如し。

くれなる

紅なる熔巖の流は、今や目睫もくせふに迫り來りぬ。道絶ゆるところ

に、黒き熔巖もて掩おほはれたる廣き面おもあり。驢馬ひづめは蹄を下すごとに、

先づ探りて而る後に踏めり。既にして一の隆起したる處に逢ふ。

さま

その状新さまに此熔巖の海に涌出せる孤島の如し。されど其草木は只

だ丈低き灌木まばらの疎まばらに生ぜるを見るのみ。この處に山やま人の草寮こやあ

り。兵卒數人火を圍みて聖涙酒を呑めり。（「ラクリメエ、クリ

スチイ」として葡萄酒の名なり。）こは遊覽の客を護りて賊を防ぐ

ものなりとぞ。われ等を望み見て身を起し、松明まつを點じて導かんとす。劇はげしき風に焰は横さまに吹き靡なびけられ、滅きえんと欲して僅に燃ゆ。博士は疲れたりとて草寮こやに留まりぬ。我等の往手は巖の間なる細徑にて、熔巖の塊の蹄に觸るゝもの多し。處々道の險しき谿たにに臨めるを見る。

既にして黒き灰もて盛り成したる山上の山ありて、我等の前に横はりぬ。我等は皆徒かちだち立となりて、驢うさぎうまをば口とりの童にあづけおきぬ。兵卒は松明振り翳かざして斜に道取りて進めり。灰は蹠くるぶしを沒し又膝を沒す。石片又は熔巖の塊ありて、歩ごとに滾ころがり落つるが故に、縦たてに列びて登るに由なし。我等は雙脚に鉛を懸けたる如く、一步を進みては又一步を退き、只だ一つとところに在るやうに覺え

たり。兵卒は、巔近し、今一息に候と叫びて、我等を勵はげましたり。されど仰ぎ視れば山の高きこと始に異ならず。一時許ばかりにして僅に巔に到りぬ。われは奇を好む心に驅られて、直に踵くびすを兵卒に接したれば、先づ足を此山の巔に着けたり。

巔は大なる平地にして、大小いろ／＼なる熔巖の塊錯落かたまりとして途に横よこたはる。平地の中央に圓錐形の灰の丘あり。是れ火坑の堤なり。

火球の如き月は早く昇りて、此丘の上に懸れり。我等の來路に此月を見ざりしは、山のために遮られぬればなり。忽ちにして坑口黒烟を噴き、四邊闇夜の如く、山の核心と覺しき處に不斷の雷聲を聞く。地震ひ足危ければ、人々相倚よりて支持す。忽ち又千百の巨きよはうを放てる如き聲あり。一道の火柱直上して天を衝き、迸ほとばしり

出でたる熱石は「ルビン」を嵌めたる如き觀をなせり。されど此等の石は或は再び坑中に没し、或は灰の丘に沿ひて顛り下り、復た我等の頭上に落つることなし。われは心裡に神を念じて、屏息してこれを見たり。

兵卒は、客人達は山の機嫌好き日に來あはせ給ひぬとて、我等を揮きて進ましめたり。われは初めその何處に導くべきかを知らざりき。火を噴ける坑口は今近づくべきにあらねばなり。導者は灰の丘を左にして進まんとす。忽ち見る。我等の往手に火の海の横れるありて、身幹數丈なる怪しき人影のその前にゆらめくを。これ我等に前だてる旅客の一群なり。我等は手足を動して熔岩の塊を避けつゝ進めり。色褪せたる月の光と松明の光とは、岩

の隈々くま／＼に濃き陰翳かたちづくを形りて、深谷の看かんをなせり。忽ち又例の雷聲を聞きて、火柱は再び立てり。手もて探りて漸く進むに、石土の熱きを覺ゆるに至りぬ。巖罅がんかよりは白き蒸氣騰たうじやう上せり。既にして平滑なる地を見る。こは二日前に流れ出でたる熔岩なり。風に觸るゝ表層こそは黒く凝りたれ、底は猶紅火なり。この一帯の彼方には又常の石原ありて、一群の旅客はその上に立てり。導者は我等一行を引きて此火くわかく殻くわかくを踐ふましめたるに、足跡あ炙あぶるが如く、我等の靴の黒き地に赤き痕あとを印するさま、橋上の霜を踏むに似たり。處々に斷文ありて、底なる火を透し見るべし。我等は凝ぎやうそく息ぎやうそくして行くほどに、一英人の導者と共に歸り來るに逢ひぬ。渠かれ、汝等の間に英人ありやと問ふに、われ、無しと答ふれば、一

聲マレデツトオ畜生と叫びて過ぎぬ。

我等は彼旅客の群に近づきて、これと同じく一大石の上に登りぬ。此石の前には新しき熔岩流れ下れり。譬へば金の熔爐より出づる如し。其幅は極めて闊ひろし。蒸氣の此流を被へるものは火に映じて殷紅あんこうなり。四圍は暗黒にして、空氣には硫黄の氣満ちたり。われは地底の雷聲と天半の火柱と此流とを見聞みきして、心中の弱處病處の一時に滅盡するを覺えたり。われは胸むな前に合掌して、神よ、詩人も亦汝の預言者なり、その聲は寺裏に法を説く僧侶より大なるべし、我に力あらせ給へ、我心の清きを護り給へと念じたり。

われ等は歸途に就つきたり。此時身邊なる熔岩の流に、爆然聲あ

りて、かんせい陷穽を生じほのほ炎焰を吐くを見き。されどわれは復たま戦きをのゝふる慄
 ふことなかりき。一行は積灰の新に降れる雪の如きを蹴けて、且滑
 り且降るほどに、一時間の來路は十分間の去路となりて、何の勞
 苦をも覺えざりき。われもフエデリゴも心に此遊の徒事ならざり
 しを喜びあへり。驢に乗りて草寮こやに至れば、博士は踞座して我等
 を待てり。促し立て、共に出づるに、風斂をさまり月明かなり。拿破ナポリ里
 灣に沿ひて行けば、熔岩の赤き影と明月の青き影と、波面に二條
 の長蛇を跳らしむ。聞説きくならく、昔はボツカチヨオ涙を牟ルギリウ
 スつかの墳そに灑そぎて、譽を天下に馳せたりとぞ。われひさい韮才もと、固よりこ
 れに比すべきにあらねど、けふエズオの山の我詩思を養ひしは、
 未だ必ずしもむかし詩人の墳のボツカチヨオの天才を發せしに似

ずばあらず。

博士はわれ等を誘ひて其家にかへりぬ。われは前度の別をおもひて、サンタ夫人との應對いかがあらんと氣遣ひしに、夫人の優しく打解けたるさまは、毫も疇ちうせき昔に異ならざりき。夫人はわが即興の手際を見んとて、こよひの登山を歌はせ、辭ことばを窮めて我才を讃めたり。

囊家

サンタのわれに優しきことは昔に變らず。されど人なき處にてこれと相見んことの影護うしろめたくて、若しフエデリゴの共に往かざる

ときは、必ず人の先づ集つどひたらん頃を待ちて、始ておとなふこととなしつ。現げにあやしきものは人の心なり。曾て心にだに留とめざりし人と、ゆくりなく浮名立てらるゝときは、その人はそもいかなる人にかと疑ふより、これに心付くるやうになり、心付けて見るに隨ひて、美しくもおもはれ慕はしくもおもはるゝことありと聞く。我が夫人に於けるも亦これに似たるなるべし。前まへの事ありしより、我が夫人を見る目は昔に同じからで、その豊ゆたかなる肌、媚こびある振舞の胸むな騷さわぎの種となりそめしぞうたてき。

我がナポリナポリに來てより早や二月とはなりぬ。次の日曜日はわが「サン、カルロ」の大劇場に出づべき期ごなり。其日の興行はセセルラルラの剃手とこやにて、その末折まつせつの終りてより、我即興詩は始まるべ

しとぞ掟おきてられし。番付ばんづけには流石さすがにわが實まことの苗字めうじをしるさんこ
 との恥はにかかしくて、假かりにチエンチイチイと名告なりたり。この運命うんめいの定ま
 るべき日の、切せちに待たるゝと共に、あるときは其成功せいこうの覺おぼつか束つかな
 き心地せられて、熱病ねつびょうむ人の如ごとくなることあり。けふも博士はくしの家
 をおとづれたれど、われは人々の背後うしろにかくれて物言ものごとふことも稀
 なりき。フエデリゴは我が物思ものおもはしげなるを見ていふやう。いか
 に心地こころや悪わるしき。われとても同じさまなり。こは火山かざんの所爲ところにて、
 この郷さとの空氣くわいの悪わるしくなれるならん。エズ中才ちゆうさいの噴火ふんかは次第さだに熾さかん
 なり。熔巖ようがんの流ながは早く麓ふもとに到いたりて、トルレ、デル、アヌンチャタ
 の方かたへ向むかへりと聞く。今宵こんせうは激ししき音ねの聞きゆるならん。空氣くわいには
 灰はい多く雜まじれり。山やまに近ちかき處ところにては、木々きぎの梢しやう皆みな灰はいに掩おほはれたり。

巔いたゞきの上は黒雲覆かさなひ重りて、爆發たびの度ごとに青ほのほき。その中に立ち昇
 れりといふ。サンタは色蒼かく、瞳常ひとみならず耀かがやけるが、友の詞を聞
 きていふやう。われも熱かに罹かれりと覺ゆ。されど日曜日には病を
 つとめて往くべし。友のためには命をさへ輕あんずべし。その翌あくるひ日
 熱に苦めらるゝこと前に倍すとも、そは顧みるべき事ならず。友
 は嬉しとおもふや、あらずや、そは知るべきならねどなど、心あ
 りげに云へり。

われは日ごとに公苑しばゐに往き戲園に入り、又心安からぬまゝに寺
 院を尋ねて、聖母マドンナの足の下に俯ふすることあり。類燃え胸跳るば
 かりなる怖ろしき誘惑うたに想ひ到れば、懺悔の念轉うた。深く、志を遂
 げ功を成さんと欲する大いなる企圖を顧み思へば、祈祷の心愈

切なり。されど我靈は我肉と鬪へり。わが心機の一轉すべき期は、
 想ふに日曜日にあるならん。われは慰藉を得ずして、空しく聖母
 の膝下を走り出でぬ。

一たび偕ともに囊家なうか（博奕場ばくえきちやう）に往かずや、いかなる境きやう界がい

をも詩人は知らざるべからずとは、吾友フエデリゴの曾て云ひし
 ところなり。されど友は我を伴ひしことなく、我も亦獨り往かん
 心を生ずることなかりき。こは見んことの願はしからざるにあら
 ず、心の怯おくれたるなり。むかしベルナルドオの我にいひしことあ
 り。汝はドメニカに育てられ、「ジエスヰタ」派の學校に人とな
 りて、その血中には山羊やぎの乳汁ちしる雜れり。されば汝は臆病なりとい
 ひき。當時われはその無禮を怒りしが、今思ふに此言は幾分の理ことわり

なきにあらず。われまことに詩人となりて、善く社會の狀態を歌
 はんには、先づかゝる怯懦けふだの心を棄てざるべからず。わが此念おもひを
 なしゝは、夕ぐれに此市に聞えたる囊家の門を過ぐる時なりき。
 これぞ我膽を試みるべき好き機會なるべき、自ら博奕ぼくえきせでもあ
 るべし、後に相識れる人々に語るとも、必ず咎むるものはあらし
 など、自ら問ひ自ら答へて、騒ぐ胸を押し鎮めつゝ門に入りぬ。
 こゝには嚴かなる装おごそしたる門よそほひ者かどもり立てり。兩邊ともしびに燈を點じたる石
 階を登れば、前房あり。僮僕しもべあまた走り迎へて、我帽と杖とを受
 取り、我が爲めに正面なる扉を排開したり。

戸内とぬちには燈明き室あまたあり。室ごとに大卓幾箇か据ゑたるを、
 男女打雜りたる客圍み坐せり。われは勇を鼓して先づ最も戸に近

き一室をおほまた大股に歩み過ぎしに、諸人は顧みんとだにせざりき。
 卓の上にはうづたか堆く金貨を積みたり。我目に留まりしは、十年前まで
 は美しかりけんと思はるゝ、さたすぎたる婦人の服飾美しく面に
 紅粉を施せるが、瘦せたる掌にかるたぎひ骨牌緊しく握り持ちて、鷺鳥の如にへどり
 き眼を卓上の黄金に注ぎたるなり。若く美しき女子も二人三人見
 えたるが、その周匝にはめぐり少年紳士群り立ちて、何事をか語るさま
 なりき。老若いづれはあれど、皆嘗て能く人の心を動しうごか、人の、
 今は他のキヨオル心文牌に目を注ぐやうになりしなるべし。

稍 狭き室に紅緑に染め分けたる一卓あり。客は柱文銀（「コ
 ロンナアトオ」といふ、その文もんやう様に依りて名づく、我二圓十五
 錢ばかり許に當る）一塊若くは數塊を一色の上に置く。球ありて此卓上

を走り、その留まる處の色は、賭者をして倍價の銀を贏ち得しむ。
 傍より覗ふに、その速なることは我脈搏と同じく、黄白の堆は忽
 ち卓に上り又忽ち卓を下る。われは覺えず兜兒を搜りて一塊の柱
 文銀を取り、漫然卓上に擲ちたるに、銀は紅色の上に駐まれり。
 監者は我面を注視して、其色の意に適へりや否やを問ふものゝ如
 し。われは又覺えず領きたり。球は走り、我銀は二塊となりぬ。
 われはこれを收むるを愧ぢて、銀を其處に放置せり。球は走り又
 走りて、銀の數は漸く加りぬ。運命は我に與するにやあらん。銀
 の嵩は次第に大いになりて、金貨さへその間に輝けり。われは喉
 の燃ゆるが如きを覺えたれば、葡萄酒一杯を買ひてこれに灌ぎ
 つ。黄白の山はみるゝ我前に聳えたり。忽ち球は我色に背きて、

監者は冷かに我銀の山を撈さらひ取りぬ。われは夢の醒めたる如くなりき。我がまことに失ひしは柱文銀一つのみと、獨り自ら慰めて次の室に入りぬ。

こゝには數人の少女をとめあり。中なる一人の姿貌かほばせは宛然たるアヌンチヤタなるが、只だ身みのたけ幹高く稍 肥えたるを異なりとす。われは暫くこれに注目せしに、少女は我前に歩み寄りて、傍なる小卓を指し、おん敵手あひてにはなるまじけれどと耳語さゝやきたり。わが軽く辭いなみて數歩を退しりぞき去るを、少女は訝いぶかしげに見送り居たり。

奥の詰つめなる室には、少年紳士等打寄りて撞球戲たまつきをなせり。婦人も幾いくたり人か立ち雜まじりたるに、紳士中には上衣を脱ぎたるあり。われは初め此社會の風儀のかくまで亂れたるをば想はひ測はからざりしな

り。入口の戸に近く、此方こなたに背を向けて撞杖キユウを揮たけへる丈高たけき一男子あり。今の撞つきざまや巧なりけん、人々喝采カクサイせしに、前さきに我に骨牌コトを勧めし少女も彼男子の面を覗のぞきて、笑みつゝ何事をかさゝやきたり。男は振り向きざまにその頬に接吻し、女は嬌けうしん嗔ちんしてその男を打てり。われは遙とほに彼男の横顔を望み見て慄りつせふ慄せふせり。そはその餘りにベルナルドオにに肖にたるが爲めなり。われは進みてこれに近づくべき膽力なかりき。されどその眞のベルナルドオなりや否やを知らんことの願はしければ、傍わがはにほの暗き室の戸の開きありたるを見て、我より窺のぞふべく彼より見るべからざらしめんために、壁に沿したがひて徐しづかに歩み、そとこれに進み入れり。天井には紅白の硝子燈しょうじとうを吊つりたれど、わざと明闇あひな相あひな半なして處々蔭多か

らしめたり。室は假の庭園なり。薄片鐵を塗りて葉となしたる蔓つるるくさは、幾箇のさゝやかなる亭あづまやに纏ひ附きて、その間には巧に盆栽の橘オレンジ柚等を排ならべたり。亭の前なる梢には剥製の鸚鵡あうむの止まりたるあり。冷なる風は窓より入りて、自奏器の樂聲人の眠を催さんとすとす。

わが此装置を一瞥をばし畢りし時、彼のベルナルドオに肖にたる男はこなたに向ひて足の運び輕げに歩み來たり。われは思慮を費すに違いとまあらずして、近き亭あづまやの内に潛みしに、男は面おもてに笑を湛よぐちへてやう上に立ち留まりぬ。その面は恰も我方へ眞向まむきになりたるが、われはそのまがふ方なきベルナルドオなることを認め得たり。渠かれは隣なる亭に歩み入り、長椅ベンチに身を投げ掛けて、微かに口笛を鳴し

居たり。我胸裏には萬感叢起せり。ベルナルドオこゝに在り。我
 と他かれと咫尺しせきす。われはかく思ふと共に、身うちの悉く震ふるひわな
 くを覺えて、力なく亭内なる長椅の上に坐したり。花卉くわきの薰かをり、幽
 かなる樂聲、暗き燈ともしび火やはらか、軟なる長椅は我を夢の世界に誘いざなひ去ら
 んとす。現げに夢の世界ならでは、この人に邂逅すべくもあらぬ心
 地ぞする。少焉しばしありて前さきのアヌンチャタに似たる少女は此室に入
 り、將に進みて我が居る亭に入らんとす。われは心にいたく驚き
 て、身内みうちの血の湧き立つを覺えき。その時ベルナルドオは忽ち聲
 朗かに歌ひはじめたり。少女は聲をしるべに隣の亭に入りぬ。衣きぬ
 の戦そよぎと共に接吻の聲我耳を襲へり。此聲は我心を焦こがし爛たぐらかせり。
 嗚呼アヌンチャタは我を去りて此輕薄男子に就つきしなり。この男

子アヌンチャタを獲てより幾時をか經し。而るに其唇は早く既にこの淤泥おでいもて捏こね成したる妖姫の身に觸るゝなり。われは此室を馳はせ出で、此家を馳せ出でたり。我胸は怒と悲とのために裂けんとす。此夜は曉わづか近うして纔にまどろむことを得たり。

我が「サン、カルロ」の劇場に登るべき日は明日あすとなりぬ。これを待つ疑懼ぎくの情と、さきの夜戀の敵に出逢ひたる驚愕の念とは我をして暫くも安んずること能はざらしむ。わが聖マドンナ母其他の諸聖を祈る心の切せちなりしこと此時に過ぐるはなかりき。われは寺院に往きて、彼の救世者流血の身に擬したる麴パン包を乞ひ受け、その奇くしき力の我を清淨にし我を康強にせんことを禱いのりぬ。尊き麴包は果して我に多少の安堵を與へぬ。されどこゝに最も心にかゝる

一事あり。そはアヌンチャタの此地にあるにはあらずや、ベルナルド才はこれに隨ひて來たるにはあらずやといふ疑問なりき。既にしてフエデリゴは我が爲めに偵知して、アヌンチャタのこゝにあらず、ベルナルド才の四日前に單身こゝに到りしを報ず。友は綿密に市の來賓簿を閲しくれたるなり。サンタの熱は未だ瘥えず、されど明日の興行には必ず往かんと誓へり。エズヰ才は火を噴き灰を雨らすること故の如し。而して我名を載せたる番付は早く通衢に貼り出されたり。

初舞臺

日暮れて劇場の馬車の我を載せ行きしは、オペラ樂劇の幕の既に開き
 たる後なりき。若し運命の女神にして、はさみ剪刀を手にして此車中に
 座したらんには、恐らくは我は、いざ、き截れと呼ぶことを得しな
 らん。われは只だ神を頼みて餘念なかりき。

場内のフオアイエエ逍遙場には俳優と文士と打うちまじ雑りたる一群ありき。中

には我と同業なる即興詩人さへありて、其名をサンチイニイと云
 ふ。平素人に佛蘭西語を教ふ。われはその群に近づきたり。會話
 は甚だ軽く、交ふるにせうぎやく笑諺を以てす。セヅルラとこやの剃手の曲の
 爲めに登場する俳優は、たちまち乍ち去り乍ち來り、演戲のその心をみだ擾さゞ
 ること尋常よのつねの社交舞に異ならず。舞臺はその定住ぢやうぢゆうの地なれ
 ばさもあるべし。

サンチイニイの云ふやう。吾等は君に難題を與ふべし。譬へば
 殻硬き胡桃くるみの拆さき難がきが如し。されど君は能く拆さき能く解とき給ふ
 ならん。われも猶初めて登場せし時の戰慄さまの状をを記せり。されど
 我智は我に祕訣を授けたり。そはけいじやう閨情、懷古、伊太利風土の
 美、藝術、詩賦等、何物にも附會し易きものあるを用ゐ、又人の
 喝采を博すべき段をば先づ作りて諳そらんじ置くことを得る事なりと
 云ふ。われ絶て此種の準備なしと答へしに、サンチイニイ頭を掉ふ
 りて、否、そは隠し給ふなり、要するに君の如き伶俐なる人には
 此業わざいと易しと耳語さ、やけり。

剃手とこやの曲は終りて、われは獨り廣闊なる舞臺の上に立てり。座レ
ジツシヨオル長レは笑を帯びて我顔を打目守り、斷頭臺は築かれたりと耳さ

語ゴきて、道具方マシニストに相圖せり。幕は開きたり。斯かくて此大劇場の觀さき棚じきに對して立てる時、わが視る所は譬へば黒洞こくとう々たる大坑に臨める如く、僅にオルケストラ伶人席の最前列と高き觀棚ロオジュの左右の端となる人の頭を辨わずることを得るのみ。濃く温なる空氣は漲り來りて我面を撲うてり。われは我精神の此の如く安たひく夷ひらかなるべきをば期せざりき。その状態は固より興奮せり。而しかれどもその諸機たうしよくに※觸し易やすき性は十分に備はりたり。われは自家の精神作用の緊張を覺ゆると共に、又其明徹を覺えたり。猶晴れたる冬の日の空氣の極めて冷に兼ねて極めて明なるがごとくなるべし。

看客は片紙に題を記して出し、警吏これを檢して、その法律に抵觸せざるを認めたる後、われに交付す。われは數題中に就いて

其一を簡えらみ取る自由あり。初なる一紙には侍奉紳士と題せり。こ
 は人妻ひとづまに事つかふる男を謂ふ。中世士風の一變したるものなるべし。
 されどわれは未だ深く心をこれに留めしことなし。(原註。「イ
 ル、カワリエル、セルエンテ」又「チチスベオ」、今侍奉紳士と
 翻ほんす。此俗本もとジエノワ府商しやう買うより出づ。その行販して郷を離
 るゝもの婦を一友に托す。これを侍奉紳士といふ。初め僧かんに托す
 るを常とせしが、後又俗士えらを擇む。侍奉紳士は婦の早起かん盥そう漱す
 る時より、深更寢に就く時に至るまで、其身邊いんに在りて奉侍す。
 他婦を顧みることを容ゆるさず、聞く侍奉紳士中いん褻せつに及ばざるも
 の往々にして有り。嘗て一男子の歿するや、其誄辭るみじ中侍奉紳士と
 なりて責を負ひ任を全うすといふ語ありきと。)われは此俗を歌

ふ一曲の人口に膾炙くわいしやするものあるを知れど、急にこれに依りて思を構かまふること能はず、（曲とは「フエミナ、ヂ、コスツメ、ヂ、マニエレ」と題するものを謂ふ、「ソネットオ」なり、ミユルレルの羅馬と其士女との巻中に收めたり。）望を第二紙に屬してこれを開きたり。紙上にはカプリと書せり。是れ亦わが爲めの難題なり。われは拿破里ナポリよりその山脈の美しきを賞しつれども、未だ一たびも此島に航せしことあらず。若し二者中一を取らば、猶侍奉紳士をこそ辭を措おき易しとせめ。われは第三紙を開きたり。題して拿破里の窟墓といふ。これも亦我未知の境なり。されど窟墓の一語は忽ち少時の怖ろしき經歷を想ひ起す媒なかだちとなりぬ。フエデリゴとの漫歩そゞろありきより地下に路を失ひたる時の心の周章など、悉く

目前に浮びぬ。われは直ちに絃を撥はじきて歌ひ出でぬ。章句は自らにして成りぬ。われは唯だ自家少時の經歷を語りしのみ、唯だ羅馬の地下窟を以て拿破里の地下窟となしゝのみ。即興詩の末解は、一たび失ひつる絲の端を再び探り得たる喜を敘したり。喝采はあまたゝび起りぬ。われは脈絡中に三鞭シヤムパニエ酒めぐの循るが如き感をなしたり。

われは第二曲の題として蜃氣樓しんきろうを得たり。こは拿破里又シリアの水濱にて屢あらは見るゝものといへど、われは未だ嘗て見しことあらず。唯だ此重樓複閣の奥には、我に親すしき神女棲み給ふ。

これをフアンタジアファンタジア（空想）の君とはいふなり。われは唯だ平生夢裏に遊べる境きやうがい界を歌はんのみ。その中には同じ神女の宮殿

あり、苑ゑん圍いあり。われは急に我資材を引纏めて、一の布局を定め、一の物語となしたり。歌ひ出づるに従ひて、新しき思想は多く來り加はりぬ。先づ敍したるは荒廢せる一寺院なりき。景をポジリツポに取りて、わぎと其名をば擧げざりき。簷のき傾き廊朽ちて、今や漁父の栖家すみかとなりぬ。聖像を燒き附けたる窓の下に床ありて、一童子臥したり。月あかくいと靜けき夜、美しき童女來りおとづれぬ。その美しきは譬へんに物なく、その身の輕きことそよ吹く風に殊ならず。兩の肩には五彩燦然たる翼お生ひたり。二人は共に嬉たのみ遊しべり。少女をとめは漁家の子を引きて、緑深き葡萄園に往き、又近きわたりの山に分け入るに、まだ見ぬ景色いと多く、殊に山腹の自ら關ひらけて、その中にめでたき壁畫と數多き贊にへづくゑ卓とある寺

院の見えたるなど、言へば世の常なり。或るときは共に舟に棹しさをさ
 て青海原を渡り、烟立つエズエズ才才の山に漕ぎ寄せつるに、山は全また
 く水晶より成れりと覺しく、巖の底なる洪爐こうろ中に、烟渦けぶりづま巻き火燃
 え上るさま掌たなぞこに指すが如くなり。或るときは共に地下の古市に遊
 ぶに、康衢かうく屋舎悉く存じて、往來織るが如く、その殷富いんぷ豊盛なる
 こと、書讀ふみむ人の遺蹟を見て説き聞かするところに増したり。少
 女は嘗て其羽を脱ぎ卸おろして、その童子の肩に結び、いざ共に空に
 翔かけらんといふ。おのれは風なす輕き身なれば、羽なきと羽あると
 殊ならずとなり。橘オレンジリモネ柚檸檬オレンジリモネの林を見下し、高くは山巔さんてんの雲を
 踏み、低くは水草茂れる沼澤の上を飛びしときは、終に茫漠たる
 平野の正たゞなか中なる羅馬の都城に至りぬ。鏡の如き蒼海を脚下に見、

カプリの島の外遠く翔^{かけ}りて、夕陽の雲の奥深く入りしときは、忽ち粉なりき。童子の齡^{よはひ}漸く長ずるに及びて、少女の訪ひ來ること漸く稀になり、はてはをりく葡萄棚の葉の間又は柑子の樹の梢^{ひま}の隙より、美しき目もてそとさし覗くのみとなりぬ。童子はこれを見るごとに戀しく懷^{なつ}かしきこと限なく、人知らぬ愛に胸を苦めたりき。漁父は童子を伴ひて海に往き、艫^ろを搖し帆^{うごか}を揚げ、暴風と争ひ怒濤と鬪ふことを教へつ。年長^たけて後、この少年の今は影だに見せぬ昔の友を懷ふ情は愈深くのみなりゆきぬ。月清く波靜なる夜半に、獨り舟中にあるときは、ともすれば艫を搖す手のおのづから休み、澄み渡りて底深く生^おふる藻のゆらめくさへ見ゆる水にきと目を注^つけて、瞬^{また、き}もせず打目守^{うちまも}ることあり。かゝる時

は昔の少女、その嬌眸みひらを睜ひらきて水底みなそこより覗うなづき、或は頷うなづき或は招
 けり。とある朝漁村の男女あまた岸邊あしべに集あひぬ。そは旭日の波間
 より出でんとする時、一箇くの奇くしく珍めづらしき島國しまくにのカプリカプリに近ちき
 處ところに湧わき出でたればなり。飛簷ひえん傑閣けつかく隙間ひまなく立ち並ならびて、その翳くもり
 なきこと珠玉しゆぎよくの如ごとく、その光あること金銀きんぎんの如ごとく、紫雲むらさきぐも柵さく引き星
 月つき麗かれり。現げにこの一幅いっふくの畫圖えずの美うしさは、譬たとへば長虹ながにじを截たちて
 これを彩いろどりたる如ごとし。蜃氣樓しんきろうよと漁父りうふ等は叫こびて、相指あひさして嬉たのみ
 笑わらへり。彼の漁父りうふの子のみは獨ひとりり笑わらはざりき。知らずや、かの樓
 閣かくはわが昔少女むかしむすめと共に遊あそび暮くし、處ところなるを。懷舊わいきゆうの念ねんしきりにし
 て、戀慕こいぼの情こころ止とむことなく、雙眸さうぼう涙なみだに曇くもる時、島國しまくには忽たちち滅きえ
 たり。月あかき宵よの事ことなりき。島國しまくには又湧わき出でぬ。忽たちち一隻いっしゆうの

舟ありて、漁父等の立てる岬みさきの下より、弦つるを離れし征箭さつやの如く、
 波平かなる海原を漕ぎ出で、かの怪しき島國の方に隠れぬ。黒雲
 空を蔽ひて、海面には暗緑なる大波を起し、潮水倒立して一條の
 巨柱を成せり。須臾しゆゆにして雲斂をさまり月清く、海面復またた平かになり
 ぬ。されど小舟は見えざりき。彼漁父の子も亦あらずなりぬ。歌
 ひ畢をはるとき、喝采の聲前に倍し、我膽力は漸く大に、我興きよう會くわい
 は漸く高し。

第三曲の題はタツソオなりき。われは一たびタツソオたりしこ
 とあり。レオノオレは即ちアヌンチャタなり。我等はフェルララ
 宮中に相見たり。われは囹圄れいごの苦を嘗め、懷裡に死を藏して又自
 由の身となり、波立てる海を隔て、ソルレントオより拿破里ナポリを望

み、また聖オノフ^{サン}リイ寺の榲^{かしのき}樹の下に坐し、戴冠式の鐘聲カピトリウム街頭に起るを聞けり。されど冥使早く至りて其冠をわれに授けつ。是れ不死不滅の冠なりき。思想の急流は我を漂し去りて、我心^{しんてう}跳は常に倍せり。

最後の一曲はサツフオオの死を題とす。嫉妬の苦も亦我が自ら味ひたるところなり。アヌンチヤタが^て痠負ひたるベルナルドオに^{おし}吝まざりし接吻は、今憶^{おも}ふも猶胸焦がる。サツフオオの美はアヌンチヤタに似て、その戀情の苦は我に似たり。波濤はこの可憐なる佳人を覆^{をほ}ひ了んぬ。(十六世紀の伊太利詩人タツソオと前七世紀の希^{ギリシア}臘女詩人サツフオオとの傳は今煩^{はげ}を憚りて悉く註せず。) 看客は皆泣けり。拍手の聲は狂瀾怒濤の如く、幕一たび墮ちて後、

われは二たび幕の外に呼び出されぬ。

喜は身に満ち兼ねて胸を壓せり。舞臺を下りて、人々の來り賀するに逢ひし時、われは痙攣けいれんのさましたる啼泣を發したり。此夕サンチイニイ、フエデリゴ及二三の俳優は我が爲めに小筵せうえんを開けり。我心は嬉たのしみたれど我舌は緘むすぼれたりき。フエデリゴ打興じて曰ふやう。此男は一の明珠なり。その一失は第二のヨゼツフたるにあり。(ヨゼツフは童貞女の夫にして耶蘇の義父なり。) 盍なんぞ薔薇を摘まざる、その凋落てうらくせざるひまに。

夜更けて後客舎に歸り、聖母と救世主との我を棄て給はざりしを謝して、いと穩なる夢を結びつ。

人火天火

翌朝は心地爽さはやかに生れ更かはりたる如くにて、われはフエデリゴに對して心のうちの喜を語ることを得たり。身の周圍なる事々物々、皆我を慰むるものに似たり。又我心は一夜の間に老成人となりたるを覺えぬ。そは喝采の雨露の我性命樹上に墜ちて、其果實を熟せしめたるにやあらん。われは昨夜サンタの劇場にありしを知る。いでや往きて彼夫人をたづね、その讃詞をも受けてまじと、足の運はこびも常より軽く、マレツチイ博士の家に往きぬ。博士は繰り返しつゝよろこびを陳べて、さてその妻の劇場より歸りし後夜もすがら熱に悩みしを告げたり。又曰ふ、今は眠れり、眠醒さめなば必ず

快きに至るならん、夕暮に再び訪ひ給へと。午餐にはフエデリゴ
 新に獲たる友だちと、我を誘ひ出して酒さかみせ店に至り、初め白き基ラ
 クリメエ、クリスチイ
 督 涙 號 を傾け、次いで赤き「カラブリア」號を倒し、わ
 が最早え飲まずと辭いなむに 闊ひろく漲り遠く下ればなり。岸邊には早
 くそを看んとて、舟を買ひて漕ぎ出づるものあり。

「アエ、マリア」の鐘鳴り止む頃、再び博士の家に往きぬ。門に
 進はしためみて婢に問へば、家にいますは夫人のみにて、目めざ覺めて後は快
 くなれりとのたまへり。間つね雜の客をばことわれと仰せられつれど、
 檀だんな那は直ちに入り給ひても宜よろしからんとなり。美しくして晴れが
 ましからず、心もおのづから靜まりぬべき室なり。窓の前には厚
 き質とぼりの幌を垂れたるが、長く床を拂へり。鏝やじり研ぐ愛の神の童の大

理石像あり。アルガント燈は人を迷はさんと欲する如き光もてこれを照し出せり。こはわが轉瞬の間に看出みいだしたる室内のさまなりき。夫人は輕げなる寢衣ねまきを着て、素絹の長椅ソファの上に横はりたりしが、我が入るを見て半ば身を起し、左手ゆんでもて被ひを身に纏ひ、右手を我にさし伸べたり。

アントニオの君よ、思の儘すべに捷かち給ひぬ、おん身も嬉しと思ひ給ふならん、千萬人の心は渾すべて君に奪はれたり、君は初め我がいかに君のために胸を跳らせ、後君の成功ごの期するところに倍するに及びて、いかに君のために安心いきの息を 《たま〜》壁頭より墮おち來りしなり。否あらず、偶 墮ち來りしに非ず。聖母は我が慾海の波に沈み果てんあはれを愍あはみて、ことさらに我を喚さまび醒し給ひしなり。

否 と叫びて、我は起ち上りぬ。我渾身の血は涌き返る熔巖にも
 比べつべし。アントニオよ、妾わらはを殺せ、妾を殺せ、只だ妾を棄て、
 な去りそと、夫人は叫べり。其臉かほ、其眸まなじり、其瞻視せんし、其形ぎやうさう相、
 一として情慾に非ざるもの莫なく、而も猶美しかしかりき。火もて畫き
 成せる天人の像とや謂ふべき。我身の内なる千萬條の神經は一時
 に震動せり。我は一語を出すこと能はずして、室を出で階きざはしを下り
 ぬ、怖ろしきものに逐はれたらん如く。

戸の外の皆火なること、身の内の皆火なると同じかりき。薰くんか
 赫くの氣は先づ面を撲うてり。エズ中オの嶺は炎焰そら霄を摩し、爆發
 の光遠く四境を照せり。涼を願ふ煩わづらひごころ心は、我を驅かりてモ口
 の船橋を下り、汀灣みぎはに出でしめたり。我は身を波打際にはたと僵たふ

しつ。我は自ら面の灼くが如く目の血走りたるを覺えて、巾を鹹きれ
ほみづ 水に漬して額の上に加へ、又水を渡り來る汐風しほかぜの些すこしをも失
 はじと、衣の鈕ボタンを鬆しょうかい開せり。されど到る處皆火なるを奈何いかにせ
 ん。山腹を流れ下る熔巖の色は海波に映じて、海もまた燃えんと
 す。眸を凝らして海を望めば、髻はうふつ鬚の間、サンタが姿のこの火
 焰の波を踏みて立ち、その燃ゆる如き目まなざしもて我を責め我を
 訴ふるを視、耳邊忽ち又妾を殺せ、妾を殺せと叫ぶを聞く。われ
 眼を閉ぢ耳を掩おほひ、心に聖母を念じて、又睨まぶたを開けば、怖るべき
 夫人の身は踉蹌よろめきて後しりへたふにれんとす。そのさま火焰の羽衣を焼く
 かとぞ見えし。あはれ、其罪を想ふだに、畏怖の念の此の如きあ
 り。その罪を遂げたらん後は、果して奈何なるべき。

もゆる河

舟に召さずや、檀那だんな、トルレ、デル、アヌンチャタへ渡しまる
 らせんと呼ぶ聲は、身のほとりより起りて、そのアヌンチャタと
 いふ語は、猶能く思に沈みし我を喚よび起せり。頭を擡もたげて見れば、
 岸近く權かいを止めたる舟人あり。熔巖の流るゝこと一分時に三臂ひちや
 長うなりといへり、（伊太利の尺の名）往きて看給はんとならば、
 半時間には渡しまるらせんといふ。舟は我熱を冷さますに宜しからん
 とおもへば乗りぬ。舟人は棹さ取りて岸邊を離れ、帆を揚げて風に
 任せたるに、さゝやかなる端艇はぶねの快こころよく、紅の波を凌しのぎ行く。汐しほか

風^{げやう}雨^うの頬^ほを吹ききて、呼吸^こ漸^じく鎮^{しづ}まり、彼方^{かた}の岸^{しづ}に登^{のぼ}りしときは、
心も頗^おるおちゐたり。

我^{われ}は心^{こころ}に誓^{ちか}ひけるやう。我^{われ}は再^{また}び博^{はく}士^しの闕^{しき}を踰^こえじ。禁^かぜられ
たる果^{この}を指^みぎし示^ゆす美^うしき蛇^{へび}に近^{ちか}づきて、何^{なに}にかはすべき。幾^{いく}千^ち
の人^{ひと}か、これによりて我^{われ}を嘲^{あざ}り我^{われ}を侮^{あな}るべけれど、猶^{なほ}良心^{れんしん}に責^せめ
られんには^{はるか}に優^あれり。壁^{かべ}の上^{うへ}なる聖^{マドンナ}母^はは、我^{われ}を墮^おさじとてこ
そ自^{みづか}ら墮^おち給^{たま}ひけめ。斯^{ごと}く思^{おも}ふにつけて、聖^{せい}母^ぼの惠^{めぐみ}の袖^{そで}に掩^{おほ}はれ
つゝ、水^{みづ}をも火^かをも避^{よこ}け得^えつべき喜^{よろこ}は一身^{いつしん}に溢^{あふ}れ、心^{こころ}の中^{なか}に有^あり
とあらゆる善^よなるもの正^{ただ}なるものは一^{いつ}齊^{せい}に凱^{がい}歌^かを奏^{そう}し、我^{われ}は復^{また}た
心^{こころ}の上^{うへ}の小^{せう}兒^にとなりぬ。天^{あま}に在^{いま}す父^{ちち}よ、願^{ねが}はくは禍^{わざはひ}を轉^まじて福^{さいはひ}と
なし給^{たま}へと唱^なへつゝ、身^みを終^おふるまでの安^{やす}樂^{らく}の基^{もと}を立^たてましたら

ん如く、足は心と共に軽く、こゝの小都會を歩み過ぎて、たんぼひ田圃間の街道に出でぬ。

人叫び、人笑ひ、人歌ひ、徒かちにて走るものあり、大小くさ／＼

の車を驅るものあり。その騒しさ言はん方なし。熔巖ラワの流は今しも山麓なる二三の村落を襲へるなり。一群の老若男女ありて奔り逃れんとす。左に嬰兒を抱き、右に裏つゝみを挟わきめる村婦の、且泣き且走るあり。われは財囊ざいのうを傾けてこれに贈りぬ。われは山に向ふ看者みての間に介はさまりて、推おされながらも、白き石垣もて仕切りたる葡萄園ぶどうばたけの中なる徑こみちを登り行きぬ。衆人は先を争ひて、熔巖の將に到らんとする部落の方へと進めり。われは數畝の葡萄園を隔て、始て熔巖を望み見たり。數間すけんの高さなる火の海は牆まがきを掩ひ

屋いへを覆ひて漲り來れり。難に遭へるものは號泣し、壯觀に驚ける
 とつくにびと
 外國人はくわんこ謹呼して、御者商人などは客を招き價を論ぜり。馬
 に跨れる人あり、車を驅れる人あり、燒耐ひさ鬻ぐ露肆ほしみせを圍みて喧け
 んさう
 譟せる農夫の群あり。凡そ此等のもの總て火光に照し出された
 れば、そのさま筆舌もて描き盡すべからず。

熔巖は同じ嚮むきに流れ行くものなれば、好事かうずのものは歩み近づき
 て迫り視ることを得べし。杖の尖さき又は貨幣などを挿さしこ込みて、熔巖
 の凝りて着きたるを抜き出し、こを看たる記念にとて持ち行くも
 のあり。流れ下る熱質の一部、その高きが爲めに分れて迸り落つ
 ることありて、その奇觀は岸拍うつ波に似たり。その落ちて地上に
 留まるや、猶暫くその火紅を存じて、銀河の側に輝く星を看る如

し。既にして空氣は漸くその隅角と周縁とを冷却して黒變せしめ、そのさま黒き絲もて編める網に黄金をつ裹める如し。

熔巖の流れ行く先なる葡萄の幹に聖母マドンナの像を懸けたるものあり。

くじく

こはその功德もて熔巖の炎を避けんとこのころしらひなるべし。

はうかう

されど熔巖はその方嚮を改めず。像を懸けたる一本ひともとの葡萄

は、早く熱のために葉を焦し、その幹は傾きて、首を垂れ憐を

もろひと

乞ふ如くなり。

衆人の中なる

じゆんぼく

淳樸なる民等が眼は、その發

りゆき

落いかならんとこの尊き神像に注げり。幹は愈曲り低れて、

マドンナ

今や聖母のおほん裳裾と火の流との間數尺となりぬ。忽ち我が

もすそ

立てる側なるフランチスクス派の一僧ありて、もろ手高くさし上

げて叫べり。聖母は火に焼かれ給はんとす。汝等を永劫不滅の火

焰の中より救ひ給ふ聖母なるぞ。早や助け出さずやといふ。衆人
 は皆震慄して一步退き、畏怖の眼を睜りて、次第に撓む梢頭の尊
 像を仰げり。一人の女房あり。口に聖母の御名を唱へつゝ、走り
 て火に赴きて死せんとす。爾時僅に數尺を剩したる烈火の壁面
 と女房との間に、馬を躍らして騎り入りたる一士官あり。手に白
 刃を抜き持ちてかの女房を逐ひ卻け、大音に呼びけるやう。物に
 や狂ふ、女子、聖母争でか汝が援を求めん。聖母は彼拙く彩り
 たる、罪障深きものゝ手に穢されたる影像の、灰燼となりて滅せ
 んことをこそ願ふなれといふ。その聲はベルナルドオが聲なり。
 その行は倏忽の間おこなひ しゆくこつに一人の命を助けて、その言は俗僧の妄誕ぼうた
 をいましめ得たるなり。われはこの昔の友を敬する念を禁ず

ること能はずして、運命の我等二人を遠離けしを憾とせり。されど我胸は高く跳りて、今渠かれに對むかひて名告なのり合ふことを欲せず、又能はざりき。

舊きう羈き鞞てき

アントニオならずやと呼ぶ聲あり。我に迫りて手を※とれり。初はわれベルナルドオの己れを認め得たるならんとおもひしが、その面を視るに及びて、そのフアビアニ公子なるを知りぬ。公子はわが昔の恩人の壻むこにして、フランチエスカの君の夫なり。我を以て不義の人となし、我に訣けつ絶ぜつの書を贈れる人の族うからなり。公子。

こゝにて逢はんとは思ひ掛けざりき。夫人に語らば定めて喜ぶことならん。されどいかなれば夙はやく我われらを訪たづねんとはせざりし。カステラマレカステラマレに來てより既に八日になりぬ。われ。君達のこゝいに在ますべしとは、毫すこしも思ひ掛けざりき。そが上わが伺候を許し給はんや否やだに知らねば。公子。現げにさることありき。おん身は昔にかはる男となりて、婦人のために人と決闘し、脱走したりとの事なりき。そは我とても好しとは思はず。をぢ君のことば短なる物語にて、その概あら略ましを知りし時は、我等もいたく驚きたり。おん身はをぢ君の書を獲たるならん。その書は優しき書にはあらざりしならんといふ。我はこれを聞きつゝも、むかしの羈きづ鞫なの再び我身に纏まつるゝを覺えて、只だ恩人に見放されたる不幸なる身の上

を侘かこちぬ。公子は我を慰めがほに、又詞を繼いで云ふやう。否々、おん身を見放さんはをぢ君の志にあらず。我車に上りて共に來よ。今宵は妻のために 思おもひがけ掛がけなき客を伴ひ還らんとす。カステラマレは遠くもあらず。旅宿は狭けれど、猶おん身が憩はん程の房へやはあるべし。をぢ君の性急なるはおん身も兼ねて知れるならずや。この和睦わぼくをばわれ誓ひて成し遂ぐべしといふ。我は首を垂れてこの成たひらぎの覺おぼつか束なかるべきを告げしに、公子は無造作に我詞を打消して、我を延ひきて車の方に往きぬ。

車くさいに乗りてより、公子は我に別後の事を語れと迫りぬ。わが賊ぞ寨くさいに入りしことを語るに及びて、公子は面に笑を帯びて、そは即興詩にはあらずや、記憶より出でずして空想より出づるにはあ

らずやといひ、又恩人の絶交書の事を語るに及びて、苛酷なり、

はなは はなは 太だ苛酷なり、されどそはおん身の改 かいしゆん 悛すべきを期してなり、

おん身を愛してなり、おん身はよもや非を遂げて劇場に出でなどはせざりしならんといふ。われは直ちに、否、昨晚出でたりと答へき。公子。そは實に大膽なる事なりき。結果はいかなりしか。

われ。望外なりき。喝采の聲止まずして、幕の外に出で、謝すること再びなりき。公子。御身にかゝる成功ありしか。そは責 せ めて

もの事なりき。此詞は我材能に疑を挾めるものなれば、われはそれを聞きて快からずおもひぬ、されど恩惠の我口を塞げるを奈何せ

ん。われは夫人に會はんことの心苦しさを訴へしに、公子は唯だ たはむれ 戲に、 ちやうもん 聴聞せ

そは説法なくては濟まぬならん、されど説法を

んもおん身に害あらじと答へぬ。

兎角いふ程に、車は旅店の門に到りぬ。一少年の髪に焼やきこ※當て、
 好ききぬ衣着たるが、門前に立てり。公子を迎へて云ふやう。フアビ
 ア二なるか。好くこそ歸り來たれ。細君は待ち兼ね給へり。かく
 云ひつゝ我を視て、扱さては新顔の即興詩人を伴ひ歸りしか、チエン
 チイといふなるべし、違たがへりやと云ふ。公子はチエンチイとはと
 我面を顧みたり。われ。そは我が番附に書かせし名なり。公子。
 然しかなりしか。そは責めてもの思案なりき。少年。フアビア二、御
 身は此人のいかに戀愛を歌ひしを想ひ得るか。昨夜おん身が「サ
 ン、カルロ」座に往かざりしこそ遺憾なれ。めでたき才藝にこそ
 とて、我と握手し、我と相見る喜びを述べ、又フアビア二に向ひ

て云ふ。今宵はおん身に晚餐の馳走を所望すべし。この好謳者かうおうしやをおん身等夫婦にて私せんとはせじ。公子。問はるゝまでもなく、おん身は何時にても我わが方かたに歓迎せらるゝならずや。少年。さるにてもおん身は、何故に猶我等二人のために紹介の勞を取らずして、互にその名を知ることを得ざらしむるぞ。公子。そはいらぬ禮儀なり。われは熟よく渠かれと相知れり。汝は我友なれば、渠は特ことごとくに紹介をば求めざるべし。渠は唯だおん身を知ることを得たるを喜ぶならんといふ。此挨拶は固もとより我心あきたらに慊ねど、われは又恩惠のために口を塞がれたり。少年は我方に向ひぬ。さらばわれ自ら我身を紹介すべし。おん身の何人たるは我既に知れり。我名はヅ

エンナ口なり。國王陛下の護衛たる一將校なり。(微笑ほゝみつゝ)

ナポリ
 拿破里の名族にて、世の人は第一に位すとぞいふ。そは偽にもあ
 らざるべし。就^{なかんづく}中わがをばは頗るこれに重きを置けり。おん
 身の如きを知るは、大いなる幸なり。おん身の才と云ひおん身の
 吭^{のど}と云ひと、猶詞を繼がんとするを、フアビア二は押しとゞめて、
 止めよく、さる挨拶を受くることは猶不慣なるべし、紹介とや
 らんも最早濟みたるべければ、夫人の許に往かん、かしこには又
 和議といふ難關あり、おん身仲裁の煩を避けずば、今の辯舌を殘
 し置きて其時の用に立てよと云ひつゝ、彼士官と我とを延^ひきて、
 旅店の一間^{ひとま}に進み入りぬ。われはこの生^{せい}客^{かく}の前にて、我身の上
 の大事を語らるゝを喜ばねど、二人は親しき友なるべければと自
 ら思ひのどめて、遅れ勝^{がち}に跟^{したが}ひ行きぬ。

やうやくにして歸り給ひしよと迎ふるは、久しく面を見ざりし
 フランチエスカの君なりき。公子。現げにやうやくにして歸りぬ。
 されど二人の賓客を伴へり、夫人は一聲アントニオと云ひしが、
 忽たちまち又調子を更かへてアントニオ君ぎみと云ひつゝ、その巖おごそかに落つきた
 る目を擧げて、夫と我とを見くらべたり。われは身を僂かゞめてその
 手に接吻せんとせしに、夫人は我を顧みず、手をジエンナ口くちにさ
 し伸べて、晚餐の友を得たる喜を述べ、夫に向ひて、エズキオの
 爆發はいかなりし、熔巖はいづ方へ流れんとするなど問ひぬ。公
 子は略ほぼ見しところを語りて、我等の邂逅の事に及び、今は客と
 して伴ひたれば昔の事を責め給ふなと云へり。ジエンナ口くち。然さな
 り。此人いかなる罪を犯しゝか知らず。されど天才には何事をも

許さるべきならずや。夫人は纔わづかに面やを和はげて我に會釋あはしつゝジエ
 ンナ口むかに對むかひて云ふやう。君のいつも面白おもしろげに見え給ふことよ。
 犯とがし、科とがもあらねば、免ゆるすべき筋の事もなし。けふは何の新しき
 事もたらを齎もたらし給ふ。佛蘭西新聞フランスには何の記事かありし。昨夜はいづく
 にてか時を過し給ひしと問ひぬ。ジエンナ口むか。新聞には珍らしき
 事も候はず。昨夜は劇場にまゐりぬ。セキルラとこやの剃手とこやの僅まっせに末
 齧つを餘したる頃なりき。ジヨゼファイインはまことに天使の如く
 歌ひしが、一たびアヌンチヤタを聞きし耳には、猶飽かぬ節のみ
 ぞ多かりし。さはいへ我が往きしは彼曲のためにはあらず。即興
 詩を聞かんとてなりき。夫人。その即興詩人は君の心に協かなひしか。
 ジエンナ口むか。わが期ごする所の上に出でたり。否、衆もろひと人の期せし

所の上に出でたり。我は諛へつらはんことを欲せず。又藝術は我等の批評もて輕重すべきものにあらず。されど我は夫人に告げんとす。夫人よ、渠かれの即興詩をいかなる者とか思ひ給ふ。謳うたひて者の人物はその詩中に活動して、満場の客はこれが爲めに魅せらるゝ如くなりき。何等の情ぞ。何等の空想ぞ。題にはタツソオあり、サツフオオあり、地下窟ありき。篇々皆書卷に印して、不朽に垂たるとも可なるやう思ひ候ひぬ。夫人。そは珍らしき才ある人なるべし。きのふ往きて聴かざりしこそ口惜しけれ。ジエンナ口。(我方を見て)夫人は其詩人の今宵の客なるをば、まだ知らでやおはせし。夫人。さてはアントニオなりとか。舞臺にまで上りて、即興詩を歌ひしとか。ジエンナ口。然さなり。その歌は舞臺の上にも珍らし

き出来なりき。されど夫人は舊く相識り給ふことなれば、定めて
 屢 その技倆を試み給ひしならん。夫人。（ほゝ笑みつゝ）まこ
 とに屢 聞きたり。まだ童わらべなりし頃より、アントニオが技倆をば
 讚め居りしなり。公子。その時われは早く桂の冠をさへ戴かせた
 り。夫人は處女なりしとき其即興詩の題となりぬ。されど今は食
 卓に就つくべき時なり。ジエンナ口、おん身はフランチェスガを伴
 ひ往け。われは外に婦人なければ即興詩人を伴はん。いぎ、アン
 トニオ君、手を携へて往かんと、戯れつゝ我を導けり。ジエンナ
 口。さるにても、フアビアニ、おん身は何故我に一たびもチエン
 チイの事を語らざりしぞ。公子。我家にてはアントニオと呼びな
 らへり。その即興詩人となれるを夢にだに知らねばこそ、前さきの和

睦の一段は生じたるなれ。アントニオは言はゞ我家の子なり。ア
 ントニオ、然さにはあらずや。（我は公子を仰ぎ視て會釋せり。）
 アントニオは好き人物なり。唯だ物學ぶことを嫌へり。ジエンナ
 口。渠かれは既に萬物を師とする詩人なり。いかなれば強ひて書を讀
 ませんとはし給ひし。夫人。（戯たはぶの調子にて）餘りに讚めちぎり
 給ふな。我等が渠の机に對ひて數學理學に思を覃ふかむるを期せし時、
 渠は拿破里ナポリの女優に懸想してうはの空なりしなり。ジエンナ口。
 そは多情多恨なる證あかしなるべし。女優とはいかなる美人なりしぞ。
 その名をば何とかいひし。夫人。アヌンチャタとて人柄も技倆も
 共に優れし女なりき。ジエンナ口。（盃を舉げて）アヌンチャタ
 は我も迷ひし一人なり。そは好趣味ありと謂ふべし。さらば、即

興詩人の君、アヌンチャタの健康を祝して一杯ひとつきを傾けてん。

(我は苦痛を忍びて盞さかづきをあはせたり。) 夫人。そも一わたりの迷に

あらず。議セナトオレ官の甥と鞞さやあて當して、敵手あひてには瘡きずを負はせたれど、

不思議にその場を遁のがれ得たり。かくてこたび「サン、カルロ」座

には出でしなり。アントニオをば舊く知りたれども、その大膽な

ることかくまでならんとは、我等も思ひ掛けざりき。ジエンナ口。

その議官の甥のたまと宣ふは、近頃こゝに來て禁軍このゑの指揮官となりし男

ならん。我も前さきの夜出逢ひしが、才氣ある好男子と思はれたり。

想ふに情夫先づ來りて、アヌンチャタも繼ついで至るにはあらずや。

此推測にして差たがはずば、拿破里はアヌンチャタが最後の興行とそ

の合がふきん※の禮とを見るならん。夫人。禁軍の將校たるものゝ争いかでか

歌妓を娶^{めと}るべき。そは家を汚すに當るべければ。われ。(震ふ聲をえも隠^{かく}さで)名士の妻を藝術界に求めて、幸福と名譽とを得たるは、その例^{ためし}ありとこそ思ひ候へ。夫人。幸福は或は有らん。名譽は有るべきやうなし。ジエンナ口。否、おん身に忤^{さか}ふには似たれど、己れなどはアヌンチャタを得ば、名譽此上なしとおもへり。されば人も然^{しか}ならんとおもふなり。そは兎まれ角まれ、アントニオの君、今宵の即興を聞せ給へ。夫人は君がために好き題を撰み給ふべければ。夫人。そは撰むまでもなし。ジエンナ口の好むところにしてアントニオの能くするところといはゞ、題は戀愛と定まり居るならずや。ジエンナ口。善くこそ宣^{のたま}ひたれ。その戀愛とアヌンチャタとを題とせん。われ。又の日にはいかなる題をも辭^{いな}

まざるべし。今宵のみは免し給へ。心地も常ならぬやうなり。外套着ずして汐風を受け、直ちに火山の熱さに逢ひ、歸るさの車にて又涼風すゞかぜに觸れし故にや。公子。アント二才も早や技藝家の自重といふことを覺えたりと見えたり。今宵は免すべければ、明日は共にペスツムに往け。かしこには詩料あり。こも亦拿破里におん身が自重を示す手段なるべし。(我はえ辭いなまで會釋せり。) ジエ ンナ口。好し、渠かれを伴ひて行かん。渠一たび希臘廢祠の中に立たば、神來の興忽ち動きて、古のピンダロスを欺く詩を得るならん。公子明日より四日の旅路なり。歸るさにはアマルフイイとカプリとを見んとす。夫人。旅の事をば猶明朝かたらふべし。夫人先づ起ちて我等は卓つくろを離れ、我は始て夫人の手に接吻することを得た

り。公子は今夜書を作りてをぢに寄せ、我がために地をなさんと云ひぬ。ジエンナ口は打ち戯れて、我はアヌンチャタを夢にだに見ん、夢なれば決闘を求むる人はあらじと云ひて別れぬ。

われ若しこの遊あそびを辭いなみなば、我生涯の運命はこゝに一變したるならん。後に思へば、此遊の四日は我少壯時代の六星霜を奪ひ去りたるなりき。誰か人間を自由なりと謂ふ。いかにも我は、目前に張りたる交錯せる綱えらを擇み引くことを得べし。されど我はその綱のいづれの處に結ばれたるを知るに由なし。我は恩人の勸に會ひて諾うと曰ひたり。こは我生涯の未來の幾齣のために、舞臺の幕を緊きびしく閉づべき綱なりしを奈何せん。已やみぬるかな。

われは數行の書をフエデリゴに寄せて、この思おもひ掛がけなき邂逅

と小旅行とを報ぜんとす。こを寫し畢りしとき、我胸には種々の情の群り起るを覺えき。さても此夕の事多かりしことよ。サンタが道ならぬ戀、ベルナルドオの再び逢ひて名告り合はざる、恩人にめぐりあひての後の境遇、彼といひ此といひ、此身は風のまに／＼弄ばるる一片の木葉にも譬へつべき心地ぞする。きのふは縁なくゆかりなき公衆の喝采を得て、けふは世に稀なるべき美人のわが優しき一言を希ひ求むるに逢ふも我なり。忽ち舊誼の絲に手繰り寄せられて、一餐の恵に頭を垂れ、再び素のカムパニアの孤となるも我なり。恩人夫婦はわが昔の罪を宥して我を食卓に列らしめ、我を遊山に伴はんとす。豈慈愛に非ざらんや。唯だ富人の手に任せて軽く投擧するときは、その賚は貧人心上の重荷となる

をいかに奈何せん。

苦言

伊太利風景の美はロオマ羅馬又はカムパニアの郊野に在らず。されば
 我が少しくこれを觀ることを得しは、曾かつてネミの湖畔に遊びし時
 と近ナポリごろ拿破里に來し時とのみ。こたび尋ねし勝概こそは、始め
 て我心を滿ち足らしめ、我をして平生む夢寐する所の仙郷おもひに居る念
 をなさしめしものなれ。凡そ外國とつくにの人などの此境を來り訪ふも
 のは、これをその曾て見し所の景に比べて、或あるは勝まされりとし或は
 劣れりともするなるべし。足本國の外を踐ふまざる我ともがら徒に至りて

は、只だその瑰くわいゐ偉珍奇なるがために魂を褫うばはれぬれば、今復たその髣髴はうふつをだに語ることを得ざるならん。

素もとわれは山水の語ることを得べきや否やを疑ふものなり。山水の全景は一齊に人目を襲ふ。而るにこれを筆舌に上のぼすときは、語を累かさねて句を作し、句を積みて章を作し、一の零碎の景に接するに他の零碎の景を以てす。譬たとへば寄木細工よせきざいくの如し。いかなる能辯能文の士なりとも、その描寫遺憾なきことを得ざらん。そが上に我が臚列ろれつする所の許多あまたの小景は、われ自らこれを前後左右に排置して寄木の如くならしむるに由なし。その排置の如きは、一に聽者讀者の空想に委ゆだぬ。是に於いてや、我が説く所の唯一の全景は、人々の心鏡に映じて千様萬態窮極することなし。且人かつをして

面貌おもはせを語らしめて聽け。目は此の如し、鼻は此の如しと云はんも、到底これに縁よりて其真相を想像するに由なからん。唯ただ君の識る所の某に似たりと云ふに至りて、僅にこれを彷彿すべきのみ。山水を談ずるも亦復是かくの如し。人ありて我にヘスペリアの好景を歌へと曰いはゞ、我は此遊の見る所を以てこれに應こたふるならん。而して聽者のその空想の力を殫つくして自ら描出する所のものは、竟つひにわが目撃せし所の美に及ばざるなるべし。蓋し自然の空想圖はるかはに人間の空想圖の上にあるものなればなり。

カステラマレを發せしは天氣めでたき日の朝なりき。これを憶おもへば烟立つエズ中才いたゞきの巔いたゞき、露たにまけく緑深き葡萄の蔓の木々の梢あはまより梢へと纏たひ懸れる美しき谿間たにま、或は苔を被れる岩壁の上に顯あれ或

は濃き橄欖オリフの林に遮られたる白堊はくあの城じやうさい砦さいなど、皆猶目前に在る心地ぞする、穹きゆう窿りゆうあり大理石柱ある寵女へスチアの祠ほこらの、今や聖マ母ドンナの堂となりたる（マドンナ、サンタ、マリヤ）は、古いにしへを好む人の心を留むべき遺蹟なり。一壁崩壊して、枯體ころ殘骨の露呈せる處に、葡萄の覃はひ來りて、半ばそれを覆ひたるは、心ありてこの悲惨の景を見せじとするにやとさへ思はれたり。

我目前には猶突兀とつこつたる山骨の立てるあり。物寂しく獨り聳えたる塔せきの尖せんに水鳥の群立むらたち來らんを候うかゞひて網を張りたるあり。脚底の波打際を見おろせばサレルノまちの市の人家きし碁子きしの如く列つらなれり。而して會くわんく 《たま〜》その街を過ぐる一行ありしがために、此一きはめ寰區くわんくは特に明かなる印象を我心裡に留むることを得たり。角極きはめ

て長き二頭の白牛一車を輓^ひけり。車上には山賊四人を縛して載せたるが、その眼は猛獸の如く、炯々^{けいけい}として人を射る。瞳黒く貌^{かほ}美しきカラブリア人あり。銃を負ひて、車の兩邊を騎行せり。

旅の初一日の宿をばサレルノと定めたり。この中古學問の淵^{えんそ}叢^うたる市に近づくとき、ジエンナ口のいふやう。縑帛^{けんぱく}は黄變^{わうへん}

すべし。サレルノ騷壇^{さうだん}の光は今既に滅せり。されど自然といふ大著述は歳ごとに鏤^る梓^しせらる。予はアントニオと同じく、師とするところ此に在りて彼に在らずといふ。われ答へて、自然固^{もと}より師とすべし、只だ書冊も亦未だ棄つべからず、譬へば酒飯の並びに廢すべからざるが如しといひしに、フランチエスカの君は我言を是なりとし給ひぬ。

此時フアビアニ公子かたはら傍より、アントニオよ、言ふは易く行ふは難きもので、羅馬に歸りての後は、その詞の偽ならぬを明にせよといふ。羅馬の一語は我が思ひ掛けざるところなりき。我は心の中に、復た羅馬には往かじと誓ひながら、詞に出して争はんとはせざりき。

公子は更に語を繼ぎてさま／＼の事をいひ出で、人々のこれに答へなどするひまに一行は早くサレルノに到りぬ。我等は先づ一寺院に入りたり。ジエンナ口進み出で、いふやう。こゝにてはわれ案内者たることを得べし。これはサレルノにてみまかり給ひし法皇グレゴリヨ七世（獨帝と争ひて位を逐おはれ、千八十五年此に終りぬ）の遺骨を收めし龕がんなり。その大理石像はかしこなる贄し

卓たくの上に立てり。さてこの石棺は アレキサンドル 歴山 大帝の遺骸を藏をさむといふ。公子。何とかいふ、歴山大帝の軀むくろこゝにありとや。ジエンナ口、我が聞きしは然しかなりき、さにはあらずや、と寺僮じどうを顧みれば、まことに仰の如しと答ふ。われつらく棺を見て、否、そは誤りなるべし、歴山大帝の軀こゝに在りといはんは、歴史ないがしろを蔑にするに近し、この浮彫の圖様は大帝凱旋の行列なれば、かゝる誤を傳へしにや、見給へ、かしこなる寺門に近き處にもこれに似たる石棺ありて、その圖様は酒神バツコスの行列なり、彼棺は素もとペスツムに在りしを、こゝに移してサレルノの一貴人の永眠の處となし、その石像をば傍に立てたり、此このたぐひ類の棺くわんくわく 擲いと多し、大帝の事を圖したりとて其屍をさを藏むとは定め難しといふ。ジエンナ口

は唯だ冷かに、現げにさることあらんも計られずとのみ答へしに、
 フランチエスカの君我耳に付きて、自らさかし伶俐がりて人を屈するは
 悪ならひしき習のたまぞと宣ふ。我は頭を低たれて人々の後しりへに退きぬ。

晩鐘の鳴る頃、公子とジエンナ口とは散歩にとて出で、我は夫
 人に侍して客舎の軒に坐し居たり。海づらは乳ちの如き白色に見え、
 熔巖石を敷きたる街路より薔薇紅ばらいろにかゞやける地平線のあたりま
 で、いと廣やかに晴れ渡り、波打際は藍色にきらめけり。かゝる
 色彩の配合は羅馬の無きところなり。われ、めでたき彩繪いろゑには候
 はずやと云へば、夫人、見よ、雲は今「フエリチツシイマ、ノツ
 テ」(幸ある夜を祈る)を言ふ時ぞ、と山嶽の方を指ざし給ふ。
 橄欖オリフの林に隠べつげふせる富人の別業はるかの邊よりは、高く、二塔の巔

を摩する古城よりは又　に低く、一ひとむら叢の雲は山腹に棚引きたり。
 われ。彼雲の中に棲すみて、大海の潮しほの漲落みちひを觀ばや。夫人。さな
 り。かしこに住みて即興詩を吟ぜよ。唯だ聽くものなきが恨なる
 べし。われ。のたまふ如く、其恨は思ひ棄て難し。詩人の喝采を
 受くるは草木の日光を受くると同じ。囿ひとやのタツソオが身を害そこなひ
 しは、獨り戀路の關を据ゑられしが爲めのみにあらず。その詩の
 爲めに知音ちいんを得ざるを恨みしが爲めなり。夫人。われは今おん身
 が上を語れり。タツソオが事を言はず。われ。タツソオは詩人な
 り。されば好きためし例と思ひて引き出でしまでに候ふ。夫人。ア|ン|ト
 二|オ|よ、さてはおん身は自ら詩人なりと許す心あるにやあらん。
 我上を語らるときは、不朽の業わざある人の名をば呼ばぬぞ好き。お

ん身は物に感動し易き情ありて、又能くさる情を解するより、直ちに己れの詩人たるを信ぜんとするならん。そは世間幾多の人の具ふる所にして、又能くする所なり。これに惑ひて徒らいたづに思ひ上がりなどせば、生涯の不幸となるべきものぞといふ。われは面の火の如くなれるを覺えて、仰せはさる事ながら、わが自ら深く信ずるところをば包まで申すを聞き給へ、「サン、カルロ」座なる數千の客は我に何の由縁ゆかりもなきに、口を齊ひとしうして喝采したり、われは惠深き君の我喜を分ち給はんことを忤はかりしにと答へたり。夫人。おん身の友は多かるべし。されどまことにおん身の喜を分たんもの我が如きは少からん。おん身の情に厚きこと、心ざまの卑からぬことは、我等よく知りたり。さればこそをぢ君の御腹立を

も申まうしと解とかばやとさへ思ふなれ。おん身には好き稟賦ひんぷあり。學ばゞ

一ひとかど廉の人物ともなるらん。されど今の儘にては、その才僅かに

坐客の耳を悦ばしむるに足りて、未だ世に立ち名を成さんには違いとま

あらざるべし。われ。才の拙つたなく學の足らざるは、げにおん詞の如

くなり。されどわが公衆に對せし時の成功をば、君の親しく視給

はねば知らせ參らせんやうなし。只だ君の信ぜさせ給ふと覺しき

ジエンナ口の君は彼夕劇場にありて、我技を賞し給ひきと申さば

足りなん。夫人。おん身はジエンナ口を證人とせんとやいふ。ジ

エンナ口は好き紳士なれど、われは其藝術上の批評には重きを置

かず。劇場に集ひし一夜の公衆に至りては、いよく信うづずべから

ず。おん身若し彼夕もろひとはづかしに辱められんには、われ深く憾うらみとす

べし。その事なくして畢をはりしは、まことに自他の幸なり。おん身が場に上りしは唯だ一夜にして、假けみやう名をさへ用ゐぬれば、かゝる夢の如きよしなしごとの久しく人の記憶に残らん憂はあらし。三日の後には我等又拿破里に在り。そのあくる日には羅馬へ旅立すべし。羅馬に往きて、おん身の耐忍と勉強とを見せよ。おん身に眞まことの事を告ぐるは我のみぞとのたまひぬ。

古祠、瞽ごぜ女

ペスツムは宿るべき家もなく、こゝよりかしこへの道は賊などの出沒することもありと聞えければ、翌あくるひ日まだ暗きに一行は車

に上りぬ。騎馬の憲兵は護衛として車の傍に隨へり。

道の左右には柑子の林ありて、その鬱茂せる状は深山の森にも似たるべし。セラの流を渡るときは、垂柳月桂の澄める水の面に影を倒せるを見き。荒蕪せる丘陵の間、時に穀の長ぜる田圃あり。道に沿ひて蘆薈霸王樹など野生したるが、皆ところ得がほに延び育ちたり。

既にして一行は一古祠の前に立てり。即ち二千年前の建立にして、その様式希臘時代の粹と稱せらる。この祠、見苦しき酒店一軒、貧しげなる人家三棟、籐もて作れる小屋三つ四つ。是れ世界に名高きペスツムの村なり。いにしへは此村薔薇に名あり。見渡す限り紅の霞に掩はれたりし由物に見えたれども、今は一株

をだに留めず。身邊すべ渾て是れ緑にして、其色遙に山嶽つらなに連れり。平地には堇花すみれ多く、薊あざみその外の雜草の間に咲きひろごりたり。自然の力餘あまりありて人間の工たくみを加へざる處なれば、草といふ草、木といふ木、おのがじし生ひ榮ゆるが中に、蘆薈、無花果いちじゆく、色紅なる「ピユレトルム、インヂクム」などの枝葉えだはさしかはしたる、殊に目ざましくぞ覺えられし。

シチリアの自然、その豊饒ほうねうの一面と荒蕪の一面とはこゝにあり。シチリアの希臘古祠はこゝにあり。而してシチリアの貧窶ひんくもまたこゝにあり。一行のめぐりには一群の乞丐かたゐ來り集ひたり。その状さま南海諸島の蕃人にも似たるべし。男子は長き羊の皮を、毛を表にして身に纏へり。暗褐色なる雙脚には靴を穿かず、剪きらざる

髪は黒き面の邊ひるがへに翻り垂れたり。妬ねたましき迄すぐに直すに美しく生なひ立ちたる娘たちのこれに隨したがへるを見るに、そのさま半ば赤はだかなりといふべし。膝の上まで截きり開きたる短衣は裂ほけ綻ころび、鬆ゆるく肩に纏うなへる外套めきたる褐かちいろ色の布は垢つきよこれ、長き黒髪をば項うなじに束ね、美しき目よりは恐ろしき光を放てり。

此群こに十二歳を踰こえじと見ゆる、すぐれて麗うるはしき娘あり。アヌンチャタとなるべき姿にもあらず、さればとて又サンタとなるべき貌にもあらず。前にアヌンチャタが物語に聞きつる、メヂチ家の愛憐神女の像は、かゝる面影あるにはあらずやと思はる。實に此少女をとめの清かたき容ちは、人をして回抱せんと欲せしむるものにあらず、却もりて膜拜もはいせんと欲せしむるものなり。

この少女は少し群を離れて立てり。褐色なる方巾偏肩より垂れたるが、巾を纏はざる方の胸と臂とは悉く現はれたり。雙脚には何物をも着けざりき。かくはかなき身と生れても、流石に粧ひ飾る心をば持ちたるにや、髪平かに結ひ上げて、一束の莖花を挿せるが、額の上に垂れ掛れり。われその容を窺ふに、羞慙あり、慧巧あり。而して別に一種言ふべからざる憂愁の色を帯びたる如くなりき。唯だその雙眸は恆に地上に注ぎて、人の面を見んことを恐るゝものゝ如し。

口々に物乞ふ中に、この少女のみは一言をだに發せざりき。ジエンナ口先づ進み寄りてこれに錢を與へ、手を頤の下に掛けて、此群には惜しき佳き兒ぞといふ。公子夫婦もまことに然なりとい

ひぬ。われは少女の面の紅を潮するをみたり。少女は目を開けり。而してわれ始てその瞽めしひなるを知りぬ。

われは同じくこれに物を贈らんと欲して敢てせざりき。既にして人々は乞丐かたあの群くるしに窘められて、酒店の軒に避けたれば、獨り立ち戻りて、盾銀たてぎん一つ握らせたり。盲人きんの敏さとき習として、少女はその常の錢ならぬを知りたるなるべし、顔は燃ゆる如くなりて、その健すこやかに美しき唇は我手背に觸れたり。われはその接吻こんしの渾身の血んに浸しみ渡る心地して、遽あわたゞしく我手を引き退け、酒店の軒に馳せ入りぬ。

酒店は只だ一室ありて、大いなる竈かまど殆どその全幅を占めたり。惜しげもなく投げ入れたる薪は盛に燃えあがりて、烟しゅうは岫を出づ

る雲の如く、騰のぼりて黒みたる仰てんじやう塵に至り、更に又出口を求めて室内をさまよへり。主人の蔭多き大柳樹の下にありて、誂あつらへし朝餉あさげの支度する間に、我等はこの烟煤えんばいの窟のがをふるほこられ、古祠ふるほこらを見に往くことゝしたり。委い它だたる細徑けいしんは荊榛けいしんの間に通ぜり。公子とジエンナ口とは手を組み合せて、フランチエスカはこれに腰掛かけつゝ昇あり行かく。

漫歩そゞろありきには似つかはしからぬ恐ろしき道かな、と夫人笑みつゝ云へば、案内者の一人、さのたまへど三とせの前迄は此道全く棘いばらに塞ふさがれたりき、又己れが幼き頃やしろ社の圓柱のめぐりに、砂土堆うづたかく積もり居しを記おぼえ居り候ふと答ふ。案内者は皆この詞の誤らざるを證せり。一行の後には、さきの乞丐かたあの群猶隨みひ來り、皆目を睜みはり

て我等を打目守れり。うちまも若しわれ等にしてふとその一人の面を見ることあるときは、その手は忽ちたまもの賜を受くるがために伸べられ、その口は忽ち「ミゼラビレ」（憐を乞ふ語）を唱へ出すなり。瞽女ごぜはいづち往きけん見えず。われはあはれなる少女の、獨りいかなる道の邊べうづくまに蹲り居るかを思ひ遣りぬ。

我等は一の劇場と一の平和神祠との迹あとなる斷礎の上を登り行きぬ。ジエンナ口人々を顧みて、あはれ平和と演劇との二つのもの、いかなればかく迄相親むことを得たるぞと云ふ。（劇場の徒の多く相嫉視するを諷するにや。）我等は海ボセイドン神祠しの前に立てり。世にはこれを「バジリカ」とぞいふ。近き頃、彼かのポムペイのの古市こしと同じく、闇黒の裡うちより出で、人の遺忘を喚び醒さましたるものは、

此祠と穀神祠デメエテルとなり。この祠ほこらの荊棘けいきよくに鎖とぎされ、土石に埋められたること幾百年ぞ。幸に外國とつくにの一畫師ありてこゝを過ぎ、柱尖の僅に露出せるを見、その美を喜びて寫し歸りしより、世の人こゝに注目し、終に棘を刈り土を掘りて、此の宏壯なる柱堂の、新らくに落せるものゝ如く、耽古者流めもてあその愛で翫あそぶところとなるには至りしなり。圓柱は黄なるトラエルチイノ石もて作られたり。(相待上新しき地層の石にして、石灰分ある温泉の鹽類の凝りて生ずる所なり。)無花果樹いちじゆくはその匝めぐりに枝さしかはし、野生の葡萄は柱頭迄攀よぢ上り、石質の罅かげき隙を生じたる處には、堇花の紫と「マチオラ」の紅とを見る。

我等は倒れたる一圓柱の跌ふの上に踞したり。ジエンナ口の力に

頼りて、乞兒かたあの群を逐ひ拂ふことを得たりしかば、我等の心靜に
 四邊あたりの風景を玩ぶもてあそには、復た何の妨さまたげもあらざりき。山の姿、海の
 色、この古神祠の頽敗さまの状など、一として我情を動さざるものな
 し。公子、今こそは我等がために一篇の即興詩を作なすことを辭せ
 ざるならめ、と問ひ掛け給へば、夫人も領きて同じ心を表し給ふ。
 われは柱を背にして立ち、少時記せしところの一歌謠の調を借り
 て、目前の景を歌ひ出せり。山水の美、古藝術のすぐれたる遺蹟
 を見るにつけ、哀なるはかの目しひたる少女をとめの上をにぞある。この
 自然の無盡藏は誰も受くべき賜たまもなるに、少女はそをだに受くるこ
 とを得ずといふ。是れ我一曲の主なる着想なりき。歌をるころは比ひに
 は、われ聲涙共に下るを禁ずること能はざりき。ジエンナ口は手

を拍ちて激賞し、公子夫妻はわが多少の情あるを認諾せり。

人々は石級を下りぬ。われはこれに従はんと欲して、ふと頭を

回らしゝに、我が倚りたりし柱の背後に、身を薰高き「ミユルツ

ス」の叢に埋めて、もろ手を項に組み合せたる人あるを見き。而

してそはかの目しひたる少女なりき。われはこの哀むべき少女の

我歌を聞きしを知りぬ、我がその限なき不幸を歌ふを聞きしを知

りぬ。餘りの便なさに、身を僂めてさし覗けば、袖は梢に觸れて

さやくくと鳴り、少女はさとも頭を擡げつ。われは思 倣に

や、その面の色のさきより蒼きを覺えたるが、少女を驚さんこと

のいとほしくて、身を動すことを敢てせざりき。少女は暫し耳を

敬て、アンジエロにやと呼びぬ。われは覺えず屏息せり。少女

は又俯うつむきて坐せり。前さきにアヌンチヤタの我に語りし希臘の神女も、
 石彫の像なれば瞻視せんしをば闕かきたるべし。今我が見るところは殆ど
 全くこれに契あへりとやいふべき。少女は祠いしずゑの礎いしずゑに腰掛けて、身を
 無花果樹と「ミユルツス」との裡に埋め、手に一物を取りてこれ
 を朱唇に宛て、面に微笑を湛へたり。何ぞ料はからん、その物は我が
 與へしところの盾銀ならんとは。

我情はこれに動かされて耐へ忍ぶべからざるに至りぬ。我は再
 び身を僂かゞめて少女の額に接吻せり。少女はあなやと叫び、物に驚
 きたる牝鹿の如く、瞬ひまく隙に馳せ去りぬ。その叫びし聲は我骨髓
 に徹し、その遽あわたゞしく奔はしり去りし状さまは我心魂を奪ひ、われは身邊の
 柱ちゆう 楹ちゆうえい 草木悉く旋せん轉てんするを覺えて、何故ともなく馳せ出し、

荊莽けいぼうの上を踏みしだきつゝ、徐しづかに歩める人々を追ひ越し行きぬ。

アント二オ、アント二オと呼ぶ公子の聲はるかなる後に聞えて、我は始て我にかへりぬ。兎かりをや獵せんとする、否さらずば天馬空を行くとかいふ詩想の象徴をや示さんとする、と公子語を繼いで云へば、ジエンナ口、否、われ等の跬きほ歩なやに蹇なやめる處を、渠かれは能く飛行すと誇るなるべし、いざ我が濟さい勝しょうの具の渠なやに劣らぬを證せんとて、我傍そに引き傍そうて走り出しぬ。公子後しりへより、汝等なは我が夫人の手を拉ひきて同じ戲あそをなすことを要もとむるにやといふとき、ジエンナ口は直に歩とぎを駐とぎめたり。

酒店に歸り着きし後は、瞽ご女ぜは影だに見えざりき。その叫こゝろびし聲の猶絶間なく耳に聞ゆるを、怪しとおもひてつく／＼聽けば、

そは我心しんてう跳しんてうのかく聞き做なさるゝにぞありける。嗚呼卑ひむべきは我心にもあるかな。少女が胸中の苦を永えいげん言げんして、これをして深く生涯の不幸を感ぜしめ、終にはその額に接吻して驚かしたるは何事ぞや。そが上にかの接吻は我が婦女に與へたる第一の接吻なり。少女の貧しきを侮あなどり、その目しひたるを奇貨として、我は我が未だ嘗て敢てせざりしところのものを敢てしたり。我はベルナルド才を輕けいてう佻てうなりとせり。而しかるに我が爲すところも亦此の如し。現げに塵の世に生れたる人、誰か罪業なきことを得ん。いかなれば我は自ら待つことの寛ゆるくして、人を責むることの酷なりしぞ。われ若し再び瞽ごぜ女ぜに逢はば唯だ地上に跪いてこれに謝せん。

一行は車に上りてサレルノに歸らんとす。我は心に今一度瞽女

を見んことを願ひしが、人に問ふことを憚りたり。忽ちジエンナ
 口の案内者を顧みて、さるにても彼の目しひたる娘はいかにした
 ると問ふを聞く。案内者の一人答へてララが事にて候ふや、ポセイ海
ドン神祠のほとりにやあるらん、常に彼處にあることを好めばとい
 ふ。ジエンナ口は「ベルラ、ヂキナ」（神々しきまで美しき子よ
 となり）と呼びて、手もて接吻の眞ま似ねしたり。車は動き出しぬ。
 さては彼子の名をばララといふとこそ覺ゆれ。われは馭者せなかと脊中
あは合せに乗りたれば、古祠の柱ちゆうれつ列のやうやく遠ざかりゆくを見
 やりつゝ、耳には猶少女の叫びし聲を聞きて、限なき心の苦しさ
 を忍び居たり。

路傍に「チンガニイ」族の一群あり。火を溝こうきよ渠の中に焚きて

食を調へたり。手に小鼓タムプリノを把りて、我等を要してト筮ほくぜいせん
 としつれど、馭者は馬に策むちうちて進み行きぬ。黒き瞳子ひとみの※電せんの如
 き少女二人、暫し飛ぶが如くに車の迹を追ひ來りしが、ジエンナ
 口はこれをも美しと愛めで稱たへき。されどララの氣けだか高きには比ぶべ
 うもあらざりき。

夕にサレルノに還りぬ。明日あすはアマルファイに往きて、それよ
 りカプリにりて還らんと成り。公子のたま實給ふやう。拿破里に還
 らば、留まることは一日にして羅馬へ立たんとぞ思ふ。アントニ
 オが準備も暇取ることあらじと宣給ふ。われは羅馬に往くこと
 を願はねど、例の恩誼に口を塞がれて、僅かに、老公のおほん憤いきどほり
 の氣遣はれてとのみ云ひしに、そはわれ等申し解くべしと答へて

我に詞を繼がしめ給はず。兎角する程に、賓客のおとづれ來て、會話はこゝに絶え、我不幸なる運命もまた定まりぬ。

夜襲

天氣好き日の朝舟出して、海より望めばサレルノの美しさは又一しほなるを覺えぬ。筋骨逞ましき男六人ろを揺うごせり。晝にしても見まほしき美少年一人かぢ舵うづの傍くまに蹲りたるが、名を問へばアルフオンソオと答ふ。水は緑いろにして透すき徹とほり、硝子ガラスもて張りたる如し。右手めなる岸の全景は、空想のセミラミスや築き起し、唯だ是れ一大苑ゑん圍いの波上に浮べる如くなり。その水に接する處に

は許多あまたの洞窟あり。その状柱列の迫持せりもちを戴けるに似て、波はその

の門に走り入り、その内にありて戯れ遊べり。突き出でたる巖いはは

端なに城あり、城じやうせん尖の邊には、一帯の雲ありて徐しづかに靡き過

ぎんとす。我等は大島小島（マユウリイ、ミヌウリイ）を望みて、

程なく彼マサニエル口とフラネオ・ジヨオヤとの故郷の緑いろ濃

き葡萄丘の間に隠見するを認め得たり。（マサニエル口は十七世

紀の一揆いつぎの首領なり。オベエルが樂曲の主人公たるを以て人口に

膾炙くわいしやす。フラネオ・ジヨオヤは羅針盤を創作せし人なり。）

伊太利に名どころ多しと雖いへども、このアマルファイの右に出づるも

の少かるべし。われは天下の人のことごとくこれを賞すること

得ざるを憾うらみとす。此地は廣くわうばう袤幾里の間、四時しいじ春なる芳園にし

て、其中央なる石級上にアマルフイイの市まちあり。西北の風絶て至ることなければ、寒さといふものを知らず。風は必ず東南より起り、棕櫚橘しゅろ オレンジ 柚の氣を帶びて、清波を涉わたり來るなり。

市の層疊して高く聳ゆる状さまは、戲園の觀棚さしきの如く、その白壁の人家は皆東國の制おきてに従ひて平屋根なり。家ある處を踰えて上り、山腹せまに逼るものは葡萄丘なり。山上には壁てふへきもて繞めぐらされたる古城ありて雲を※さふる柱をなし、その傍には一株の「ピニヨロ」樹の碧空を摩して立てるあり。

舟の着く處は遠淺なれば、舟人は我等を負ひて岸に上らしめたり。岸には岩窟多くして、水に浸されたと否あざるとあり。小舟三つ四つ水なき處に引上げたるを、好き遊あそびどころにして、子供

あまた集へり。身に挂かけたるは、大抵襦袢一枚のみにて、唯だ稀に短チヨキき中單を襲ねたるが雜まじれり。「ラツツアロオネ」といふ賤民たちんぼうなど（立坊ちんぼう 杯ちんぼうの類）の裸らうていなるが煖すなき沙すなに身を埋めて午睡せるあり。その常に戴ける褐色かちの帽は耳を隠すまで深く引き下げられたり。寺院の鐘は鳴り渡れり。紫衣の若僧の一行あり。頌じゆを唱へて過ぐ。捧ぐる所の磔たくぎょう像には、新に摘みたる花の環を懸けたり。

市の上なる山の左手に、深き洞穴に隣れる美しき大僧堂あり。

今は外よそびと人の旅館となりて、凡そこゝに來らん程のもの一人としてこれに投ぜざるはなし。夫人をば輿こしに載せて舁かかせ、我等はこれに隨いひて深いはほく巖きに載り込みたる徑こみちを進みぬ。下には清き蒼海を瞰みる。一行は僧堂の前に留りぬ。内暗き洞穴は我等に向ひて其あぎと

を開けり。穴の裏うちには十字架三基ありて、耶蘇と二賊との像これに懸り、巖上には彩衣を着て大いなる白き翼を負ひたる數人の天使ひざまづ跪けり。皆美術品などいふべき限のものにはあらず、木もて彫まだらり斑にいろどりたるまでなり。されど信仰の温き情は影を此拙作の上に留めて、おのづから美を現ぜり。

ちき 小き中庭を歩みて宿るべき部屋々々に登り着きぬ。我室の窓より見れば、烟波渺べうぼう茫として、遠きシチリアのあたりまで只だ一目に見渡さる。地平線きはの際に、しろかね色したるものゝ點々數ふべきは舟なり。

ジエンナ口は我を遊歩に誘はんとて來ぬ。いかに詩人よ。共に麓のかたに降り行きて、かしこの風景の美のこゝに殊なりや否や

を見んとおもはずや。少くも女性の美は麓のかたの優れたること
 疑ふべからず。こゝの隣房なる英吉利婦人イギリスの色蒼ざめて心冷なる
 は、我が堪ふること能はざる所なり。おん身も女子をなごを見ることを
 ば嫌ひ給はぬならん。恕ゆるし給へ、こは我ながらおろかなる間なり
 き。女子を見ることを嫌ひ給はねばこそ、君はこゝらわたりを彷徨さま
 徨まよひて、我は又この邂逅の奇縁を結ぶことを得つるなれ。斯く戯
 れつゝ、ジエンナ口は我を促し立て、石徑を下り行けり。途みちすが
 ら又いふやう。猶忘れ難きは彼の目しひたる娘の美しさなり。拿
 破里に歸りての後、クラブリア酒誂やぎへんをりは、かの娘をも共に
 取寄せんとぞおもふ。我血を沸き立たしむる功は此も彼に譲らざ
 るべし。

我等は市街に歩み入りぬ。アマルフイイの市は裹める貨物を
みだりに堆積したる状をなせり。羅馬なる猶太街の狭きも、これ
に比べては尚通衢大路と稱するに足るならん。こゝの街といふは、
まことは家と家との間に通じ、又は家を貫きて通じたるろぢの類
のみ。或るときは狭く長き歩廊を行くが如く、左右に小窓あり
て、許多の暗黒なる房に連れり。或るときは巖壁と石垣との間に、
二人並び歩むに堪へざるばかりの道を開けるが、暗くして曲り、
濕りて穢れ、級を登り級を降りて、その窮極するところを知らず。
我等はをりく身の戸外に在るを忘れて、大なる廢屋の内を彷徨
ふ念をなせり。所々燈を懸けて闇を照すを見る。而して山上は
日獨り高かるべき時刻なりしなり。

既にして我等は稍 開かいくわつ 豁くわつなる處に出でたり。一の石橋あり。

こなたの巖いははな端はなよりかなたの巖端に架したり。橋下の辻は市内第

一の大ひろこうぢ達ちなるべし。二少女ありて「サタレルロ」の舞を演せ

り。かほばせ貌かほめでたく膚かち褐ちいろなる裸らていの一童子の、傍に立ちてこれを

見るさま、アモオル愛の神童はうふつに彷彿ふつたり。人の説くを聞くに、この境寒やまひさ

を知らず、數年前きかん祁寒かんと稱せられしとき、寒暑針は猶八度を指し

たりといふ。(寒暑針はレオミユウル式ならん。)

巖頭に小さき塔ありて、美しき入江の景色の、遠く大小二島の

邊まで見ゆる處より、ろくわい蘆ろく薈わい、「ミユルツス」の間を通ずる迂うきよ

曲くせる小みちあり。これを行けば、いくばく幾いくもあらぬに、きゆうりゆう穹きゆう窿りゆうの

如く茂りあへる葡萄ぶだうの下に出づ。我等は渴を覚えぬれば、葡萄圃

のあなたに白き屋壁の緑樹の間より見ゆるを心あてに歩をそなた
 へ向けたり。輕暖の空氣の中には草木の香みちく／＼て、美しき甲
ぶとむし

蟲

あまた我等の身邊に飛びめぐれり。

到り着きて見れば、この小家のさまの畫趣多きこと言はんかた
 なし。壁には近き故墟こきよより掘り出したる石柱頭と石臂石脚とを塗
 り籠めて飾とせり。屋上に土を盛りて園とし、柑子の樹かうじ又はくさ

／＼の蔓草類を栽ゑたるが、その枝その蔓四方に垂れ下りて、

びろうど

緑の天鷲絨もて掩へる如し、戸前には薔薇叢さうびそうありて花盛に開け

るが、殆ど野生の状さまをなせり。六つ七つばかりの美しき小娘二人

その傍に遊び戯れ、花を摘みて環たまきとなす。されどそれより一際ひときは

美きは、此家の門口に立ち迎へたる女子なり。髪をば白き帛布あさぬの

もて束ねたり。その瞻視まなざしの情ありげなる、睫毛まつげの長く黒き、肢體したいの品しな高くすなほなる、我等をして覺えずうやく恭しく帽を脱し禮を施さざること能はざらしめたり。

ジエンナ口進み近づきて、さては此家いへあるじこそは、土地に匹た儔ぐひなき美人なりしなれ、疲れたる旅人二人に、一杯ひとつきの飲を恵み

給はんやと云へば、いと易き程の御事なり、戸外に持ち出でてまゐらせん、されど酒は只だ一種ひとつくさならずは貯たくはへ侍らずと笑ひつゝ

答ふ。その眞白なる齒に、唇の紅はいよく美さを増すを覺えき。

ジエンナ口。酒はいかなる酒にもあれ、君の酌くみて給はらんに、旨うまからぬことやはある。美しき娘の酌める酒をば、われ平生嗜たしなみて飲めり。女主人をみなあるじ。されどけふは美しき娘のあらねば、色香な

き人妻の酌みてまゐらするを許し給へ。ジエンナ口。さらば君は
 はや主^{ぬし}ある花となり給ひしにや、そのうら若さにて。女主人。否、
 われははや年多くとりたり。この時^{かたへぎき}傍^{かたへぎき}聽^{かたへぎき}したりしわれ、おん
 身の芳^{とし}紀^{とし}いくばくぞと問ひぬ。想ふにこの女子まだ十五ばかりな
 るべけれど、脊^{せたけ}丈^{せたけ}伸びて恰^{かつかう}好^{かつかう}なれば、行^へ酒^エ女神^べの像の粉本とせ
 んも似つかはしかるべし。女主人はわが何の爲めに問ひしかを疑
 ふものゝ如く、我面を暫し守りて二十八歳と答へつ。ジエンナ口。
 そはまことに好き^{としごろ}年^{としごろ}紀^{としごろ}にて、殊におん身には似あひたり。さる
 にても人の妻となりてより幾年をか^{へたま}經^{へたま}給ひし。女主人。最早^{もはや}十と
 せあまりになりぬ。かしこなる娘たちに問ひ試み給へかしといふ。
 この時先に門の口にて遊び居たりし二人の娘、我等が前に走り來

りぬ。われは故意わざと娘等に向ひて、これは汝たちの母なりやと問ひしに、娘等はゑましげに主人を見て、さなりくと頷きつゝ右ひだりより主人に倚より添すひたり。

女主人は酒もち來りて薦すめたり。その味はいとめでたかりき。

我等は杯を舉げてあるじの健康を祝したり。ジエンナ口われを指さして、この男は詩人なり、舞臺に出で、即興詩といふ者を歌ふを業わざとす、されば拿破里ナポリの婦人をばことごとく迷はしたれど、生來かたくな頑かたくななること石の如く、世に謂ふ女嫌ひなどいふものにや、まだ婦人に接吻したることなしといへり、珍らしき人にあらずやといへば、主人、さる人は世に有りがたからんとて笑へり。ジエンナ口語を繼ぎてわれはそれとは表裏うらうへなり、あらゆる美しき女を愛

し、あらゆる美しき女に接吻し、あらゆる美しき女の身方みかたとなりて、到るところ人の心をやはらぐ、されば美しき女に接吻を求むるは我權利なり、我が受け納るべき租税なり、これをばおん身も拂ひ給はざるべからずといひて、つとあるじの手をと※りたり。女主人。われは人の心やはらげ給ふといふおん恵あづかに與らんことをも願はず、さればさる租税をもえ納め侍らず。我租税をば、我夫自ら來りて收め取る習なり。ジエンナ口。その夫はいづくにあるか。女主人。さまで遠からぬところにあり。ジエンナ口。われは拿破里に居れども、いまだかくまで美しき手を見つることあらず。此上に接吻一つせんといはゞ、價いくばくをか求め給ふ。女主人。盾銀たてぎん一つにては貴かるべきか。ジエンナ口。さらば盾銀二つ出

さば、唇をも任せ給ふべきか。女主人。否、そは千金にも換へ難し。そは吾夫の特權なり。この對話の間、女あるじは我等に酒をす侷めて、ジエンナ口のなれ慣々しきをもにく惡む色なく、尚暫く無邪氣なる應答をなし居たり。我等はあるじのまことは十四歳にて、去年同じ里の美少年某なにがしと結婚せしこと、その夫は今拿破里にありて明日歸り來るべきこと、二人の子どものあるじの妹にて夫の留守の間來りやど舍れることなど、話の裏うちより聞き出せり。ジエンナ口は二人の小娘に、チャアレキん查列斯銀一つ（伊太利名「カルリイノ」約十五錢五厘）與ふべければ薔薇の花束得させよといひて、そを遠ざけ、あるじに迫りて接吻せんとしたり。初めは詞もてさま／＼に誘ひたれどそのしるし驗なかりき。次にはたはぶれ戲のやうにもてなして、搔き抱

きたれど、女はいち早く擦り脱けたり。終には路易金一つ（「ルイドル」と云ふ、約九圓七十八錢）取出し、指もて撮みて女の前にきらめかし、只だ一たびの接吻を許さば、これをおん身におくるべし、この金あらば、めでたき飾紐あまた買はるべし、その黒き髪に映好きものを擇み試みんは、いかに樂かるべきぞなど、繰返して説き勧めつ。女は我を指して、あちらのおん方は、おん身に比ぶればはるかに善き人なりと云へり。われ女の手を取りて、努彼詞に耳傾けんとなし給ひそ、彼黄金の色に目を注がんとなし給ひそ、彼男は悪しき人なり、願はくは彼男にの面當つらあてに、われに接吻一つ許し給へといひぬ。女はきと我面を見たり。われ重ねて、さきに彼男の我上を語りし中に、唯だ一つの實事あり、われ未だ

一たびも女の唇に觸れずといひしは是なり、我唇は清淨なり、わ
 れに接吻し給ふは小兒に接吻し給ふと同じといひぬ。ジエンナ口。
 さてく狡猾なる事を言ふものかな。女をくどく方便てだてのみはわれ
 汝に優れりと覺えつるに、今は汝又我を凌しのがんとす。女主人。否
 々、御身は金をこそ持ち給へれ、心ざま善ならぬ人なり。我が黄こ
 金がねをも何ともおもはず、接吻をも何とも思はぬをおん身に見せん
 ため、我はこの詩人かたの方に接吻すべし。新しく言ひ畢をはりて、女主人
 は雙手もろてもて我頬を押へ、我唇に接吻して、家の内に走り入りぬ。
 日の入り果てし頃、われは獨り山上なる寺院の一房に坐して、
 窓より海を眺め居たり。波頭の殘紅は薔薇色をなして、岸打つ潮
 に自然の節奏を聞く。舟人は漁すなとりぶね舟くがを陸に曳き上げたり。暮色

漸く至れば、新に點ともしたる燈火その光を増して、水面みのもは碧色にかゞやけり。一時四隣は寂として聲なかりき。忽ち歌曲の聲の岸より起るあり。こは漁父の妻子と共に歌ひ出せるにて、子どもらしき「ソプラノ」の音は低き「バツソオ」の音にまじりたり。一種の言ふべからざる情は我胸あふに溢れて、我心はこれがために震ひ動けり。一の流星あり。その疾ときこと擊げ石火せきくわの如く、葡萄の林のあなたに隕おちぬとぞ見えし。けふ我に接吻せし氣輕なる新婦にひよめの家も亦彼林のあなたにあり。われは彼女主人うつくしの美かりしをおもひ出で、又彼海ホセイドン神祠しほとりの畔ごぜなる瞽女ごぜの美かりしをおもひ出で、その背後には心と身と皆美しかりしアヌンチャタ」は底本では

「アヌンチャタ」ありて、その一たび點したる火は今も猶我身

を焦せり。我は餘りの堪へ難さに、口に聖母マドンナの御名みなを唱へて、
瓶裡へいりの薔薇一輪摘み、それを唇に押し當てつゝ心には猶アヌンチャ
タが上を思へり。われは情に堪へずして、僧堂を出で、海の方へ
降り行きぬ。即ち星輝せいぎを浴びあたる波の岸に碎くる處、漁父の歌ふ
處、涼風の面を撲うつ處なり。歩みて晝間過ぎし所の石橋の上に至
りぬ。この時一人の身に大外套を被り、忙せはしげに我傍を馳せ去り
たるあり。われはその姿勢態度を見て、直ちにそのジエンナ口な
るを知りぬ。ジエンナ口は驀まつ地しくらに走りて、曾て憩ひし白壁の
家に向へり。我は心ともなく、その後したがに跟したがひ行きぬ。家の窓より
は燈火の影洩りたるが、彼の外套着たる姿は其光に照されて、窓
の直下に浮び出でぬ。われは葡萄架ぶどうだなの暗き處かくに躲かくれ、石に踞し

て其状を覗ひ居たり。まどかけ帷を引かざれば、室の内外の光景は明白に我眼に映ぜり。この家の裏の方、かたびさし側廂に通ずる大なる梯の室内より見ゆる處に、別に又一つの窓あるをも、われは此時始めて認め得たり。

へやぬち室内には一小卓を安んじ、上に十字架を立てたるが、ともしび燈をばその前に點せるなり。二人の小娘は衣を脱して、はだぎ白き汗衫を鬆やかに身に纏ひ、まと卓の下に跪きて讚美歌を歌へり。姉なる新婦も亦二人の間に坐せり。我目に映じたる此一幅の圖はラファエロの筆に成りたる聖母と二天使との圖と擇むことなかりき。えら新婦の漆黒なる瞳子は上に向ひて、その波紋をなせる髪は白き肩に亂れ落ち、もろ手は曲線美しき胸の上に組み合されたり。

われは屏息へいそくしてこれを窺うかがひ居て、我脈搏の亢進するを覺えた
 り。既にして三人は立ちあがりぬ。新婦は二兒を延ひきて梯はしを上り、
 しばらくありて靜かに傍かたびさし廂の戸を閉ぢ、獨り梯を下り來りぬ。
 さて窓に近きところを往來ゆききして、物取り片付けなどし、ふと何事
 をか思ひ出でしものゝ如く、箆笥の前に坐して、その抽箱ひきだしより
 紅色の手帳一つ取り出だしつ。打ち返し見てほゝ笑み、開き見ん
 とするさまなりしが、忽ち又首打ち掉ふりて、手快てばやく抽箱ひきだしの中
 に投じたり。そのさま密みそかごと事して父母などに見られしに驚く小兒
 に似たりき。

暫くして裏の方なる窓を敲たく音す。新婦は驚きて頭を擡もたげ、耳
 敲そて、聞きけり。敲く音は又響きて、何事をか戸外にて言ふ如くな

れど、基詞は我が居るところには聞えず。新婦は忽ち聲高く呼べり。檀那だんなは何とて斯く遅くこゝに來給ひしぞ。何の用のおはすにか。うしろめたき事には侍らずやといふ。戸外の人は又何やらん言ひたり。新婦。さなりく。おん詞はまことなり。おん身は手帳を忘れ置き給へり。さきに妹に持せて、麓ふもとなる宿屋まで遣りたれど、かしこにてはさる檀那は宿り給はずといひぬ。定めて山の上に宿り給ふならん。つとめて又持たせ遣らんとこそ思ひ侍りしなれ。手帳は現げんにこゝに在り。斯く云ひて、新婦にひよめは抽箱ひきだしよりさきの手帳を取出せり。戸外の人は何やらん言へり。新婦は首を掉ふりて、否々、門かどの口をばえひらき侍はべらず、おん身のこゝに來給はんは宜よろしからずと云ひ、起ちてかなたの窓を開きつ。手帳をわ

たさんとして差し伸べたる新婦の手をば、外より握りたりと覺しく、手帳ははたと音して窓の外に落ちたり。ジエンナ口の頭は此響と共に窓の内に顯れたり。新婦は走りてこなたの窓のほとりに來つ。これより後我は明に二人の詞を辨ずることを得るに至りぬ。

ジエンナ口。さらば君はわが感謝のために君の手に接吻するをだに許し給はぬにや。物落しし人の拾ひ主に謝するは世の習ならずや。そが上に走りてこゝに來つれば、喉乾きて堪へ難し。我に

ひとつき

一杯の酒を飲ませ給ふとも、誰かはそれを悪しき事といはん。何

故に君は我がそこに入らんとするを拒み給ふぞ。新婦。否、かく

夜ふけておん身と物言ひ交すだに影護うしろめたき事なり。疾とくおん身

の手帳を取りて歸り給へ、我は窓を鎖すべきに。ジエンナ口。我

はおん身の手を握らでは歸らず。おん身のけふ我に惜みて、彼馬鹿者に與へ給ひし接吻を取り返さでは歸らず。新婦は周章の間に一聲の笑を洩せり。否々。君は人の與へざる所のものを奪はんとし給ふにや。君強ひて奪はんとし給はゞ、われまた誓ひて與へざるべしといふ。ジエンナ口は哀れげなる聲していふやう。我等の相見るはこれを限なるを思ひ給へ。われは再び此地に來るものにあらず。さるを君は我が手を握らんといふをだに聽き納れたまはず。我胸には君に言ふべき事はなれど、君が手を握らんの願の外は、われ敢て口に出さじ。聖母マドンナは我等に何とか教へ給ふぞ。人は兄弟姉妹の如く相愛せよとこそ宣給へ。のたまわれはおん身の兄弟なり。我黄金をおん身と分ちて、おん身の艶あでやかなる姿を飾る料かて

となさんとこそ願へ。貴き飾を身に着け給はば、おん身の美しさ
 幾倍なるべきぞ。おん身の友だちは皆おん身を羨むべし。されど
 我とおんみとの中をば世に一人として知るものなからん。斯く云
 ひも果てず、ジエンナ口は一躍して窓より入りぬ。新婦にひよめは高く
 聖母の名を叫べり。

われは表の窓に走り寄りて、力を極めて其扉ガラスを打ちたり。硝子
 はからくと鳴りたり。我は目に見えぬ威力に驅らるゝものゝ如
 く、走りて裏口に至り、得物えものもがなと見 傍かたへの、葡萄架だなの横木
 引きちぎりつ。女はニコオ口にやと叫べり。さなり、我なりと、
 われは假つくりごゑ聲して答へたり。室へやぬち内の燈消ゆると共に、ジエン
 ナ口は窓より跳り出で、いち足出して逃げて行く。其外套は風に

翻ひるがへれり。ニコオロよ、いかにしておん身は歸りし、これも聖母の
 御みめぐみ惠にこそといひつゝ、女は窓に走り寄りぬ。その聲は猶わな慄け
 り。われは吃どもりて、恕ゆるし給へ君と叫びぬ。あなやと呼ぶ女の聲と
 共に、扉ははたと鎖され、われは茫然として獨り窓外に立てり。
 暫しありて、我は新にひよめ婦の靜かに歩ゆみ、戸を開き、戸を閉ぢ、
 鑰ぢやうを下す響を聞き、今は心安しとおもひて、そと歸途に就きぬ。
 われは心中に無量の喜を覺えたり。かくてこそわれは晝間の接吻
 に報い得つるなれ。若し彼女主人にして豫あらかじめ守護の功を測り知り
 たらんには、渠かれは猶一たび接吻することをも辭せざりしなるべし。
 僧堂に歸りしは恰も晚餐の時なり。人々は我が外に出でしを知
 らざるさまなり。食卓に就きて程經ぬるに、ジエンナ口のみ來ぎ

りければ、フランチエスカの君は心を勞し、公子はあまたたび人
 を馳せて、その歸るを候はせぬ。ジエンナ口はやうやくにして來
 りぬ。漫歩して岐に迷ひ、農夫に教へられて纔に歸ることを得つ
 といふ。夫人その姿を見て、げにおん身の衣は綻びたりといへば、
 ジエンナ口手もてその破れたる處を摘み、この端の斷れたるは棘
 にかゝりて跡に残りぬ、われは直ちに心付きぬれど、奈何ともす
 ること能はざりき、このあたりにて斯くまで道を失はんとは、流
 石に思掛けざりき、目暮の景色を弄ぶ中、俄に暗くなりしを見て、
 近道より歸らんとおもひしが事の原なりといふ。一座は此遊の可
 笑しき話柄を得たりとて打ち興じ、杯を擧げて、此迷失兒の健康
 を祝しつ。こゝの葡萄酒はいと旨きに、人々酔を帯び、歡を竭し

て分れぬ。

わが寢室に入りしとき、隣室なるジエンナ口は上衣を脱ぎ襦じゆば袴はかま一つとなりて進み來り、いとさかしげに笑ひつゝ、掌たなごこを我肩わがけん上に置きて、晝見つる美人の爲めに思を勞すること莫なれといふ。われ。然しか宣給のたまへど、接吻をばわれ博し得たり。渠かれ。そは固もとよりなり。されどわれを始終まゝ繼子こたりしものとな思ひそ。われ。繼子たりしや否やは知らず。唯だ繼子らしかりしは事實なり。渠。われは未だ曾て繼子たりしことなし。おん身若し能く祕密を守らば、われは敢て告ぐるところあらんとす。われ。何事まれ語り給へ。われは誓ひて餘所よそに洩さざるべし。渠。さらば包まず語るべし。われは歸るさに故意わざと手帳を遺れ置きぬ。そは日暮れて再び往か

ん爲めなり。原もと女といふものは、只二人居向ひては頑かたくなならぬが
 多し。さて我は再び往きぬ。衣の綻びたるは、墻かきこ踰え籬まがきうがを穿ちし
 時の過あやまちなり。われ。さらば女はいかなりし。渠。晝見しよりも美
 しかりき。美しくして頑かたくなならざりき。わが預あらかじはかめ度りし如く、さし
 向ひとなりては何のむづかしき事もなかりき。おん身が得しは只
 一つの接吻なりしが、わが得しは千萬にて總て残る限くまなき爲しあはせ合な
 りき。これよりはその時のさまを樂しき夢に見んとぞおもふ。便びん
 なきアント二才よと語りもあへず、ジエンナ口はおのが臥房ふしどに跳
 り入りぬ。

たつまき

僧堂を辭し去る朝あした、大空は灰色の紗うすぎぬを被せたる如くなりき。岸

には腕たしかなる漕手こぎて幾人か待ち受け居て、一行を舟に上らしめたり。ともづな纜を解きてカプリに向ふ程に、天を覆ひたりし紗は次第に斷れて輕雲となり、大氣は見渡す限澄み透りて、水面には一波の起るをだに認めず。美しきアマルファイは巖のあなたに隠れぬ。

ジエンナ口は後しりへを指ぎして、かしこにてはわれ薔薇を摘み得たりと云ふ。われは頷うなづきて、心の中にはこの男の強きやう顔がんなることよ、まことは刺はりに觸れて自ら傷けしものをとおもひぬ。

舟のゆくては杳えうぼう茫たる蒼海にして、その抵いたる所はシチリアの島なり、あらず、亞弗利加アフリカの岸なり。ゆん手の方は巖石屹立した

る伊太利の西岸にして、所々に大なる洞穴あり。洞前に小村落あるものは、其幾個の人家、わざと洞中より這ひ出で、背を日に曝さらすものゝ如く、洞の直ちに水に臨めるものゝ前には漁人の火を焚き食を調へ又は小舟にチヤン兒を塗れるあり。

舷下の水は碧あをくして油の如し。試みに手をもて探れば、手も亦水と共に碧し。舟の影の水に落ちたるは極て濃き青色にして、艚ろの影は濃淡の紋理ある青蛇を畫けり。われは聲を放ちて叫びぬ。げに美しきは海なる哉。若し彼蒼ひさうの大いなるを除かば、何物か能く之と美をくら※ぶべき。我は幼かりし時、地に仰臥して天を觀つるを思ひ出でぬ。今見る所の海は即ち當時見し所の天にして、譬へば夢の一變して現うつとなれるが如し。

舟はイ、ガ^ルリといふ巖より成れる三小^{せうしよ}嶼の傍を過ぎぬ。そのさま海底より石塔を築き上げて、その上に更に石塔を^{たふ}僵し掛けたる如し。青き波は緑なる石を洗へり。想ふに風雨一たび到らば、このわたりは群^{ぐんく}狗吠ゆてふ鳴^{なる}門（スキルラ）の怪^{くわいすみか}の栖なるべし。不毛にして石多きミネルワの岬^{みさき}は、眠るが如^{うしほ}き潮これを繞^{めぐ}れり。いにしへ妙音の女怪の住めりきといふはこゝなり。而してカプリの風流天地はこれと相對せり。いにしへチベリウス帝^{おごり}が奢をきはめ情^{ほしいま}を縦にし、灣頭より眸^{なほり}を放ちて拿破里の岸を望みきといふはこゝなり。

舟人は帆を揚げたり。我等は風と波とに送られて、漸くカプリの島邊に近づきぬ。水のまことの清さ、まことの明^{あか}さを知らんと

欲せば、この海を見ざるべからず。舷に倚りて水を望めば、一塊の石、一叢の藻、歴々として數ふべく、晴れたる日の空氣といへども、恐らくはこの玲瓏れいろう透徹なからんとぞおもはるゝ。

カプリの島は唯だ一面の近づくべきあるのみ。その他は皆削りけづ成せる斷崖にして、その地勢拿破里に向ひて級を下るが如く、葡萄園と橘オレンジ柚橄欖オリワの林とは交る／＼これを覆へり。岸に沿へる處には、數軒の蟹戸たんこと一棟の哨舍ぼんごやとを見る。稍 《やゝ》高き林木の間に、屋瓦の叢そうを成せるはアンナア、カプリイの小都會なり。一橋一門ありてこれに通ず。一行は棕櫚しゆろの木立てる。パガアニイが酒店の前に歩を留めつ。

我等はこゝに朝餐あさげして、公子夫婦は午時ひるときまで休憩し、それよ

うきぎょうまやと
 り驢を倩ひてチベリウス帝の別墅の址を訪はんとす。われは憩
 はんこゝろなければ、ジエンナ口と共に此島を一周し、南に突き
 出でたる大石門をも見ばやとて、漕手二人を呼び、岸なる舟に乗
 り遷りぬ。

風少し起りたれば、我等は行程の半ばばかり帆の力に頼ること
 を得べし。巖壁に近き處には、漁人の網を張りたるあれば、舟は
 これを避けて沖の方に進みぬ。既にして奇景の人目を驚すに足る
 ものあるを見る。灰色なる巨石の直立すること千丈なるあり。そ
 の頂は天を摩し、所々僅に一石塊を容るべき罅隙を存じて、蘆
 蒼若くは紫羅欄これに生じたり。青き焰の如き波に洗はれた
 る低き岩根には、紅殻の毛星族（クリノイデア）いと繁く着

きたるが、その紅の色は水を被りて愈 紅に、岩石の波に觸れて
血を流せるかと疑はる。

既にして我等は海を右にし島を左にする處に至りぬ。水を吞吐
する大小の窟いはおまた許多ありて、中には波の返す毎に僅かに其天井を露
すあり。こは彼妙音の女怪のすみかにして、草木繁茂せるカプリ
の島は唯だこれを蓋おほへる屋上やねたるに過ぎざるにやあらん。

漕手の一人なる白髮の翁のいふやう。這裏このうちには悪しきもの住
めり。人若し過あやまちて此門に入るときは、多くは再びこれを出づる
ことを得ず。その或は又出づるものは、痴なるが如く狂せるが如
く、復またた尋常人間の事を解せずといふ。往手ゆくてのかたに稍 大なる
一窟あり。されど若し舟に棹ささしてこれに入らんとせば、帆おろを卸

し頭を屈するも、猶或は難からんか。柁取りかぢの年少わかき男のいふやう。これ魔窟なり。黄金珠玉その内にみち／＼たれど、これを探らんとするものは妖火のために身を焚やかる。げにいふだに恐ろしき事なり。尊とんキルチアよ、（サンタ、ルチア）我を護り給へといふ。ジエンナ口。彼妙音の女怪の一人此舟の中に来ぬこそ殘惜しけれ。その容色はいと好しとぞ聞く。さるものを待遇せんは、わが徒ともがらの難かたんぜざるところぞ。われ。おほよそ女といふ女のおん身の言に従はぬはあらざるべければ、化けしやうのものなりとも、其數には洩れぬなるべし。ジエンナ口。接吻し回抱するは波濤はたうの常態なれば、その上に泛うかべるものも之に倣ならふべき筈ならずや。責せめては彼アマルフイイの女房をなりとも、共に載せて來べかりしもの

を。げに得易からぬ女なり。然おもひ給はずや。おん身も一たび
 は彼唇の味を試み給ひぬ。われはその人前にておとなしぶりたる
 を怪しとおもふなり。憾うらむらくはおん身はその夜のさまを見給は
 ざりき。その迎ふる情の熱さは我が送る情の熱きに譲らざりき。
 ジエンナ口が此詞は遂に我をして耐へ忍ぶこと能はざらしむるに
 至りぬ。我はいと冷かに、されどわがかの彼夕見しところは、いたく
 おん詞と違たがへりといひぬ。ジエンナ口は驚きたる面おももち持して、暫
 し我顔を打ち守りつゝ、何とかいふ、おん身の詞は解げし難しと問
 ひ返しつ。われ重ねて、おん身の女子にもてはやされ給ふべきを
 ば、われ露ばかりも疑はねど、彼夕はわれふと同じ處に落ち合ひ
 てまことのさまを目撃したり、さればわれは始よりおん身の詞の

戯言ざれごとなるべきを知りぬといふ。ジエンナ口は猶訝いぶかしげに我顔を
 見て一語をも出さざりき。われ微笑ほくそみつゝジエンナ口が前夜の口
 吻を眞似まねて、おん身のけふ我に惜みて彼馬鹿者に與へ給ひし接吻
 を取返さでは歸らずといひたり。ジエンナ口の面は血色全く失せ
 て、さてはおん身は立聞せしか、おん身は我を辱はづかしめたり、我と決
 闘せよといふ。其聲極きはぬや、かて冷かに、極てあらゝかなりき。わが實を述
 べたる一語の、此の如く渠かれを激せんことは、わが預期せざる所な
 りき。われは徐しづかに、ジエンナ口よ、そはよも眞面目なる詞には
 あらじといひて、其手を握りしに、ジエンナ口は手を引き面を背そむ
 け、舟人に陸くがに着けよと命ぜり。老いたる方の漕手答へて、舟を
 停たえむべきところは、さきに漕ぎ出でしところの外絶たえて無ければ、

是非とも島を一周せでは叶はずといひつゝ、ろをうごか揺す手を急にし
 たり。舟は深碧の水もて繞めぐらされたる高き岩窟いはやに近づきぬ。ジエン
 ナ口は杖を揮ふるひて舷側の水を打てり。われは且怒り且悲みて、傍
 より其面を打ち目守まもりぬ。爾そのとき時年少わかき漕手いと慌あわただしく、龍卷
 (ウナ、トロムバ)と叫べり。その睽みづめ視たる方を見れば、ミネル
 ワの岬より起りて、斜に空に向ひて豎じゆりつ立せる一道の黒雲あり。
 形は圓柱の如く、色は濃墨の如し。その四邊あたりの水、恰も鍋中の湯
 の滾沸こんぶつせるが如くなり。ジエンナ口はいづかたに避くるかと問
 へり。少年は後あとく々といへり。われ。されば又全島を巡らんとす
 るか。少年。風なき方の岩に沿うて漕がん。龍卷は島を離れて走
 る如し。翁。此小舟の若し岩に觸れて碎けずば幸なり。語未だ畢

らず、龍卷の嚮むきは一轉せり。一轉して吾舟の方に進めり。その疾と
 きこと※風へうふうの如し。舟若し高く岩頭に吹き上げられずば、必ず岩
 根に傍そひて千尋ちひろの底に壓おし沈めらるべし。われは翁と共にろ握
 りつ。ジエンナ口も亦少年を扶たすけて働けり。されど風聲は早く我
 等の頭上に鳴りて、狂瀾は既に我等の脚下ひるがへに翻れり。二人の漕手
 は異口同音に、尊まきルチア、助け給へと叫びつゝ、を捨てゝ跪
 拜せり。ジエンナ口を勵はげまして、などを捨つると叱すれども、
 二人は喪心せるものゝ如く、天を仰いで凝ぎようざ坐す。われは忽ち乗
 る所の舟の、木葉の旋風もてあそに弄もばるる如きを覚え、暗黒なる物の左
 舷へに迫るを視、舟は高く高く登り行けり。飛瀑の如き水は我頭上
 に灌そぎ、身は非常なる氣壓の加はるところとなりて、眼中血ほとばしを迸

らしめんと欲するものゝ如く、五官の能既に廢して、わが絶えざる
 こと縷いとの如き意識は唯だ死々と念ずるのみ。われは終に昏絶こんぜつ
 せり。

夢幻境

わが再び眼を開きし時の光景は、今猶目に在ること、彼壯大な
 火山の活畫の如く、又彼沈痛なるアヌンチヤタの別離の記念の
 如し。我身を繞めぐれるものは、八面皆碧色なる瀨氣かうきにして、俯仰ふぎやう
 の間物ものとして此色を帯びざるはなかりき。試みに臂ひぢを擧ぐれば、
 忽ち無数の流星の身邊に飛ぶを見る。われは身の既に死して無際

空間の氣海に漂へるを覺えたり。我身は將まさに昇りて天に在ませる父の許もとに往かんとす。然るに一物の重く我頭上を壓するあり。是れ我罪障なるべし。此物はわが昇天を妨げ、我身を引いて地に向へり。而して冷なること海水の如き瀨氣かうきは我顛ろちやう頂の上に注げり。

われは心ともなく手を伸べて身邊を摸もし、何物とも知られぬながら、豎き物の手に觸るゝを覺えて、しかとこれに取り付きたり。我疲勞は甚だしく、我身には復また血なく、我骨には復また髓ずゐなきに似たり。我魂は天上の法廷に招かれ、我わがかばね骸こがねは海底よこたはに横れるにやあらん。われは纔わづかにアヌンチヤタと呼びて、又我眼を閉ぢたり。

われはこの人事不省の境にあること久しかりしならん。既にしてわれは己れの又呼吸するを覺え、我疲勞の稍 恢復すると共に、

我意識は稍 明ちやうめいなりき。我身は冷にして堅き物の上に在り。

こは一の巨巖の頭なるべし。而して此巖は高く天半に聳えたるもの、如く、彼の光ある碧色の瀨氣かうきのこれを繞めぐれる状さまは、前さきに見しと殊なることなし。天は碧穹窿をなして我を覆ひ、怪しき圓錐形の雲ありてこれに浮べり。雲の色は天と同じく碧あをかりき。四邊せき寂として音響なく、天地皆墓穴の静けさを現あらわす。われは寒氣の骨に徹するを覺えたり。われは徐しづかに頭むたを擡もちげたり。我衣は青き火の如く、我手は磨ける銀しろかねの如し。されどこの怪しき身の虚むなしき影にあらずして、實じつなる形あきらなるは明あきらなりき。我は疲れたる腦髓に鞭うちて、強ひて思議せしめんとしたり。われは眞に既に死したるか、又或は猶生けるか。われは手を展のべて身下の碧氣を探りしに、こ

は冷なる波なりき。されどその我手に觸れて火花を散らす状は、
アルコール酒 精 の火に殊ならず。我側には怪しき大圓柱あり。その形は
 小なれども、略ほぼ前さきに見つる龍卷に似て、碧き光眼を射たり。こ
 はわが未だ除のぞかざる驚怖の幻出する所なるか、將た未だ滅きえざる
 記念の化現けげんする所なるか。暫しありて、われは手をもてこれを摸
 することを敢てしたるに、その堅くして冷なること石の如くなり
 き。摸して後邊に至れば、手は堅く滑なる大壁に觸る。その色は
 暗碧なること夜の天色の如し。

そもくわれは何處にか在る。前に身下に積せき氣ありとおもひし
 は、燃ゆれども熱からざる水なりき。我四圍を照すものは、彼燃
 ゆる水なるか、さらずば彼穹窿と巖壁と皆自ら光を放つものなる

か。こは幽冥の境なるか、わが不死の靈魂の宅なるか。われは現世に此の如き境ありとおもふこと能はず。凡そ身邊の物、一として深淺種々の碧光を放たざることなく、我身も亦内より碧火を發して、その光明は十方を照すものの如し。

身に近き處に大石級あり。琅玕ろうかんもて削りけづ成せるが如し。これに登らんと欲すれば、巖扉密みつに鎖して進むべからず。推すするに、こは天堂に到る階級きざはしにして、其門扉は我が爲めに開かざるならん。我は一人の怒を齎もたらして地下に入りぬ。ジエンナ口はいかにしたるぞ、又二人の舟人はいかにしたるぞ。

われは獨り此境に在り。我母を懷おもひ、ドメニカをおもひ、フランチエスカの君をおもひ、我記憶の常に異ならざるを知りぬ。さ

ればわが見る所のものは、必ず幻影に非ざるならん。我は故の我なり。只だ在るところの境の幽明いづれに屬するかを辨ずること能はざるのみ。

彼邊の壁に罅隙ありて、一の大なる物を安んず。手もて摸すれば銅の鉢なり。その内には金銀貨を盛りて溢れんと欲す。われは此異境の異の愈益甚しきを覺えたり。

地平線に接する處に、我身を距ること甚だ遠からず、青光まばゆき一星ありて、その清淨なる影は波面に長き尾を曳けり。われは俄に彼星の、譬へば日月の蝕の如く、其光を失ふを見たり。既にして黒き物の其前に現るゝあり。諦視すれば、一葉の舟の、海底より湧き出でもしたらん如く、燃ゆる水の上を走り來るにぞ

ありける。

その漸く近づくを候へば、靜かにを揺すものは一人の老翁なり。のたび水を打つごとに、波は薔薇花紅を染め出せり。舟へさきの舳うづくまに一人の蹲うづくまれるあり。その形女子をみなごに似たり。舟は漸く近づけども、二人は口に一語を發せず、その動かざること石人の如く、動くものは唯だ翁が手中のみ。忽ち聲ありて、一の長大息の如く、我耳に入り來りぬ。その聲は會かつて一たび聞けるものゝ如くなりき。

舟は岸に近づきて圈わを劃ゑがき、我が起たちて望める邊ほとりに漕こぎ寄せられたり。翁が手はを放てり。女子はこの時もろ手高くさし上げて、哀あはれに悲しげなる聲を揚げ、神の母よ、我を見棄て給ふな、我

は仰を畏みてこゝに來たりと云へり。われは此聲を聞きて一聲ラ
 ラと叫べり。舟中の女子は彼ペスツム古祠の畔なる瞽女ごぜなりしな
 り。

ララは我に對むかひて起ち、聲振り絞りて、我に光明を授け給へ、
 我に神の造り給ひし世界の美しきを見ることを得させたまへと祈
 願したり。その聲音こわねは尋常よのつねならず、譬へば泉下の人の假に形を
 現して物言ふが如くなりき。我即興詩は漫みだりに混沌あなの竅うがを穿ちて、
 少女に宇宙の美を教へき。今や少女は期ごせずして我前に來り、我
 に眼を開かんことを請こへり。われは少女の聲の我心魂に徹するを
 覺えて、口一語を出すこと能はず、只だ手を少女の方にさし伸べ
 たるのみ。少女は再び身を起して、我に光明を授け給へと唱へか

けしが、張り詰めし氣や弛ゆるみけん、小舟の中にはたと伏し、
 側たなる水ははらくくと火花を飛ばしつ。
 舷ふなば

翁は暫く身を屈して、少女のさまを覗うかがひ居たるが、やをら岸に
 登りて、きと眼を我姿に注ぎ、空中に十字を書し、彼だいどうはつ大銅鉢を
 抱いて舟中に移し、己も續いて乗りうつれり。われは思慮するに
 違いとまあらずして、同じく舟に上りしに、翁は我を迎へんともせず、
 さればとて又我を拒こぼまんともせず、只だ目を睜みはりて我を視るのみ。
 翁は又ろを握りて、彼青き星に向ひて漕ぎ行けり。冷なる風は舟
 に向ひて吹き來れり。舟は巖窟の中に進み入りて、我等の頭は巖
 に觸んとす。われは身をララの上に俯したり。たちまち忽にして舟は杳えうば
 茫うとして涯かぎりなき大海の上に出でぬ。かうべめぐら頭を回せば、斷崖千尺、斧

もて削り成せる如くにして、乗る所の舟は崖下の小洞穴より潜り出でしなり。

新月の光は怪しきまでに清澄なりき。斷崖の一隅に龕の形をなしたる低き岸あり。灌木疎に生じて、深紅の花を開ける草之に雜れり。岸邊には一隻の帆船を繋げるを見る。翁は小舟を其側に留めしに、少女は期する所ある如く、身を起して我に向へり。われはその手に觸るゝことをだに敢てせずして、心の裡に我が遇ふ所の夢に非ず幻に非ず、さればとて又現にも非ず、人も我も遊魂の陰界に相見るものなるべきを思ひぬ。少女は、いざ藥草を採りて給へと云ひて、右手を我にさし着けたり。われは鬼に役せらるるものゝ如く、岸に登りて彼香しき花を摘み、束ねて少女に遞與し

つ。この時われは堪へ難き疲を覺えて、そのまゝ地上に僵れ臥したり。われは猶首を擡もたげて、翁が手快てばやくララを彼帆船に抱き上げ、わが摘みし花束をも移し載せて、自らこれに乗りうつり、小舟をとも艫ともに結び付けて、帆を揚げて去るを見たり。されど我は身を起すこと能はず、又聲を出すこと能はずして、徒らに身を悶え手を振るのみ。我は死の我わがむね心に迫りて、心の裂けんと欲するを覺えたり。

蘇生

かくては性命おそれの虞はあらしとは、始て我耳に入りし詞なりき。

われは眼を開いてフアビア二公子と夫人フランチエスカとを見た
り。されど彼語を出しゝは、我手を握りて、眞面目なる思慮あり
げなる目を我面に注ぎたる未知の男なりき。我は廣闊にしてしやう
めい明なる一室に臥せり。時は白晝まひるなりき。われは身の何の處いづくにあ
るを知らずして、只だ熱の脈絡の内に發おこりたるを覺えき。わがい
かにして救はれ、いかにしてこゝに來しを審つまびらかにすることを得しは、
時を経ての後なりき。

きのふジエンナ口とわれとの歸り來ざりしとき、人々はいたく
心を苦め給ひぬ。我等を載せて出でし舟人を尋ぬるに、こも行方ゆくへ
知れずとの事なりき。さて島の南岸に沿ひて、龍卷ありしを聞き
給ひしより、人々は早や我等の生きて還らざるべきを思ひ給ひぬ。

搜索の爲めに出し遣られし二艘の舟は、一はこなたより漕ぎ行き、
 一はかなたより漕ぎ戻りて、末遂に一つとところに落ち合ふやうに
 捉おきてられしに、その舟皆歸り來て、舟も人もその踪そうせき跡を見ずと
 いふ。フランチェスカの君は我がために涙を墮し給ひ、又ジエン
 ナ口と舟人との上をも惜み給ひぬと聞えぬ。

その時公子の宣のたま給ふやう。かくて思ひ棄てんは、猶そのてだて
 を盡したりといふべからず。若し舟中の人にして、或は浪に打ち
 揚げられ、或は自らおよ洄およぎ着きて、巖のはざまなどにあらんには、
 人に知られで飢渴の苦くげん艱を受けもやせん。いでわれ親みづから往いて求
 めんとて、朝まだきに力強き漕手こぎて四人を倩やとひ、湊みなとを舟出ふなでして、こゝ
 かしこの洞窟より巖のはざまゝで、名残なごりなく尋ね給ひぬ。されど

彼魔窟といふところには、舟人辭いなみて行かじといふを、公子強ひて説き勧め、草木生ひたりと見ゆる岸邊をさして漕ぎ近づかせしに、程近くなるに従ひて、人の僵たふれ臥したりと覺しきを認め、さてこそ我を救ひ取り給ひしなれ。われは緑なる灌木の間に横はり、我衣は濱風に吹かれて半ば乾きたりしなり。公子は舟人して我を舟に扶たすけ載せしめ、おのれの外套もて被ひ、手の尖胸さきのあたりなど擦すり温めつゝ、早く我呼吸の未だ絶え果てぬを見給ひぬといふ。われはかくてこゝに伴はれ、醫師くすしの治療を受けつるなりけり。

さればジエンナ口と二人の舟人とは魚腹はうむに葬られて、われのみ一人再び天日を見ることゝなりしなり。人々は我に當時の事を語らしめたり。われは光まばゆき洞窟の中に醒さめしを始とし、目し

ひたる少女を載せ來し翁に遭へるに至るまで、そのおほよそを語りしに、人々笑ひて、そは熱ある人の寒き夜風に觸れ、半醒半夢の間にありて妄想せるならんといへり。げにわれさへ事の餘りに怪しければ、夢かと疑ふ心なきにしもあらねど、また熟　　《つく／＼》思へばしかはあらじと思ひ返さざることを得ず。かへす／＼も奇しく怪しきは、彼洞天の光景と舟中の人物となり。

我物語を傍聽せし醫師は公子に向ひ頭を傾けて、さては君の此人を搜し得給ひしは彼魔窟の畔なりけるよといひぬ。公子。さり。さりとして君は世俗のいふ魔窟に、まことに魔ありとは、よも思ひ給はじ。醫師。そは輒く答へまつるべうもあらぬ御尋なり。自然は謎語の鉤鎖にして吾人は今その幾節をか解き得たる。

我心は次第に爽かになりぬ。抑 《そもく》わが見し洞窟はいかなる處なりしぞ。舟人の物語に、この石門の奥に光りかゞやるところありといひしは、わが漂^{たゞよ}ひ着^きし別天地を斥^さして言へるにはあらざるか。かの怪しき翁の舟の、狭き穴より潛^くり出しをば、われ明かに記憶せり。夢まぼろしにてはよもあらし。さらば彼洞窟は幽魂^{ゆきき}の往來するところにして、我は一たび其境に陥り、聖^{マドン}母^ナの恵によりて又現世^{うつしよ}に歸りしにや。われはかく思ひ惑^{まど}ひつゝも、わが掌^{たなごこ}を組み合せて彼舟中の少女の上を懷ひぬ。まことに彼少女は我を救へる天使なりき。

年經て我夢の夢に非ざることば明かになりぬ。彼洞窟は今カプ^リ島の第一勝、否伊太利國の第一勝たる琅玕洞^{らうかんどう}（グロツタ、ア

ツウラ（にして、舟中の少女も亦實にかのペスツムの瞽女ララ）なり。

歸途

公子夫婦は我を率ゐて拿破里ナポリに歸らんとために、猶カプリカプリに留まること二日なりき。二人の我を待つ言動は、始の程こそ屢 我感情を傷そこなふこともありつれ、遭難の後病弱の身となりては、親族にも稀なるべき人々の看護の難ありがた有さ身にしみて、羅馬へ伴ひ行かんと云はるゝが嬉しとおもはるゝやうになりぬ。そが上かの洞窟の内に遭遇せし怪異と、萬死を出でゝ一生を獲たる幸とは、いたく

わが興奮したる腦髓を刺戟して、我をして無形の威力の人の運命を左右することの復た疑ふべからざるを思はしめぬれば、我は公子夫婦の羅馬へ往けと勧め給ふを聞きても、又直ちにその聲を以て運命の聲となさんとしたり。わが健康の漸く故に復もとらんとする頃、公子夫婦は又我床頭にありて、何くれとなく語り慰め給ひき。夫人。アントニオよ。おん身の往方ゆくへまだ知れざりし程は、我等は屢 おん身の爲めに泣きぬ。おん身の不思議に性命を全うせしは、聖母の御恵なりしならん。今はおん身情強こほきも、よも再び拿破里に住みて、ベルナルドオと面をあはせんとは云はぬならん。公子。そは勿論なるべし。われ等は只だ羅馬に伴ひ歸りて、曾て過あやまちありしアントニオは地中海の底の藻屑となりぬ、今こゝに來たるはそ

の昔幼く可哀ゆかりしアントニオなりと云はん。夫人。さるにても便なきはジエンナ口なり。才も人に優れ情も深かりしものを、いかなれば神は未猶遠き此人の命を助けんとはし給はざりけん。惜みても餘あることならずやなど宣給へり。

醫師は屢 病牀をおとづれて、數時間を我室に送れり。この人は拿破里に住みて、いまは用事ありて此カプリに來居たるなりといふ。第三日に至りて、醫師我を診して健康の全く故に復りたるを告げ、己れも我等の一行と共に歸途に就きぬ。醫師の我を健全なりといふは、形體上より言へるにて、若し精神上より言はゞ、われは自ら我心の健全ならざるを覺えき。わが少壯の心は、かの含羞草といふものゝ葉と同じく萎み卷きて、曩に一たび死の境

界に臨みてよりこのかた、死の天使の接吻の痕は、猶明かに我額の上に存せり。公子夫婦の我と醫師とを引き連れて舟に上り給ふとき、我は澄み渡れる海水を見下して、みおろ忽ち前日の事を憶ひ起し、激しく心を動したり。今日影のうらゝかに此積水の緑を照すを見るにつけても、我は永く此底に眠るべき身の、つが恙なくて又此天日の光に浴するを思ひ、涙の頬に流るゝを禁ずること能はざりき。

人々は皆優しく我を慰めたり。フランチエスカの君は我才を稱へ、我を呼びて詩人となし、醫師に我が拿破里の劇場に上りて、即興詩を歌ひしことを語り給ひしに、おももち醫師驚きたる面持して、さてはかの謳者うたひては此人なりしか、公衆の稱歎は尋常よのつねならざりき、重ねて技わざを演じ給はゞ、世に名高き人ともなり給はんものをなど

いへり。風の餘り好かりければ、初めソレントオより陸くがに上るべかりし航路を改め、直ちに拿破里の入江を指して進むことゝなりぬ。

われは拿破里の旅寓はたごに入りて、三通の書信に接したり。その一は友人フエデリゴが手書なり。フエデリゴはきのふイスキアの島に遊び、三日の後ならでは還らずとの事なりき。明日あすの午頃には人々こゝを立たんと宣給のたまへば、われはこの唯だ一人なる友にだに、暇いとまごひ乞こすることを得ざらんとす。その二はわが宿を出でし次の日に來しものなる由、房カメリ奴エリわれに語りぬ。これを讀むに唯だ二三行の文あり。心誠なるものゝおん身の爲め好かれとおもへるありて、今宵おん身の來まさんことを願ふとのみ書きて、末に昔

の友なる女と署し、會合の家を指し示せり。其三はこれと同じ手
して書けるものなり。その文左の如くなりき。

よしなき御疑念など起し給はで、御出下されかすと、ひたすら
御待申上候。御別申上候節は、實に思ひ掛けぬ事にて、胸騒ぎ
魂消えて、申上ぐべき詞をもえ辨わきまへ侍らざりしかど、今は御許
にても、あわたゞしかりし當時の事を思ひ棄て給ひつらんと存
じ候。御許にて思ひ違たがへ給ひしにはあらずやと思はるゝ節も候
へども、そはすべて御目にかゝりたる上にて申解くべく候。只
だ一刻も早く御目にかゝり度御待申上ぐるより外無御座候。か
しこ。

末には又昔の友なる女と署したり。會合の家は知らぬ巷ちまたに在れど、

サンタならではかゝる文書くべき婦人あるべうもあらず。われは
 今更彼婦人に逢ひて何とかかすべきと思ひぬれば、御返事もやある
 と促うながしに來し男を呼び入れて、詞短かにいひぬ。われは遽にはかに思
 ひ定むる事ありて、拿破里を去らんとす。今までの厚き御惠は誓
 ひて忘れ侍らじ。御目に掛かりて御暇乞すべきなれど、あわたゞ
 しき折なれば、唯だこの由御使に申すなりといひぬ。フエデリゴ
 には數行の書を作りて遺し置きつ。その概あらまし略は今物書くべき心
 地もせねば、精くはししき事の顛末をば、羅馬に到り着きて後にこそ告
 ぐべけれ、手を握らで別れ去ることの心苦しさを察せよといふ程
 の意こころなりき。

暇乞にとては、何處へも往かざりき。街上にてベルナルドオの

面を見んことの影うしろめた護たく、又此地に來てより交を結びし人には、相見んことの願はしくもあらねば、われは旅寓の一室にたれこめて此日を暮さんとおもひ居たり。さるを公子の車を誂へ置きたれば、共に醫師の家訪はずやと宣給ふがことわりなれば、隨ひて行きぬ。小さく心安げなる家にて、年長たけたる姉の家政つかさどを掌つかさどれるあり。質直なる性質眉目の間に現はれて、むかしカムパニアの野邊にありける時、鞠きく育いくの恩を受けしドメニカに似たるところあり。されど此は教育ある人なれば、起居振舞のみやびやかなる、いろ／＼なる藝能ある採など、日を同じうして語るべくもあらざるなるべし。翌朝われは先づエズ中才の山を仰ぎ見て別を告げたり。嶺いたゞきは深く烟霧うちの裏うちに隠れて、われに送別の意を表せんともせざる如し。

このひ
是日海原はいと靜にして、又我をして洞窟と瞽女との夢を想はし
む。嗚呼、此拿破里の市も、今よりは同じ夢中の物となり了るな
らん。

カメリエリ
房 奴

はけふの拿破里日報（ディアリオ、ヂ ナポリ）を持ち

來りぬ。披きて見れば、我假名あり。さきの日の初舞臺の批評

なりき。いかなる事を書けるにかと、心忙しく讀みもて行くに、

先づ空想の贍にして、章句の美しかりしを稱へ、恐らくは是れパ

ンジエツチイの流を酌めるものにて、摸倣の稍 甚しきを嫌ふと

斷ぜり。パンジエツチイといふ人はわれ夢にだに見しことあらず。

われは唯だ我天賦の情に本づきて歌ひしなり。想ふに彼批評家と

いふものは、おのれ常に摸擬の筆を用ゐるより、人の藝術も亦然

ならんと思へるにやあらん。末の方には例に依りて、獎勵の語を
 添へたり。いはく。此人終に名を成すべき望なきにあらず、今の
 見る所を以てするも、猶非凡なる材能たることを失はざるべし、
 空想感情靈應の諸性具備したりと見ゆればなりとあり。此評は惡
 しき方にはあらねど、當日の公衆の喝采に比ぶるときは、その冷
 かなること著しいちじるとおもはる。われは此新聞紙を疊みて行李の中に
 藏をよめたり。そは他年わが拿破里の遭遇の悉く夢ならぬを證せん料しろう
 にもとてなり。嗚呼、われ拿破里を見たり、拿破里の市はうくわを徻
 徻うせり。わが得しところいくばくも幾何ぞ、わが失ひしところはた
 そも幾何ぞ。知らず、フルヰアの預言は既に實現し盡せりや否や。
 われ等は拿破里を出立いでたちたり。葡萄栽いゑたる丘陵は見るく烟

雲の間に没せり。一行は羅馬に向ひて行くこと四日なりき。わが
 行くところの道は、二月の前にフエデリゴ、サンタの二人と與ともに
 行きし道なりき。モラの旅亭に来て見れば、柑子の林は今花の眞
 盛なり。われは再び我祕わがひめごと言をサンタに偷ぬすみ聽かれし木蔭に立寄
 りたり。人の離合聚散の測り難きこと、また今更に驚かれぬ。イ
 トリの狹隘けみを過ぐる時、われはフエデリゴが上を憶ひ起しつ。旅
 券を閱けみする國境には、けふも洞穴の中に山羊の群をなせるあり。
 されどフエデリゴが筆に上りし當時の牧童は見えざりき。

一行はテルラチナに宿りぬ。夜明くれば天氣晴朗なりき。あは
 れ、美しき海原よ。汝は我を懷抱し我をゆり動かして、我にめで
 たき夢を見させ、我をかう／＼しきララに逢はせき。今はわれ

汝に別れんとぞすなる。水の天に接する處には、猶エズ申才の山の雄々しき姿見えて、立昇る烟の色は淡き藍色を成し、そのさま清明にして而も幽微に、譬へば霞を以て顔料となし、かゞやく空の面おもに畫ける如し。われは大息といきして呼べり。さらばく、いで我は羅馬に入らん。我墓穴は我を待つこと久し。

われは曾て怪しき媼おうなフル申アとさまよひありきし山を望みき。

われはジエンツアノ市を過ぎて、我母の車に觸れてみまかり給ひし廣こうぢを見き。路の傍なる乞兒かたゐは我衣服の卑しからぬを見て、われをエツチエレンツア殿エツチエレンツア様と呼べり。むかし母に手を拉ひかれて祭を見し貧家の子幸さちありといはんか、今ボルゲエゼ家の賓客となりて歸れる紳士幸ありといはんか、そは輒たやすく答へ難き問なるべし。

一行はアルバノの山を躓こえたり。カムパニアの曠野ひろのは我前よこたに横
 れり。道の傍なる、つたかづら 蔦 蘿 深く鎖とぎせるアスカニウスの墳つかは先づ
 我眼に映ぜり。古墓あり、水道の殘礎あり、而して聖サン、ピエトロ彼得得寺
 の穹窿天に聳えたる羅馬の市は、既に目睫もくせふの中に在り。(アス
 カニウスは昔アルバ、ロンガの基を立てし人なり。是れ拉甸人ラテン
 始めて市を成せる處にして、後の羅馬市はこれより生ぜりといふ
)。

車の聖サンジヨワンニイの門(ポルタ、サン、ジヨワンニイ)より
 入るとき、公子は我を顧みて、いかに樂しき景色にはあらずやと
 宣給へり。「ラテラノ」の寺、丈長オベリスコスき尖柱、オベリスコス「コリゼエオ」
 の大廈たいかの址あと、トラヤヌスの廣こうち、いづれか我舊夢を喚び返す

なかだち
媒ならざる。

羅馬は拿破里の熱鬧ねつたうに似ず。コルソオの大路は長しと雖、繁華なるトレドの街と異なり。車の窓より道行く人を覗ふに、むかし見し人も少からず。老いたる教師ハツバス・ダアダアのボルゲエゼ家の車の章しるしに心づきて、蹣跚まんさんたる歩を住め我等を禮みやしたるは、おもはずなる心地せらる。コンドツチイ街（キヤ、コンドツチイ）の角を過ぐれば、むかしながらのペツポが手に履あしだまがひの木片きぎれを装ひて、道の傍に坐せるを見る。

フランチエスカの君の、やうく我家に歸り着きぬと宣給ふに答へて、まことにさなりと云ひつゝも、我は心の内に名状し難き感情の迫り來るを覺えき。我は今曾て訣絶の書を賜ひし舊恩人を

拜せざるべからず。その待遇は果していかなるべきか。我はこゝ
 に至りて、復たこれを避けんと欲することなく、却りて二馬の足あ
 搔がきの猶太だ遅きを恨みき。譬へば死の宣告を受けたるものゝ、早
 く苦痛の境を過ぎて彼岸に達せんことを願ふが如くなるべし。
 車はボルゲエゼたちの館の前に駐まりぬ。僮僕しもべは我を誘ひて館の最
 高層に登り、相接せる二小房を指して、我行李を卸おろさしめき。
 少選しばしありて食卓に呼ばれぬ。われは舊恩人たる老公の前に出で
 々、身を僂かゞめて拜せしに、アントニオが席をば我とランチエス
 カとの間に設けよと宣給ふ。是れ我が久し振にて耳にせし最初の
 一語なりき。

會話の調子は輕快なりき。われは物語の昔日あやまちの過に及ばんこと

おもんばか
を慮りしに、この御館みたちを遠ざかりたりしことをだに言ひ出づる人
なく、老公は優しさ舊に倍して我を欺待もてなし給ひぬ。されどわれは
此一家の復た我に厚きを喜ぶと共に、人の我を恕するは我を輕ん
ずる所以ゆゑんなるを思ふことを禁じ得ざりき。

教育

ボルゲエゼ家の宮殿は今わが居處となりぬ。人々の我をもてな
し給ふさまは、昔に比ぶれば優しく又親しかりき。時として我を
輕んずるやうなる詞、我を侮あなどるやうなる行おこなひなきにしもあらねど、
そはわが爲め好かれと言ひもし行ひもし給ふなれば、憎むべき

にはあらざるなるべし。

夏は人々暑さを避けんとて餘所よそに遷り給へば、われ獨り留まりて大廈の中にあり。涼しき風吹き初そむれば人々歸り給ふ。かく我は漸く又此境遇に安んずることゝなりぬ。

我は最早カムパニアの野の童わらはにはあらず。最早當時の如く人の詞といふ詞を信ずること、宗教に志篤き人の信條を奉ずると同じきこと能はず。我は最早「ジエス・キタ」派學校の生徒にはあらず。最早教育の名をもてするあらゆる束縛を甘んじ受くること能はず。さるを憾うらむらくは人々、猶我を視ることカムパニアの野の童、「ジエス・キタ」派學校の生徒たる日と異ならざりき。此間に處して、我は六とせを經たり。今よりしてその生活を顧みれば、波瀾

層疊たる海面を望むが如し。好くも我はその波濤の底に埋没し畢をはらざりしことよ。讀者よ、わが物語を聞くことを辭いなまざる讀者よ。願はくは一氣に此一段の文字を讀み去れ。われは唯だ省筆を用ゐて、その大概を敘して已みなんとす。

この六年の歴史はわが受けし精神上教育の歴史なり。この教育は人の師たるを好むものゝことさらに設けたる所にして、不便ふびんなる我はこれを身に受けざること能はざりしなり。人々は我を善人とし、我に棄て難き機根ありとして、競ひて自ら教育の任を負へり。恩人はその恩を以て我に臨みて我師たり。恩人ならぬ人はわが人好きひとよに乗じて僭せんして我師となれり。我は忍びて無量の苦を受けたり。そは教育といふを以ての故なり。

主公はわが學の膚淺ふせんなるを責め給へり。我はいかに自ら勵ま
も、わが一書を讀みたる後、何物か我胸中に残れると問はゞ、そ
はたゞ其卷冊の裡より我心かなに適へるものを抽ぬき出し得たりといふ
のみにて、譬へば蜂の百花の上に翼を休めて、唯だ一味の蜜を探
らんが如くなるべし。こは老侯の喜び給ふところにあらざりしな
り。家の常の賓まらうど客、その他われを愛すといふ人々には、おのゝ
その理想ありて、われを測るにその合理がふりさう想の尺度をもてす。
人々いかでかわが成績に甘んずることを得ん。數學者はアントニ
オあまりに空想に富みて、冷靜の資なしと云ひ、儒者はアントニ
オの拉甸語ラテンに精くはしからざることよと云ひ、政治家は稠ちうじん人の前に
ありて、ことさらに我に問ふにわが知らざるところの政治上の事

をもてし、われを苦めて自ら得たりとし、遊戯をもて性命とせる
 貴公子は、また我と馬相を論じて、わが馬を愛することの己れの
 身を愛するごとくならざるを怪み、貴族にして毒舌ある一婦人の、
 まことは人に超えたる智あるにあらざして、漫りに批評に長ぜり
 と稱せられたるは、また我詩稿を刪潤せんと欲し、我に一枚
 づゝ寫して呈せんことを求めたり。その外、ハツバス・ダアダア
 の如く、むかし有望の少年たりしわが、今才盡き想涸れたるを歎
 ずるものあり、舞蹈を善くする某の如く、わが舞場に出で、姿勢
 の美を闕くを憾むものあり、文法に精しき某の如く、わが往々讀
 に代ふるに句を以てするを難ずるものあり。就中フランチ工
 スカの君は、もろ人の我を褒むるに過ぎて、わが慢心のこれがた

めに長ずべきを惜むとて、毎つねに峻嚴と威儀とをもて我に臨まんとし給へり。おほよそ此等の毒は滴てき々我心上に落ち來りて、われは我心のこれが爲めに硬結すべきか、さらずば又これが爲めにその血を瀝したらし盡すべきをおもひたりき。

我心は一物に逢ふごとに、その高尚と美妙との方面よりして強く刺戟せられ深く悦えつ懌えきす。われは獨り閑室に坐するとき、首かうべを回めぐして彼の我師と稱するものを憶ふに、一種の奇異なる感の我を襲ひ來るに會ひぬ。世界は譬へば美しき少女をとめの如し。その心その姿その粧よそほひは、わが目を注ぎ心を傾くるところなり。さるを靴工は、彼の穿はける靴を見よ、その身上第一の飾はこれぞと云ひ、縫ほうしや匠うは、否、彼の着たる衣を見よ、その裁ちざまの好きことよ、

その色あひを吟味し、その縫ぬい際に心留むるにあらでは、少女の姿を論ずべからずと云ひ、理髪師は、否々、彼の美しき髪かみのいかに縮わがねられたるかを見ずやと云ひ、語學の師はその會話の妙をたへ、舞の師はその舉止のけだかさを讚む。彼の我師と稱するものは、この工匠等に異ならず。されどわれ若し憚はげることなくして、人々よ、我も一々の美を見ざるにあらねど、我を動かすものは彼に在らずしてその全體の美に在り、是れ我職分なりと曰いはゞ、人々は必ず陽あらに、げにくく我等の教ふところは汝詩人の目の視るところより低かるべしと曰ひつゝ、陰ひそに我愚を笑ふなるべし。

天地の間に生せい物多しと雖、その最も殘忍なるものは蓋けだし人なるべし。われ若し富人ならば、われ若し人の庶ぶ下に寄るものなら

ずば、人々の旗色は忽ちにして變ずべきならん。人々の聰明ぶり博識ぶりて、自ら處世の才ざえに長たけたりげに振舞ふは、皆我が食客たるをもてにあらずや。我は泣かまほしきに笑ひ、唾せんと欲して却かへりて首を屈し、耳を傾けて俗士婦女の蟬かを囀かむが如き話説を聽かざるべからず。所謂いはゆる教育は果して我に何物をか與へし。面從腹誹ふくひ、抑鬱不平、自暴自棄などの惡癖陋習ろうしふの、我心の底きぞに萌し、より外、又何の効果も無かりしなり。

十の指は我があらゆる暗黒面を指し、却りて我をして我に一光明面なしや否やを思はしめ、我をして自ら己の長もとを覓め、自ら己の能てらを銜てらはしめたり。而して彼指は又この影を顧みて自ら喜ぶ情を指して、更に一の暗黒面を得たりとせり。

人々はわが我見がけんの強くして固きを難ぜり。政治家のわが我見を責むるは、われ心を政況せいけいに委ねゆだねざればなり、馬を愛めづる貴公子のわが我見を責むるは、われ馬を品し馬に乗りて居きよしよ諸を送ること能はざればなり、曾て又一少年の審美學の書ふみに耽ふけるものありしが、其人は我にいかに思惟し、いかに吟詠し、いかに批評すべきを教へ、一朝わがその授くる所の規矩しだかに遵したがはざるを見るに及びては、忽たちまち又わが我執がしふを責めたり。こはわが我執あるにはあらで、人々の我執あるにはあらざるか。そを翻ひるがへりてわれ我執ありといふは、わが人の恩蔭を被りたる貧家の孤みなしごたるを以てにあらざるや。

名よりして言はんか、我は貴族にあらず。されど心よりして觀んか、我豈あに賤人ならんや。されば我は人に侮蔑せらるゝごとに、

必ず深き苦痛を忍べり。いかなれば我は赤心を捧げて人々に依頼
 せしに、人々は我をして鹽の柱と化すること彼口オト（アブラハム
 の甥をひ）が妻の如くならしめしぞ。是に於いてや、悖ぼつれい戻いの情は一
 時我心上に起り來りて、自信自重の意識は緊縛をわが恆つねの心に加
 へ、此緊縛の中よりして、増上慢の鬼は昂然として頭を擡もたげ、我
 をして平生我に師たる俗客を脚底に見下さしめ、我耳に附きて語
 りて曰はく。汝の名は千載の後に傳へらるべし。彼の汝に師たる
 ものゝ名は、これに反して全く忘らるべし。縱たとひ令忘られざらんも、
 その偶 《たま〜》存ずるは汝が囹圄れいごの桎梏しつこくとして存じ、汝
 が性命の杯中に落ちたる毒藥として存ずるならんといふ。われは
 タツソオの上をおもへり。矜きようぢち持ぢせるレオノオレよ。驕けうがう傲うなる

フエルララの朝廷よ。その名は今タツソオによりて僅に存ずるに
 あらずや。當時の王者の宮殿は今瓦石の一堆たいのみ、その詩人を拘
 禁せし牢舎ひとやは今巡拜者の靈場たりなど、おもへり。此の如き心の
 卑むべきは、われ自ら知る。されど所謂教育は我をして此の如き
 心を生ぜしめざることを能はず。われ若し彼教育を受けて、此心を
 だに生ぜざりせば、われは性命を保ちて今に到るに由なかりしな
 り。わが潔白なる心、敬愛の情は、一言の奨勵、一顧の恩惠を以
 て雨露となしゝに、人々は却りて毒水を灌そくぎてこれを槁枯かうこせしめ
 しなり。

今の我は最早昔の如き無邪氣の人ならず。さるを人々は猶無邪
 氣なるアントニオと呼べり。今の我は斷えず書ふみを讀み、自然と人

間とを觀察し、又自ら我心を顧みて己の長短利病を審にせんつまびらかとせり。さるを人々は始終物學びせぬアントニオと呼べり。この教育は六年の間續きたり、否、七年ともいふことを得べし。されど六とせ目の年の末には、早く多少の風波の我生涯の海の面に噪さわぎ立つを見たり。この教育の六年の間、猶書かまほしき事なきにあらねど、今より顧みれば、皆流れて毒水一滴となり了をはんぬ。こは門地なく金錢なき才子の常に仰ぎ常に服するところのものにして、此毒水は此類の才子の爲には、人の呼吸するに慣れたる空氣に異ならずともいふべきならん。

われは「アバテ」となりぬ。われは又即興詩人として名を羅馬人の間に知られぬ。そは「チベリナ」學士會院（アカデミア、チ

ベリナ)の演壇の、我が上りて詩藁しかうを讀み、又即興詩を吟ずることを許し、がためなり。されどフランチエスカの君は、會院の吟誦には喝采を得ざるものなしといふをもて、わが自負の心を抑へ給へり。

ハツバス・ダアダアは會院中の最も名高き人なり。その名の最も高きは、その演説し著述することの最も多きがためなり。院内の人々は一人としてハツバス・ダアダアの意を得て、ひたすら只管書けみきに書き説きに説けり。ある日我詩藁を閲し、評して水彩畫となし、ボルゲエゼ家の人々に謂ふやう。アントニオに才藻の萌芽ありしをば、嘗て我生徒たりしとき認め得たりしに、惜いかな、其芽は枯れて、今の作り出すところは畸形の詩のみ。アントニオは

古の名家の少時の作を世に公おほやけにせしものあるを見て、或はおのれ
 のをも梓しかう行せんとすることあらんか。そは世の嘲あざけりを招くに過ぎず。
 願いさはくは人々彼を諫いさめて、さる無謀くはだての企を思ひ留まらしめ給へと
 ぞいひける。

アヌンチャタが上はつゆばかりも聞えざりき。アヌンチャタは
 我が爲めには隔世の人たり。されどこの女子は死に臨みて、その
 冷なる手もて我胸を壓し、これをして事ごとに物ごとに苦痛を感
 ずることよの常ならざらしめしなり。ナポリナポリの旅と當時の記憶と
 は、なつかしく美しきものながら、今はその美しさの彼かのメツウザ
 に逢ひて化石したるにはあらずやおもはれたり。(メツウザは
 希臘神話中の恐るべき處女神にして、之を視るものは忽ち石に化

したりといふ。）煖き巽シロツク風の吹くごとに、われはペスツムの温
 和なる空氣をおもひ出して意中にララが姿を畫き、ララによりて
 又その邂逅の處たる怪しき洞窟に想ひ及びぬ。われは彼物かの教へん
 とする賢き男女の人々の間に立ちて、上校の兒童の如くなるとき、
 心にはむかし賊ぞくさい寨にて博せし喝采と「サン、カルロ」座にて聞
 きつるくわんこ謹呼の聲とを思ひ、又人々の我を遇すること極めて冷な
 るが爲めに、身を室隅に躲さけたるとき、心にはむかしサンタがも
 ろ手さし伸べて、我を棄てゝ去らんよりは寧ろ我を殺せと叫びし
 ことをおもひぬ。六とせは此の如くに過ぎ去りて、我齡は二十六
 になりぬ。

小尼公

フアビアニ公子とフランチエスカ夫人との間に生れし姫君の名
 をばフラミニアといひぬ。されど搖籃の中^いにありて、早く神に許
 ひなづけ

嫁 ^{アベヂツサ} せさせ給ひしより、人々 小尼公とのみ稱ふることゝなり

ぬ。この小尼公には、むかし我手にかき抱きて、をかしき畫など

かきて慰めまつりし頃より後、再び見^{まみ}ゆることを得ざりき。小尼

公は教育の爲めにとて、^{クワトロ、フオンタネ} 四井街の尼寺にあづけられ給ひ

しより、早や六とせとなりぬ。境^{けいだい}内を出で給ふことなく、母君

なるフランチエスカの夫人ならでは往きて逢ふことを許されねば、

父君すら一たびも面を合せ給ふことあらざりき。われ等は唯^ひだ人

とづて
傳に姫君の今は全く人となり給ひて、その學藝をさへ人並なら
ず善くし給ふを聞きしのみ。

寺の掟おきてに依るに、凡そ尼となるものは、授戒に先だてる數月間
親々の許に還り居て、浮世の歡よろこびを味ひ盡し、さて生涯の暇乞して
俗縁を斷つことなり。この時となりて、再び寺に入るとそが儘我
家に留まるとは、その女子の意志の自由ゆだに委ぬといへど、そは只
だ掟の上の事のみにて、まことは幼きより尼の装よそほひしたる土にんぎやう偶
もてあそあそを翫あそばしめ、又寺に在る永き歲月の間世の中の罪深きを説きては
威おどしすかし、寺院の靜かにして戒行の尊きを説きては勸いざなめ誘ひ、
必ず寺に歸り入らしむる習なりとぞ。

是より先きわれは四井街の邊を過ぐるごとに、この尼寺の築ついで泥

の蔭にこそ、わが嘗て抱き慰めし姫君は居給ふなれ、今はいかなる姿にかなり給ひしと、心の内におもひ續けざることなかりき。

あるひ

一日われは尼寺に往きて、格子の奥にて尼達の讚美歌を歌ふを聽

きしことあり。あの歌ふ人々の間にアベヂツサ小尼公はおはさずやおも

ひしかど、流石さすが心に咎められて、教をしへご子として寺に宿れるものゝ、

彼歌樂の群に加はるや否やを問ひあきらむることを果さゞりき。

既にしてわれはこのもろ聲の中より、一人の聲の優れて高く又清

く、一種言ふべからざるせいせつ凄切しらべの調をなせるものあるを聞き出し

つ。その聲のアヌンチャタが聲にいと好く似たりければ、把住はぢゆう

し難き我空想は忽ちはかなき舊歡の影をおもひ浮べて、彼ボルゲ

エゼ家の少女の事を忘れぬ。

次の月曜日にはフラミニアこそ歸り來べけれど、老公宣給ひぬ。のたま

この詞はあやしく我情を動して、その人と成りしさまの見まほし

さはよの常ならざりき。想ふに小尼公も亦我と同じき籠こちゆう中の鳥

なり。こたび家に歸り給ふは、譬へば先づ絲もてその足を結びお

き、暫し籠より出だして翺かうしやう翔せしむるが如くなるべし。傷いたま

しきことの極きはみならずや。

わが姫の面を見しは午餐ひるげの時なりき。げに人傳に聞きつる如く

おとなびて見え給へど、世の人の美しとてもてはやす類たぐひすがほぼせの姿貌に

はあらざるべし。面の色は稍 蒼かりき。唯だ惠深く情厚きさま

の、さながらに眉目の間に現れたるがめでたく覺えられぬ。

食卓に就きたるは近親の人々のみなり。されど一人の姫に我の

誰なるを告ぐるものなく、姫も又我面を認め得ざるが如くなりき。さてわれは姫に對むかひてかたばかりの詞を掛けしに、その答いと優しく、他の親族の人々と我との間に、何の軒けん輕ちするところもなき如し。こは此御館みたちに來てより、始ての欸待もてなしともいひつべし。

人々は打解けてくさ／＼の物語などし、姫は笑ひ給ふ。われは覺えず興に乗じて、その頃羅馬に行はれたりし一口話を語りぬ。姫はこれをも可笑をかしとて笑ひ給ふに、外の人々は遽にはかに色を正して、中にもかゝる味なき事を可笑しとするは何故ならんなどいふ人さへあり。われ。しか宣給のたまへど、今語りしは近頃流行の一口話にて、都人士のをかしとするところなるを奈何いかにせん。夫人。否、おん身の話は掛かけ詞ことばの類のいと卑しきをさげとせり。人の腦髓

のかくまで淺はかなる事を弄ぶことを嫌はざるは、げに怪しき限ならずや。嗚呼、我とても争いでかことさらに此の如き事のために、我腦髓を役せんや。我は唯だ世の人の多く語るところにして、我が爲めにもをかしとおもはるゝものなるからに、人々の一い衆を博する料しろにもとおもひし迄なり。

日暮れて客あり。數人の外國人とつくにびとさへ雜りたり。われは晝間の譴責けんせきに懲りて、室の片隅に隠れ避け、一語をだに出ださゞりき。人々は圈わの形をなして、ペリイニイといふものゝめぐりに集へり。この人は齡略よははぼ我と同じくして、その家は貴族なり。心爽かにして頓智あり、會話も甚巧いたくみなれば、人皆その言ふところを樂み聽けり。忽ち人々の一齊に笑ふ聲して、老公の聲の特ことさらに高く聞え

ければ、われは何事ならんとおもひつゝ、少しく歩み近づきたり。
 然るに我は何事をか聞きし。晝間我が語りて人々の咎に逢ひし、
 彼かの一口話は今ペリイニイの口より出で、人々に喝采せらるゝなり
 き。ペリイニイは一句を添へず又一句を削けづらず、その口吻態度ちと
 の我に殊なることなくして、人々は此の如く笑ひしなり。語り畢
 る時、老公は掌たなぞこを撫して、側に立ちて笑ひ居たる姫に向ひ、いか
 にをかしき話ならずやと宣給へり。姫、まことに仰せの如くに侍
 り、けふ午ひるの食卓にて、アントニオが語りし時より然しかおもひ侍
 りきと答へ給ふ。その語調はいと温和にて、怨み憤る色もなく辨わきま
 へ難ずる色もなし。われは心の内にて、この優しき小尼公の前に
 跪ひざまづかんとしたり。この時フランチェスカの君も、げに〜をかし

き物語なりきと宣給ふ。われは心の跳るを覺えて、そと人々に遠ざかり、身を長き幌とぼりの蔭に隠して、窓の外なる涼しき空氣を呼吸したり。

この一口話の事をば、われ唯だ一の例として、かく詳つづきにはしるしゝなり。これより後も、日としてこれに似たる辱はづかしめを被らざることなかりき。唯だ小尼公のすゞしき目の我面を見上げて、衆人の罪惡の爲めに代りて我に謝するに似たるありて、われはその辱の疇さき昔よりも忍び易きを覺えたり。竊ひそかにおもふに我にはまことに弱點あり。それを何ぞといふに、影を顧みて自ら喜ぶ性さがありて、難きを見て屈せざる質うまれなきこと是なり。そもこの弱點はいづれの處よりか生ぜし。生を微賤の家に稟うけしにも因るべく、最初に受けし

教育にも因るべく、又恆に人の庶下ぶかに倚る境遇にも因るなるべし。我は胸に溢れ口に發せんと欲するところのものあるごとに、必ず先づ身邊の嘗て我に恩恵を施したる人々を顧みて、自ら我舌を結び、終に我不屈不撓の氣象を發展するに及ばずして止みぬ。若し自から辯護して評せばこも謙讓の一端なるべし。されどその弱點たることは到底掩おほふべからざるを奈何せん。

今の勢をもてすれば、その恩義の絆きづなを斷たんこといとむづかし。人々は我にいかなる苦痛を與へ給はんも、我が受けたるところの恩義は飽くまで恩義なり。そは人々なかりせば、我は或は饑渴きかつの爲めに苦くるめられけんも計り難きが故なり。我が人々の爲めに身にふさはしき業わざして、恩義に酬むくいとせしことは幾度ぞ。我は報恩

の何の義なるかを知らざるにあらず、良心のいかなるものなるかを解せざるにあらず。いかなれば人々は此良心の發動、報恩の企圖を妨碍ぼうがいして、天才は俗事に用なしといひ、又思想多きに過ぎて世務に適せずといふぞ。若しまことに天才を視ること此の如く、思想を視ること此の如くならば、そは天才をも思想をも知らざるなり。

その頃我は大ダキット關を題として長篇を作りぬ。この詩は字々皆我心血なりき。昔の不幸なる戀と拿破ナポリ破里客中の遭遇とは、常に胸裡に往來して、侯爵家の人々の所謂教育は斷えず腦髓を刺戟し、我を驅りて詩國に入らしめ、我心頭には時として我生涯の一篇の完璧をなして浮び出づることあり。その中にはいかなる瑣細なる事

も、いかなる厭ふべく苦むべき事も、一として満分の詩趣を具へざるはなかりき。我中情は此の如く詠歎の聲を迫り出して、我をしてダキツトの故事の最も當時の感興を寓するに宜しきを覺えしめしなり。

詩成りて、我は復たその名作たるを疑はざりき。而して我は神に謝する情の胸に溢るゝを見たり。そは我平生の習として、一詩句を得るごとに、未だ嘗て神の我靈魂を護りて、詩思を生ぜしめ給ふを謝せざることあらざればなり。此作は我心の瘡痕を醫すべき薬液なりき。我は自ら以爲へらく。人々若し我此作を讀まば、その我に苦痛を與ふることの非なるを悟りて、善く我を遇するに至るならんと。

詩成りて、作者より外、未だ一人の肉眼のこれに觸れたるもの
 あらず。この塵を蒙かうむらざる美の影圖は、その氣高けだかきこと彼「ワチ
 カアノ」なるアポルロンの神の像の如く、儼げんぜん然として我前に立
 てり。嗚呼、この影圖よ。今これを知りたるものは、唯だ神と我
 とのみ。我は學士會院に往きてこれを朗讀すべき日を樂み待てり。
 さるを一日フアビアニ公子とフランチエスカ夫人との優しさ常
 有あるひるに倍するを覺えければ、我は此二恩人に對して心中の祕密を守る
 こと能はざりき。こは小尼公アベヂツサの來給ひしより二三日の後なりき
 と覺ゆ。公子夫婦は聞きて、さらばその詩をば我等こそ最初に聽
 くべけれと宣給ふ。我は直ちに諾たくしつれど、心にはこの本讀ほんよみの發な
 落りゆきいかにと氣遣はざること能はざりき。さて我詩を讀むべき夕

には、老侯も席に出で給ふ筈なりき。此日となりて又期せずしてハツバス・ダアダアの侯爵家を訪ふに會ひぬ。フランチエスカはこれを留めて、かれ渠にも我が讀むべき詩を聽かしめんといひぬ。われは此翁の偏執の念強くして人の才を妬み、特に平生我を喜ばざるを知れり。公子夫婦の心冷ひや、かなる、既に好き聽衆とすべきならぬに、今又此毒舌の翁を獲つ。我が本讀の前兆ははなはただ佳ならざるが如くなりき。

我胸の跳ることは、嘗て「サン、カルロ」座の舞臺に立ちし時より甚しかりき。若し我が期するところの効果にして十分ならば、人々はこれを聽きて、その常に我を遇する手段の正しからざるを悟り、未來に於いて自ら改むるに至るならん。是れ一種の精神上

の治療法なり。われは明かに我が期するところの難かたきを知る。さ
るを猶これを敢てするものは、深く自ら「ダキツト」の一篇の傑
作なることを信じたればなり、又小尼公の優しき目の暗に我を鼓
舞するに似たるあるに感じたればなり。

我詩は一として自家の閱歴に本づかざる者なし。此篇も亦然しかな
り。首段は牧童たるダキツトの事を敘す。即ち我が穉をさなかりし頃、
ドメニカにはぐままれてカムパニアの茅屋ぼうをくに住めりし時の境きやう
界がいに外ならず。フランチエスカの君聞もあへず、そは汝が上に
あらずや、汝がカムパニアの野にありし時の事に非ずやと叫び給
へば、老侯笑ひて、そは預期すべき事なり、いかなる題に逢ひて
も、自家の感情をもてこれに附會することを得るはアントニオが

長技ならずやと答へ給ふ。ハツバス・ダアダアはか嘎れたる聲振り
 絞りていふやう。句々洗鍊の足らざるが恨なり、ホラチウスの教
 を知らずや、唯だ放置せよ、放置してその熟するを待てといへり、
 おん身の作も亦然なり。

人々は早く既に一槌をわが美しき彫像に加へしなり。我は猶二
 三章を讀みしかど、只だ冷澹にして輕浮なる評語の我耳に詣り入いた
 るあるのみ。人々は又我肺腑中より流れ出でたる句を聞きて、古い
 にしへびと
 人 某の集より剽竊へうせつせるかと疑へり。嗚呼、初め我が人をし
 て聳そうちやう聽せしむべく、怡悦いえつせしむべき句ぞとおもひしものは、

今は人々の一顧にだに價せざらんとす。我は第二折の末に到りて、
 興全く盡きぬれば、人々に謝して讀むことを止めたり。此に至り

て、自ら我手中の詩篇を顧みれば、復た前の^{さき}綽^{しやくやく}約^{やく}たる姿なくして、彼^{かの}三王日の前夜フイレンチ工市を擔ひ行くなる「ベフアアナ」といふ^{にんぎやう}偶人の、面色極めて奇醜にして、目には硝子球を嵌^はめたるにも譬へつべきものとなりぬ。是れ聽衆の口々より※^はきたる毒氣のわが美の影圖をして此の如く變化せしめしにぞありける。

おん身の^ダキツトは^{しせい}市井の俗人をだに殺すことなからん、とはハツバス・^ダア^ダアが總評なりき。人々は又評して宣給ふやう。篇中往々好き處なきにあらず。そは情深きと無邪氣なるとの二つに本づけりとなり。我は頭を^た低れて口に一語を出さず、罪囚の刑の宣告を受くるやうなる心地にて、人々の前に凝立せり。ハツバス・^ダア^ダアは再びホラチウスの教を忘れ給ふなと繰返しつゝも、

猶慙懃いんげんに我手を握りて、詩人よ、懃つとめよやと云ひぬ。我は室の

一隅に退きたりしが、暫しありて同じハツバス・ダアダアが耳疎
 き人の癖とて、聲高くフアビア二公子にさゝやくを聞きつ。そは
 杜撰づさん彼篇の如きは己れの未だ嘗て見ざるところぞとの事なりき。

人々は我詩を解せざらんとせり。又我を解せざらんとせり。こ

は我が忍ぶこと能はざるところなり。室の隣には、開爐カムミンに炭火

を焚きたる廣間あり。われはこれに退き入り、手に詩藁しかうを把りて、

爪ささうかふ甲たなごこの掌を穿たんばかりに握りたり。嗚呼、我夢は一瞬の間に

醒め、我希望は一瞬の間に破壊せられたり。我身は神の御姿みすがたの

摸造ながら、自ら顧みれば苦く※の器に殊ならず。われは我鍾しよあ

愛いの物、我がしばく接吻せし物、我が心血そくを漑そぎし物、我が

性命ある活思想とも稱すべき物をもて、熾火しくわの裡なげうに擲なげうちたり。我詩卷は炎々として燃え上れり。忽ちアントニオと叫ぶ一聲我身邊より起りて、小尼公アベヂツサの優かひなしき腕かひなの爐中の詩卷を攫つかまんとせし時、事の慌忙あわたゞしさに足踏みすべらしたるなるべし、この天使の如き少女はあと叫びて、横よこざまに身を火の間に僵たふしつ。我は夢心地の間に姫を抱き起しつ。人々は何事やらんと馳つどせ集つどへり。

フランチエスカ夫人は聖母マドンナの御名を唱へつ。我手に抱き上げられたる姫は、眞蒼まさをなる顔もて母上を仰ぎ見つゝ、足すべりて爐の中に倒れ、手少し傷け侍り、アントニオなかりせば大いなる怪我をもすべかりしをと宣給ひぬ。われは激しき感情に襲はれて、口に一語を發すること能はず、只だ喪心せるものゝ如くなりき。

姫は右手めてを劇はげしく焼き給へり。一家の騷擾さうぜうは一方ならず。彼
 問ひ此答しげふる繁しげき詞の中にも、幸にして人の我詩卷を問ふ者なく、
 我も亦もた黙ありければ、ダキツトの詩篇の事は終に復た一人の口に
 上ることなかりき。あらず、後に至りてこれに言ひ及びし人唯一
 人あり。そは我が爲めに翼を焦し、天使なりき、小尼公なりき。
 嗚呼、小尼公なかりせば、われは全く厭世の淵に沈み果てしなら
 ん。われをして人の心の猶頼むべきを覚えしめ、われをして少時
 の淨き心を喚び返さしめたるは、げにこのボルゲエゼ一家の守護
 神たる小尼公なりき。小尼公の手は痛むこと十四日の間なりき。
 我胸の痛むことも亦十四日の間なりき。

ある日われは獨り姫の病牀に侍することを得て、わが久しく言

はんと欲するところを言ふことを得たり。われ。フラミニアの君よ、願はくは我罪を許し給へ。君は我が爲めに其苦痛を受け給へり。姫。否、その事をば再び口に出し給ふな。又ゆめ餘所に洩し給ふな。そが上に、さのたまふはおん身自ら歎き給ふにてこそあれ。我足のすべりしは事實なり。おん身若し扶たすけ起し給はずば、わが怪我はいかなりけん。されば我はおん身の恩を荷になへり。父母も然しか思ひて、御身のいちはやく救ひ給ひしを感じ給ひぬ。獨り此事のみにはあらず。父母の御身を愛し給ふ心のまことの深さをば、おん身は未だ全く知り給はぬごとし。われ。そは宣給のたまふまでもなし。わが今日あるは皆御家の賜なり。かくて一日ごとに我が受くるところの恩澤は加はりゆくなり。姫。否、さる筋の事をい

ふにはあらず。わがふたおや二親のおん身を遇し給ふさまをば、此幾日
 の間に我よ熟く知れり。二親はかくするが好しとおもひ給ふなれば、
 そは奈何ともし難けれど、總ておん身をあ悪しとおもひ給ひてには
 あらず。殊に母上の我に對しておん身を譽め給ふ御詞をば、おん
 身に聞せまほしきやうなり。師の尼君の宣給のたまふに、おほよそ人と
 生れて過失なきものあらじとぞ。はづかり憚ることには侍れど、おん身
 にも總て過失なしとはいひ難くや侍らん。例たとへ之ばおん身は、いか
 なれば一時怒に任せて、彼美しき詩をや焚き給ひし。われ。そは世
 に残すべき價なければなり。唯だ焚くことの遅かりしこそ恨なれ。
 姫。否々、われは世の人の心のけは險しきを憶おもひ得たり。靜かなる尼
 寺の垣の内にありて、優しき尼達に交らんことの願はしきよ。わ

れ。げに君が淨き御心にては、しかおもひ給ふなるべし。我心は汚れたり。惠の泉の甘きをば忘れ易くして、一滴の毒水をば繰返して味ふこと、まことに罪深き業わざにこそ侍らめと答へぬ。

この館たちには一人として我を憎むものなし。されど尼寺の心安きには似ず。こは小尼公アベヂツサの獨り我に對し給ふとき、屢宣給ひし詞なり。われはこの姫をもて我感情の守護神、わが清淨なる思想の守護神とし、漸くこれに心を傾けつ。想ふに姫の歸り來給ひしより、館の人々の我を遇し給ふさま、面色よりいはんも語氣よりいはんも、著いちじろく温和いとうあくに著く優渥いとうあくなるは、この優しき人の感化に因るなるべし。

姫は數 《しばく》我をして平生の好むところを語らしめ給

ひぬ、詩を談ぜしめ給ひぬ。興に乗じて古人の事を談ずるときは、
 われは自ら我辯舌の暢ちやうたつ達たつになれるに驚きぬ。姫はもろ手の指
 を組み合せて、我面を仰ぎ見給ふ。姫。おん身の如く詩をもて業
 とするは、まことに人生の幸福なるべし。されど神の預言者たる
 べき詩人の、神の徳、天國の平和をば歌はで、人の業、現世の争
 奪を歌ふは何故ぞ。おん身は世の人に福さいはひを授け給ふことも多かる
 べけれど、又禍を遺し給ふことも少からざるならん。われ。否、
 詩人の人を歌ふは隨やがて即神を歌ふなり。神は己れの徳を表さんとて、
 人をば造り給ひしなり。姫。おん身の宣給ふところには、わが諾うべな
 ひ難き節あれど、われは我心を明あかすべき詞を求め得ず。人の心に
 も世のたゞずまひにも、げに神の御心は顯あらはれたるべし。さればそ

を指し示して、世の人をして神の懷に歸り入らしめんこそ、詩人
ゆびさ
 の務とはいふべけれ。さるを却りて世の人を驅りて、おそろしき
どんぜい
 呑噬争奪の境界に墮ちしめんとする如くなるは、好しとはおも
 はれず。そは兎まれ角まれ、おん身はいかにして即興の詩を歌ひ
 給ふか。われ。題を得るときは思想は招かずして至るものなり。
 姫。さなり。其思想は神の賜ふ所なること人皆知る。されどそを
 句とし章とし、それに美しき姿しらべを賦ふし給ふは奈何いかに。われ。
 君は尼寺に居給ふとき、「プサルモス」の歌を聴き、又古の聖ひじりの
 上を綴りたる韻語を學び給ひしならん。さてある時端なく一の思
 想の浮び出づるに逢ひて、これと與ともに會て聞ける歌、會て聞ける
 韻語を憶おもひ得給ひしことはあらずや。憾うらむらくは、おん身はかゝ

る機會を逸し給ひて、筆とりて其思想を寫さんことを試み給はざりしなり。おん身若しそを試み給ひしならば、思想の全き形の心頭に顯れたるものは凝りて散ぜず、句は句を生じ章は章を生じ、詩は無意識の間になりしならん。こは唯だ我一人の經驗ながら、詩人の製作といふものはかくあらんとおもふなり。われは詩を作るごとに、我詩の前世の記憶の如く、前身の搖籃中にて聞きし歌の名残の如きを感じず。われは創作すと感ぜず、われは復誦すと感ぜず。姫。その思想といふものも、いかなるが詩となすに宜^{よろ}しかるべきか知るよしなけれど、わが尼寺にありし時、ふと物の懷^{なつ}かしき如き情、遠きに騁^はする如き情の胸に溢るゝことあり。その懷かしきは何ぞ、その騁するは何をあてぞといはば、われ自ら答ふる

ところを知らず。されど夢に吾わがつま夫たるべき耶蘇やそを見、又マドンナ聖母
 を見るときは、我心はこれに慰められたり。かゝる情も詩となる
 べしや否や、覺おぼつか束なし。館たちに歸りての後は、耶蘇聖母の夢に見
 え給ふこと稀にして、華やかなる浮世の事、罪深き人間の事のみ
 夢に入りぬ。されば唯だ尼寺に返らんことこそ願はしけれ。アン
 ト二才よ。おん身は親しき友なれば告ぐべし。われはこの頃漸く
 心の汚れんとするを覺ゆるなり。そは粧ひ飾らんとする願起りて、
 人の美しと褒むるが喜ばしくなれるにて知らる。尼寺の人々に知
 られなば、何とかいはれん。われ。世に君の如く淨き心あるべし
 や。われは唯だ我心の君に似ざるを愧はづるのみ。今我目もて見る
 ときは、君の心の淨さは、昔をさな穉なくて此御館に居給ひし日に殊なら

ず。(われはかく言ひて姫の手に接吻せり。) 姫。その頃おん身の我を抱き給ひしこと、我が爲めに晝かきて賜はりしことをば、まだ忘れ侍らず。われ。おん身の其晝を看^み畢^はりて、破^やり棄て給ひしをも、われは忘れず。姫。それを憎しとおもひ給ひしや。われ。世の人は我胸中なる美しき繪の限を破り棄てぬれど、われはそれすら憎むことなし。

わが アベヂツサ 小尼公に親む心は日にけに増さり行きぬ。われは世の人の皆我敵にして、唯だ小尼公のみ身^{みかた}方なるを覚えき。

落飾

暑き二箇月の間は、館たちの人々チヲリに遊び給ひぬ。わがその群
 に入ることを得つるは、恐らくは小尼公の緩くわん頰けふに由れるなる
 べし。橄欖オリワの茂き林、石いははし走る瀧津瀬たきつせなど、自然の豊かに美しき
 景色の我心を動すことは、嘗てテルラチナに來て始て海を觀つる
 時と殊なることなかりき。この山のたゞずまひ、この風の清く涼
 しきに、我は復たナポリの夢を喚び起すことを得たり。我は羅馬ロオマ
 の塵多き衢ちまた、焦げたるカムパニアの野、汗流るゝ午景を背にせし
 を喜びて、人々の我を伴ひ給ひしを謝したり。

小尼公の侍女と共に驢うさぎうまのに騎りてチヲリの谷間に遊び給ふときは、
 我はこれに隨ひ行くことを許されたり。姫は頗る自然を愛する情
 に富みて、我に些の寫生を試みしめ給ひぬ。荒漠たるカムパニア

の野の盡くるところに、サン、ピエトロ 聖彼得寺の塔の湧出したる、橄欖の
 林、葡萄の圃はたけの緑いろ濃く山腹を覆ひたる、瀑布幾條か漲りみなぎりお墮つ
 る巖の上にチヲリむらがの人家の簇りたるなど、皆かつがつ我筆に上り
 しなり。

終の圖に筆を染むる時、姫の宣給のたまふやう。かく麓より眺むれば、
 この落ちたぎつ水の勢は、早晚いつか巖石を穿ち碎き、押し流して、そ
 の上なる人家も底そこひなき瀧壺に陥らずやと怖しく思はると宣給ふ。
 われ。まことに宜給ふ如し。されどそを憂へずして、彼家々に栖す
 める人の笑ひ樂みて日を送れるこそ神の恵ならめ。神は憫あはれむべき
 人類のために、おそろしき地下のさまを掩ひ隠し給ふとおぼし。
 君は此水をすらおそろしと見給へども、ナポリまちの市の地下のさま

はいかなるべきか。此は水なり、彼は火なり。かしこの民は、沸き返る熔巖ラワの釜の上に生涯を送れるなりと答へぬ。我又語を繼ぎて、エズキオの火山の形、わが其巔いたゞきに登りし時の事、エルコラノとポムペイとの來歴など、姫に聞えまつりしに、姫は耳を傾け給ひて、館に還りての後、猶大澤たいたくの彼方あなたの珍らしき事どもを語り聞せよと宣給ひぬ。

姫は海のいかなるものなるを想ひ見ることに能はずと宣給ふ。それは親しく海と云ふ者を觀給ひしは唯一たびにて、それさへ山の巔より、地平線を限れる一帯の銀色したる物を認め給ひしに過ぎざればなり。われは姫に告げて、まことの海原は我脚底に又一の碧空を視る如しと云ひしに、姫は手を組み合せて、神の此世界を飾

り給ひしことの極みなく奇しきをたへ給ひぬ。この時我は、その奇しく妙なる世界を背にして、狭き尼寺の垣の内に籠らんとし給ふ御心こそ知られねと云はんと欲せしが、姫の思ひ給はん程のおぼつかなくて黙しつ。ある日姫と我等とは、荒れたる神巫寺の傍に立ちて雲霧の如く漲り下る二條の大瀑を下瞰したり。一道の白き水烟は、小暗き林木を穿ちて逆立し、その末は青き空氣の中に散じ、日光はこれに觸れて彩虹を現じ出せり。側なる小瀑ルラの上なる岩窟には、一群の鴿ありて巢を營みたり。その時ありて大いなる圈わを畫きて、我等の脚下を飛ぶや、噴珠と共に亂れて、見る目まばゆき程なり。姫は歎賞すること久しうして、我に即興を求め給へり。われは平生夢寐むびの間に往來する所の情の、終

に散じ終に銷せうすること此飛泉と同じきを想ひて、忽ち歌ひ起して
 いはく。人生の急湍きふたんは須臾しゆゆも留まることなし。太陽同じく照す
 といへど、一滴一沫よりして見れば、その光を仰ぎその温を被ら
 ざるあり。惟ただ美妙の大光明は全景を覆ひ盡すのみと云ひぬ。姫
 は我歌を遮り留めて、止めよ、われは悲傷の詞を聞かんことを願
 はず、汝が心まことに樂しからずば、姑しばらく我が爲めに歌ふことを
 休やめよと宣給ひぬ。

姫の我を信じ給ふことの厚きは、我が姫を信ずることの厚きに
 殊ならず。ある時姫の詞に、いかなる故とも知る由なけれど、館
 に往來ゆききする他の男子には語り難き事をも、おん身には語り易し、
 御身の親しきは父母に劣らざる心地すといはれしことあり。され

ば我もまた心を置かで、何くれとなく物語するやうになりぬ。幼
 かりし日の事を語りて、地下の石窟いはむろに入りて路を失ひし話より
 ジエンツアノの花祭に老侯の馬車の我母を轆ひきころ殺せし話に至りし
 ときは、姫の驚ひとかた一方ならざりき。姫は我手をと※りて、我面を打
ちまも目守り、その事をば館の人々まだ一たびも我に告げざりき、さて
 は我族うからの御身に負ふ所はいと大いなりと宣給ひぬ。カムパニアの
おうな媼ドメニカには、姫深き同情を寄せ給ひて、おん身は定めて今も
 怠らずおとづれ給ふなるべしと宣給ひぬ。われは少しく心に恥ぢ
 ながら、去年は唯だ二たび訪ひしのみなれど、彼方より尋ね來た
 るごとに、些ちとの小づかひ錢をば分ち與ふるを例とすと答へぬ。

われは姫に促されて、我自傳を語りつゞけ、ベルナルドオの上

に及び、又アヌンチャタの上に及びぬ。されど我面に注ぎたる姫の涼しき目は、我をして縦ほしいまゝに戀愛を説き嫉妬を説くこと能はざらしめき。われは話題を轉じてナポリの紀行に入り、ララの事を語り、こたびは又サンタの事にさへ及びぬ。

最も姫の心に愜かなひしはララなり。姫の宜給ふやう。アヌンチャタは美しくもありしなるべく、賢さかしくもありしなるべし。されど面を公衆の前に曝さらすことを憚はゞからず、浮薄なる貴公子を戀ひ慕へるなど、われはいかなる詞もて評すべきを知らぬながら、その人のおん身の妻とならざりしをば喜ぶなり。ララはこれに異ことにて、まことにおん身の爲めの守護神なるべし。おん身の靈の天上に在らん時、先づ來りて相見んものはララならずして誰ぞやと宣給ひぬ。

サンタをば姫いたく怖れ給ひて、燃ゆる山、闊ひろき海の景色はいかに美しからんも、かゝる怖ろしき人の住める地に往かんことは、わが願にあらず、おん身の恙つがなかりしは、聖マドンナ母の御恵なりと宣給ふ。われは此詞を聞きて、さきに包み藏かくして告げざりしサンタとの最後の會見の事を憶ひ起しつ。現げに我頭を撃うちて我夢を醒まし、は、尊き聖母の御影なりき。姫若しわが當時の惑を知らば、猶我に許すに善人をもてすべしや否や。我肉身の弱きことは、よその男子に殊ならざりしなり。姫は又我に迫りて、嘗て即興詩人として劇場に上りし折の事を語らしめ給ひぬ。山深き賊ぞくさい寨にて歌はんは易く、大都の舞臺にて歌はんは難かるべしとは、姫の評なりき。われは行李を探りて、かの拿破里日報ナポリを出して姫に見せ

つ。姫は先づ當時の評語を讀みて、さて知らぬ都會の新聞紙のいかなる事を載せたるかを見ばやとて、あちこちひるがへ翻し見給ひしが、忽ち我面を仰ぎ視て、おん身はアヌンチャタの同じ時ナポリに在りしをば、まだ我に告げ給はざりきと宣給ふ。われはこの思ひ掛けぬ詞に、アヌンチャタの争いでかとおつぶやきつゝ、彼新聞紙に目を注ぎつ。われは此一枚ひらの紙を手にとりしこと幾度なるを知らねど、いつも評語をのみ讀みつれば、アヌンチャタの事を書ける雜報あるには心付かざりしなり。

姫の指ざし給ふ雜報には、アヌンチャタ明日登場すべしとあり。その明日といへるは即ち我が拿破里を發せし日なり。われは姫と目を見合せて、暫くはものいふこと能はざりき。既にして我はわづか纔

に口を開き、さるにても我が再び面をあはせざりしは、せめても
 の幸なりきといひぬ。姫。さは宣給へど、今其人に逢ひ給はゞい
 かに。定めて喜ばしと思ひ給ふならん。われ。否、われは悲しと
 思ふべし。それを何故といふに、わが昔崇拜せしアヌンチャタは今
 亡うせたり、昔の理想の影は今消えぬ、わがこれを思ふは泉下の人
 を思ふ如し、さるを若しそのアヌンチャタならぬアヌンチャタ又
 出で、冷なる眼もて我を見ば、いえなんとする心の創は復た綻ほころ
 びて、却りてわれに限なき苦痛を感じしむるなるべし。

いと暑き日の午ひるすぎ後、われは共同の廣間に出でしに、緑なる蔓
 草の纏せひ付きたる窓さうれい櫺の下に、姫の假うた寝ねし給へるに會ひぬ。
 纖せんしゆ手もて頬ほを支へて眠りたるさま、只だ戯たはぶれに目を閉ぢたるやう

に見えたり。胸の波打つは夢見るにやあらん。忽ち微笑の影浮びて、姫の眠は醒めぬ。アントニオそこにありや。われは料^{はか}らずも眠りて、料らずも夢見たり。おん身はわが夢に見えしは何人の上なりとかおもふ。われ。ララにはあらずや。この答はわが姫の目を閉ぢたるを見し時、心に浮びし人を指^さして言へるのみなりしに、期^ごせずして中^{あた}りしなり。姫。さなり。われはララと共に飛行して、大海の上を渡りゆきぬ。海の中には一の島^{しまやま}山ありき。その山の巔はいと高きに、われ等は猶おん身の物思はしげなる面持して石に踞して坐し給ふを見ることを得つ。ララは翼を振ひて上らんとす。われはこれに従はんとして、羽^{はたき}揺^よするごとに後^{おく}れ、その距離^{ちひろ}千尋なるべく覺ゆるとき、忽ち又ララとおん身との我側にある

を見き。われ。そは死の境きやうがい界がいなるべし。生きて千里ちさとを隔つるものも、死しては必ず相逢ふ。死は惠深きものにて、我に我が愛するところのものを與ふ。姫。われは遠からず尼寺に歸らんとす。これより後の我生涯は、おん身の爲めには死せると同じ。おん身は能く我を忘れずして、死後相見んことを期し給はんや。姫の此詞はいたく我心を動して、我をしてすなは輒すなはち答ふること能はざらしめき。

ある日フランチエスカ夫人は姫を伴ひて中ちゆうラ、デステの園の中をそゞろありきし給へり。我も亦許されてその後しりへに従ひぬ。園は高き絲杉あるをもて世に聞えたるところなり。一行の人工の噴泉ある長き街なみき櫺きの間を歩むとき、路上に檻ぼろ樓まを纏まとひたる貧人の群

の草を抜くありき。われそが一人に「パオロ」銀一箇（我二十錢餘）を與へしに、姫もまた微笑みつゝ一箇を與へ給ひぬ。草抜く人は、美しき姫君とむこぎみ壻君とにマドンナ聖母の御惠あれかしと呼びたり。フランチエスカ夫人はこれを聞きて高く笑へり。われは熱血の身を焦すを覺えて、姫の面を覗ふことを敢てせざりき。われは今明に姫の我が爲めに離れ難き人となりしを覺りぬ。されど此情は嘗てアヌンチャタの爲に發せしとはるかに殊にて、又ララに對して生ぜしとも同じからず。アヌンチャタの才さいえと色とは殆ど我をして狂せしめ、ララの理想めきたる美は魔力を吾頭上に加へ、並に皆我をしてその人を我物にせん願を起さしめしなり。獨りアベヂツサ小尼公に至りては、我友情を催すこと極て深きに、われは却かへりて又我慾念の

これが爲めに抑へらるゝを覺えき。

いくばく

幾もあらぬに我等は又羅馬に歸りぬ。姫は二三週の後には尼寺

に返り給ふべく、返り給ひては直ちに覆面の式を行はせらるべし

と傳ふ。姫の長き髪はこれを截り、その身には生きながら凶衣を

被らしめ、輓歌ばんかを歌ひ鯨音かねを鳴し、法かたの如く假はうむに葬りて、さて天

に許いひなづけ嫁よめせる人となりて蘇生せしむ。是れ式のあらましなり。

姫は面に喜の色を湛へてこれを語りぬ。われは聞くに忍びずして、

いかなれば君は自ら壙つかあな穴うがを穿ちて自ら下り入らんとはし給ふぞ

といひぬ。姫は色を正して、さる詞を人にな聞せそ、此塵の世に

心牽ひかるゝことおん身の如くならんも拙つたなし、少しは後の世の事を

も思へかすと宣給ふ。その聲音こわねさへ常ならぬに我はいたく驚きぬ。

霎時しほしありて、姫は詞の過ぎたるを悔み給ひしにや、面に紅を潮して我手を取り、アントニオとても我心の平和を破り、我に要えうなき物思せさせんとはあらざるべしと宣給ふ。我は詞なくて姫の金蓮の下に臥し轉まろびつ。

別わかれの舞踏會は御館みたちにて催されぬ。われは姫の最後に色ある衣きぬを着け給ふを見き。是れ人々の生いけ贄にへの羔こひつじを飾れるなり。姫は我傍に歩み寄りて、おん身も人々の歡よろこびを分ち給はずや、われ若しおん身の憂はしき面を見て別れ去らば、尼寺に入りて後に屢御身の上を氣づかふならん、かくてはおん身我に罪障を増させ給ふなりと宣給ふ。其聲は我が爲めに、瀕死の人の氣息を聞くが如くなりき。

出立ち給ふ前の日の夕となりぬ。姫は神色常の如く、父君と老
 侯とに接吻して、あすの別の事を語り給ふ。其詞つきの、唯だ假か
りそめ初の旅路など杯いでたに出立ち給ふにかはらぬぞ、なか／＼に哀なりける。
 アント二才にいとまごひ暇 乞せずやといふは、フアビア二公子の聲なり。
 坐上にて、獨り此君のみは面に憂の色を帯び給へり。我は趨はしりて
 姫の前に出で、白く細き右手に接吻せり。姫はアント二才と我名
 を呼び掛け給ひしが、流石にしばし口籠くぐもりて、世に幸さちある人とな
 り給へ、さらばとて、我額に接吻し給ふ。われは夢心に其間を走
 り出で、我室に泣きに入りぬ。

終にその日とはなりぬ。空は晴れ渡りて、日は麗うらかに照りぬ。

我は父君母君の盛せいさう妝せせる姫をにへづくゑ贅卓の前に導き行き給ふを見、

歌頌の聲を聞き、けふの式を拜まんとて來り集へる衆人の我めぐり四邊
 を圍めるを覺えき。されど僧徒の群に引かれてつくゑの前に跪き
 給へる、天使の如き姫君の、色白く優しげなる面のみは、我心の
 上に殊に明かなる印象を與へて、年經ての後も消ゆることなかり
 き。我は僧等の姫が頭上うすぎぬの紗を剥ぎて、雲の如きひんぱつ 髪かみの亂れ墜お
 ちて兩の肩おほを掩へるを見、これを斷つ剪刀はさみの響を聞きつ。僧等は
 幾襲かさねの美しき衣を脱がせて、姫を柩ひつぎの上に臥させまつり、下に白
 き希きれを覆ひ、上に又髑髏どくろの文様もんやうある黒き布を重ねたり。忽ち鐘
 の音聞えて、僧等の口は一齊に輓歌ばんかを唱へ出しつ。かくて姫は此
 世を隠れましゝなり。爾そのとき來きた尼院にんいんに連れるつらな 廊わた道どのの前なる黒漆
 の格子あが舉りて、式の白衣を着たる一群の尼達現れ、高く天使の歌

を歌ふ。^{エピスコポス}僧官は姫の手を取りて扶^{たす}け起しつ。姫は早や天に許^{いひなづ}嫁^けし給ひて、御名さへエリザベツタと改まりぬ。我は姫の群集の上に投じ給ふ最後の一瞥を望み見たり。一人の故參の尼は姫の手を引きて入りぬ。黒漆の格子は下りて、姫の姿、姫の裳裾^{もすそ}は見えずなりぬ。

なきあと

ボルゲエゼ家の館^{たち}は賀客絡繹^{らくえき}たり。エリザベツタの天に許嫁せしを賀するなり。フランチエスカ夫人は面に微笑を浮べて客に接し給へど、その良心のまことに平なるにあらざるをば、われ猶^{なほ}

能くこれを知れり。

フアビア二公子は我を招きて一包の金を賜ひぬ。たま汝は好き方かたう
 人^どを失ひぬれば、氣色すぐれず見ゆるも理なきことわりにあらざ。姫は
 我に此金を残しおきて、カムパニアの媪おうなに與へんことを頼み聞え
 ぬ。想ふに姫はドメニカの上を汝に聞きて知りたりしならん。持
 ち往きて與へよとなり。

死は蛇の如く我心を纏へり。我は自殺の念の一種の旨味うまみあるを
 覺えて、心に又此念の生じ來れるを怖れたり。御館の廣き間ごと
 間ごとに、我はうらさびしき空虚を感じり。我はこゝを出で、カ
 ムパニアの野に往かんことの樂しかるべきをおもひぬ。そは我搖
 籃のありつる處、ドメニカが子もり歌の響きし處の、今更に懷なつかし

き心地したればなり。

カムパニアの廣き野は、この頃の暑さに焦げ爛れて、些の生氣をだに留めざりき。黄なるテエエルの流の、層々の波を滾し去るは、そをして海に没せしめんが爲めなるべし。われは又蔦蘿の壁にまとひ屋根にまとへる、小さな石屋を見たり。是れ實にわが少時の天地なりしなり。門の戸は開けり。われは媼の我を見て喜ぶべきを思ひて、胸に楽しく又哀なる一種の感を起しつ。先に此家をおとづれてより、早や一とせを經ぬ。先に羅馬にて彼媼を見しより、早や八月を經ぬ。此間われは媼を忘れたりしならず、起おきくし臥ふごとに思ひ出で、小尼公にも語り聞せつ。されどチヲリアベヂツサの避暑、御館にかへりて後の心の憂などは、我を妨げてカムパニ

アに來させざりしなり。家の見え初めてより、われは媪の歡び迎ふる詞を想像しつゝ、歩を早めたりしが、家の門近くなりては、又きようおん 音の疾く聞えんことを恐れて、ぬきあししつゝ進み寄りぬ。

門口より見るに、土間の中央に籐とうを折り加くべて火を燃やし、大いなる鐵の銚なべを吊つりたり。その下に火を吹く童ありて、こなたへ振り向くを見れば、ピエトロなり。昔はわれ此童の搖籃を護りしことありしに、此頃はいと遅たくましきものにぞなりぬる。聖サンジユウゼツペ、檀那だんなの來ましつるよ、さきに來ましゝより早や久しくなり候ふとて、立ち上りて迎へぬ。わがさし伸ばす手に、童の接吻せんとするを遮りつゝ、われ、無つ面目れなくも忘られしよとおもへるなら

ん、忘れたるにはあらずとことわりつ。童。否、母もさは思ひ候
 はざりき、生存ながらへたらばいかに嬉しとおもふらんものを。われ。
 何とか言ふ。ドメニカは最早世にあらずとか。童。地の下に埋め
 てより、既に半年になりぬ。病みしは僅に二日ばかりなりしが、
 その間アントニオ、アントニオとのみ呼び続け候ひぬ。わがかく
 檀那の御名おんなをいふを無禮なめしとおもひ給ふな。母は唯一目アントニ
 オを見て死なんといいひき。今宵はとおもはれし日の午過ぎひるすて、わ
 れは羅馬の御館みたちに参りしに、檀那はチヨリに往き給ひし後なりき。
 歸りて見れば、母は息絶えたり。言ひ畢をはりて、ピエトロは手もて
 面を掩おほひぬ。

ピエトロが物語は、句ごとに言ことばごとに、我胸を刺す如くなりき。

恩情母に等しきドメニカが、死に垂なんなんとして我名を呼びしとき、
 我は避暑の遊をなして、心のどかに日を暮しつ。媼の餘命いくば
 くもあらぬをば、われ争いかでか知らざらん。何故に我はチヲリに往
 くに先だちて、一たび媼の許には來ざりしぞ。我はかくても猶自
 ら辯護して、我は善き人ぞといはんとするか。

われは彼金包を取りいで、我身邊に帶び來りし錢をも添へて、
 悉く童に與へつ、童は土間に跪ひざまづきて、我を天使と呼べり。我が爲
 めには此詞の嘲てうぎやく諛うその意あるが如く聞えて、我は此家の内やにあ
 るに堪へず、一つの憂をもて來し身の、今は二つの憂を懷いだきて、
 逃るが如く馳せ去りぬ。

未錬

カムパニアの野より御館までは、いかにして歸り着きけん知らず。われは限なき苦惱を覺えて、我臥床ふしどの上に僵れ臥たふしゝに、忽ち高熱を發して人事を知らざること三晝夜なりき。看病にはフエネルミラとて、聾みひたる女を附けられしかば、幸に我譫うはごと語も人に怪まるゝことあらざりしならん。されどフアビア二公子の屢病床に來給ひぬといふは、猶胸苦しき心地ぞする。

我恢復は頗る遅かりき。館の人に見舞はるゝごとに、我は勉つとめて面やを和はらげ快らくげろよにもてなせども、胸の中の苦しさは譬へんに物無かりき。此間人々は一たびも小尼公アベヂツサの名を我前に唱ふることな

かりき。かくて小尼公の尼寺に入り給ひしより、六週の後となりし時、醫師くすしは始て我に戸外とのもを逍遙することを許しつ。

我は期ごする所あるに非ずして、ホルタ、ピアの傍に立ち、目をクワトロ、フオンタネ

四井街はゞかの方に注ぎつ。されど我は猶心に憚りて、尼寺の門に到ることを果さゞりき。二三日の後、我は新月の光を趁おひて、又同じところに来しに、こたびは自ら禁ずること能はずして、進みて灰色の寺壁の下に立ち、格子窓を仰ぎ視たり。我は自らことわりて、誰かわが此墳墓みを展るを難ずることを得んと云ひぬ。これよりして、我足は日として四井街に向はざることなく、偶

《たま〜》識る人に逢ふことあれば、散歩のゆくてはアルバニなりと欺あざむきつ。

我足の尼寺の築泥ついでちの外に通ふこと愈 繁く、我情の迫ること愈
 切に、われはこの通路かよひぢの行末いかなるべきかを危あやぶまざるこ
 と能はざるに至りぬ。果せる哉、ある暗き夕我が尼寺の一窓の微かすか
 に燈光を洩せるを仰ぎ見て、心に小尼公をおもふ時、忽ち傍より
 アントニオと呼ぶものあるを聞きつ。アントニオ、おん身はこゝ
 に何をか爲せる。我は頭かうべめぐらを回して公子の面を認め得たり。公子は
 直ちに我を促して共に歸りぬ。公子は途上復たわれと一語を交へ
 ざるに、われは心に公子の思はん程の恥かしくて、その面を見る
 ことを敢てせざりき。我室に入りて相對せる時、公子容かたちを改めて
 宣給ふやう。アントニオよ。御身の病はまだ痊いえずと覺し。少し
 く世の人に立ち交りて、氣鬱を散ぜんかた、身の爲めに宜しから

ん。曩むかしにはおん身一たび翼を張りて飛ばんとせしを、われ強ひて
 抑留し、おん身をして久しく樊籠はんろうの中にあらしめき。そは我あやま
 過ちにはあらざりしか。人各 意志あり。行かんと欲するところ
 に行き、住とどまらんと欲するところに住まりて、さて不幸に遭あはば、
 そは自ら作なせるなれば、悔ゆることもあらざるべし。おん身は最
 早童にあらねば、人の監督を受くることをば喜ばざるべし。この
 頃くすし醫師に謀はかりしに、これも轉地を勧めたり、拿破里ナポリの方かたをば既に
 見つれば、こたびは北伊太利を見に往けかし。一とせの間の費つひえを
 ば、われいかにともすべし。此館にありし間の我等の待遇には、
 おん身は或は慊あきたざりしならん。されど又世間に出で、は、誠の心
 もておん身を待つ人少きことを忘れ給ふな。われ等は未來一ひととせ年

の間のおん身の振舞を見て、過去の我等の待遇のおん身に利ありしか利あらざりしかをため験すべしといはれぬ。

公子は我答を待たずして室を出で給ひぬ。こは我に謀るにあらずして我に命ずるものなればなり、我に命ずるは我を逐おふものなればなり。世途は艱難ならん。されどその我を毒すること今の生涯に孰いづれ與ぞ。今や公子はわれに自由を與へ給ふ。こは仙方なり、靈藥なり。われは只だその仙方靈藥の劇毒の如く我創痍を刺し、我に苦痛を與ふるを感ずるのみ。去らんかな、羅馬を去らんかな。いでや、記念かたみの花の匂へる南國を出で、アペンニノの山を躰こえ、雪深き北地に入らん。アルピイおろしの寒威は、恰も好し、我が沸わきかへる血を鎮むるならん。いでや浮島のエネチアに往かん、

わたつみの配つまてふエネチアに往かん。神よ、我をして復た羅馬に
 歸らしむること勿なかれ、我記念の墳墓とぶらを訪はしむること勿れ。さら
 ば羅馬、さらば故郷ふるさと。

梟首けうしゆ

車は物寂ものさびたるカムパニアの野を走りぬ。サン、ピエトロの寺
 塔は丘陵のあなたに隠れぬ。既にして我はモンテ、ソラクテの側
 を過ぎ、山を踰こえてネピまちの市に入りぬ。明月は市の狭ちまたき巷を照せ
 り。一僧の酒オステリア肆の前に立ちて説法するあり。群衆は活キワ、サンタ聖
 マリアの聲に和しつゝ僧に隨ひて去れり。われはこれを避けて歩

を轉ぜり。 蔦つた 蘿かづら に包まれたる水道の址あととこれを圍める橄欖オリブの
 茂林とは、 黯澹あんたんたる一幅の圖をなして、わが刻下の情に 月光
 の一の壁面を照すを見れば、半ば剥はく 蝕くせられたる鮮畫フレスコは、
 箭やに貫つらぬかれたる聖サンセバスチアノの像を物せり。此廣間は絶えず遠
 雷の如き響ありて、四壁に反響す。われその響を追ひて狭き戸を
 潜り出でしに、道は「ミユルツス」と葡萄との鬱茂せる間に窮ま
 りて、脚底せんじん千仞の斷崖を形づくれり。一の瀑布ありてこれに懸
 る。月光其泡沫を射て、銀丸なげうを擲つ如し。凡そ此等の景は、なべ
 て世の好奇心あるものを動かすに足るものなるべし。されど當時
 の我の憂愁に沈める、或は等閑に看過したらんも知るべからず。
 幸に我は此境に在りて、別に一事に遭ひたり。我は其事を我心上

に血書して復た消滅すべからざらしめしが故に、亦併せて此景の
つばら詳なることを記し得たり。

崖に沿ひて一ひとすぢ條の細ほそみち徑あり。迂して初の街道に通ず。わ

れは高たかがや萱を分け小をくさ草を踏みて行きしに、月は高き石垣の上を照

して、三人みたりの色蒼ざめたる首かうべの、鐵格うしろの背後より、我うかゞを覗ふを見

たり。こは山賊けうを梟せるなりき。ネピネピの人の此壁上に梟首するは、

羅馬の人のアンジエロ門（ポルタ、デル、アンジエロ）の上に梟

首するに殊ならず。首を鐵籠中に置くことはた同じ。常の我なら

ば、遠く望みて走り去るべきに、此頃の痛苦は我に哲學思想を與

へ、我をして冷眼もてこれを視ることを敢てせしめき。嗚呼、王

侯の前に屈せざりし首よ、人を殺し火を放つ計はかりごとを出し、首よ、深み

山やまの荒鷺あらいそに似たる男等の首よ。今は靜に身を籠中に托すること、
 人に馴れたる小鳥の如し。近づくこと一步にして見れば、は匆ねら
 れてよりまだ日を経ざるものと覺しく、鬚眉しゆび猶生けるがごとし。
 既にして我は中央なる首級の少しく異なるものあるを認め得たり。
 こは分ぶん明みやうに老女の首なりしなり。我はこの褐かちいろの顔、半ば
 開けるまぶた眸まぶた、格子の外に洩れ出で、風に亂る、銀髪を凝視して、我
 脈搏の忽ち亢進するを覺えき。われは眼を壁に懸けたる石版に注
 げり。版には土地とちの習にて、梟せられたるもの、氏名と其罪科と
 を彫ゑりたり。果せるかな、中央に老女フルキア、フラスカアチの
 産と記せり。われはいたく感動して、覺えず歩み退しりぞくこと二三歩
 なりき。嗚呼、嘗て一たび我性命を救ひ、我に拿破里に至る盤纏ばんぜん

を給せしフルキアは、今此梟木の上より我と相見るなり。この藍色なる唇は、曾て我額に觸れしことあり。この物言はざる口は、曾て我に未來の運命を語りしことあり。汝は我福祉を預言したり。汝の猛き鷲は日邊に到らずして其翼を折けり、世のまがつみと戦ひてネミの湖に沈みたり。われは涙を灑いでフルキアの名を呼び、盤散として閩門の外なる街道に歩み旋りぬ。

翌朝ネピを發してテルニイに抵りぬ。こは伊太利疆内にて最も美しく最も大なる瀑布ある處なり。われは案内者と共に、騎して市を出で、暗く茂れる橄欖の林に入りぬ。濕ひたる雲は山巔に棚引けり。我は羅馬以北の景を看て、その概ね皆陰鬱なるに驚きぬ。大澤の畔の如くならず、テルラチナなる橄欖の林の

棕櫚しゆろを交へたるが如くならず。されど我は猶此感の我中情より出でたるにあらざるかを疑へり。

道は一苑を過ぎて、巖壁と激流との間なる街樾なみきに入りぬ。その木は皆鬱蒼たる橄欖なり。これを行く間、われは早く水沫みなわの雲の如く半空とうじやうに騰上して、彩虹の其中に現ぜるを見き。蝦夷石レツム南と

「ミユルツス」との路を塞げるを、押し分けつゝ攀よぢ登りて見れば、大瀑おほたきは山の絶ぜつてん巔より起り、削けづれる如き巖壁に沿ひて倒下す。側に一支流ありて、迂曲して落つ。其状銀色の帯を展のべたる如し。

この細大二流は、わが立てる巖いはほの前に至りて合し、幅闊ひろき急流となり、乳色の渦巻を生じて底なき深谷みなきに漲り落つ。雷の如き響は我胸こたうを鼓盪こたうして、我失望我苦心と相應じ、我をして前さきに小尼公アベヂツサ

の爲めにチヲリの瀧の前に立ちて、即興の詩を吟ぜし時の情を憶ひ起さしむ。げにや、碎け、消え、死するは自然の運命なること、獨り此瀑布のみにはあらず。

導者はわれを顧みていふやう。昨年英吉利人ひとり山賊に撃ち

イギリスひと

殺されしは、此巖の上にての事なりき。賊はサビノの山のものな

りといへど、羅馬のテルニイとの間に出没して、人そのな踪そう蹤しよう

なま

を審つばらにすること能はず。警吏は直ちに來りて、それが夥伴なる三人

を捕へき。われはその車上に縛せられて市まちに入るを見たり。市の

門にはフルキアの老女おうな立ち居たり。老女は天あめの下の奇しき事ども

を多く知れるものにて、世には法皇の府の僧カルチナアレ官達も及ばざる

こと遠しとぞいふ。その時老女の車上の賊に向ひて語りしは、何

事にかありけん、例の怪しき詞なれば、
 傍かたへぎき聽きせしものは辨わきまへ
 知らん由なかりき。さるを後には老女を彼賊の同類なりとし、こ
 とし數人の賊と共に彼老女をさへ刎はねて、ネピ||の石垣の上に梟かけ
 たりと語りぬ。

妄想

自然と云ひ人事と云ひ、一として我心の憂を長なずる媒かたちとならざ
 るものなし。暗黒なる橄欖オリフの林はいよゝ濃き陰翳を我心の上に
 加へ、四邊よもの山々は來りて我頭かしらを壓せんとす。われは飛ぶが如く
 に、里といふ里を走り過ぎて、早く海に到らんことを願へり、風

吹く海に、下なる天の我を載すること上なる天の我を覆ふが如くなる處に。

我胸は愛を求むるが爲めに燃ゆ。是より先き此火は既に二たび點ぜられしなり。昔のアンチヤタは我が仰ぎ瞻しところ、我が新に醒めたる心の力もて攀ぢんと欲せしところなるに、憾むらくは我を棄て、人に往けり。今のフラミアは我を眩せしめず、我を狂せしめずして、漸く我心と膠着すること、寶石のまばゆからざる光の、久しきを経て貴きことを覚えしむるが如くなりき。フラミアは我手を握ること、妹の兄の手を握る如く、我にこれに接吻することを許すこと、妹の兄に許す如く、又我を説き慰め、我が爲めに祈りて世の穢を受けざらしめんとして、その度ごとに

知らず識らずやじり鍬を我心に没せしめたり。我はこれを愛すること許い
ひなづけ嫁の婦つまを愛するが如くならず。されどその人の婦とならんを
 ば、われまた冷に傍より看ること能はざりしならん。今やフラミ
 ニアは死せり、現世うつしよの爲めには亡なきひと人の數に入りたり。世にはこ
 れを抱き、その唇に觸るゝことを得るものなし。是れ我が責せめても
 の慰藉也。

海に往かん、往いて海の驚くべき景を觀ん。是れ我が新なる境
 界なり。エネチアよ、水に泛うかべる都城よ、ハドリアの海の王女よ、
 願はくは我をして重れる山と黒き林とを過ぎることを須もちゐず、空
 に翔かけり波を凌しのぎて汝と會することを得しめよとは、我が當時の夢
 なりき。

初め我は先づフイレンチエに往き、かしこよりボロニア、フェ
ルララを経て、エネチアに達せんと欲せしに、今は忽ち前の計畫
を擲ち、スポレツトオより雇車を下り、暗夜身を郵便車に托
してアペンニノの嶺を踰え、ロレツトオの地をさへ、尊き御寺を
拜まずして馳せ過ぎつ。

山道を登りて巔に至りし時、我は早く地平線上一帯の銀色を認
め得たり。是れハドリア海なり。脚下に大波の層疊せるを見るは、
群巒の起伏せるなり。既にして碧波の上に、檣竿の林立せ
るを辨ず。種々なる旗章は其尖に翻れり。光景は略ぼ拿破里
に似たれど、エズオの山の黒烟を吐けるなく、又カプリの島の
港口に横れるなし。此夜の夢に、我はフルオのおうなとフラミ

ニアの君とに逢ひしに、二人皆面に微笑を湛へて、君が福祉の棕櫚ゆろは緑ならんとすと告げたり。

眠醒めしとき、日は旅店の窓よりさし入りたり。房カメリエリ 奴エリ 來り

ていふやう。客まらうど 人よ、エネチアに渡る舟は今帆を揚げんとす、

猶留りてこのわたりの景色を觀んとやし給ふといふ。否、舟あるこそ幸なれ、さらば直ちにエネチアに往かんと答へつ。我心は何故とも知る由なけれど、唯だ推され輓ひかるゝ如くなりき。われは埠頭ふしとうにおり立ちて、行李を搬はこび來らしめ、目を放ちて海原を望み見たり。さらばく我故郷。われは足の此土を離れんとするに臨みて、いよく新なる世界の我が爲めに開くべきを感じ。北伊太利國の自然の全く相殊ことなるべきは始より疑ふべからず。就なかんづ

中、エネチアは盛飾せる海の配偶にして、他の伊太利諸市と全く
 其趣を異にすべきこと明なり。我が乗るところの此舟は、即ちエ
 ネチアの舟にして、翼ある獅子の旗は早く我が頭上に翻れり。帆
 は風に鑿あきて、舟は忽ち外海に※り出で、我は艙板ふないたの上に坐し
 て、藍碧なる波の起伏を眺め居たるに、傍に一少年の蹲うづくまれるあり
 て、エネチアの俚謡ひなうたを歌ふ。其歌は人生の短きと戀愛の幸ある
 とを言へり。こゝに大概あらましを意譯せんか。其辭にいはいはく。朱あけの唇
 に觸れよ、誰か汝の明日猶在るを知らん。戀せよ、汝の心の猶少わか
 く、汝の血の猶熱き間に。白髪は死の花にして、その咲くや心の
 火は消え、血は氷とならんとす。來れ、彼輕舸けいかの中に。二人はそ
 の蓋おほひの下に隠れて、窓を塞ぎ戸を閉ぢ、人の來り覗うかがふことを許さゞ

らん。少女よ、人は二人の戀の幸を覗はざるべし。二人は波の上
に漂ひ、波は相推し相就き、二人も亦相推し相就くこと其波の如
くならん。戀せよ、汝の心の猶少く、汝の血の猶熱き間に。汝の
幸を知るものは、唯だ不言の夜あるのみ、唯だ起伏の波あるのみ。
老は至らんとす、氷と雪ともて汝の心汝の血を殺さん爲めに。少
年は一節を唱ふごとに、其友の群を顧みて、互に相領けり。友の
群は劇場の舞群の如くこれに和せり。まことに此歌は其辭卑猥に
して其意放縱なり。さるを我はこれを聞きて輓歌を聞く思ひをな
せり。老は至らんとす。少壯の火は消えなんとす。我は尊き愛の
膏油を地上に覆して、これを焚いて光を放ち熱を發せしむるに及
ばざりき。こは濫用して人に禍せしならねど、遂に徒費して天に

背そむきしことを免れず。そもく我は誓約の良心を縛ばくするあるにあらず、責任の云爲うんゐを妨ぐるあるにあらずして、何故に我前に湧ける愛の泉を汲まざりしぞ。かく思ひ續くれば、一種の言ふべからざる情はわが胸に溢れたり。これに名づけて自ら慊あきたらざる情ともいふべきか。こは我慾火の勢を得て、我智慧を燬やくにやあらん。

我がサンタを畏れて走り避けしは何故ぞ。聖母マドンナの像の壁上より落ちぬればなり。否々、鏽さびたる釘はいづれの時か折れざらん。まことに我をして走り避けしめしものは、我脈絡中なる山羊の乳のみ、「ジエス・キタ」派学校の教育のみ。われはサンタの艶色を憶ひ起して、心目にその燃ゆる如き目まなざしを見心耳にその渴せる如き聲音こわねを聞き、我と我を嘲り我と我いやしを卑めり。何故に我は世

上の男子の如く、ベルナルドオの如くなることを得ざる。愛を求むるは我心にあらずや。我心は神の授け給ひし光明にあらずや。さらば愛を求むるは神にあらずや。此時我は此の如くに思議せり。此の如くに思議して、エネチアの繁華をおもひ、その女ありて雲の如くなるをおもひ、我血の猶熱せるをおもひ、忽ち聲を放ちて我少年の歌に和したり。

嗚呼、是れ皆熱の爲めに發せしうはごと譚話のみ、苦痛の餘なるさつぎ躁やう狂のみ。我に心の光明を授け給ひし神よ、我運命の柄を握り給

ふ神よ。我は御身の我罪を問ひ給ふことの刻薄ならざるべきを知る。人の心中には舌頭に上すべからざるほつき發作あり、争鬪あり。是れ吾人の清廉なる守護神の膝を悪魔の前に屈する時なり。世の能

く欲して能く遂ぐる人々は、我がいたづらに欲せしところに就いて、自在に評論せよ。されど汝等は裁決せざれ。さらば汝等は裁決せられざるならん。汝等は呪誼じゆそせざれ。さらば汝等は呪誼せられざるべし。我は實に此の如く思議せり。此の如く思議して、復たいのり禱の詞を出すこと能はずして寢たり。舟は穩おだやかに我夢を載せて、北のかたエネチアに向へり。

水の都

曉に起きて望めば、前面早く家々の壁と寺塔とを辨ずることを得たり。そのさま譬へば帆を揚げたる無数の舟の横つらなに列れるが如

し。左のかたにはロムバルチアの岸の平遠なる景を畫けるあり。遙に地平線に接してはアルピイの山脈の蒼靄さうあいに似たるあり。われはこれを望みて、彼蒼ひさうの廣大なるを感じり。天球の半なかばは一時に影を我心鏡に映ずることを得たるなり。

爽涼なる朝風は我感情を冷却せり。我は心裡しんりにエネチアの歴史を繰り返して、その古いにしへの富、古の繁華、古の獨立、古の權勢ないし乃至大海めあはに配めあはすといふ古の大統領ドオジエの事を思ひぬ。(エネチア共和国に「ドオジエ」を置きしは、第八世紀より千七百九十七年に至る。)既にして舟は漸く進み、鹹かんたく澤 (ラグウナ)の上なる個々の人家を見るに、その壁は黄を帯びたる灰色を呈し、古代の様式にもあらず、又近時の設計にもあらねば、要するに好觀にあらざりき。

名に聞えたるマルクスの塔は思ひしよりも高からず。舟は陸と鹹澤との間を進めり。後なるものは曲りたる堤の如く、海中としゆに斗出つしたり。土地は全體極めて卑ひくしとおぼしく、岸の水より高きこと僅に數寸なるが如し。偶 數戸の小屋の群を成せるあれば、指ぎフジナして市と云ふ。こゝかしこには一ひとむら叢の木立あり。其他は渾すべて是れ平地なりき。

われはエネチアの既に甚だ近きを覺えしに、今かたへびと傍人に問へば猶一里ありと答ふ。而して此一里の間は、皆瀦ちよりう留せうたくせる沼澤せうたくの水のみ。處々には泥土たうしよの島嶼さまの状をなして頭あらはを露あらはせるあり。その上には一鳥の足を留むるなく、一莖の草の萌え出づるなし。沼澤の中に、深みぞき渠みぞを穿ちて、杭を立て泥を支ふるあり。是れ舟

を行^やる道なり。われは始て「ゴンドラ」といふ小舟を見き。皆黒
 塗にして、その形狭く長く、波を截^きりて走ること弦^{つる}を離れし箭^やに
 似たり。逼^{せま}りて視れば、中央なる船房にも黒き布を覆^{おほ}へり。水の
 上なる柩^{ひつぎ}とやいふべき。拿破^{ナポリ}里の水は岸に近づきても猶藍いろな
 るに、こゝは漸く變じて汚れたる緑となれり。偶 《たま〜》
 一島の傍を過ぐるに、その家々は或は直ちに水面^{みのも}より起れる如く、
 或は廢^{すた}れたる舟の上に立てる如し。最も高き石壁の頂に、幼^やき耶
 蘇^そを抱ける聖^{マドンナ}母の御像^{みざう}ありて、この荒涼なる天地を眺め居給ふ。
 水の浅きところは、別に一種の鴨^{あふりよく}緑色をなして、一面深き淵
 に接し、一面は黒き泥土の島に接す。日は明^{あか}くエネチア^{まち}の市を照
 して、寺々の鐘は皆鳴り響けり。されど街衢^{がいく}は閬^{げき}として人影なき

に似たり。船渠せんきよを覗へば、只だ一舟よこたはの横れるありて、こゝにも人を見ざりき。

我は身を彼水上ひつぎの柩すそに托して、水の衢ちまたに入りぬ。樓屋軒をならべて石階の裾すそは直ちに水面に達し、復た犬ばしり程の土をだに着けず。家々の穹きゆう窿りゆう門もんは水に架して橋梁の如く、中庭は大なる井の如し。この中庭には舟に帆掛けて入るべけれど、舳艫ちくろめぐらを旋さんことは難かたかるべし。海水はその緑なる苔皮たいひをして、高く石壁に攀よち登らしめ、巍々ぎぎたる大理石の宮殿も、これが爲めに水中に沈しづまんと欲する状さまをなし、人をして危殆きたいの念を生ぜしむ。況いはんや金薄んぱく半ば剥げたる大窓の※《けづ》らざる板もて圍まれたるありて、大廈の一部まことに朽敗きうはいになんくとしたるをや。既にし

て梵ぼんしょう鐘しょうは聲こゑを斂とめて、櫂かぢの水を撃つ音より外、何の響をも聞かかずなりぬ。われは猶未だ人影を見ずして、只だ美しきエネチアはくてふばねの鵝かの尸かの如く波の上に浮べるを見るのみ。

舟は轉じて他の水路に入りぬ。その幅頗る狭くして石橋あまたかゝれり。こゝには人ありて、或は橋を渡りて家の間に隠れ、或は石壁の門を出入す。されど街と名づくべきものは、水路の外有ることなし。舟人の棹さを留めたる時、われは何處に往くべきぞと問ひぬ。舟人は家と家との間を通ずる、橋の側なる隘せまき巷こうぢを指さし教へつ。兩邊の家に住める人は、おのゝ六層樓上の窓を開いて、互に手を握ることを得べく、この日光を受けざる巷は、僅に三人の並び行くことをゆるすなるべし。我舟は既に去りて、身

邊また寂^{せき}として人を見ず。

あはれエネチアとは是か、海の配偶と云ひ、世界第一の富強者と云ひしエネチアとは是か。われは名に聞えたるマルクスの廣こうちに入りぬ。こはエネチアの心胸と稱すべき處にして、國の性命は此^{こゝ}に存ずといふなるに、その所^{いはゆる}謂繁華は羅馬のゴルソオに孰^{いづれ}與ぞ、又拿破^{ナポ}破^{ポリ}里の市に孰^{いづれ}與ぞ。石の迫^{せりもち}持の下なる長き廊^{わたどの}道^{みち}には、書肆^{しよし}あり珠玉店あり繪畫鋪あれども、足を其前に留むるもの多からず。唯だ骨喜店^{カツフエエ}の前には、幾個の希臘人、土耳其^{トルコ}人などの彩衣を纏ひて、口に長き烟管^{きせる}を啣^{ふく}み、黙坐したるあるのみ。日は「マルクス」寺の星根の鍍金^{めつき}せる尖^{さき}と寺門の上なる大なる銅馬^{どうめ}とを照して、チユペルス、カンチア、モレア等の舟の赤^せ

檣きしやうの上なる徽章ある旗は垂れて動かず。數千の鴿はとは廣こうぢ
 を飛びかひて、磔いしだたみ石の上にあきれり。

われは進みてポンテ、リアルトオに到りて、いよくこの斯土の風
 俗を知りぬ。エネチアは大いなる悲哀の郷なり、我主觀の好き對
 象なり。而して此郷の水の上にうか泛べること、古のノアの舟と同じ。
 われは小き舟を下りて、この大いなる舟に上りしなり。

日の夕となりて、模糊として力なき月光の全都を被おほひ、隨處に
 際立ちたる陰翳いんえいを生ぜしとき、われはいよくエネチアの眞味
 を領略することを得たり。死せる都府の陰森いんしんの氣は、光明に宜
 しからずして幽暗に宜しければなり。われは客亭の窓を開いて立
 ち、黒き小舟の矢を射る如く黒き波を截きり去るを望み、前さきの舟人

の歌ひし戀の歌を憶ひ起せり。われは此時アヌンチャタを恨みき。
 いかなれば彼佳人は我を棄て、ベルナルドオに奔りしぞ。こは誠
 實を去りて輕薄に就きしにあらずや。われは此時フラミアをさ
 へ恨みき。いかなれば彼少女は我を棄て、をよめ尼寺に入りしぞ。こは
 情愛を去りて平和に就きしにあらずや。我胸は一種の言ふべから
 ざる空虚を感じたり。我胸はあらゆる我を喜ばせしものとあらゆる
 我を慰めし者とを一掃して去らんと欲せり。然るにかく思議す
 る間、終始我心目の前に往來するものは、可哀かはゆきララと罪深きサ
 ンタとの面影なりき。われは蹣跚まんさんとして階きざはしを下り、舟を喚びて
 水の衢ちまたを逍遙せり。二人の舵手こぎては相和して歌ふ。其歌は古の恢復
 せられたるエルザレム（ジェルザレムメ、リベラアタ）の調にあ

らず、大統領ドオージェの族絶うからえて、獅子の翼よそびとの外よそびと人に縛せられてより、
 エネチアの民はその歌謠の上の國粹をさへ失ひつるなり。われは
 獨語して、いでや人生の渦裏に投じて、人生たのしみの樂を受用し、誓ひ
 て餘瀝なからしめんと云ふとき、舟はもとの旅館の階下に留まり
 ぬ。われは又蹣跚として階を上り、おぼつかなき孤客の夢を結び
 ぬ。

颯風

羅馬より齎もたらしたる紹介状は、我をして相識を得しめ、我をして
 所謂朋友あらしめたり。人々は我を「アバテ」と喚べり。我言の

善きをば人皆褒め、我才せえをば人皆稱せり。羅馬なる恩人は常に我に不快なる事を告げ、中にはことさらに我に快からざるべき事どもを探りもと覓めて、それを我に告ぐる如くなりしに、今はさる詞を耳にすることなし。羅馬にては常に長上にのみ交ることゝて、フラミニアフの姫の情あるすら、我をして抑壓の苦を忘れしむること能はざりしに、今は心にさる負荷おひにを覺ゆることなし。苦言を聞かざるは、信ある友なきなりといへば、こゝには信ある友は絶て無きなるべし。

われは大統領ドオジエの館たちの輪りんくわん奩いの美を討たづねて、その華麗を極めたる空むなしき殿堂へめぐを經り、おそろしき活地獄いきの圖えある鞫問きくもんじよ所を觀みき。われは彼四面皆塞りふさがたる橋の、小舟通ふ溝渠の上に架せられ

たるを渡りぬ。是れ館より牢獄に往く道にして、名づけて歎息橋と曰ふとぞ。橋に接する處は即ち牢井らうせいなり。廊わたどのに點じたる燈ともし火は僅かに狭き鐵格てつがうを穿ちて、最上層の獄ひとやを照し出せり。此層の如きは、これを下層に比するときは、猶晴やかなる房へやと稱すべきならん。濕うるほひて菌きのこを生じたる床は、溝渠はるかの水面の下にあり。あはれ、此房の壁は幾いくばく何の人の歎息と叫喚とを聞きつる。われは慥せふぜん然として肌膚きふの粟あはを生ずるを覺え、急に舟を呼んで薄赤いろなる古宮殿、獅子を刻める石柱の前を過ぎ、鹹澤かんたくの方に向ひぬ。舟の指すところは即ち所謂岸區りドなりき。

われは岸區に近づくととき、何物をか見し。ここには一の大なる墓田ありき。外國人とつくにびとと新教徒とは、この水と水とに挾まれた

る一帯の土の、殆ど時々刻々洗ひ去らるゝ状さまをなせる處に埋めらるゝなり。白き人骨いびんこは沙いさごの表あらはに露あれて、これが爲ためめに哭こくするものは、只だ浪の音あるのみ。

漁父の危きを冒して沖に出でたるとき、その妻そのいひなづけの妻などの、坐して夫の舟の歸るを待つは、此岸區なりといふ。颶風ぐふうの勢少しく挫くじけたるとき、こゝに坐したる女子をみなごの、彼恢復せられたるエルザレム中の歌を歌ひ、耳を傾けて夫の聲のこれに應ずるや否やを覗うかがひしこと幾度ぞ。さるをその懐なつかしき夫の聲の終に應ずることなく、可憐の女子の獨り不言の海に對して口は復た歌ふこと能はず、目は空しく沙上の髑髏されかうべを見、耳は徒らに岸打きしうつ浪なみの音を聞きて、暮色の漸く死せる古都を掩おほふを覺えしこと又

幾度ぞ。

この暗澹たる畫圖は我心目に上りて消えず、我情調はこれに一層の悲惨の色を添へんとせり。わが對するところの自然は、無常と歴劫れきごふとの觀を惹ひき起すこと、一の寺院の如くなりき。フラミニアの姫の詞は、此時端はしなく憶ひ出されぬ。詩人は神の預言者にあらずや。何故に詩人は神の徳を頌せんことを勉めざる。嗚呼、我は忽ち此詞の眞理なることを感得せり。不滅なる詩人の心は不滅なる神をこそ詩料とすべきなれ。目前の榮華は泡沫の五彩の色を現ずるに異ならずして、その生ずる時はやがてその滅する時なり。われは忽ち興到り氣奮ふるふを覺えしに、忽ち又興散じて氣衰ふるを覺え、悄然として舟に上り、大海に臨める岸區リドに着きぬ。

海はやゝ浪立てり。われは佇ちよりつ立してアマルフィいりえの灣を憶ひ起しつゝ、目を轉じて身邊を顧みれば、波のもて來し藻草と小石との間に坐して、草畫を作れる男あり。われは其姿に些ちとの見おぼえあるをもて、徐しづかにこれに近づくほどに男は身を起して此方こなたに向へり。こは我がエネチアエネチアに來てよりの新相識の一人なる貴族の少年にて名をポツジヨポツジヨといふものなりき。

ポツジヨポツジヨのいふやう。こゝにて君と相見んとは思ひ掛けざりき。この怒り易く恃たのみ難きハドリアハドリアの海の、能く君を招き致したるは、唯だその紅波白浪の美あるがためか、そもく別に美なるものありて、この岸區に住めるにはあらざるかといひぬ。我等は互に進み寄りて手を握りつ。

人の語るを聞くに、ポツジヨは畫才ありて資力なき人なり。その人に對する言語動作は活澆にして、間々放縱なるかとさへ疑はるゝ節あれども、まことはいみじき厭世家なり。言ふところはド
 ン・ホアンを欺く蕩子たうしなる如くにして、まことは聖アンサントニウス
 の誘惑を峻しゆんきよ拒する氣概あり。無邪氣なること赤子の如く、胸
 中一事を包藏するに堪へざるものに似て、智を恃たのめる土流は遂に
 その底蘊ていうんを窮むること能はず。こは深き憂あに中あたれるが爲めなる
 べけれど、その憂は貧か戀か、そもく別に尋常よのつねならざる祕密
 あるか。これを知るもの絶て無しとぞ。われは人の若語しかかたるを聞
 きて、かねてよりポツジヨに親まんことを願ひしかば、今ゆくり
 なくこれに逢ひて、心にこの邂逅を喜び、早く胸の狹霧さぎりのこれが

ために晴るゝを覺えき。

ポツジヨは海を指ざしてかゝる青く波立てる大面積は羅馬の無き所なり、おほよそ地上の美なるもの海に若くはなかるべし、宜なり海はアフロヂテの母にしてと云ひさし、少し笑ひて、又エネチア歴代の大統領の未亡人なりといへり。われ。海を愛する心は、エネチアの人殊に深かるべき理あり。海は己れが母なるエネチアの母にして、己れを愛撫し己れを游嬉せしむる祖母なればなり。ホツジヨ。その氣高かりし海の女の今は頭を低れたるぞ哀なる。われ。フランツ帝の下にありて幸ありとはいふべからざるか。ポツジヨ。われは政治を解せず。エネチア人は今も不平を説くことを須みざるなるべし。されどわが解するところのものは美妙なり。

陸上宮殿の柱カリアチデス像たらんは、海の女王たらんことの崇高なるに
 は若しかず。おもふに君の美妙を崇拜し給ふこと我に殊ならざるべ
 ければ、君はかしこより來る彼美かのびの呼び迎ふるをも辭いなみ給はぬな
 らん。こは識る所の酒亭オステリアの娘なり。共に往き給はずやといふ。
 われはポツジヨと少女をとめに誘はれて、海に枕のぞめる小家に入りぬ。酒
 は旨うまし。友は善く談ぜり。誰かポツジヨが輕快なる辯いえつと怡悦の色
 とを見て、その厭世の客たるを知り得ん。我は共に坐すること二
 時間ばかりなりしに、舟人は急に我を呼びて歸途に就かんことを
 促せり。こは颶風ぐふうの候しるしありて、岸區リドとエネチアとの間なる波は、
 最早小舟を危うするに足るが故なりと云へり。ポツジヨは耳そぼだを敬
 てたり。何とか云ふ。颶風は我が久しく觀んことを願ひしところ

なり。「アバテ」も暫く我と共に留まり給へ。日の暮るゝまでには風なぐべし。若風もしがずば、枕をこの茅屋根かやの下に安くして、波の音を聞くこと、昔子もり歌を聞きしが如くせんといふ。我は舟人を顧みて、舟を要せば別に雇ふべければ、汝達は去留自在にせよといひて、暇を取らせつ。

須臾しゆゆにして波濤きようく 洶々 の音漸く高く、風力の衝突は頻りに全屋うごかを撼せり。我とポツジヨとは偕ともに戸外に出で、瞻望せんぼうしたり。

時に夕陽は震怒したる海の暗緑なる水を射て、大波の起る處雪花ひるがへ亂れ翻れり。地平線に近き邊には、層雲堆たいを成して、稻妻の其間より閃せんぱつ發せるさま、幾箇の火山の噴坑を開けるに似たり。我等は忽ち二三の舟の紙上の黒點の如く彼雲に映ずるを見しが、忽ち

又之を失へり。岸を噬む水は、石に觸れて倒立し、鹹沫は飛んで
 二人の面を撲てり。ポツジヨの興は風浪の高きに從ひて高く、掌
 を抵ちて哄笑し、海に對して快哉を連呼せり。此興は我に感
 じ傳はりて、我は胸中の苦悶の天地の忿怒に壓倒せらるゝを覺え、
 亦ポツジヨの聲に應じて叫びぬ。

暮色は急に襲ひ至りぬ。我等は亭に入りて、當壚の女をして良
 酒を供せしめ、續けさまに數杯を傾けて、此自然の活劇を翫べり。

忽ちポツジヨの聲を放ちて歌ふを聞きつ。其曲は嘗て此地に來り
 しとき舟中にありて聞きしと同じき戀の歌なり。われ杯を擧げて、
 エネチアの美人の健康のために飲まんと云へば、ポツジヨ、さら
 ば我は羅馬の美人のために飲まんと云ふ。若し相識らぬ人の、我

等の狂態を見たらんには、定めて尋常時つねのときに及びて行樂する徒ともがらとなすなるべし。ポツジヨのいふやう。女子の美は羅馬しに若くはなし。君はいかにおもひ給ふか。憚はゞかることなく答へ給へ。われ。そは我が首肯する所なり。ポツジヨ。さもあるべし。されど伊太利第一の美人は此エネチアボデスタにこそあれ。憾むらくは君未だ市長ボデスタの女を見給はず。清楚なること此の如きは、世の絶て無くして僅に有るところにして、これをや精神上の美とは云ふべき。若しカノワハリテスにして此女を識りたらましかば、その三美ハリテスの像の最も少きをば、必ず此女の姿によりて摸し成ししならん。(カノワは彫てうしや匠うなり。ポツサニヨポツサニヨに生れエネチアボデスタに歿す。三美の像は獨逸ドイッチミンンヘンに在り。)われは嘗て晚餐式ありしとき、寺院にて見、

サン、モセス

又聖摩西の劇場にて一たび見たり。その高根の花に似て、仰ぎ
 見るだに容易たやすからぬを恨むものは、獨り我のみにはあらず。おほ
 よそエネチアの少年紳士にして同じ恨を抱かぬはあらざるならん。
 只だ人々と我と相異なるは、彼は懸想けさうし我は懸想せざるのみ。我
 俗眼もて見れば、彼人は餘りに天人めきたり。されど天人は崇拜
 の對象とすべきならん。「アバテ」はいかに思ひ給ふといふ。わ
 れは此語を聞いて、フラミニアの事を思ひ出し、喜の色は我面よ
 り消え失せたり。ポツジヨ。酒は好し。風波は我筵えんの爲めに歌舞
 す。いかなれば君愁うれひの色を見せ給ふぞ。われ。市長ボテスタは客を招き
 筵を張ることありや。ポツジヨ。稀にそのことなきにあらず。さ
 れど招請せうせいを慎むつゝしこといと嚴おごそかなり。矧いはんや彼人は物に怯おそるゝこと鹿か

子の如く、同じ席つらなに列るものもたやすく近づくこと能はざるを奈何せん。われは必ずしもかの人心より此の如しと説かず。そは人にめづらしがられんとてかく振舞ふ女も少からねばなり。そが上に彼人の身上には明白ならざる處なきにしもあらず。わが聞くところに依れば、市長に二人の妹ありて、皆久しく遠國に住めりき。その最も少わかき方の妹は希臘人に嫁ぎたりしに、その夫婦の間に彼の奇くしき少女はまうけられぬといふ。今一人の妹は猶處しよし子なり、しかも老いたる處子なり。四とせ前の頃彼の少女を伴ひて歸り來りしは、此の老處子に他ならざりき。

夜の如き闇黒は急に酒オステリア亭を襲ひて、ポツジヨが話の腰を折りたり。あなやと驚く隙ひまもあらせず、赫かくぜん然たる電光は身邊めぐを繞

り、次いで雷聲大に震ひ、我等二人をして覺えず首を低れて、十字を空に畫かしめつ。

酒亭の女主人色を變じて馳せ來りて云ふやう。氣の毒なるこ

とこそ出いできた來り候ひぬれ。岸區リドの優すぐれたる舟人六人未だ海より歸

らずして、就なかんづく中憐むべきア二エエゼは子供五人と共に岸に坐

して待てり。いかになり行くことならん。只だ聖母マドンナの御惠を祈

らんより外術すべなしといひぬ。忽ち歌頌の聲はわれ等の耳に入れり。

戸を出で、覗へば、彼の激浪倒立すること十丈なる岸頭に、一群

の女子小兒の立てるあり。小兒等は十字架を棒げ持てり。群のう

ちに一人の年わか少かき女の、地に坐して海上を凝視せるあり。この女

は赤子に乳房を銜くませたるに、別に年稍 長ぜる一兒の膝に枕し

たるさへありき。忽ち一道の雷火下り射ると共に、颶風は引き去らんと欲する状さまをなせり。地平線には小き稻妻亂れ起りて、暗碧なる浪の尖さきなる雪花はほの／＼と白み來れり。彼女は俄に蹶けつき起して、舟はかしこにと呼べり。われ等はその指す方に一の黒點あるを認め得たり。黒點は次第あややに鮮かになりぬ。時に一人の老漁ありて、褐かちいろなる無つばなし庇帽ぼうしを戴き指を組み合せて立ちたりしに、不意にあなやと叫べり。聲未だ畢をはらざるに、我等は黒點の泡立てる巨濤の蔭に隠るゝを見たり。果せるかな老漁の目は我を欺かざりき。一群の人は周章の色を現せり。天の漸く明かに、海の漸く靜に、舟人遭難の事の漸く確實になりゆくと共に、周章の色は加はり來れり。小兒は捧げ持ちたりし十字架を地に委ゆだねて、泣き號さけ

びつゝ母に縋すがりぬ。その時老漁は十字架を地より拾ひて、救世主の足に接吻し、更に高くこれを撃さげて口に聖マドンナ母の御名を唱へき。半夜に至りて天に纖雲なく、皎けうげつ月はエネチアと岸區リドとの間なる風なき水を照せり。われはポツジヨと舟を倩やとひて岸區を離れたり。そは留まりて彼の五子の母を慰藉し、又これを救きうじゆつ恤するに由なかりしが爲めなり。

感動

翌晩われはポツジヨとエネチア屈指の富人某それの家に會せり。こはわが出納すゐたふの事を托したる銀行の主人あるじなり。會するものはいと

多かりしかど、席上一の我が相識れる婦人なく、又一の我が相識らんことを欲する婦人なかりき。

會話は昨夜よべの暴風の事に及べり。ポツジヨは舟人の横死と遺族の窮乏とを語りて、些少なる棄損きえんのいかに大いなる功德くどくをなすべきかを諷し試みたれども、人々は只だその笑止なることなるかなとて、肩を聳そびやかして相視たるのみにて、眞面目まことにこれに應こたふるものなく、會話よそは餘所の題目に移りぬ。

頃しばらくして席は遊藝を競ふところとなり、ポツジヨは得意ふなうの舟歌ふなうた（バルカルオラ）を歌へり。我は友の笑ゑみを帯びたる容貌おもさしの背後うしろに、暗に富貴なる人々の卑吝ひりんを嘲あざける色いろを藏かくしたるかを疑ひぬ。舟歌畢りしとき、主婦は我に對ひて、君は歌ひ給はずやと問ひぬ。

われ、さらば即興の詩一つ試みばやと答へぬ。四邊あたりには渠かれは即興詩人なりと耳語さぐやく聲す。婦人の群は優しき目もて我を促し、男子等は我を揖いふして請へり。われは「キタルラ」の琴を抱きて人々に題を求めつ。忽ち一少女の臆する色なく目を我面に注ぎてエネチアと呼ぶあり。男子幾人か之に應じてエネチア、エネチアと反復せり。そはかの少女の頗る美なるが爲めなり。われは絃をさを理めて、先づエネチア往古の豪華を説きたり。人々は歴史と空想とを編み交ぜたる我詞章に耳を傾けつ、彼過去の影をもて此現在の形となすにやあらん、その眼光は皆耀かざり。われは心中にララをおもひサンタをおもひつ、月明かなる夜、渠水きよすゐに枕のぞめる出窓の上に、美人の獨りたゞずめる状さまを敍したり。婦人等はこれを聞きて、

謳うたふもの直ちに己れを讚むとなすにやあらん、織手を拍うちて我に酬むくいぬ。わが席上の成功はスグリツチ（原註、知名の即興詩人）にも譲らざる如くなりき。

ポツジヨは我耳に附きて、市ボデスタ長の姪あり、此席にありとさゝやきしが、會 《たま〜》婦人數人と老いたる貴族某それとの坐客を代表して、我に再演を請ひたりしが爲めに、われは友と多く語を交ふること能はざりき。此請は我が預め期したるところなりき。われは好機會を得て、昨夜よべの暴風と難船との事を敘し、前に友の雄辯もて遂ぐることに能はざりしところをも、詞章もて遂ごげんと期したりしなり。

我はチチアノの贊といふ題を得たり。即興はおもふまゝなる喝

采を博して、古名匠の贊はわが自贊となりぬ。されどチチアノは海を畫く人ならざりしが爲めに、われは此題を利用して我志を果すに由なかりき。

主婦は我に近づきていふやう。君の如く自家の技藝もてかくあまたの人を樂ましめ感ぜしめんは、いかに快き事なるべきか。われ。詩人第一の快事は詩の成功なり。主婦。さらば能くその快きを題として歌ひ給はんや。君の辭を措き給ふことの容易げなるよりわれ等は、頻りに請ふことの無禮げなるをさへ忘れんとす。われ。こゝに一の奇術あり。そは人々皆詩人となりて、能く詩人の快さを體驗することなり。われは此術を善くすれども、かゝる術の常として、報なくては演ずべきにあらず。わが此詞は果して座

客をして耳を敲そばてしめ、人々は争ひ進みて、願はくはその奇術を
 見ることを得んと云へり。我は側つくなる卓えを指ざして、報むくせんと思
 ふ方かた々／＼は、金錢にもせよ珠玉首飾の類にもせよ、此上に出し
 給へと云ひぬ。婦人の一人は戯たはむれに、さらば我はこの黄金こがねの鎖を置
 かと云ひて、言ふところの品を卓上なげうに擲なげうてり。一男子は笑ひつ
 々、さらば我は骨牌かるたの爲めに帶おびび來れる此金残こがねらずを置かと云
 ひて、その財囊ざいを擲なげうてり。われ。人々よ、我詞ざれごとは戯たはむれ言ことにあらず、
 人々は再び其品を得給ふまじといふに、満座の客は、さもあらば
 あれ君が奇術こそ見まほしけれと、金銀、指環、鎖くわの類うづたかを堆うづたかく卓
 上に積たみたり。軍服着たる一老人、若しその奇術奇ならざるとき
 は、われは我が「ヅカアチイ」二個ふたこ（約三圓三十八錢）を取り返

すことを得んかといひしに、ポツジヨは我に代りて、若し疑はし
とおもひ給はゞ、夥伴なかまに入り給はでもあるべきにと答へぬ。人々
はこれを聞きて打笑ひ、只管ひたすら我が演じいだす所のいかなるべき
を俟まち居たり。

われは將まさに口を開かんとするに臨みて、神の我に光明を與へ給
ふを覺えたり。先づエネチアの配偶なる、威力ある海を紋し、そ
れより海の兒孫なる航海者に及び、性命を一葦あしに托する漁者に及
べり。次に前さい夕いつゆふの目撃せしところに就きて颶風を紋し、岸に
臨みて翹望げうぼうせる婦幼に及び、十字架を落す兒童とこれを拾ひて
高く撃さぐる漁翁さうとに及び。我は殆ど歌ふところのもの、即ち神
の御聲みこゑにして、我身の唯だ此聲を發する器具に過ぎざるを覺えき。

時に廣座の間寂せきとして人なきが如く、處々に巾きれもて涙を拭ふもの
 あるを見る。われはこれより茅屋ぼうをくのうちなる寡婦孤兒の憐むべ
 き生活なりはひを敘し、賑恤しんじゆつの必要と其效果とに及べり。われは人
 間の快さは取るに在らずして與ふるに在り、與ふる快さは即ち神
 の御心にして、此心あるものは誰か眞の詩人たらざらんと云へり。
 我聲の威力、その幅員は曲の未解に至りて強さと大きとを加へき。
 我曲は能く衆人を感動せしめき。我が卓上の物を取りてポツジヨ
 に交付し、これに救助の事を托せしときは喝采の聲屋いへゆるがを撼したり。
 爾そのとき時一そのときの年わかき婦人ありて、我前に來り跪ひざまづき、我手を握り、
 その涙うるほに潤へる黒き瞳もて我面を見上げ、神の母の報むくいは君が上に
 あれと呼びたり。われは婦人の黒き瞳を見て、曾て夢中に相逢ひ

たる如き念をなし、深くこれに動されぬ。婦人は此言をなし畢りをはて、纒わづかにおのれの舉動の矩のりを踰こえたるを曉さとれりとおぼしく、臉かほに火の如き紅くれなるのほを上して席をすべり出でぬ。

座客は皆我傍に集ひて、わが博愛の心を稱たへ、わが即興の作を讚む。ポツジヨは我を擁して、幸ある友よ、人の仰ぎ視ることをだに敢てせざる美人は、膝を君が前に屈せしにあらずやとささやけり。われ。渠かれは何なんびと人なりしか。ポツジヨ。エネチア第一の美人なり。市ボデスタ長の姪なり。一の老婦人ありて我に歩み近づきて、君は最早我を忘れ給ひしか、そは理ことわりなきにあらず、唯だ一たび相見てより後、年あまた経ぬればと云ひつゝ、我に手をさし伸べたり。われ、一たび相見しことある御方とは知れど、何時何處にて

の事ともおもひ定め難しといふに、老婦人、我同胞はらからは醫師くすしにて
 拿破里ナポリに居たり、君はボルゲエゼ家の公子と共に弟を訪おとひ給ひぬ
 といふ。われ。まことに宣給ふ如し。こゝにて逢ひまつらんとは
 思ひ掛けざりしなり。老婦人。拿破里の弟は妻なかりし故、われ
 に家政をとりまかなはせしに、四とせ前にみまかりぬ。今はこゝ
 なる兄の許に住めり。我姪はその性人さがと殊なれば、一たび家に歸
 らんといひ出で、は、思ひ留まるべくもあらず、又こそ御目にかゝ
 らめとて、老婦人は出で去りぬ。ポツジヨは再び我にさゝやくや
 う。かへすがへすも幸ある友よ。市長の妹の君が相識にて、君と
 再會を約せしは願ひてもなき事ならずや。エネチアの少年紳士に
 して君を羨まぬものはあらず。人々は遠距離にありてだに心むねに傷て

を負へるを、君は敵の陣地に入ることなれば、注意して自らまも護り給へといふ。市長の姪の去りしには、座客氣付きぬれど、皆その心の優しきこと姿の美しきにかはらずとて、讚め稱へて已まざりき。

善行は心に光明を與ふ。われは久しぶりに心の中の快活を感じて、ポツジヨと杯をうちあはせ、此より兄弟の如くならんことを誓ひぬ。家に歸りしは夜半なりき。直ちに眠に就つくべき心地ならねば、窓に坐して清風明月に對せり。きよすゐ渠水波なく、古宮空しく聳ゆる處、我が爲めには神話中の夢幻界を現じ來れり。我は兒童の如く合掌して祈祷したり。父よ、我諸惡を免ゆるせ。我に氣力を賦ふして善良の人たることを得しめよ、我をして些の羞しうざん慚の心なく、彼尼院中

なるフラミアを懐ふことを得しめよ。

翌朝は身極めて爽快なりき。我は舟人を喚びて市長ボデスタの家に往くことを命ぜしに、舟人そのオテルロ宮（パラツツオオ、ドテルロ）なるを告げたり。オテルロとは彼シエクスピアの戯曲エネチアの黒人の主人公にして、市長の家は其舊館なれば、英吉利人は此地に來る毎に必ずこれを尋ぬること、マルクス寺又は武庫に殊ならずといふ。

市長の一家は歡びて我を迎へ、主人の妹なる口オザ夫人は、亡弟の記念かたみと拿破里の繁華とを語りて、我に再遊の願の甚だ切なるを告げ、主人の姪なるマリアは我をして復たララの姿を見、フラミアミニアの才さえを見る心地せしめき。マリアとララとの相肖にたるは驚

くべき程なり。さるにても身に襪ほろを纏ひて、髮に一束の董花すみれを挿みし乞丐かたるの女の、能くエネチア第一の美人と美をなら※ぶるこそ不思議なれ。是より我は頻りに此家に往來して、ロオザ夫人の爲めにダンテの神曲、アルフイエリ、ハコリイニイ（並に詩人の名）等の集を朗讀せり。ポツジヨもわが紹介によりて市長の常の客となることを得たり。

即興詩人としての我名は漸くエネチアの都に傳はり、美術會院（アカデミア、デル、アルテ）は一日我を招きて技を奏せしめき。われはダンドロのコンスタンチノポリス征服とマルクス寺の銅馬どうまとを題として即興の詩を歌ひ、會員證を授與さづけられたり。（ダンドロはエネチアの大統領ドオジエなりき。千二百三年コンスタンチノポリ

スを征服す。即ち所謂第四次十字軍なり。されどその頃我は別に一物の此會員證より貴きものを得つ。そは極めて細かなる貝を絹紐もて貫きたるくびたま瓔珞なり。岸區リドの漁者の遺族は我がために作りてポツジヨに托し、ポツジヨはマリアにあづけ置きぬ。ある日マリアは我が往きて訪ふを待ちて、美しく愛らしきものならずやと云ひつゝ我手にわたし、ロオザ夫人は傍より、他日おん身の許いひなづけ

嫁ひなづけの妻に掛けさせ給ふべき品なり、作りし人もその心ありしなるべしと詞を添へつ。われは料はからずも眉せを蹙せめて、我に許嫁の妻なし、未來にも亦さる人なからんと叫びぬ。マリアの面には失望の色をあらはせり。そはこの贈おくりものを取次ぎて我を悦はしめんことを期ごせしが故なり。われは手に瓔くびたま珞を捧げて、心にこれをマリ

アに與へんことを願ひぬ。マリアの顔の紅を潮せしは、我心を付
 り得たるにやあらん、覺束なし。

末路

とある夕わが爲換かはせきん金を取扱ふ商家を尋ねしに、主人の妻のい
 ふやう。近頃はおん身の來給ふこと稀になりぬ。そは市長ボデスタの許
 に往き給ふことの頻なるが爲めなるべし。我家にはマリアの如き
 美しき人あるにあらねば、誰かおん身の足の彼方かなたにのみ向くを理
 ならずとせん。マリアは今エネチア第一の美人にして、御身はエ
 ネチア第一の才子におはすれば、彼此かれこれ似つかはしき中なるに、

マリアが所有なりといふクラブリアの地面はいと廣しといへば、
 おん二人ふたりの生計たつきさへ豊かなることを得べきならん。御身若し早く
 心を決めて誓約をだになし給はゞ、エネチア全市の男子一人とし
 ておん身を羨まざるものなからんといふ。われ。いかなれば我を
 さまで利己心多きものとはし給ふぞ。わがマリアを尊むは、あら
 ゆる美しきものを尊む情に外ならず。これをしも愛と謂はゞ、何
 人かマリアを愛せざらん。縦たとひわれマリアを愛せんも我心は又決
 してその財産に左右せらるゝことなかるべし。主人あるじの妻。否、さ
 てはおん身はつまさだめするものゝ先づ心得べき事あるを知り給
 はぬなるべし、かてくりや 粮 廚あなぐらに満ち酒窖なりはひに満ちて、始て夫婦の間の幸
 福は全きもので。古き諺ことわざにも、生活なりはひを先にし戀愛を後にすとい

へるにあらずやと云ひぬ。

人の我上をかくおもへる、既に我が忍ぶべきところならず。況いはんやまのあた面りこれを語るをや。我は喜んで市長一家の人々と交れども、

此の如き嫌疑を受くることを甘んじて、猶その家に入出入すべくもあらず。今宵も市長の家を訪ふべかりし我は、歩を轉じてエネチアの狭こうぢき巷をさまよひめぐりぬ。相向へる二列の家は、簷のきと簷と殆ど相觸れんとし、市いちみせ店の燈を張ること多きが爲めに、火光は

到らぬ隈もなく、士女の往來織るが如くなり。渠きよすゐ水を望めば、

燈影長く垂れて、橋を負へる石弓せりもちの下に、「ゴンドラ」の舟の

箭やよりも疾はやく駛はしるを見る。忽ち歌聲の耳に入るあり。諦聽すれば、

是れ戀愛と接吻との曲なり。迷ラビュリントス路の最も邃ふかき處に一軒の稍

大なる家ありて、火の光よそよりも明かに、人多く入りゆくさまなり。こはエネチアの數多き小芝居の一にして、座の名をばサン聖ルカスと云へりとぞ。大抵樂劇のオペラ一組ありて、日ごとに二曲を興行すること、拿破里の「フエニチエ」座に同じ。初の一曲は午後四時に始まり六時頃には早く終り、次なる曲は夕の八時より始まる。素よりもと精くはしき技藝、高き趣味をこゝに求むべきにはあらねど、些の音楽に耳を悦ばしめんとする下層の市民の願をばこれによりて遂げしむることを得べく、又旅人などの消遣せうけんの爲めに來り觀るも少からざるべし。觀棚さしきの料は甚だ廉やすく晝夜とも空席を留めぬを例とす。

招牌かんばんを揚げば、「ドンナ、カリテア、レジナ、ヂ、スパニア」

(スペイン西班牙女王カリテア夫人)と大書し、作譜者の名をばメルカダ

ンテと注せり。われ心の中におもふやう。かゝる時にこそ、我脈

絡にカムパニアの野なる山羊の乳汁ちしるめぐ循らずして、温き血環めぐれるを

人に示すべきなれ、我が世馴れたることのベルナルドオにもフエ

デリゴにも劣らぬを示すべきなれ。兎も角も一たび此場にはぬち内に入

りて、美しき女優おもの面を見ばや。若し興なくば、曲の終るを待た

で出でんも妨さまたげあらじとおもひぬ。入場券を買ふに、小き汚れたる

ふだ牌を與へつ。我觀棚さじきは極めて舞臺に近き處なりき。

此劇場には高下二列の觀棚あり。平間ひらまをばいと低く設けたり。

されど舞臺の小なること、給仕盆の如しとも謂ふべし。あはれ、

此舞臺にいくばくの人か登り得べきとおもふに、例の小芝居の習

とて、中むかしの武弁ぶべんの上をしくめる大樂劇の、行列の幕あり戰鬪の幕あるものをさへ興行するなるべし。觀棚は内壁の布張汚れ裂けて、天井は鬱悒いふせきまで低し。少焉しばしありて、上衣を脱ぎ襯衣はだぎの袖を攘からげたる男現れて、舞臺の前なる燭を點ともしつ。客は皆無遠慮オルケストラに聲高く語りあへり。又少時しばしありて、樂人出で、奏樂席に就きぬ。これを視るに、只是れ四奏の一組なりき。彼と云ひ此と云ひ、今宵の受用の覺おぼつか束なかるべき前兆ならぬものなけれど、われは猶せめて第一折を觀んとおもひて、獨り觀棚に坐し居たり。

場内の女客に美しきはあらずやと左を顧み右を盼みしかど、遂にさる者を認め得ざりき。忽ち隣席に就く人あり。こは嘗なにかむしろて某の筵なにかむしろにて相見しことある少年紳士なりき。紳士は笑みつゝ我手を握り

て云ふやう。こゝにて君に逢はんとは思ひ掛けぎりき。君はその
 邊の消息を知り給ふか知らねど、かゝる處にては、折々面白き女
 客と肩を並ぶることあり。かくて薄暗き燈ともしび火は、これと親なむだち媒
 となるものなりと云ひぬ。紳士の詞は未だ畢をはらぬに、傍より叱しつゝ
 々と警いましむる聲す。そは 開ウエル場チュウルの曲の始まれるが爲めなりき。

音樂は心細きまで微弱なりき。幕は開きたり、只だ見る、男子
 三人女子二人より成れる一群ひホロスの唱和するを。その骨相を看れば、
 座主ざすは俄に 觀る可きものなきにあらず、此組にも好きプル道チネルラ化師
 あり、大劇場に出だしても恥かしからぬ男なりなど云ふ。この時
 今宵の曲の女王は、侍姫じきに扮せる二女優と共に場に上りぬ。紳士
 眉を顰ひそめて、さては女王は渠かれなりしか、全曲は最早一錢の價だに

あらざるべし、あはれジャンネツテならましかばとつぶやきぬ。

女王は身の丈甚だ高からず、おもて面の輪廓鋭くして、黒き目は稍

おちい陥りたり。衣裳つきはいと悪し。無遠慮に評せば、擬人せる貧窶ひんく

の妃嬪ひひんの装束さうぞくしたるとやいふべき。さるを怪むべきは此女優の

たちゐ舉止のさま都みやびやか雅わかにして、いたく他の二人と異なる事なり。わ

れは心の中に、若しわか少き美しき娘に此行儀いあらば奈何かならんとお

もひぬ。既にして女王は進みて舞臺ふちの縁ともに點し連ねたる燈火の處

に到りぬ。此時我心は我目を疑ひ、我胸はげは劇しき動悸を感じたり。

われは暫くの間、傍なる紳士に其名を問ふことを敢てせざりき。

われ。此女優の名をば何とかいふ。紳士。アヌンチヤタといへり。

歌ふことを善くせぬに、その顔ばせさへこれが償つぐのひをなすに足らぬ

ば、顧みる人なきもことわりなり。此詞は句々腐蝕する藥の如く我心上に印せり。われは瞠目枯坐して心を喪ふものゝ如くなりき。

女王は歌ひはじめき。否、こはアヌンチャヤタが聲ならず。微か

にして恃たのみなく、濁りて響かず。紳士。この喉には些いさゝかの修行の痕あ

るに似たれど、氣の毒なるは聲に力なきことなり。われ。(騒ぐ

胸を押し鎮めて) さきには羅馬ロオマ、拿破里ナポリに響を馳ほまれせたる西班牙生スパニヤ

れの少女をとめありしが、この女優は偶 《たま〜》其名を同じうし

て、色も聲もこれに似ること能はざりしよ。紳士。否、この女優

こそはその名譽あるアヌンチャヤタがなれる果はてなれ。盛名一時に騒

ぎしは七八年前のことなるべし。當時は年もまだ若くて、聲は

マリブランの如くなりきとぞ。されど今はしも薄落はくおちたり。こは

かゝる伎わざもて名を馳せし人の常なり。暫くは日の天ちゆうに中するが如
 き位くだにありて、世の人の讚歎の聲に心惑はかりごとひ、おのが伎わざの時々刻々
 降りゆくを曉さとらず、若し此時に當り早く謀はかりごとをなさざるときは、公
 衆先づ其演奏の前に殊なるところあるを覺ゆべし。かゝるなりは
 ひする女子の習として、財を獲ること多しといへども、隨すみやかひて得
 れば隨すみやかひて散じ、暮年の計をおもはねば、その落魄すみやかもいと速すみやかなり。
 君のこの女優を見給ひぬといふは、羅馬にての事にやありけん。
 われ。然り。其頃面を見ること二三度なりき。紳士。さらば變化
 の甚しきを覺え給ふならん。人の噂には、四五年前に重かゝき病に罹かゝ
 りてより、聲はたとつぶれぬといふ。その人の爲めにはいと笑止
 なる事ながら、聽衆の過去の美音を喝采いかんせざるをば、奈何いかんともす

べからず。いぎ、昔のよしみに拍手し給へ。われも應援すべしとて、先づ激しく掌たなぞこを打ち鳴しつ。平土間パルテエルなる客二三人、何とかおもひけん、これに和したるに、叱々と呼びて、この過當の褒美にあらがふもの少からず。女王はこの毀譽きよを心に介せざる如く、首を昂あげて場を下りしに、紳士見送りて、我等はトロヤ人なりきとつぶやきぬ。(原語「フイムス、トロエス」は猶已やみなむ矣と云はんが如し。)

代りて場に上りしは、此曲の女主人公にして、これに扮せるは二八ばかりの女をみななりき。色好む男の一瞥して心を動すべき肉しおき豊かに、目まなざし燃ゆる如くなれば、喝采の聲は屋いへを撼ゆるせり。此時むかしの記念かたみは我胸を衝いて起りぬ。羅馬の市民のアヌンチヤ

夕の爲めに狂せし状さまはいかなりしぞ。いにしへの帝王の凱旋の儀
 をまねびつる、アヌンチャタが車のよそほひはいかなりしぞ。わ
 が崇拜の念はいかなりしぞ。さるを今はこの尋よのつね常なる容色にす
 らけおされ畢をはんぬ。あはれ、薄倖なるベルナルドオは身病み色衰
 ふるに及びて君を棄てしか。さらずば、君は始より眞成まことにベルナ
 ルドオを愛せざりしか。君が唇のベルナルドオの額ぬかに觸れしをば、
 われ猶記す。君争いでかベルナルドオを愛せざらん。思ふにかの無つ
 情男子れなをのこは君が色を愛して、君が心を愛せざりしなり。

アヌンチャタは再び場に上りぬ。老いたるかな、衰へたるかな、
 只だ是れ屍しかばねの脂粉を傅つけて行くものゝみ。われは覺えず肌はだに粟生あは
 ぜり、われもアヌンチャタが色に迷ひし一人なれども、その才ざえの

高く情の優しかりしをば、わが戀愛に蔽おほはれたりし心すら、猶能く認め得たりき。縦令色よしやは衰ふとも、才情はむかしのまゝなるべし。かへす／＼も惡むべきはベルナルドオが忍びて彼才ざえ彼情を棄てつるなる哉。我心緒は此不幸なる女子を憐み、彼無情なる友を憎むが爲めに、亂るゝこと麻の如くなりき。傍なる紳士は、我面色の土の如くなるを見て、いかにし給ひしぞ、不快なるにはあらずやと問ひぬ。此棧敷さじきの餘りに暑き故なるべしと答へつゝ、我は起ちて劇場の外とに走り出でぬ。

胸中の苦悶は我を驅かりて、狹きエネチアの巷へこうぢを、縦横に走り過ぎしめしに、ふと立ち留りて頭を擡もたぐれば、われは又前まへの劇場の前に在り。時に一人の老僕ありて、入口に貼りたるけふの名題を

剥ぎ取り、代ふるにあすのをもてせんとす。われは進みて此しもべ僕の
 耳に付き、アヌンチャタの宿はいづくぞと問ひしに、僕は首かうべを
 して我顔を打目うちまもり、アヌンチャタと宣給のたまふか、そはアウレリア
 の誤なるべし、けふもアウレリアが部屋をばおとづれ給ひし檀那
 達いと多かりき、宿に案内しまゐらすは易けれど、歸るには些
 の隙ひまあるべしと答ふ。われ、否、アヌンチャタなり、けふ女王の
 役を勤めし人なりといふに、僕は暫し目を睜みはりて、訝いぶかしげに我を
 見居たるが、さてはあの瘦やせぎす骨を尋ね給ふか、檀那は別に御用あ
 りての事なるべければ、案内あないしまゐらせん、されどこれも歸らん
 は一時間の後なるべし、そが上に人に問はるゝことなき女なれば、
 出で、御目に掛かるべきか、覺おぼつか束なしとつぶやきぬ。好し、さ

らば一時間の後の事にすべければ、こゝにて我が來んを待てと契ちぎり置きて、我は岸邊に往き、舟を雇ひて、何處をあてもなく漕ぎ行かせつ。

我心緒はいよゝ亂れに亂れぬ。只だ心中ゆききに往來する切せちなる願は、今一たびアヌンチャタと相見て、今一たびこれに詞をかはさんといふことのみ。嗚呼、アヌンチャタはまことに不幸なりき。されど我はその不幸を救ひ得べき地位にあらざりしを奈何せん。指す方もなき水上の逍遙ながら、痛苦おに逐おはるゝ我心は、猶船脚はなはの太だ遲きを覺えぬ。

一時間の後、舟を初の岸つなに繫つなげば、老僕は早く劇場の前に立ちて待てり。引かるゝまゝに、いぶせき巷こうぢを縫ぬひ行きて、遂にとあ

なる敗^{あばらや}屋の前に出でしとき、僕は星根裏のともしびのはしごの影の微か
 なるを指ざしたり。僕は先に立ちて暗き梯を登りゆくに、我は詞
 もあらでその後随ひぬ。僕は戸外の鈴^{れいさく}索^{さく}を牽^ひいたり。内より
 誰^たぞやといふは女の聲なり。マルコオ、ルガノと名^な告ると共に、
 戸はあきて、我等は暗黒なる一室の中に立てり。聖^{マドンナ}母を畫けり
 と覺しき小幅の前に捧げし燈明は既に滅^きえて、燈心の猶^{くゆ}燻るさま、
 一點の血痕の如し。忽ち頭の上に戸の軋^{きし}る音して、覺束なき火の
 光洩れ來しとき、我は側にはしごの梯あるを認めつ。御^{おたづね}尋の女はあ
 れにといふ老僕の手に、些の銀貨を握らすれば、あまたゝびぬか
 づき謝して、直ちに戸外に出で去りぬ。わが最後の梯を登りゆく
 とき、一人の女のきれのつ片にて髪をひろ裏み、闊き暗色の上衣を着

たるが入口に現れて、あすの名題や變りし、躑つまづき給ふな、マルコ
 才と云ひつゝ迎へぬ。我はつと室へやぬち内に進みぬ。

我はアヌンチャタと相對して立てり。あな、おん身は何人ぞ、

何の爲に此には來ましゝと、驚きたる女主人は問ひぬ。我は一聲
 アヌンチャタと叫べり。暫し我面を打まもりし主人は、再びあな
 やといひもあへず、もろ手もて顔を掩おほひつ。何人にもあらず、昔
 の友の一人なり、むかしおん身の恵にて、あまたの樂しき時を過
 し、あまたの幸福ある日を送りしものなり、何の爲めにか來べき、
 唯だ今一たび相見んの願ありて來つるのみといふ我聲は恥かしき
 迄震ひぬ。アヌンチャタは靜に手を垂れて頭を擧げたり。肉落ち
 て血色なく、死人の如き面なれど、これのみは年も病もえ奪はざ

りけん、暗黒にして、渡津海わたつみのそこひなきにも譬へつべき瞳は、磁石の鐵を吸ふ如く、我面に注がれたり。アント二オ、かくて御身と相見んとは、つやく思ひ掛けざりき。同じ憂き世の山路なれど、おん身はそを登る人、われはそを降る身なれば、相見て又何をかいふべき。疾とく行き給へと口には言へど、つれなき涙まふたは眶に餘りて、頬ほの上に墮おち來りぬ。われ。そは餘りに情なし。われはおん身の今不幸なるを知りぬ。むかし一言ことの白せりふ、一目おもいれの介もて、萬人に幸福を與へしおん身なるを。アヌンチヤタ。幸福は妙齡と美貌とに伴ふものにて、才やえと情との如きは、その顧みるところにあらざるを奈何せん。われ。おん身は病に臥し給ひきとは實まことか。アヌンチヤタ。病はいと重く、一とせの久しきにわたりしかど、

死せしは我容色と我音聲とのみなりき。公衆は此二つの屍を併せあは
 藏せる我身を棄てたり。醫師はこの死を假死なりとなし、我身は
 果敢はかなくもこれを信じたりき。我身は舊に依りて衣食を要するに、
 平生の蓄たくはへをば病の爲めに用ゐ盡しぬれば、彼死を祕して、詐いつはりて
 猶ほ生きたるものゝ如くし、又脂粉を塗りて場に上ることゝなり
 ぬ。されど流石さすがに人を驚おどろかかさんことの心苦しくて、わざと燈燭の數
 少き、薄暗き小劇場に出づるにこそ。おん身の記憶に存じたるア
 ヌンチヤタは早や死して、その遺像は只だかしこの壁にありとい
 ひぬ。われは此詞を聞きて、向ひの壁を仰ぎ看しに、一面の大畫
 幅あり。梓わくを飾れる黄金の光の、燦さんぜん然として四邊あたりを射るさま、
 室内貧窶ひんくの摸樣と、全く相反せり。圖するところはチドに扮した

るアヌンチヤタが胸像なりき。けだかうるは氣高く麗しきその面輪おもわ、威ありて
 險けはしからざる其額際、皆我が平生の夢想するところに異ならず。
 我視線は覺えずすべりて、壁間の畫より座上の主人あるじに移りぬ。ア
 ヌンチヤタは面を掩ひて、世の人の我を忘れし如く、おん身も今
 は我を忘れて、疾く行き給へといふ。われ。否、われ争いでか行く
 ことを得ん、争でか此儘に行くことを得ん。おん身は聖母マドンナの恵
 を忘れ給ふか。聖母はおん身を救ひ給はん、我等を救ひ給はん。
 アヌンチヤタ。おん身は衰運に乗じて人を辱はづかしめんとはし給はざる
 べし。むかし交らひ侍りし時より、おん身の心のさる殘忍なる心
 ならざるを知る。さらばおん身は何故に、世よこぞ舉りて我を譽め我に
 諛へつらふ時我を棄て、去り、今ことさらに我が世に棄てられたる殘軀ざんく

の色も香もなきを訪とぶらひ給ふぞ。われ。情なき事をな宣のたま給ひそ。我
 争いかでかおん身を棄つべき。我を棄て給ひしは、我を逐ひて風塵の
 巷ちまたはしに奔らしめ給ひしは、おん身にこそあれ。かく言はゞ、おん身
 は我を自ら揣はからざるものとやし給はん。さらば只だ我を驅逐せし
 ものは我運命なり、我因果なりとやいはん。此詞纔わづかに出で、ア
 アUNCHAYATAはその猶美しき目を睜みはり、ことばはなくて我面を凝視
 し、その色を失へる唇はものいはんと欲する如くに動きて又止み、
 深き息徐おもむろに洩れて、目は地上に注そがるゝことしばらくなりき、
 アUNCHAYATAは忽ち右手めてを擧げて、緩ゆるやかにその額ぬかを撫でたり。一の
 祕密の神とおのれとのみ知れるありて、此時心頭に浮び來りしに
 やあらん。アUNCHAYATAは再び口を開きぬ。我は君と再會せり。

此世にて再會せり。再會していよく君が情ある人なることを知る。されど薔薇は既に凋^{しを}れ、白鴿^{くぐひ}は復た歌はずなりぬ。おもふに君は聖^{マドンナ}母の恩澤に浴して、我に殊^{こと}なる好き運命に逢ひ給ふなるべし。今はわれに唯だ一つの願あり。アントニオよ、能くそを愜^{かな}へ給はんかといふ。われ手に接吻して、いかなるおん望にもあれ、身にかなふ事ならばといふに、アントニオ、さらばこよひの事をば夢とおぼし棄て給ひて、いまより後いついづくにて相見んとも、おん身と我とは識らぬ人となりなんこと、是れわが唯だ一つの願ぞ、さらば、アントニオ、これより善き世界に生れ出でなば、また相見ることあらんとて、我手を握りぬ。苦痛の重荷に押し据ゑられたる我は、アントニオが足の下に伏しまろびしに、ア

ヌンチャタしづ徐かに扶たすけ起し、すかして戸外に伴ひ出でぬ。我は小
 兒の如くすかさされて、小兒の如く泣きつゝ、又來んを許し給へ、
 許し給へと繰返しつ。戸は、さらばといふ最後の一こゑに鎖され
 て、われは空しく暗黒なる廊わたどのの中に立てり。街に出づれば、その
 暗黒は屋内やぬちに殊ならざりき。神よ。おん身の造り給ふところのも
 のゝ中に、かゝる不幸もありけるよと、獨り泣きつゝ我は叫びぬ。
 此夜は家に返りて些の眠をだに得ずして止みぬ。

翌あくるひ日はわれアヌンチャタが爲めに百千もうちの計畫を成じやうじゆ就し、

百千の計畫を破壊して、終には身の甲斐かひなさを歎くのみなりき。

嗚呼、われは素もとカムパニアの野の棄兒なり。羅馬の貴人あてびとは我
 を霑うるほす雨露に似て、實は我を縛ばくする繩じようさく索さくなりき。恃たのむところ

は單だ一の技藝にして、若し意を決して、これによりて身を立てんとせば、成就の望なきにしもあらず。されども技藝の聲價、技藝の光榮は、縱令其極處に詣らんも、昔のアヌンチャタが境遇の上に出づべくもあらず。而るにそのアヌンチャタが末路は奈何なりしぞ。假に彩虹の色をやどしつゝ飛泉の水の、末はポンチニの沼澤に沈み去るにも似たらずや。

思慮はたゞ一つとところを馳せるに似て、一日一夜は過ぎぬ。次の朝には、胸中僅かに今一たび相見んの願を存ずるのみなりき。われは再びさきの狭き巷に入り、晝猶暗き梯を上りぬ。鎖された戸をほとくと打叩けば、腰曲りたる老女入口に現れて、貸家見に來たまひしや、檀那がたの御用には立ち難くや候はんといふ。

今まで住みし人はと問へば、きのふ立ち退のき候ひぬ、何かは知らず、火急なる事ありと覺しくて、いとあわたゞしく見え候ひぬ。

われ。行方をば知り給はぬか。老女。旅にとは申しゝが、いづくにかあらん。パツア、トリエステ、フェルララなどにや候はんと、答へもあへず戸を鎖したり。直ちに劇場に往きて見れば、これも鎖されたり。近隣の人に聞けば、きのふ打うちとめ留なりきといふ。

アヌンチャタはいづくにか之ゆきし。ベルナルドオなかりせば、彼人は不幸に陥らで止みしならん。否、彼人のみかは、我も或は生涯の願を遂げ、即興詩人の名を成して、偕かいらう老ちぎりまつたの契を全うせしならんか。嗚呼、絶ゆる期ごなき恨なるかな。

友なるポツジヨおとづれ來ていふやう。何といふ顔色ぞ。恐し

き巽シロツク風もぞ吹く。若しその熱き風胸より吹かば、中なる鳥の埃エ
チフト及人の火紅鳥ならぬが、焦がれ死じにするなるべし。野にゆきて
 は茨いばらのうちなる赤き實みを啄つみ、窓に上りては盆栽さうびくわの薔薇花とに止
 まりてこそ、鳥は健すこやかにてあるものなれ。わが胸の鳥の樂を血の
 中に歌ひ籠こめて、我におもしろく世を渡らするを見ずや。殊に詩
 人たらんものは、庭の花をも茨の實みをも知り、天上かうきの灑氣さうきにも下
 界の毒霧はうにも搏はつ鳥たくはを畜かへでは協かなはずといふ。我かく。是かくの如く詩人
 を觀んは、卑はきに過ぐるには非ずや。友。基督は地獄に下りて極
 惡の幽鬼をさへ見きと聞く。天の澄めると地の濁れると相觸れて
 こそ、大事業大制作は成就すべけれ。否、かくてはわれ汝が爲め
 に説法するにや似たらん。われはさる説法のためにこゝに來しに

はあらず。われは市長ボデスタ一家の使節なり。おん身の伺候おこたを懈ゆるるこ
 と三日なりしは、口オザに聞きつ。何といふ亡ぶじやう状ぞや。疾とく往
 きて荊いはらを負ひて罪を謝せよ。但し懈怠けたいの申譯もあらば聽くべし。
 われ。此二日三日は不快の爲めに門を出ざりき。友。そは拙つたなき申
 譯なり。他人は知らず、我はそを諾うべなはざるべし。さきの夜樂劇オペラに
 往きしは何人なりけん。しかも劇場は、かの頻りに艶つやだね種の主人
 公たりしアウレリアが出づる劇場なりしならずや。されどおん身
 もかゝる路傍の花の爲めに頭つむりを痛めしにはあらず。兎まれ角まれ、
 けふの午餉ひるげにはおん身を市長の家に伴ひ行かでは、我責務の果し
 難きを奈何せん。われ。今は包み隠さで告ぐべし。わが暫く市長
 を訪はざりしは、世のさかしの厭はしければなり、市長の娘の

美くて、カラブリアに廣き地所を持てるを、わが彼家に出入する
 目的物なるやうに言ひ做すものあればなり。友。其噂は珍らしか
 らず。カラブリアの地所は知らず、マリアが美しきは人も我も認
 むるところにて、おん身がその崇拜者の一人なるをば、われとて
 も疑はざるものを。われ。崇拜とは過ぎたり。むかし我が愛せし
 盲めしひの子に姿すがた貌かたちの似たればこそ、われはマリアに心を牽ひかれし
 なれ。友。マリアが目も拿ナ破ポリ里なるをぢの治療にて、始て開あきし
 ものと聞けば、盲ひたる子に似たりといはんも、その由なきにあ
 らねど、我には別に解釋あり。戀は固とより盲なるものなり。その
 戀の神なるアモオルをこそ、むかしおん身は見つるならめ。今お
 ん身の心のマリアに惹かるゝは、戀の神の所爲なれば、人の噂は

遠からず事實となりて現るゝならん。われ。否、マリアはさて置き、何人をも我は終身めと娶らざるべし。友。そは又たやす輒くは信じ難き豫言なり、おん身にふさはしからで我にふさはしかるべき豫言なり。好し、さらばわれ君と誓はん。おん身若し我に先ちさきだて妻を持たば、婚禮の日に三鞭酒二瓶を飲ませ給へ。われ。尤も好し、その酒をば君こそ我に飲ましめ給はめ。

友は我を拉ひいて市ボデスタ長の許に至りぬ。市長とロオザとは戯ざれごと言まじりに我無情を譴せめ、おとなしきマリアは局外に立ちて主客の争をまもり居たり。ロオザが杯を擧げて、我健康を祝せんとする時、友は急に遮さへぎりて、否々、凡そ婦人たるものは、決してアントニオが健康を祝すべからず、そは此男終身めと娶らずと誓ひぬればな

りといふ。市長。そは「アバテ」の天才より産まれし思想中の最も悪しきものなり。されどそを吹ふいちやう聴ちやうせんも氣の毒なり。友。吾意見は御主人とは異なり。かゝる悪しき思想をば梟けうぼく木ぼくに懸けて、その腦裏に根を張らざるに乗じて、枯らし盡さざるべからずといひぬ。佳かかう美酒は我前に陳ぜられて、我をしてアヌンチャタの或は飢渴に苦むべきを想はしめぬ。辭して出づるとき、ロオザは我に日ごとにおとづれて、シルキオ・ペリコの集を朗讀すべきことを契らしめき。

わが日ごとに市長ボテスタの家に往くこと、はや一月となりぬ。此間我は絶てアヌンチャタが消息を聞くこと能はざりき。ある夕例の如く市長がりおとづれしにマリアは思ふところありげにて、顔に

は深き憂の痕あとを印したり。朗讀畢りて、口オザ席を起ちて去りぬ。
 我とマリアとの陪席者なくて對坐するはこれを始とす。我は冥めい
 々の裡うちに、一の凶音の來り迫るを覺えながら、強ひて口を開き
 て、ペリコの政客たる生活の其詩に及ぼし、影響を説き出しつ。
 マリアは忽ち容かたちを改めて、「アバテ」の君と呼び掛けたり。その
 聲調は、始て我をしてさきよりの月旦評がうの毫もマリアが耳に入ら
 ざりしを悟らしめき。「アバテ」の君、我はおん身に語るべきこ
 とあり、此會談は我が瀕死の人と結びし約束の履行なり、日ごろ
 疎うとからぬおん身に聞かせまつることながら、これを語る苦しさを
 ば察し給へといふ。その面は色を失ひて、唇は打顫へり。我が、
 あな、何事のおはせしぞと驚き問ふ時、マリアは兜兒かかしの中より、

一封の書ふみを取と出だて、さて語ことばを續つけて云ふやう。不可思議なる神の御手みては、我を延ひきておん身の生涯の祕密の裡に立ち入らしめ給ひぬ。されど心安くおもひ給へ。われは沈黙を死者に誓ひしが故に、口オザにだに何事をも語らざりき。祕密の何物なるかは、此封を開かば明あきらならん。これを我手に受けてより、はや二日を過ぎぬ。今おん身にわたしまゐらせて、我は約を果し侍りぬといふ。われ、その死者とは何人ぞ、此書ふみは何人の手より出でしぞと問ふに、マリア、そは御身の祕密なるものをとて、起ちて一間を出でぬ。

家に歸りて封を啓ひらけば、内より先づ二三枚の紙出でたり。先づ取上げたる一枚は我手して鉛筆もてしるせる詩句なりき。紙の下端には墨汁インクもて十字三つを劃したるさま、何とやらん碑銘にまぎ

らはしくおぼゆ。此詩句は、わが初めてアヌンチャタを見つると
 き、さじき観棚より舞臺に投げしものなり。さては此一封をマリアに托
 しきといふはアヌンチャタなりしか。死せしはアヌンチャタなり
 しか。

紙の間には別に かさねふう重封の書ありて、アントニオ様へとうは書
あわたゞせり。遽しく裂きて中なる書ふみをとりいだすに、いと長き消息の、
 前半は墨濃く筆のはこびも慥なれど、後半は震ふ筆もて微かすかに覺
 束なくしるされたるを見る。其文に曰く。

ふみ文して戀しく懐かしきアントニオの君に まうしあはせそ申上※。今宵はゆ
 くりなくも、おん目に掛り候ひぬ、再びおん目にかゝり候ひぬ。
 こは久しき程の願にて、又此願のかなはん折をいと恐ろしくお

もひしも、久しき程の事にて候。譬へば死をば幸を齎もたらすものぞと知りつゝも、死の到來すべき瞬間をば、限なく恐ろしくおもふが如くなるべく候。この文認め候は、君に見えてより數時間の後に候へども、君のこれを讀ませ給はんは、數月の後なるべきか、或は又月を踰こえざるべきかとも存ぜられ候。世の人の言に、われとわが姿に出で逢ひしものは、遠からずして死すと申候へば、わが常の心の願にて、我心と同じものになり居たる君に逢ひまゐらせたるは、我死期の近づきたるしるしなるべくやなど思ひつゞけ※。いかなれば我心は君をえ忘れず、いかなれば君は我心と化し給ひて、幸ある時も、禍わざはひに逢へる時も、君は我心を離れ給はざりけん。今より思ひ　らし候へば、そは君が

世に棄てられたるアヌンチャタを棄て給はぬ唯一の恩人にましませばならんと存^{ぞんじ}※。されど君の今に至りて猶我身を棄て給はざる御恩は、決して故なき人の上に施し給ひしには候はずと存※。君の此文を見給はん時は、私は世に亡き人なるべければ、今は憚^{はげ}ることなく申上候はん。君は我戀人にておはしまし候ひぬ。我戀人は、昔世の人にもてはやされし日より、今またく世の人に棄て果てられたる日まで、君より外には絶て無かりしを、^{マドンナ}聖母は、^{うつつしよ}現世にて君と我との一つにならんを許し給はで、二人を遠ざけ給ひしにて候。君の我身を愛し給ふをば、彼の不幸なる日の夕に、^{たま}彈丸のベルナルドオ」は底本では「ベルナドオ」を傷けし時、君が打明け給ひしに先だちて、私は疾^とく曉^{さと}り居

り候ひぬ。さるを君と我とを遠ざくべき大いなる不幸の、忽ち
 目まのあたり前に現れたるを見て、我胸は塞ふさいがり我舌は結むすばれ、私は
 面を手負てをひの衣に隠し、隙ひまに、君は見えずなり給ひぬ。ベルナル
 ドオの痍きずは命を隕おとすに及ばざりしかば、私は其治不治生不生の
 君が身の上なるべきをおもひて、須臾しゆゆもベルナルドオの側を離
 れ候はざりき。憶ふに、此時のわが振舞は君に疑はれまゐらせ
 しことのもとにや候ふべき。私は久しく君の行方を知らず、人
 に問へども能く答ふるもの候はざりき。數日の後、怪しきおう
 な尋ね來て、一ひらの紙を我手にわたすを見れば、まがふ方な
 き君の手跡にて、拿破里ナポリに往くと認めしたあり、御名をさへ書添へ
 給へれば、おうなの云ふに任せて、旅行券と路用の金とをわた

し候ひぬ。旅行券はベルナルドオに仔細を語りて、をぢなる議セ

ナトオレ

官に求めさせしものに候、ベルナルドオは事のむづかしき

を知りながら、我言を納いれて、強ひてをぢ君を説き動し、趣に候。幾いくばくもあらぬに、ベルナルドオが痲きずは名残なく癒いえ候ひぬ。

彼人も君の御上をば、いたく氣遺居きづかひたれば必ず悪しき人と御

思なひ做しなさるまじく候。ベルナルドオは痲いの痊いえし後、我身を愛する由聞え候ひしかど、私はその偽ならぬを覺さとりながら、

君をおもふ心よりうべなひ候はざりき。ベルナルドオは羅馬を去り候ひぬ。私は直ちに拿破里をさして旅立候ひしに、君も知らせ給ひし友なるおうなの俄に病み臥こやし、爲め、モラ、ヂ、ガエタに留まること一月ばかりに候ひき。かくて拿破里に着きて

聞けば、私の着せし前日の夜、チエンチイといふ少年の即興詩人ありて、舞臺に出でたりと申噂に候。こは必ず君なるべしとおもひて、人に問ひ糺たゞし候へば、果してまがふかたなき我戀人にておはしましき。友なるおうなは消息して君を招き候ひぬ。こなたの名をばわざとしるさで、旅店の名をのみしるしゝは、情ある君の何人の文なるをば推し給ふべしと信じ居たるが故に候ひき。おうなは再び文をおくり候ひぬ。されど君は來給はざりき。使の人の文をば読み給ひぬといふに、君は來給はざりき。剩あまつさへ君は遽にはかに物におそるゝ如きさまして、羅馬に還り給ひぬと聞き候ひぬ。當時君が振舞をば、何とか判じ候ふべき。私は君の誠ありげなる戀のいち早くさめ果てしに驚き候ひしのみ。私

ととも、世の人のめでくつがへるが儘に、多少驕慢の心をも生
 じ居たる事とて、思ひ切られぬ君を思ひ切りて、獨り胸をのみ
 傷め候ひぬ。さる程に友なるおうなみまかり、その同胞はらからも續
 きてあらずなり、私は形影相弔てうすとも申すべき身となり候ひぬ。
 されど年猶わか少く色未だ衰へずして、身には習ひおぼえし技藝あ
 れば、舞臺に上るごとに、萬人の視線一身に萃あつまり、喝采の聲
 我心を酔はしめて、しばし心の憂さを忘れ候ひぬ。是れまこと
 のアヌンチャタが最終の一年に候ひき。私はボロニアおもむに赴く旅
 路にて、ふと病に染まり候ひぬ。初こそは唯だかりそめの事と
 おもひ候ひつれ、君に棄てられまつりてよりの、人知れぬ苦痛
 は、我が病に抗すべき力を奪ひて、一とせが程は頭をだにえ擡もた

げず候ひき。こゝに君に棄てられぬと書きしをば、許させ給へ。
 私はその頃、君の猶我身を忘れ給はで、世の人の皆我身を顧み
 ざるに至りて、今一たび我手に接吻し給ふべきをば、夢にだに
 思得候はざりしなり。二とせの間、劇場にて貯へし金をば、藥
 餌の料に費し盡し候ひぬ。病はいえぬれども、聲潰れたれば、
 身を助くべき藝もあらず、貧しきが上に貧しき境界きやうがいに陥い
 り、空しく七年の月日を過して、料はからずも君にめぐりあひ候ひ
 ぬ。君はこよひの舞臺にて、むかし羅馬の通衢ちまたを驅かるに凱旋の
 車をもてせしアヌンチャヤあぐけがいかに賤客に嘲られ、口笛吹きて
 叱責せられたるかを見そなはし給ひしなるべし。私は運命せまの蹙せま
 まりしと共に、胸狭くなりしを自ら覚え居候。扱見さて苦しき假住

ひに御尋下され候時、我目を覆ひし面紗エエルの忽ち落つるが如く、
 君の初より真心もて我を愛し給ひしことを悟り候ひぬ。汝こそ
 は我を風塵中に逐ひ出しつれとは、君の御詞なりしかど、私の
 いか^{かた}に君を慕ひまゐらせ、いか^{かた}に君の方へ手をさし伸べ居たり
 しをば、君のしろしめさゞりしをいかに奈何かせん。私は再び君に見まみ
 ゆることを得て、君の温なる唇を我手背に受け候ひぬ。今や戸
 外に送りいだしまゐらせて、私は再び屋根裏の一室に獨坐し居
 り候。この室をば直ちに立退き申すべく、此エネチアをも直ち
 に立去り申すべく候。アントニオの君よ。願はくは我が爲めに
 徒らいたづに歎き悲み給ふな。私は世には棄てられ候へども、聖母マドンナ
 は私を護り給ふこと、君を護り給ふに同じかるべく候。アント

二才の君よ、さきには我を思ひ棄て給へと申候へども、未鍊ともおぼさばおぼせ、猶親しかりし人のみまかりしを思ひ給ふが如く、我を思ひ給はんことのみは望ましく存※。

涙は讀むに隨ひて流れ、わが心の限の涙と化して融け去るを覺えたり。此より下は、かすかなる薄墨の痕猶新あらたにして、數日前に寫されしものと知らる。

苦を受くる月日も最早些ちと子を餘し候のみと存※。今まで受けつるあらゆる快樂の聖母の御惠なると等しく、今まで受けつるあらゆる苦痛も亦聖母の御惠と存※。死は既に我胸に迫り候。血は我胸より漲り流れ候。いま一回轉して漏刻の水は傾け盡され申すべく候。人の傳へ候ところに依れば、エネチア第一の美人

は君がいひなづけの妻となり居候由に候。私の死に臨みての願
は、御二人の永く幸福を享^うけ給はんことのみに候、あはれ、此
數行の文字を托すべき人は、その人ならで又誰か有るべき。そ
の人の私の請^{こひ}を容れて、こゝに來給ふべきをば、何故か知らね
ど、^{かた}牢く信じ居※。生死の境に浮沈し居る此身の、一杯の清き
水を求むべき手は、その人の手ならではと存※。さらばく、
アントニオの君よ。私の此土に在りての最終の祈祷、彼土に往
きての最初の祈祷は、君が御上と、私の徒^{いたづ}らに願ひてえ果さず、
その人の幸ありて成し遂げ給ふなる、君が偕^{ちぎり}老の契の上とに在
るのみなることを、御承知下され度存※。今更^{くりごと}繰言めき候へ
ども、聖母の我等二人を一つにし給はざりしは、其故なからず

やは。私は世人にもてはやされ讃め稱たへられて、慢心を増長し
 居候ひぬれば、君にして當時私を娶り給めとひなば、君の生涯は或
 は幸福を完うし給ふこと能はざりしにあらずやと存※。さらば
 く、アントニオの君よ。過ぎ去りしは苦痛、現然せるは安樂
 にして末期は今と存※。アントニオの君よ。又マリアの君よ。
 私の爲めに祈祷し給へかし。

アヌンチヤタ。

悲歎の極には聲なく涙なし。我は茫然として涙に濡れたる遺書
 を睽視だうしすること久しかりき。暫しありて、猶封中より落ち散りた
 りし一ひら二ひらの紙を取り上げ見れば、一はわが拿破ナポリ里に往く
 としるして、フルシアのおうなに渡し、筆の蹟あとなり。又一はベル

ナルドオがアヌンチャタに與へし文にして、負傷の爲めに床に臥したりし程の、ねんごろ懇なる看護の恩を謝し、今はよしなき望を絶ちて餘所の軍役に服せんとおもへば、最早羅馬にて相見ることにはあらじと書せり。嗚呼、おもひの外の事どもなるかな。アヌンチャタは初より我を戀ひたりしなり。我が拿破里に往くことを得しは、アヌンチャタの恵なりしなり。拿破里の旅店より書を寄せて、相見んことを求めしはアヌンチャタにしてサンタにはあらざりしなり。その恩情きはまり窮なきアヌンチャタは今や亡き人となりしなり。さるにてもアヌンチャタはマリアを病床に招き寄せて、いかなる事を物語りし。既にマリアをわがいひなづけの妻といへば、巷説は早くアヌンチャタの病床に聞え居りて、マリアさへ其口より、さ

がなき人の言草ことぐさを聞きつるなるべし。再びマリアの面を見んは

うしろめた
影護

き限なれども、アヌンチヤタの爲めにも我が爲めにも天

使に等しきマリアに、一ことの謝辭を述べずして止まんやうなし。

舟を傭やとひて市ボデスタ長の家に往きしに、口オザとマリアとは一と問

の中において手仕事に餘念なかりき。我はしばし相對して物語し
つれど、心に言はんと欲する事の、口に言ひ難ければ、問はるゝ

ことあるごとに、あらぬ答をのみしたりき。口オザは忽ち我手を
把とりて口を開きて云ふやう。おん身は深き憂に沈み居給ふとおぼ
し。われ等の君がまことの友たるを知り給はゞ、打開けて物語し
給へと云ふ。われ。さなり。君は何事をも知り給ふならん。口オ
ザ。否われは未だ何事をも知らず。マリアこそは聞きつることも

あらめ。(マリアは鼻じろみて、その詞を遮らんとしたり。)わ
 れ。おん身二人には、われ又何事をか隠し候ふべき。初よりの事
 のもとすゑを打開けんも我が心やりなれば、煩はしけれど聞き給
 へとて、われは昔むかしがたり語をぞ始めける。よるべなき孤みなしごなりし生おひた
 立ちより、羅馬にてアヌンチャタと相識り、友なりけるベルナル
 ドオを傷けて、拿破里に逃れ去りし慘劇まで、涙と共に語り出で
 しに、可憐なるマリアの掌たなそこを組合せて、我面を仰ぎ見るさま、我
 記憶の中に残れるフラミニアが姿に髻さもにたり。われはマリアが面
 前にありて、ララが事、琅玕洞ろうかんどうの事のみは、語ることを憚りた
 れば、直ちにエネチアにての再會の段に移りて、アヌンチャタの
 末路を敘し畢をはりぬ。口オザ。おん身の上に、さる深き關繫あるべ

きをば、初め少しも知らざりき。さきの日尼寺の病室より、識らぬ女の文とゞきて、今生死の際に在るものなるが、マリアに逢ひて申し残したき事ありといへば、舟にてかしこに伴ひゆき、われは尼達の許に留まりて、マリアを病人の室に遣りぬ。マリア。かくてその人に逢ひ侍りぬ。記念かたみの一封をばさきに渡しまゐらせつ。我。アヌンチャタはその時何とか申し候ひし。マリア。人知れずこれをアントニオに渡し給へといひぬ。おん身の上をば、妹の兄の上を語るらんやうに語りぬ。爾時そのときアヌンチャタが唇は血に染まり居たり。死は遽にはかに襲ひ至りて、アヌンチャタはわが面をまもりつゝ、こときれ侍りはべと、語りもあへず、マリアは泣き伏したり。われは詞はあらで、マリアの手を握りつ。

われは寺院に往きてアヌンチャタが爲めに祈祷し、又その墓に
 尋ね詣まうでつ。此地の瑩えい域いりきは、高き石垣もて水面みのもより築き起され
 たるさま、いにしへのノアが舟の洪水の上に泛うかべる如し。草むら
 の中に黒き十字架あまた立てるあたりに歩み寄れば、わが尋ぬる
 墓こそあれ。只是一片の石に、アヌンチャタと彫り付けたり。一
 基の十字架の上に、緑の色の猶あざやか鮮あざやかなる月ラウレオ桂の環を懸けたるは、
 口オザとマリアとの手向たむけなるべし。われは墓前に跪ひざまづきて、亡人なきひと
 おもかけの悌をしのび、更に頭かうべめぐらを回して情ある口オザとマリアとに謝した
 り。

さすらひ
 流離

その頃フアビア二公子の書状届きしに、文中公子のわがエネチアに留まること四月の久しきに至るを怪み、強ひてにはあらねど、我にミラノ若くはジエノワに遊ばんことを勧めたる一節あり。われつらく念ふやう。わが猶此地に留まれるは、そもく何の故ぞや。此地にはげに兄弟に等しきポツジヨあり、姉妹に等しき口オザ、マリアあれど、是等の交は永遠なるべきものにあらず。中にも女友二人の如きは、相見ることまじはりに我が悲哀の記憶を喚び醒すさまことを免れず。われは悲哀を懐いてエネチアいだに來ぬ。而してエネチアは更に我に悲哀を與へしなり。われは遽にはかにエネチアを去らんと欲する心を生じて、それを告げんために、市ボデスタ長の家をおとづれ

たり。

月光始めて渠きよする水に落つるころほひ、我は二女と市長の家の廣

間なる、水に枕のぞめる出窓ある處に坐し居たり。マリアはすでに一

たび燈ともしび火を呼びしかど、ロオザがこの月の明あかきにといふまゝに、

主客三人は猶月光の中に相對せり。マリアはロオザに促されて、

穴居洞の歌を歌ひぬ。聲と情との調和好き此一曲は、清く軟かな

る少女をとめの喉のどに上りて、聞くものをして積水千丈の底なる美の窟宅

を想見せしむ。ロオザ。この曲には音節より外、別に一種の玲瓏

たる精神ありとはおぼさずや。われ。洵まことに宣給ふごとし。若し精

神といふもの形體を離れて現ませば、應まさに此詩の如くなるべし。マ

リア。生れながらに目しひなる子の世界の美を想ふも亦是の如し。

口オザ。さらば目開あきての後に、實世界に對せば、初の空想の非なることを知るならん。マリア。實世界は空想の如く美ならず。されど又空想より美なるものなきにあらず。話頭は直ちにマリアが初め盲目なりし事に入りぬ。こはポツジヨが早く我に語りしところなれども、今はわれ二女の口より此物語を聞きつ。口オザは弟の手術を讃め、マリアも亦その恩恵を稱たへたり。マリアの云ふやう。目しひなりし時の心の取像しゆざうばかり奇くしきは莫なし。先づ身におぼゆるは日の暖さ、手に觸るゝは神社の圓まろ柱ぼしらの大きいなる、霸王樹サボテンの葉ひろの闊ひろき、耳に聞くはさま／＼の人の聲音こわねなどなり。一の官能の闕かくるものは、その有るところの官能もて無きところのものを補ふ。人の天青し、海青し、董すみれの花青しといふを聽きて、

われは董の花の香を聞き、そのめでたさを推し擴めて、天のめでたかるべきをも海のめでたかるべきをも思ひ遣りぬ。視根の光明闇きときは、意根の光明却りて明なるものにやといふ。これを聞く我は、ララが髪に挿みし董の花束と、ペスツム祠の圓柱とを憶ひ起すことを禁ずること能はざりき。話頭は轉じて自然の美に入り、ロオザは拿被里^{ナポリ}の山水の景の慕はしさを説き出せり。われはこの好機會を得て、エネチアを去る意を洩しつ。そは思ひも掛けぬ事かなとロオザ訝^{いぶか}れば、さては最早再び此地には來給ふまじきかとマリア氣遣ふさまなり。否々、ミラノまで往かば、又此地を経て羅馬に還らんとこそ思ひ候へと我は答へつれど、實はまだこゝを立ちていづ方に往かんとも思ひ定めざりしなり。

わがエネチアに別るゝ涙を見せしは、アヌンチヤタが墓とマリ
 アが居間とのみなりき。墓に詣でゝは、石上に残れる輪飾わかざりの一
 葉を摘みて、夾けふたい袋の中に藏をさめつ。われは此石の下に、唯だ一團
 の塵を留むるのみなるを知る、アヌンチヤタが魂の聖母マドンナの御許みもと
 に在り、その影の我胸中に在りて、此石の下なる塵のわが執着す
 べき價あるものにあらざるを知る。されどわれは猶低徊して此方
 數尺の地を去ること能はざりき。市長ボデスタの家に往きては一家の人
 々とポツジヨとの饑宴せんえんを受けたり。市長は三鞭酒シヤンパニエの盃を擧げて
 別を告げ、ポツジヨはめぐる車の云々しかといふ旅の曲と、自由
 なる自然に遊ぶ云々といふ鳥の歌とを唱ひぬ。ロオザは、君若し
 妻を娶めとり給はゞ、偕ともに我家に來給へ、我は君が物語の中なる彼亡な

きひと

人を愛する如く、君の伴ひ來給はん其人をも愛せんといひ、マリ
 リアは唯だ、健かに樂しげにて、又我家をおとづれ給へといひぬ。
 ポツジヨは例の「ゴンドラ」の舟にて、フジナまで送らんとて、
 我と共に立出づれば、ロオザとマリアとは出窓に立ちて、紛※を
 打振りぬ。別に臨みてポツジヨは聲高く笑ひつゝ、許嫁いひなづけの女
 極きまらば、彼約束を忘るなどいひぬ。われは、けふさる戯ざれごと言ことい
 ふことかはと戒めつゝも、心の中にその笑顔の涙を掩ふ假面めんなる
 をおもひて、竊ひそかに友の情誼に感じぬ。

車は情なくして走り、一堆たいの緑を成せるブレンタの側を過ぎ、
 垂楊の列と美しき別業べつげふとを見、又遠山の黛まゆずみの如きを望みて、夕
 暮にパツアに着きぬ。聖サンアントニウス寺の七穹窿は、恰も好し月

光に耀けり。柱列の間には行人絡繹らくえきとして、そのさまいと樂しげなれども、われは獨り心の無聊ぶれうに堪へざりき。

白晝まひるとなりてより、我無聊は愈甚だしければ、又車を驅りて

こゝを立ち、一の平原に入りぬ。緑草の鬱茂せるさまはポンチニ

イの大澤たいたくに譲らず。瀑布の如くなる大柳樹は古塚を掩おほひ、所々

に聖母マドンナの像を安じたる贄卓にへづくゑを見る。像の古りたるは色褪いろあせ

て、これを圍める彩畫ある板壁さへ、半ば朽ちて地に委ねたれど、

中には聖母兒せいぼじの丹粉にのこあざやか猶鮮かなるもなきにあらず。御者はその古き

に逢ひては顧みだにせねど、その新なるを見るごとに、必ず脱帽

して過ぐ。われはその何の心なるを知らずして、唯聖母の貴き

すら、色褪せては人に崇あがめらるゝことなきを歎じたり。

中チエンツアを過ぎぬれど、パラチオ（中興時代の名ある畫師）

が美術も光明を我胸の闇に投ずること能はざりき。エロナは始て

稍 我心を動したり。石級のコリゼエオに似たるありて、幸に兵^へ

^{いせん}

燹を免れ、人をして小羅馬に入る感あらしむ。柱列の間なる廣^{あひだ}

き處は、今税關となり、演戲場の中央には、板を列ね幕を張りて、

假に舞臺を補理^{しつら}ひ、旅役者の興行に供せり。夜に入りて我は試^{こころみ}に

往きて看つ。エロナの市^{いちびと}人の石^{せきたふ}榻に坐せるさまは、猶古^{いにしへ}のご

とくにて、演ずる所の曲をば、「ラ、ジエネレントオラ」と題せ

り。役者の群は、エネチアにて見しアヌンチヤタが組なりき。ア

ウレリアはこよひも此樂曲の主人公に扮したり。一張^{はり}の「コント

ルバス」に氣壓^{けお}さるゝ若干の管絃なれど、聽衆は喝采の聲を惜ま

ざりき。趨はしりて場を出づれば、月光あまね遍く照して一塵動かず、古の劇場の石壁石柱は然きぜんとして、今の破やれ小屋のあなたに存じ、廣大なる黒影を地上に印せり。

我はカプレツチイだい第を訪ひぬ。昔カプレツチイ、モンテキイの二豪族相争ひて、少年少女の熱情を遮り斷ちしに、死は能くその合ふべからざるものを合せ得たり。シエエクスピアがものしつる「ロメオ、エンド、ジュリエット」の曲即ち是なり。此第はロメオが初てジュリエットに來り見まみえて共に舞ひし所にして、今は一の旅館となりぬ。われはロメオの夜なく通ひけん石きざの階を踐みて、曾かつて盛に聲樂を張りてエロナの名流をつどへしことある大いなる舞臺に上りぬ。闊ひろき窓の下鋪板しもゆかに達するまでに切り開かれ

たる、丹たんせい青目を眩くらましたりけん壁畫の今猶微かに遺のこれるなど、昔の豪華の跡は思はるれど、壁の下には石灰の桶いくつともなく並べ据よゑられ、鋪板ゆかには芻秣まぐさ、藁わらなどちりぼひ、片隅には見苦しき馬具と農具との積み累かさねられたるを見る。まことに榮枯盛衰のはかなきこと、夢まぼろしはものかは。さればこの假の世を、フラミニアミニアの厭いとひしも、アヌンチヤタの去りぬるも、なかなか慰む方ありとやいふべき。

月の末にミラノに着きぬ。新に交を求めん心なければ、人の情なさけの紹介幾通かありしを、一としてその宛名の家にとゞくることなかりき。一夜「ラ、スカラ」座に入りて樂曲を聴きたり。帷とばりを垂れたる六層の觀棚さしきも、積せきあまりに大いにして客常に少ければ、却

りて我をして一種の寂寥と沈鬱とを覚えしめき。奏する所の曲は「タツソオ」にして、主なる女優はドニエツチイといふものなりき。一折畢るせつをはごとに、客の喝采してあまた、び幕の外に呼び出すを、愛らしき笑がほして謝し居たり。わが厭世の眼は、この笑の底におそろしき未來の苦惱の潜めるを見て、あはれ此美うまびと人目前に死せよ、さらば世間もこれが爲めに泣くことなか／＼に少かるべく、美人も世を恨むことおのづから淺からんとおもひぬ。

「バレットオ」の舞には玉の如き穉をさなき娘達打連れて踊りぬ。われはその美しさを見るにつけて、血を嘔はくおもひをなしつゝ、悄然として場を出でたり。

ミラノの客舎の無聊ぶれうは日にけにまさり行きて、市長の家族も、

親友と稱せしポツジヨも我書に答ふることなかりき。われは或ときは蔭多ちまたき衢をそゞろありきし、或ときは一室に枯坐して新に戯曲の稿を起しつ。曲の主人公はレオナルド・ダ・エンチなりき。レオナルドオの住みしは此地なり。その不朽の名畫晚餐式はこゝに胚胎はいたいせしなり。その戀人の尼寺の垣内かきぬちに隠れて、生涯相見ざりしは、わがフラミニアに於ける情と古今同揆どうきなりとやいはまし。

われは日ごとにミラノの大寺院に往きぬ。此寺はカルララの大
 理石もて、人の力の削り成しし山ともいふべく、月あかき夜に仰
 ぎ見れば、皎潔けうけつ雪を欺あざむく上半の屋蓋は、高く碧空に聳えて、幾
 多の簷角えんかく、幾多の塔尖より石人の形の現れたるさま、この世に

有るべきものともおもはれず。晝その堂内に入れば、採光の程度
 ほゞ羅馬の「サン、ピエトロ」寺に似て、五色の窓硝子より微か
 に洩るゝ日光は、一種の深祕世界を幻出し、人をして唯一の神こゝ
 に在いますかと觀ぜしむ。ミラノに來てより一月の後、我は始て此寺
 の屋や上に登りぬ。日は石面を射て白光身を繞めぐり、ここの塔かしこ
 の龕がんを見めぐらせば、宛さながら然立ちて一の大達ひろばに在るごとし。許多あまた
 の聖しやうじや者獻身者の像にして、下より望み見るべからざるものは、
 新に我目まのあたり前に露呈し來れり。われは絶頂なる救世主の巨像の
 下に到りぬ。ミラノ全都の人烟は螺紋らもんの如く我脚底に晝かれたり。
 北には暗黒なるアルピイの山聳え、南には稍 低き藍色のアペン
 ニノ横はりて、此間を填うづむるものは、唯だ緑なる郊原のみ。譬へ

ばカムパニアの野を變じて一の花^{くわき}卉多き園^{ゑん}囿となしたらんが如
 し。われは^{まなじり}眈を決して東のかたエネチアを望みたるに、一群の飛
 鳥ありて、列を成してかなたへ飛び行くさま、一片の帛^{きぬ}の風に翻
 弄せらるゝに似たり。われはマリアを憶ひ、ロオザを憶ひ、ポツ
 ジヨを憶へり。昔幼かりし時、母とマリウチアとに伴はれて、ネ
 ミの湖に往きしかへるさ、アンジエリカが我に物語りし事こそあ
 れ。その物語は今我空想に浮び來ぬ。オレワアノにテレザといふ
 少女ありき。戀人なるジユウゼツペが山を^こ躓えて北の國に往きし
 より、戀慕の念止むことなく、日を経るに従ひて瘦せ衰へぬ。フ
 ル^{おうな}^{どうとう}^{どうとう}^{どうとう}ル^{おうな}^{どうとう}ル^{おうな}の老媪はテレザの髪とその藏め居たりしジユウゼツペの髪
 とを銅銚に投じて、奇^くしき藥艸と共に煮ること數日なりき。ジ

ユウゼツペは他郷に在りしが、我毛髮の彼銚中に入ると齊ひとしく、
 今まで忘れ居つるテレザの慕はしくなりて、醒めては現うつゝに其聲を
 聞き、寢いねては夢に其姿を視、そぞろに旅のやどりを立出で、
 おうなが銚なべの下に歸りぬといふ。エネチアには我髮を烹にる銚ある
 にあらねど、わがこれを憶ふ情は、恰も幻術の力の左右するところ
 となれるが如くなりき。われ若し山やまぐに國うまれの産ならば、此情はや
 がて世に謂いふ思郷病ノスタルジアなるべし。(歐洲人は思郷病は山國の民多
 くこれを患わづらふとなせり。)されど又エネチアのわが故郷ならぬを
 奈いかに何せむ。われは悵ちやうぜん然として此寺の屋上やねより降りぬ。

客舎に歸れば、卓上に一封の書ふみあるを見る。こはポツジヨが許
 より來れるなり。これを讀むに、袂を分ちてより第二の書を作る

云々と書せり。さらば友の初の一書は我手に入るに及ばずして失はれしなるべし。エネチアには何の變りたる事もあらねど、マリアは病に臥こしたり。その病のさま一時は性命をさへ危くすべくおもはれぬれど、今は早や恢復に近し。猶そと戶外には出でずとなり。末文には、例の戲言ざれごと多く物して、まだミラノの少女に擒とりこにせられずや、三鞭酒シャンパニエをな忘れそなど云へり。われは讀み畢りて、ポツジヨが滑稽の天性にして、世の人のそを假面めんと看做みなすことの謬あやまれるを信ぜんとせり。さればこそ同じ無稽の巷説は、わがマリアを敬すること口オザを敬すると殊ならざるを見ながら、謬りて我をもてマリアに戀するものとなすなれ。

われは消遣せうけんの爲めに市の外廓より出で、武具の辻（ピアツ

ツア、ダルミイ)を過ぎ、ナポレオン拿破崙の凱旋塔の下に至りぬ。世の

いはゆるセムピオオネの門(ポルタ、セムピオオネ)とは是なり。

塔は猶未だ其工事を終らず、板がこひを繞めぐらして、これに格子戸

を装ひたり。戸より入りて見れば、新に大理石もて彫えり成せる大

いなる馬二頭地上に据あえられ、青あをくさ艸はほしいまゝに長じて跣ふせき石

を掩はんと欲す。四邊あたりには既に刻める柱頭あり、粗あらごなししたる

石塊あり。許多あまたの工人は織るが如くに來往せり。

時に一の旅人ありて我を距へだたること數歩の處に立ち、手簿しゅぼを把とり

て導者の言を記せり、年の頃は三十ばかりなるべし。胸には拿破ナポ

里りの勳章二つを懸けたり。此旅人の迫せりもち持の石柱を仰ぎ見るに及

びて、我はそのベルナルド才しなるを識りぬ。彼方も亦直ちに我を

認め得つとおぼしく、何の猶豫ためらふさまもなく、我側に歩み寄りて我胸を抱き、めづらしきかな、アントニオ、われ等の相別れし夕は賑やかなりき、われ等は祝砲をさへ放ちたり、されど想ふに我等の友情は舊もとの如くなるべしといひぬ。我は肌はだへの粟あはを生ずる心地しつゝ、纔わづかに口を開きて、さてはベルナルドオなりしよ、圖はからざりき、おん身と伊太利の北のはてなる、アルピイ山の麓にて相見んとはと答へつ。

我等は共に歩みて新劇場の邊に往き、轉じて市まちの廓くるわに入りぬ。ベルナルドオは道すがら語りていふやう。汝は此地を指してアルピイ山の麓といへり。われはまことのアルピイいただきの巔たきに登りて世界の四極よものはてを見たり。曩さきに拿破里に在りし時、獨逸の士官等の、

瑞西スイスの山水を説くを聞き、一たび往いて觀んことを願ふこと漸く切なるに、汽船もて達し易きジエノワを距ること遠くもあらぬを
知れば、意を決して往くことゝしつ。シヤムニイの谿たにをも渡りぬ。
モンブランの頂にも、ユングフラウの頂にも登りぬ。現げにユング
フラウは「ベルラ、ラガツツア」（美少女）なれど、かくまで冷
かなる女子は復た有るべからず。これよりはジエノワに往きて、
約束せし妻とその父母とを訪とぶらはんとす。もはや眞面目なる一家の
あるじとならんも遠からぬ程なるべし。汝若し我が昔日の生涯を
語らず、彼の馴るゝ小鳥の事、愛らしき歌妓の事などを祕せんと
誓はゞ、われは汝を伴ひてジエノワに往くべし。いかに、三日の
後に我と共に發足せずやといひぬ。われ。否々、我は明日あす此地を

立たんとす。ベルナルドオ。そは何處いづくへ往くにか。われ。エネチアに往くなり。ベルナルドオ。汝が漫遊の日程は、よも變更ゆるを容さぬにはあらざるべし。枉まげて我言に従はずや。われはベルナルドオにかく説き勸められて、反復しておのれのエネチアに往かざるべからざるを辯じ、果は自らこの漫然口を衝いて發せし語の、實にその故あるが如きを覺ゆるに至りぬ。

われは客舎に返りて、不可思議なる力に役せらるゝものゝ如く、

さうくわう
倉

皇 我行李を整へ、あるじに明朝の發軔はつじんを告げたり。此夜

ふしど

は臥床に入れども、胸打ち騒ぎて熱を病むものゝ如く、眠をなさざ

ること久しかりき。翌朝ベルナルドオを訪ひて、我が爲めに善くその未來の妻に傳へんことを頼み聞え、忙はしく車を驅りてエネ

チアに向ひぬ、二月前に去りしエネチアに。

心疾身病

車はフジナに到りぬ。われは又泥深き海、衣色の石垣、「マルクス」寺の塔を望むことを得たり。怪むべし、われは足一たびエネチアの地を踏むと齊ひとしく、吾心の劇變せるを覺えき。今までエネチアへ、エネチアへと呼びし意欲は俄に迹あとををさめて、一種の言ふべからざる羞しうざん慚の情生じ、人の汝は何故に復た來れると問はゞ、辭の答ふべきなからんと氣遣ふやうになりぬ。

われは直ちに舊寓に入りて、衣服を改め、身の疲れたるをも顧

みで、市^{ボデスタ}長の家に往きぬ。舟の苔を被れる屋壁と高き窓とに近づくとき、怪しき映象は我胸に浮びぬ。そはわれ若しマリアが結婚の席に往きあはゞいかにといふことなりき。われは此念^{おもひ}の頭を擡^{もた}げ來るを見て、又急にこれを抑へ、否、われは求婚の爲めに往くならねば、そも亦^{さまたげ}妨なしと云ひぬ。されど我心は遂に全く平^{たひらか}なること能はざりき。

門^{かど}を叩けば僕^{しもべ}出で迎へて、あるじはおん身來まさば、案内^{あない}することを須^{もち}みざれと宣^{のたま}給ひぬといふ。そのさま吾が至るを期^ごしたるに似たり。廣間には幌^{とばり}を卸^{おろ}して、闌^{げき}として物音を聞かず。われは、是れデステモナが悲歎せし處なるべし、されどオテル口の苦痛はこれより甚しかりしならんとおもひぬ。わが此時恰も此念をなし、

も、亦頗るあやしき事なり。既にして導かれて口オザが房へやに入るに、こゝも幌を垂れて日光を遮りたれば、外より入るものはその暗きに驚かんとす。わがミラノにて覺えし奇くしき情、我を驅りてエネチアへ來させし奇たちまちしき情は忽又起りて、その幻術に似たる力は一層の強さを加へ、我手足は震慄せり。われは手もて壁を支へて、僅に地に倒れざることを得たり。

あるじ主人は温顔もて我を迎へ、我身を回抱して、再見の喜を述べたり。われは二婦人の何處いづくに在るを問ひぬ。彼等は親族と共にパツアに往きたり、二三日の後ならでは歸り來ざるべしといふ。その面色その態度を察するに、何とやらん言を構へて我を欺く如くなり。されどわれは又此人の平生を顧みて、わが疑の邪推なるべき

をおもへり。主人は我を留めて晚餐を供せり。卓に就きたる間、
 我は限なき寂寞を感じ、又主人の面の爽さはやかならざるを覚えぬ。わ
 れはおそる／＼その不興の因もと由を問ひしに、主人頭を掉ふりて、否、
 益やくなき訴訟の事ありて、些ちとの不安を感ずるに過ぎず、ポツジヨは
 久しくおとづれず、おん身さへ健康すぐれ給はざる如し、兎も角
 も此一ひとつき盃を傾け給へといひつゝ、我前なる杯に葡萄酒を注がん
 とせしに、忽ちその手を駐とどめて、おん身は心地悪しきにはあらず
 やと叫びぬ。そは我面色の土の如く變じたればなるべし。われは
 室へやぬち内の物の旋風の如く動搖するを覺えて、そのまゝはたと地に
 僵たふれぬ。

此より我は半醒半睡の間に在ること幾日なるを知らず。市長は

時として我臥床ふしどの傍に坐して、われに心を安んじて全快を待たんことを勧め、ロオザの遠からず來りて病を瞻みるべきを告げたり。或日家の内騒がしく、人の到着しつと覺しきさまなりしに、忽ちロオザは吾前に來ぬ。その面には憂の色を帯びたり。その日の暮つかた、われは家内やぬちの又さきにも増して物騒がしきを覺え、側なる奴婢ぬひに問はんとするに、一人として我に答ふるものなし。階下の室には人多くゆききする足音頻あのとまきりに、屋外の大渠たいきよには小舟の梶か音賑ちのとはしかりき。われは暫し目蕩まじろみしに、ふとマリアの死せることを知り得たり。さきにはポツジヨ我にマリアの病を告げて、その病はえぬと云へり。されど病は再發して、マリアは既に死し、家人は我に祕して、こよひそを葬るなり。われは明かにロオ

ザの祈祷の聲を聞き、マリアの菫花もて飾れる棺は明かに心目の
 前にあらはれぬ。忽ち我は病の既に去りて力の既に復せるを感じ、
 蹶けつぜん然として臥床ふしどより起ち、人の我側に在らざるに乗じて、壁に
 懸けたる外套を纏ひ、岸邊なる小舟を招きて、「デイ、フアラリ
 イ」の寺に往かんことを命じつ。こは市ボデスタ長が累世の墓ある處に
 して、われは曾て一たび其窟墓を窺ひしことありき。夜は暗くし
 て、「アエ、マリア」の鐘と共に閉されたる門の前には人影早や
 絶えたり。われは扉をほとくと敲たきしに、寺僮は我が爲めに門
 を開きつ。そは曾てわが市長に伴はれて來ぬる時、我にチチャノ
とカノワとの墓を指し教ゆびさへしことあれば、猶我面を見知り居たり
 しなり。寺僮は我心を計はかり得て、君は遺骸を見に來給ひしならん、

今は猶にへづくゑ贄卓の前に置かれたれど、あすは龕がんに藏をさめらるべしとて、燭を點して我を導き、鑰匙かぎ取り出で、側なる小き戸を開きつ。寺僮と我との足音は、穹窿あひだの間に寂しき反響を喚起せり。寺僮のひつき柩はかしこにと指して、立ち留まるがまゝに、我はひとり長廊を進めり。聖母マドンナの御影の前に、一燈微かに燃え、カノワが棺のめぐりなる石人は臙氣なる輪廓を畫けり。贄卓に近づけば、卓前に三つの燈の點ぜられたるを見る。董花すみれのかほり高き邊ほとり、覆おほはざる柩の裏に、堆うづたかき花はな瓣はなびらの紫に埋もれたる屍かばねこそあれ。長たけなる黒髪を額ぬかに縮わがねて、これにも一束の董花を挿めり。是れ瞑目せるマリアなりき。我が夢寐むびの間あひだに忘るゝことなかりしララなりき。われは一聲、ララ、など我を棄てゝ去れると叫び、千行ちすぢの涙かばねを屍の上

に灑そぎ、又聲こゑふりしほりて、逝ゆけ、わが心の妻よ、われは誓ちかひて
 復またた此世このよの女子によしを娶めとらじと呼び、我指わがさしに嵌はめたりし環たまを抽ぬきて、
 そを屍しかの指ゆびに遷うつし、頭あたまを俯うつして屍しかの額かぶに接吻くちくちしつ。爾そのとき時とき我血わがちは
 氷こほりの如ごとく冷ひやえて、五體ごたい戦ふるひをのゝき、夢ゆめとも現うつとも分わかかぬ間に、
 屍しかの指ゆびはしかと我手わがてを握にぎり屍しかの唇くちびるは徐しづかに開ひらきつ。われは毛髮さかしま倒た
こやみに豎たちて、卓こまと柩こまとの皆獨樂こまの如ごとく旋轉くわんするを覺おぼえ、身邊みへ忽とち常と
こやみ闇やみとなりて、頭あたまの内うちには只ただだ奇くしく妙たへなる音樂おんがくの響こゝろきを聞ききつ。
 忽とち温ぬるなる掌てのひらの我額わがかぶを摩なするを覺おぼえて、再またび目めを開ひらきしに、燈ともしび
 は明あかに小こき卓こまの上うへを照あし、われは我枕邊わがまくらの椅子いすに坐まし、手てを我
 頭あたまに加くへたるものゝ口オザくちなるを認おぼめ得えたり。又また一人ひとりの我臥床わがふしどの
 下したに蹲うづまりて、もろ手てもて顔かほを掩おほへるあり。口オザくちの我わがに一匙ひとしづの

薬水を薦めつゝ、熱は去れりと云ふ時、蹲れる人は徐かに起ちて室
 を出でんとす。われ。ララよ、暫し待ち給へ。われは夢におん身
 の死せしを見き。ロオザ。そは熱のなし、夢なるべし。われ。否、
 我夢は夢にして夢に非ず。若しこれをしも夢といはゞ、人世はや
 がて夢なるべし。マリアよ。われはおん身のララなるを知る。昔
 はおん身とペスツムに相見、カプリに相見き。今この短き生涯に
 ありて、幸にまた相見ながら、争でか名告りあはで止むべき。我
 はおん身を愛す。語り畢りて手をさし伸ばせば、マリアは跪きて
 我手を握り、我手背に接吻したり。

數日の後、我はマリアと柑子の花香しき出窓の前に對坐して、
 この可憐なる少女の清淨なる口の、その清淨なる情を語るを聞き

つ。少女の語りけらく。わが幼かりし時は、唯だ日の暖きを知り、
 董花の香しきを知るのみなりき。或時「チンガニイ」族のおうな
 ありて、我目の必ず開く時ああるべきを告げしが、その時期はいつ
 なるべきか、絶て知るよしあらざりき。ペスツムの古祠の下にて、
 おん身の唇の暖きこと、日の暖きが如くなるを覚えし夕、彼おう
 な夢に見えて、汝のやしなひ親なるアンジエロとともに、カプリ
 の島なる窟いはむろに往け、アンジエロは富貴を獲べく、汝はトビアスの
 如く、（舊約全書を見よ）光明を獲べしと云ひぬ、醒めて後アン
 ジエロに語れば、これも同じ夜に同じ夢を見き。アンジエロは我
 を伴ひて島に渡りしに、天使はおん身に似たる聲して我名を呼び、
 我に薬艸を與へき。歸りて之を煮んとする時、ロオザが兄なる人

我等の住める草寮こやに憩やすひて、我目の開あくべきを見窮みきはめ、我を拿破
 里みに率もつて往ゆきぬ。手術は功を奏せり。ロオザが兄あなる醫師くすしは、我
 を養やしなひて子となし、希臘ギリシアにてみまかりし子の名を取りて、我を
 マリアと呼びぬ。ある日アンジエロは、忽ち醫師のもとに來て、
 われは命の久しからざるべきを知りぬ、我が貯へし金を讓らん人
 ララならではあらざるべし、先づこれをあづけまゐらせんとて、
 金あまた取出とつて、逗留とつすること數日にして眠るが如くみまかりぬ。
 われはさきの夜の席むしろにて、おん身の舟人の不幸を歌ひ給ふを聞き、
 おん身の聲を聞き知りて、直ちにおん身の脚下に跪まきぬ。アヌン
 チヤタが末期まつごの詞の我に希望の光明を與へしと、おん身のつれな
 き旅立の我を病に臥ふさしめしとは、おん身自ら推し給へといひぬ。

われはマリアとにへづくゑ贄卓の前に手を握りぬ。おほよそ市ボデスタ長の

家にゆきかふものは、皆歡喜の聲を發しつれど、其聲の最も大い

なるはポツジヨなりき。越ゆること二日にして、我等は口オザと

俱ともに田舎の別墅べつしよに移りぬ。こはアンジエロが遺産もて買ひしも

のなりき。ポツジヨは一書を我別墅に寄せて、飄然としてエネチ

アを去りぬ。その書には、唯だ左の數句あるのみなりき。曰く、

我は汝と賭して贏かちたり、されど實まことに贏ちしは我に非ざりきと。

憐むべし、ポツジヨが意中の人は即亦我意中の人なりしなり。

フアビアニ公子とフランチエスカ夫人とは、わが好き妻を得し

を喜び、かの腹黒きハツバス・ダアダアさへ皺ある面に笑ゑみを湛たへ

て、我新婚を祝したり。わが昔の知しるひと人の僅に生き残れるは、西ス

班牙磴パニアとうの下なるペツポのをぢのみにて、その「ボン、ジヨオルノ」
 (好日)の語は猶久しく行人の耳に響くなるべし。

琅玕洞

千八百三十四年三月六日の事なりき。旅人あまたカブリ島なる
 パガアニイが客舎の一室に集ひぬ。中にカラブリア産うまれの一美人あ
 りて、群客の目を駭おどろかせり。その美しき黒き瞳はこれに右手めてを借し
 たる丈ますらを夫の面に注げり。是れララと我となり。吾等は夫婦たる
 こと既に三年、今エネチアに至る途上、再び此島に遊びて、昔日
 奇遇の蹟あとを問はんとするなり。室の一隅には、又一老婦のもろ手

を幼女の肩に掛けたるあり。容貌魁偉なる一外人この幼女を愛する餘りに、おぼつか覺束なげなる伊太利語もてその名を問ふに、幼女はにはか遽に答ふべくもあらねば、老婦代りてアヌンチャタと答へつ。こはララが生みし子に附けし名にて、それを外人に告げたるは口オザなり。われ進みて之と語を交へて、そのデンマルク璉馬人なるを知りぬ。嗚呼、是れ畫工フエデリゴと彫匠トオルワルトゼンとの郷人なり。フエデリゴは今故郷に在り、トオルワルトゼンは猶羅馬に留れりと聞く。現げに後者が技術上の命脈は斯土このどに在れば、その久しくこゝに居るもまた宜むべなるかな。

我等は群客と共に岸に下りて舟に上りぬ。舟はおのゝ二客を艫へんぎどもとこぎ載せて、漕手は中央に坐せり。舟の行くこと箭やの如く、

ララと我との乗りたるは眞先に進みぬ。カプリ島の級状をなせる
 ぶだうばたけ 葡萄園と橄欖樹とは忽ち跡を没して、我等は矗立せる岩壁の
 そび 天に聳ゆるを見る。緑波は石に觸れて碎け、紅花を開ける水草を
 洗へり。

忽ち岩壁に一小罅隙あるを見る。その大きは舟を行るに堪へざ
 るものゝ如し。我は覺えず聲を放ちて魔穴と呼びしに、舟人打ち
 ほゝゑ 微笑みて、そは昔の名なり、三とせ前の事なりしが、獨逸の畫工
 およ 二人ありて洩ぎて穴の内に入り、始てその景色の美を語りぬ、そ
 の畫工はフリースとコオピツシユとの二人なりきと云ひぬ。

舟は石穴の口に到りぬ。舟人はを棄て、手もて水をかき、
 われ等は身を舟中に横へしに、ララは屏息して緊しく我手を握

りつ。暫しありて、舟は大穹窿の内に入りぬ。穴は海^{うなづら}面を抜くこと一伊尺ブラツチヨオに過ぎねど、下は百伊尺の深さにて海底に達し、その門^{もんよく}闕の幅も亦略^ほぼ百伊尺ありとぞいふなる。さればその日光は積水の底より入りて、洞窟の内を照し、窟内の萬象は皆一種の碧色を帯び、艚の水を打ちて飛沫しぶきを見るごとに、紅薔薇の花瓣を散らす如くなるなれ。ララは合掌して思を凝らせり。その思ふところは必ずや我と同じく、曾て二人のこゝに會せしことを憶ひ起すに外ならざるべし。彼アンジエロの獲つる金は、むかし人の魔穴を怖れて、敢て近づくことなかりし時、海賊の匿^{かく}しおきつるものなるべし。

巖穴の一點の光明は忽ち失せて、第二の舟は窟内に入り來りぬ。

そのさま水底より浮び出づるが如くなりき。第三、第四の舟は相繼いで至りぬ。凡そこゝに集へる人々は、その奉ずる所の教の新舊を問はず、一人として此自然の奇觀に逢ひて、天にいます神父の功德くどくを稱へざるものなし。

舟人は俄に潮満ち來くと叫びて、忙はしく艚ろを揺かし始めつ。そは滿潮の巖穴を塞ぐを恐れてなりき。遊人の舟は相銜ふくみて洞窟より出で、我等は前に渺茫べうぼうたる大海を望み、後に琅玕洞しりへの石門らうかんどうの漸く細りゆくを見たり。

(明治二十五年十一月—三十四年二月)

青空文庫情報

底本：「定本限定版 現代日本文學全集 13 森鷗外集（二）」
筑摩書房

1967（昭和42）年11月20日発行

入力：三州生桑

校正：松永正敏

2005年8月25日作成

2008年9月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

即興詩人 IMPROVISATOREN

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 ハンス・クリスチアン・アンデルセン Hans Christian Andersen
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>